

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (52)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書 (Ⅲ)

前 畑 遺 跡

(第6分冊)

1990. 3

鹿児島県教育委員会

例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の「前畑遺跡」の発掘調査書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)の「前畑遺跡」(第6分冊)である。
3. 中ノ原遺跡は、鹿屋市郷之原町(旧字名前畑)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和62年6月19日～昭和63年3月9日間と昭和63年4月19日～9月2日の間に実施した。整理作業は、昭和63年度と平成元年度に実施した。
6. 発掘調査においては、鹿屋市教育委員会や大浦町内会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査においては、河口貞徳(鹿児島県文化財審議会審議員)・宮本長二郎(奈良国立文化財研究所遺構調査室長)・小片丘彦(鹿児島大学歯学部教授)・成尾英仁(鹿児島玉龍高校教諭)の御指導を得た。報告書作成作業においては、下篠信行(受媛大学法文学部教授)・上村俊雄(鹿児島大学法文学部教授)・武末純一(北九州市立考古博物館副館長)・櫻木晋一(九州帝京短期大学経済学部講師)・本田道輝(鹿児島大学法文学部助手)・成尾英仁(鹿児島玉龍高校教諭)の御指導を得た。
9. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一・梅北浩一・中村和美・八木沢一郎)で行った。出土遺物の実測・製図は雨宮瑞生・関一乏・八木沢・前迫・新東が行なった。
10. 本書の執筆は、小片丘彦・峰 和治(第IV章第3節)、櫻木晋一(第IV章第4節)に玉稿を頂き、そのほか石器を雨宮(第II章第2節2(2))と関(第II章第2節2(2)M)と梅北(第II章第3節2)が分担し、他を新東が担当した。
11. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東がこれを担当した。

目 次

第 I 章	調査の概要	1
第 1 節	調査の経緯	1
第 2 節	発掘調査の方法と経緯	1
第 3 節	発掘調査の概要	4
第 4 節	遺跡の層位	6
第 II 章	縄文時代の調査	8
第 1 節	調査の概要	8
第 2 節	X 層の調査	8
1	X 層の概要	8
2	遺構	8
3	出土遺物	22
第 3 節	V 層の調査	85
1	V 層の概要	85
2	出土遺物	85
第 III 章	弥生時代の調査	99
第 1 節	調査の概要	99
第 2 節	III 層の調査	99
1	遺構	99
2	出土遺物	136
第 IV 章	近世墓の調査	152
第 1 節	近世墓の概要	152
第 2 節	鹿屋市前畑遺跡出土の近世人骨 小片丘彦・峰 和治	161
第 3 節	前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭 櫻木晋一	167
第 V 章	発掘調査のまとめ	173

挿 図 目 次

第1図	前畑遺跡の地形とグリッド配置図	3
第2図	大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位	7
第3図	前畑遺跡の層位図(1)	9
第4図	前畑遺跡の層位図(2)	11
第5図	集石遺構と礫の分布状況	13
第6図	1号集石実測図	15
第7図	2号集石実測図	16
第8図	3号集石実測図	17
第9図	4号集石実測図	18
第10図	5号集石実測図	19
第11図	6号集石実測図	20
第12図	集石遺構の石塊の最大長と重量比	21
第13図	X層の遺物出土分布図	23
第14図	X層の土器出土分布図	25
第15図	I類・II類土器実測図	27
第16図	III類土器実測図	28
第17図	IV類土器出土分布図	31
第18図	IV類土器実測図(1)	33
第19図	IV類土器実測図(2)	34
第20図	IV類土器実測図(3)	35
第21図	IV類土器実測図(4)	36
第22図	IV類土器実測図(5)	37
第23図	IV類土器実測図(6)	39
第24図	IV類土器実測図(7)	40
第25図	IV類土器実測図(8)	41
第26図	IV類土器実測図(9)	42
第27図	IV類土器実測図(10)	43
第28図	IV類土器実測図(11)	44
第29図	IV類土器実測図(12)	45
第30図	IV類土器実測図(13)	46
第31図	IV類土器実測図(14)	47
第32図	IV類土器実測図(15)	48
第33図	IV類土器実測図(16)	49

第34図	IV類土器実測図 (17)	50
第35図	IV類土器実測図 (18)	51
第36図	IV類土器実測図 (19)	54
第37図	IV類土器実測図 (20)	55
第38図	IV類土器実測図 (21)	56
第39図	IV類土器実測図 (22)	57
第40図	IV類土器実測図 (23)	58
第41図	V類土器の分布と他類土器との比較	59
第42図	V類土器実測図 (1)	63
第43図	V類土器実測図 (2)	64
第44図	V類土器実測図 (3)	65
第45図	VI類土器実測図	65
第46図	X層石器出土分布図	67
第47図	石器実測図 (1)	69
第48図	石器実測図 (2)	70
第49図	石器実測図 (3)	71
第50図	石器実測図 (4)	72
第51図	石器実測図 (5)	73
第52図	石器実測図 (6)	74
第53図	石器実測図 (7)	75
第54図	石器実測図 (8)	76
第55図	石器実測図 (9)	77
第56図	石器実測図 (10)	78
第57図	石器実測図 (11)	79
第58図	石器実測図 (12)	80
第59図	石器実測図 (13)	81
第60図	石器実測図 (14)	82
第61図	石器実測図 (15)	83
第62図	V層出土遺物分布図	85
第63図	V層土器出土状況	86
第64図	土器実測図	87
第65図	石器実測図	88
第66図	III層遺構配置図	100
第67図	1号住居址遺物分布図	101
第68図	1号住居址遺物出土状況図	102

第 69 图	1 号住居址实测图	103
第 70 图	1 号住居址出土遗物实测图	103
第 71 图	2 号住居址遗物分布图	104
第 72 图	2 号住居址遗物出土状况图	105
第 73 图	2 号住居址实测图	106
第 74 图	2 号住居址出土遗物实测图 (1)	107
第 75 图	2 号住居址出土遗物实测图 (2)	107
第 76 图	2 号住居址出土遗物实测图 (3)	108
第 77 图	3 号住居址遗物分布图	109
第 78 图	3 号住居址遗物出土状况图	110
第 79 图	3 号住居址实测图	111
第 80 图	3 号住居址出土遗物实测图 (1)	112
第 81 图	3 号住居址出土遗物实测图 (2)	113
第 82 图	3 号住居址出土遗物实测图 (3)	114
第 83 图	1 号掘立柱建物迹遗物出土状况图	115
第 84 图	1 号掘立柱建物迹实测图	116
第 85 图	1 号掘立柱建物迹出土遗物实测图	117
第 86 图	2 号掘立柱建物迹遗物出土状况图	120
第 87 图	2 号掘立柱建物迹实测图	121
第 88 图	2 号掘立柱建物迹出土遗物实测图 (1)	123
第 89 图	2 号掘立柱建物迹出土遗物实测图 (2)	124
第 90 图	2 号掘立柱建物迹出土遗物实测图 (3)	125
第 91 图	3 号掘立柱建物迹实测图	126
第 92 图	4 号掘立柱建物迹实测图	128
第 93 图	5 号掘立柱建物迹实测图	129
第 94 图	6 号掘立柱建物迹实测图	130
第 95 图	7 号掘立柱建物迹实测图	131
第 96 图	8 号掘立柱建物迹实测图	133
第 97 图	8 号掘立柱建物迹出土遗物实测图	134
第 98 图	凹形周溝遺構实测图	134
第 99 图	凹形周溝出土遗物实测图	135
第 100 图	Ⅲ層遺物出土分布图	137
第 101 图	Ⅲ層出土遺物实测图 (1)	139
第 102 图	Ⅲ層出土遺物实测图 (2)	140
第 103 图	Ⅲ層出土遺物实测图 (3)	141
第 104 图	Ⅲ層出土遺物实测图 (4)	142

第105図	Ⅲ層出土遺物実測図（5）	143
第106図	Ⅲ層出土遺物実測図（6）	143
第107図	Ⅲ層出土遺物実測図（7）	145
第108図	Ⅲ層出土遺物実測図（8）	146
第109図	Ⅲ層出土遺物実測図（9）	147
第110図	近世墓の配置図	152
第111図	墓壙配置図（1）	153
第112図	1号墓実測図	154
第113図	1号墓出土古銭	154
第114図	2号墓実測図	155
第115図	2号墓出土古銭	155
第116図	3号墓実測図	156
第117図	3号墓出土古銭	156
第118図	4号墓・5号墓実測図	157
第119図	4号墓・5号墓出土古銭	157
第120図	墓壙配置図（2）	158
第121図	6号墓実測図	159
第122図	6号墓出土古銭	159
第123図	7号墓実測図	160
第124図	7号墓出土ガラス玉実測図	160

表 目 次

第1表	遺跡出土遺物一覧表	89
第2表	遺跡出土遺物一覧表	90
第3表	遺跡出土遺物一覧表	91
第4表	遺跡出土遺物一覧表	92
第5表	遺跡出土遺物一覧表	93
第6表	遺跡出土遺物一覧表	94
第7表	遺跡出土遺物一覧表	95
第8表	遺跡出土遺物一覧表	96
第9表	出土石器一覧表	96
第10表	出土石器一覧表	97
第11表	出土石器一覧表	98
第12表	1号掘立柱建物跡の一覧表	118
第13表	2号掘立柱建物跡の一覧表	124
第14表	3号掘立柱建物跡の一覧表	127

第 15 表	4号掘立柱建物跡の一覧表	128
第 16 表	6号掘立柱建物跡の一覧表	129
第 17 表	7号掘立柱建物跡の一覧表	131
第 18 表	8号掘立柱建物跡の一覧表	132
第 19 表	遺跡出土遺物一覧表	148
第 20 表	遺跡出土遺物一覧表	149
第 21 表	遺跡出土遺物一覧表	150
第 22 表	出土石器一覧表	151

図 版 目 次

図版 1	1. 前畑遺跡・中原山野遺跡遠景（南西から）	179
	2. 前畑遺跡の層位	
図版 2	1. 集石遺構検出状況（西から）	180
	2. 石斧（306）出土状況	
	3. X層検出状況 4. 土器（30）出土状況	
図版 3	1. 4号集石と周辺の検出状況	181
	2. 3号集石 3. 3号集石断面	
	4. 6号集石 5. 6号集石断面	
図版 4	1. 縄文土器（X層）（1）	182
図版 5	1. 縄文土器（X層）（2）	183
図版 6	1. 縄文土器（X層）（3）	184
図版 7	1. 縄文土器（X層）（4）	185
図版 8	1. 縄文土器（X層）（5）	186
図版 9	1. 縄文土器（X層）（6）	187
図版 10	1. 縄文土器（X層）（7）	188
図版 11	1. 縄文土器（X層）（8）	189
図版 12	1. 縄文土器（X層）（9）	190
図版 13	1. 縄文土器（X層）（10）	191
図版 14	1. 縄文土器（X層）（11）	192
図版 15	1. 縄文土器（X層）（12）	193
図版 16	1. 縄文土器（X層）（13）	194
図版 17	1. 縄文土器（X層）（14）	195
図版 18	1. 縄文土器（X層）（15）	196
図版 19	1. 石器（X層）（1）	197

図版20	1. 石器 (X層) (2).....	198
図版21	1. 石器 (X層) (3).....	199
図版22	1. 石器 (X層) (4).....	200
図版23	1. 石器 (X層) (5).....	201
図版24	1. VI層遺物出土状態 (東から)	202
	2. VI層土器出土状態 (386)	
	3. 縄文土器 (VI層)	
図版25	1. 石器 (VI層)	203
図版26	1. III層 (弥生時代) 全景 (東から)	204
	2. III層 (弥生時代) 全景 (北東から)	
図版27	1. III層 (弥生時代) 遺構近景 (北から)	205
	2. III層 (弥生時代) 遺構近景 (西から)	
図版28	1. III層遺物出土状況遠景 (東から) 2. 土器出土状況.....	206
	3. 土器出土状況 4. 土器出土状況	
	5. 石器 (536) 出土状況 6. 鉄片出土状況	
	7. 石鏃 (527) 出土状況	
図版29	1. 1号住居址遠景 (東から) 2. 1号住居址検出状況.....	207
	3. 1号住居址掘り下げ状況 (北から) 4. 1号住居址掘り下げ状況 (南から)	
	5. 柱炭化木検出状況 6. 1号住居址出土遺物	
図版30	1. 1号住居址全景 2. 1号住居址全景.....	208
図版31	1. 2号住居址検出状況 2. 住居址掘り下げ状況.....	209
	3. 炭化木出土状況 4. 住居址床面検出状況	
	5. 2号住居址遠景 (南から)	
図版32	1. 2号住居址検出状況 (南から)	210
	2. 2号住居址全景 (南から)	
図版33	1. 2号住居址出土遺物 (1)	211
図版34	1. 2号住居址出土遺物 (2)	212
図版35	1. 3号住居址掘り下げ状況 (1) 2. 3号住居址掘り下げ状況 (2)	213
	3. 3号住居址全景 4. 3号住居址遠景	
	5. 3号住居址全景	
図版36	1. 1号掘立柱建物掘り上げ状況 (1)	214
	2. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (2)	
図版37	1. 1号掘立柱建物検出状況 2. 掘り下げ状況 (1)	215
	3. 掘り下げ状況 (2) 4. 検出状況	
	5. 1号掘立柱建物検出状況	

図版38	1. 柱穴掘り下げ状況	2. 溝1断面(1)	216
	3. 溝1断面(2)	4. 建物内路址検出状況	
図版39	1. 1号掘立柱建物・溝1出土遺物		217
図版40	1. 2号掘立柱建物検出状況(北から)		218
	2. 2号掘立柱建物掘り下げ状況(北から)		
図版41	1. 溝2遺物出土状況(南から)	2. 溝2遺物出土状況(南から)	219
	3. 2号掘立柱建物検出状況(北から)	4. 溝2全景(東から)	
	5. 柱穴掘り下げ状況(北から)	6. 2号掘立柱建物遠景(北から)	
図版42	1. 2号掘立柱建物(溝内)出土遺物		220
図版43	1. 4号掘立柱建物掘り下げ状況	2. 作業風景	221
	3. 4号建物と溝3遠景	4. 4号掘立柱建物全景	
図版44	1. 6号・7号建物検出状況(1)	2. 6号・7号建物検出状況(2)	222
	3. 6号・7号建物掘り下げ状況	4. 6号・7号・8号建物全景	
	5. 6号・7号掘立柱建物全景		
図版45	1. 8号建物掘り下げ状況(東から)	2. 建物群遠景(西から)	223
	3. 8号建物柱穴出土遺物	4. 柱穴掘り下げ状態	
	5. 8号建物全景(東から)		
図版46	1. 柱穴検出状態		224
図版47	1. 柱穴検出状態		225
図版48	1. III層出土土器(1)		226
図版49	III層出土土器(2)		227
図版50	III層出土土器(3)		228
図版51	1. III層出土土器(4)		229
図版52	1. III層出土石器		230
図版53	1. 中・近世溝状遺構(A B 区)		231
	2. 中・近世溝状遺構(A B 区)		
図版54	1. 1号墓(北から)	2. 1号墓遺物出土状態	232
	3. 1号墓作業風景	4. 2号・3号墓(東から)	
	5. 2～5号墓(北から)	6. 2～5号墓(北西から)	
図版55	1. 3～5号墓(東から)	2. 4号墓出土状態	233
	3. 4号・5号墓(東から)	4. 6号墓(北から)	
	5. 7号墓出土遺物	6. 7号墓(東から)	
図版56	1. 古銭(1号～4号墓)	2. ガラス玉(2号墓)	234
	3. 古銭(6号墓)	4. 櫛(4号墓)	
	5. 古銭(6号墓)	6. 数珠玉(7号墓)	

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の経緯

前畑遺跡は、郷之原台地の中央を通る県道西原～郷之原線の西側の平坦地に位置し、中原山野遺跡には隣接している。

昭和59年度の分布調査では、県道から排水路までの遺物の散布がみられたため、これを第4地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき、昭和60年4月確認調査を実施した。確認調査は、ほぼ中央の畑地にトレンチを1本設定した。確認調査の結果、この部分でアカホヤ火山灰の下層に縄文時代早期の包含層を確認した。遺物は密集しており遺跡の中心部と考えられた。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、この第5地点は、昭和62年度に再度確認調査を実施することとした。

第 2 節 発掘調査の方法と経過

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、本道部分の確認調査と一部の本調査及び上水道埋設部分等の確認調査及び本調査を実施した。発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のA B 20区付近までの確認調査を終了した。A B 20区付近の確認調査の結果、A B 20区以西にも遺跡が拡張することが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、A B 20区以西に確認調査を追加することになった。

発掘調査は、昭和62年度と昭和63年度の2年度にわたって実施した。

前畑遺跡の昭和62年度の発掘調査は、昭和62年6月19日から昭和63年3月9日の間に実施したが、工事の関係で中原山野遺跡と並行して実施せざるを得なかった。本道部分は、散布域のA B 20区付近までの確認調査を昭和62年6月19日から7月15日の1カ月間、中原山野遺跡の確認調査と並行して実施した。遺跡の想定をもとに、工事用センター杭No.415とNo.420を基準に10m×10mのグリッド網を確認調査対象区に被せ実施した。そして、グリッドは、東端から1～10区と南からA～C区として、各グリッドはA 1区-----A 10区、B 1区-----B 10区などと呼称することにした。そのグリッドの東側に2m×10mの確認調査トレンチを1グリッド毎に設定した。

A B 20区付近の確認調査の結果、A B 20区以西にも遺跡が広がることが判明した。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、A B 20区以西に確認調査を追加すること

になった。以下、発掘調査の経過は日誌抄をもって説明する。

【昭和62年度の調査】 昭和62年6月19日～昭和63年3月9日

6月は、グリッド設定を行い確認調査に入る。B7区～B17区までトレンチを設定。6月は確認調査に終始。表土直下から戦跡遺構、その下には弥生時代と縄文時代晩期が、さらに下層には縄文時代早期の包含層が確認された。

7月は、6月の継続とB19区、B20区の確認トレンチ掘り下げ作業。ほぼ遺物分布範囲のトレンチ設定は完了。すべてのトレンチで包含層を確認する。AB20区以西の部分にも遺跡の広がりが見込まれ、建設省大隅工事事務所と協議を行う。AB20区付近から以東に平面調査を実施する。AB15区～AB20区に掩体壕跡を検出。清掃・写真撮影・実測作業を行う。その下層に、AB17区～AB20区に弥生時代包含層を検出し掘り下げ開始。7月26日『かごしまの古代探訪』。

8月は、掩体壕の精査と周辺の弥生時代包含層の掘り下げ作業。AB12区・AB13区の平面調査で近世墓検出。10日、小片丘彦鹿児島大学教授近世墓調査。11日、建設省よりAB20区以西の確認調査の依頼があり、B23区～AB27区にトレンチ設定。その結果、AB24区付近まで弥生時代包含層が残存することが確認される。AB17区～AB20区に住居址や掘立柱建物跡等の弥生時代遺構検出。この区の遺構の配置をほぼ確認する。

9月は、AB21区～AB25区の弥生時代の遺構の検出作業。表土剥ぎ作業を行い、表土直下に弥生時代包含層を検出。遺物実測・取り上げ作業の処理を行い遺構検出作業。17日、掘立柱建物跡5基を確認する。この区は、建物跡だけ存在する。遺構の精査と平面実測に入る。並行して18日からは、AB6区～AB12区の弥生時代包含層の掘り下げに入る。

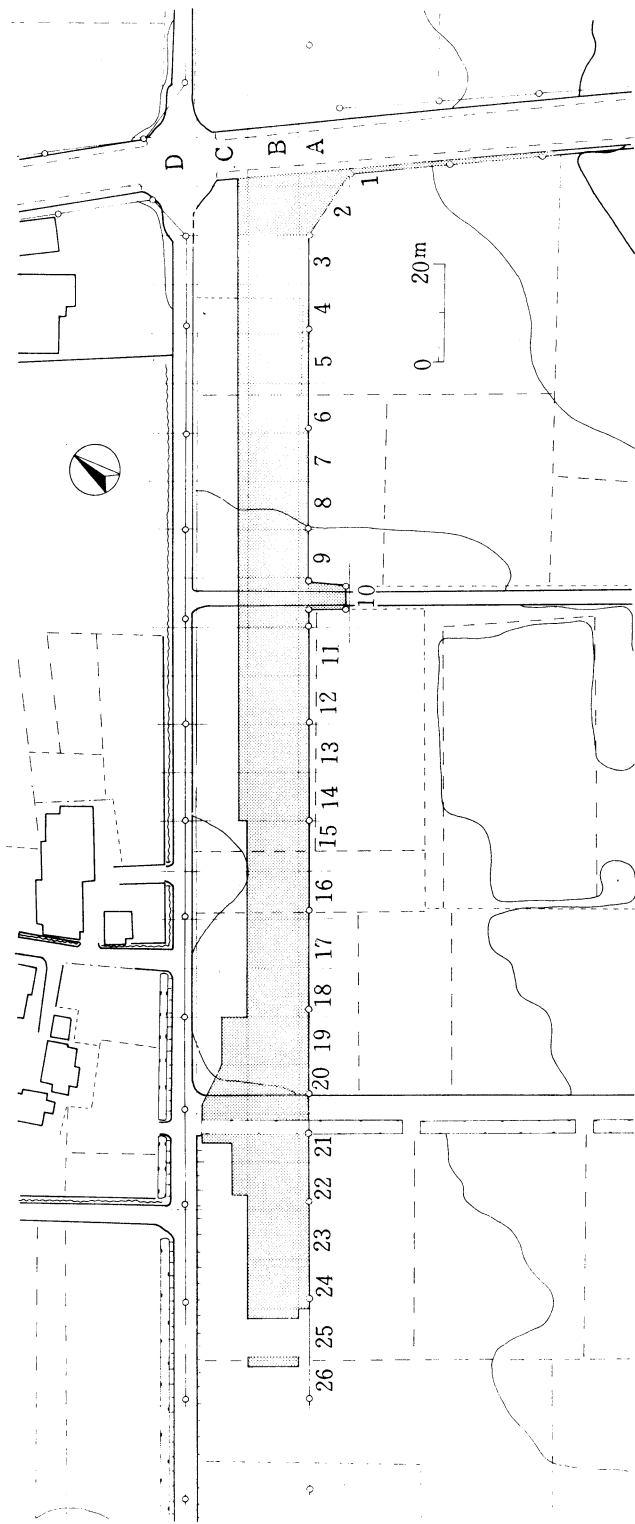
10月は、工事の関係で中原山野遺跡の調査を中心に行う。その間、AB13区～AB15区のアカホヤ火山灰上部の清掃とAB11区・AB12区縄文時代早期包含層の調査を開始。

11月は、中原山野遺跡の調査に主力を置く。一部、C1区とD1区の電話線埋設部分の調査を行う。そしてAB11区・AB12区縄文時代早期包含層の調査。

12月は、県道西原～郷之原線の前畑遺跡分の上水道埋設部分の調査に入る。戦跡遺構と縄文時代早期包含層を検出。また、20区～21区にかかる排水溝の建設のため、C19区・C20区を拡張する。22日からAB13区・AB14区のアカホヤ火山灰層を排土し、早期包含層の掘り下げ作業を行う。年度末は25日に終了。

1月は、6日調査開始。AB11区～AB14区の縄文時代早期包含層の調査から開始する。早期の遺物が多量に出土。継続してAB20区・AB21区の道路部分の掘り下げ作業を行う。道路下の弥生時代包含層は遺物が多量に出土する。遺物の処理後、遺構検出作業。月末は住居址1号～3号の掘り下げに主力を置く。

2月は、住居址1号～3号の掘り下げ作業及び実測。並行してAB11区～AB13区の早期包含層の掘り下げ作業継続。続いて建物跡の一段掘りを行い建物跡の配置を確認。10日、河口貞



第1図 前畑遺跡の地形とグリッド配置図

徳県文化財保護審議会委員現地指導。12日、全体写真撮影。排水溝工事のため建物跡2及び建物跡3の柱穴掘り下げ。月末、21区以西の建物跡の調査に主力を置き終了する。宮本長二郎奈良国立文化財研究所遺構調査室長、建物跡調査指導。

3月は、住居址1号～3号及び建物跡1号～3号の実測・写真撮影を行い終了。今年度の工事区間については9日で終了する。

【昭和63年度の調査】 昭和63年4月19日～9月2日

4月は、昨年度の残部のAB4区・AB5区の表土剥ぎ作業を行い遺構検出。戦跡遺構（誘導路）を検出。さらに、AB13区・AB14区は縄文時代早期の遺物の検出及び実測取り上げ作業継続。弥生時代住居址1号・2号の最終面の写真実測。

5月は、AB11区～AB14区間の縄文時代早期包含層の掘り下げ検出作業を継続。大量の遺物とともに集石遺構検出。集石は3基検出。写真撮影及び実測作業。

6月は、しばらく先月の継続。AB11区～AB14区の早期包含層の掘り下げ作業。13日からAB3区～AB4区の早期包含層掘り下げに移る。20日からAB5区～AB6区の早期包含層に移る。AB3区～AB4区は下層確認の深掘り作業。AB7区～AB9区へ移動。早期包含層はほとんど全域に広がる。

7月は、AB7区～AB9区の早期包含層の掘り下げ及び実測・遺物取り上げ作業。10区へも入る。AB9区～AB10区付近が最も遺物が多く難行。

8月は、AB7区～AB10区の早期包含層の最終面の調査。C3区～C6区の拡張区の早期包含層の掘り下げ作業に入る。C3区拡張区より縄文時代早期の特殊石斧が出土。AB7区、AB9区の下層確認の深掘りトレンチ掘り下げ作業続行。断面実測。集石遺構の実測。集石3号～8号は平面実測から開始。1号・2号は断面実測に移る。月末終了。17日から、C7区～C14区の早期包含層の掘り下げ開始。遺物実測。取り上げ作業の継続。掘り下げ作業は8月31日で終了。9月1日～2日、残部の断面実測を終了し、機材等を撤去し運搬。前畑遺跡の全ての発掘調査を完了する。

第3節 発掘調査の概要

昭和62年度の発掘調査は、戦跡遺構と弥生時代の住居址・掘立柱建物跡等の集落跡の調査及び縄文時代早期包含層の一部の調査である。

本発掘調査は、上層から順次行った。その結果、AB1区～AB20区にかけては、戦時中の遺構・遺物が多量に出土した。AB1区～AB10区には、誘導路と付属施設が検出された。さらに、AB14区～AB20区には、飛行機を格納するための掩体壕が検出されている。

その下層には、近世の溝状遺構と墓が検出されている。溝状遺構は、AB7区～AB8区、AB11区～AB12区、AB17区～AB24区にかけて検出されたが用途は不明である。近世墓は

A B 12区～A B 13区、A B 20区にかけて7基発見されている。

A B 16区～A B 25区の間に弥生時代の、遺物包含層・遺構が検出された。遺構は、竪穴住居址3基、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基、溝状遺構3基(但し、建物に付随するものが2基)検出された。時期は、弥生時代中期末～後期初頭の山ノ口式土器に該当するものである。

住居址は、B 7区(1号)、B C 19区(2号)、B 20区(3号)に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。1号及び2号住居址は、焼失家屋であり、炭化木が住居址内に多量に出土している。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは1号～3号建物で、梁間が3間のものである。3号は現水路で破壊されているため全形は知り得ないが、1号、2号建物は、梁間×桁行間が3間×4間である。1号、2号には、中央付近に炉跡状の変色部分が確認され、さらに北側に溝状の遺構が付設されている。なお、1号建物には、棟持柱状の柱穴が梁間外側に確認された。平地式建物の可能性が大きい。

二つ目のタイプは、梁間が1間のものである。4号建物は、1間×1間のタイプである。5号建物は用地外に延びるが、1間×2間の建物の可能性が強い。6号～8号建物は、1間×2間の同一タイプのものである。外側の4本柱が主柱で掘り方が大きく深い。中柱は小さく浅いため添え柱の可能性が強い。高床倉庫跡の可能性が大きい。

円形周溝は、C 20区に1基発見された。2号建物と3号建物に切られているため、この円形周溝が一番古い段階の構築物であることがわかる。用途は不明である。

溝状遺構は1号・2号は建物跡に付随するものである。建物跡に付随した溝は全国的にも珍しく極めて貴重である。3号溝は直角に曲がる形で検出されたが、削平されて全容は不明である。

特に、竪穴住居址、平地式建物跡、円形周溝遺構、高床式建物跡の遺跡内での配置は、集落構成を知るための貴重な資料となった。

縄文時代晩期の時期は、A B 1区～A B 9区の間を確認された。この区間については、包含層の掘り下げで終了した。遺構は検出されていない。

縄文時代早期の時期は、A B 1区～A B 17区間を確認され一部を終了し、残りについては昭和63年度に継続して実施することになった。早期の時期は、集石遺構等が確認されている。早期該当の時期は、平椀式土器を中心に出土し、石坂式土器・塞ノ神式土器が若干含まれる。

昭和63年度の発掘調査は、A B 4区～A B 5区の未調査(未買収)の部分の調査とA B 11区～A B 14区の縄文時代早期包含層の掘り下げ作業を行う。さらに、建設省から2m幅の工事拡張のための調査依頼があり、その部分を追加して調査を行う。

調査は、ほとんど縄文時代早期包含層の掘り下げ作業で集石遺構8基に伴って大量の遺物が出土している。A B 9区～A B 11区付近が微高地状に高くなり、その微高地は南の用地外に広がる。特に縄文時代早期の遺物の中心は、A B 9区～A B 13区付近で用地外は南側に広がることが予想される。

集石遺構は、この微高地の北側の端部に配置されている。調査範囲内で8基の検出であり、用地外を含めると相当な存在が予想される。

微高地上の集石遺構に囲まれた中央に広場状の空間が存在するが、住居址等の遺構は存在しない。

なお、C3区の拡張区の縄文時代早期包含層中から、敲打仕上げの特殊な石斧が出土し注目されている。

第4節 遺跡の層位

前畑遺跡の層位は、発掘調査対象区域が約250mにも及ぶため区によっては大きな変化がみられる。先に記載（第一分冊「概要編」・第三章・第1節）した大浦・郷之原地区の基本的層序と比較すると、欠落する層位や若干変容する層位もかなりみられる。そのためここでは、前畑遺跡のうち安定した地層と考えられるB10区とB11区付近の層位から前畑遺跡の層位的特徴を説明する。

挿図の第3図と第4図は、前畑遺跡の層位断面図である。層位断面図は、発掘調査対象区が道路建設のため12m幅で台地を輪切りにした形で長く延びるため、センター部分つまりB区列の北側断面を1本通した。それが、第3図①～第4図⑧である。そのほかに、台地の縦位の地層を知るために20m毎に東側断面を提示した。それが、第3図～第4図である。

前畑遺跡の層位をみると、ほぼ基本的層序に準じている。このなかで前畑遺跡で確認されず欠落することが考えられる層は、Ⅷ層の砂礫層である。この砂礫層は入戸火砕流堆積後の自然現象によるもので、台地端部などに局部的形成が考えられるものであり、台地中央部に位置する前畑遺跡で欠落するのは当然の現象である。

I層は、a～cの3つに分離しているが、前畑遺跡ではほとんどがa、bの2層が確認される。特に、縄文時代早期遺跡が所在するB3区からB15区付近は高台のためか、削平されて旧地形をとどめていない。ただ、弥生時代の遺構が検出されたB19区～B20区の一部の付近だけはa～c層やその直下の層が残存しているようである。

II層は、純黒色の綺麗な土層である。B7区付近からB11区の途中までとB19区の途中からB22区の途中までに残存している。いずれも下層が凹地を形成している部分にあたる。確かな遺構・遺物は確認されていないが、実態の不明な溝状遺構がみられるのみである。

III層は、黒褐色土層で弥生時代中期～後期初頭の包含層である。弥生時代の遺構をはじめ多くの遺物が出土している。A B16区～A B24区付近の範囲である。

IV層は、黄茶褐色土層を呈する。黄色の微粒子を含み火山灰状を呈している。この層は、中原山野遺跡の調査の結果、中原山野遺跡の黄白色土層に対比されることが判明した。しかもこの層は火山灰層ではなく、下層のⅪ層にあたる薩摩降下軽石火山灰層の二次堆積の可能性が高い。中原山野遺跡では厚い独立層を形成するが、縁辺部の遺跡ではこのように薄い形状の堆積

になる。

V層は、茶褐色土層で縄文時代晩期の包含層を形成している。本遺跡では、6～9区に包含層が残し遺物が出土している。他の地区は、削平されている。

VI層は、黄褐色土層であり、一般的にはアカホヤ火山灰層の二次堆積層である。下層にVII層にあたる池田降下軽石層が浮遊した状態で堆積し、この軽石層より上面がVI層にあたる。

VII層は、池田降下軽石火山灰層に相当するが、この付近では層は形成されていない。

VIII層は、アカホヤ火山灰層に相当する。VIII層はVIII a層の赤褐色土層が大部分を占めるが、これは幸屋火砕流に比定されるものである。

IX層は、前畑遺跡ではほとんどみられない。権現山火山灰と呼ばれるものに相当する。

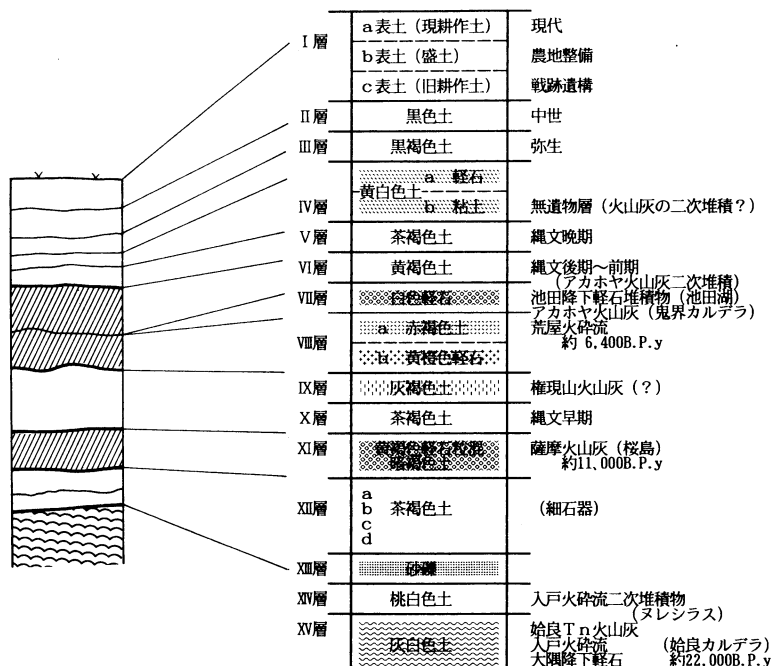
X層は、茶褐色土層の粘土層で、一般的に縄文時代早期の包含層を形成する。前畑遺跡ではA B 2区付近からA B 14区付近まで包含層が形成され、集石遺構や多量の遺物がみられる。

XI層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層でいわゆる「薩摩火山灰層」と呼ばれる火山灰堆積物から成っている。部分的に止切れる部分もみられるが、ほとんどの地点で層形成がみられる。

XII層は、茶褐色土層の粘土層である。一般的には細石器文化が包含されるが、本遺跡では層は存在するが細石器文化は確認されていない。

XIII層は、桃白色土層で、通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

XIV層は、入戸火砕流で通称「シラス」と呼ばれる堆積物である。通常本県では、数m～数十mの厚い堆積がみられ、本遺跡では基盤層と成っている。



第2図 大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位

第 II 章 縄文時代の調査

第 1 節 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構、近世遺構及び弥生時代の調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の進捗状況によって各区の調査行程は若干異なっている。

前畑遺跡の縄文時代は、X層（アカホヤ火山灰下層）中から早期に該当する時期（AB8区～AB14区を中心にした範囲）と、V層に晩期に該当する時期（AB6区～AB8区の範囲）の2時期の包含層が検出された。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業、遺構検出作業の順の行程で進化した。

縄文時代（X層・V層）の確認調査については、AB2区～AB24区までは20m毎に2m×12mの南北トレンチ調査で確認調査を実施した。その結果、V層の包含層はAB6区～AB8区に確認され、X層の包含層はAB8区～AB14区に確認された。そして、V層から引き続き全面調査を実施した。

X層は、総数約4,500点の遺物のほか集石遺構6基以上が検出されている。V層には、総数117点の遺物の出土がみられた。

第 2 節 X層の調査

1 X層の概要

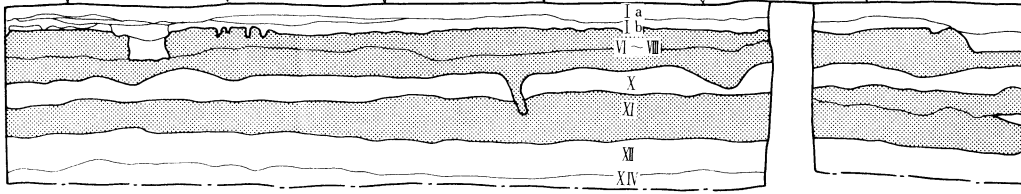
X層で早期包含層が確認されたのは、本道建設部分のAB1～14区の区域であるが、その中心はAB8区～AB14区付近である。

X層からは、6基以上の集石遺構が検出されたが、住居址などの他の遺構は確認されなかった。X層からの出土遺物は、総数約4,500点を数える。

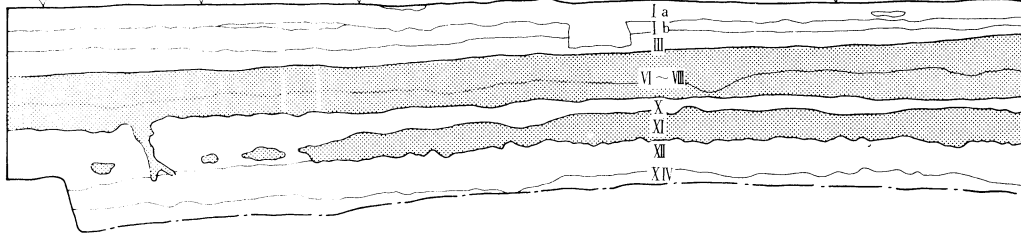
2 遺 構

遺構は、X層下面に集石遺構が6基以上が検出された。集石遺構として検出したものは6基であったが、包含層中に検出される礫の分布状況（第5図）をみると、これ以外にも存在したことが考えられる。つまり、包含層の形成時に流失した可能性がある。また、集石は、遺跡の存在する微高地の縁辺部端に構築されている。集石遺構の時期は、共伴する確かな遺物はないが、遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えられる。遺跡は、包含層や遺構の検出状態からその中心は南側の用地外へ広がることが想定される。調査区

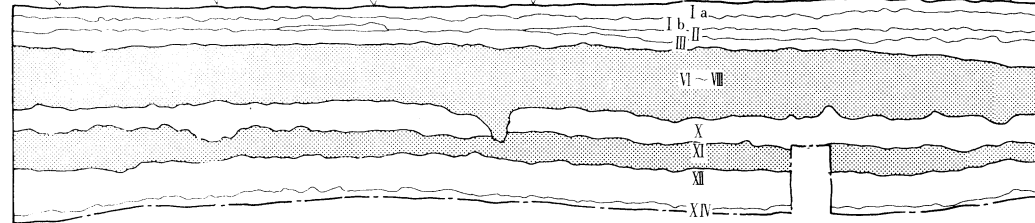
① B 3 ~ B 5 区北側壁面断面図



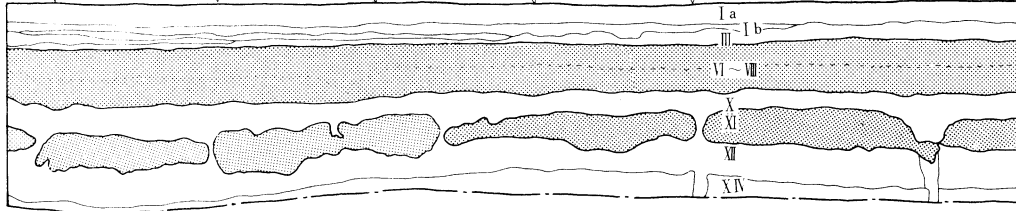
② B 6 ~ B 8 区北側壁面断面図



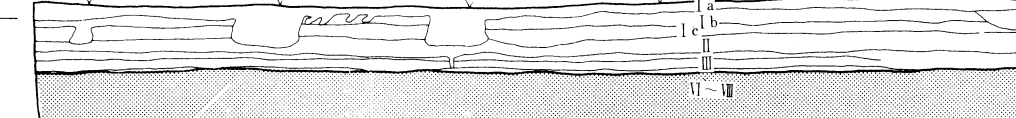
③ B 9 ~ B 11 区北側壁面断面図



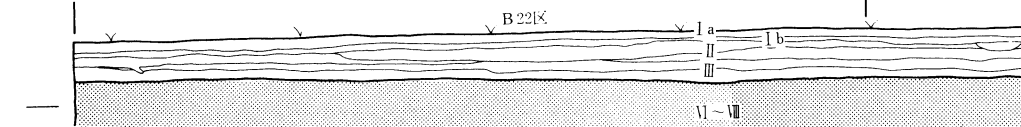
④ B 12 ~ B 14 区北側壁面断面図

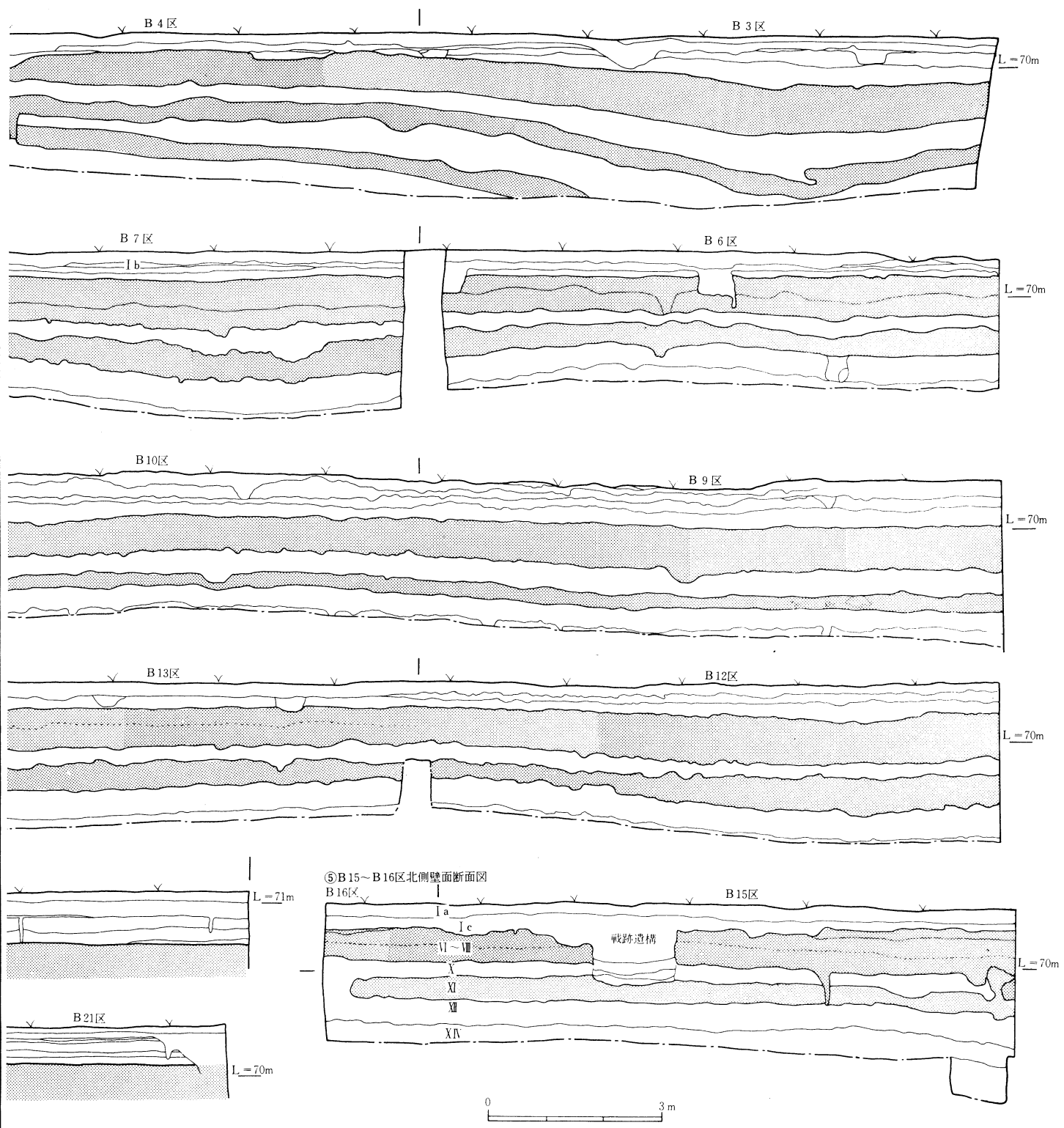


⑥ B 19 ~ B 21 区北側壁面断面図

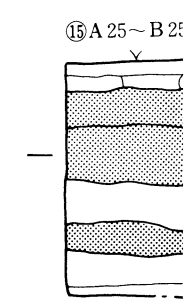
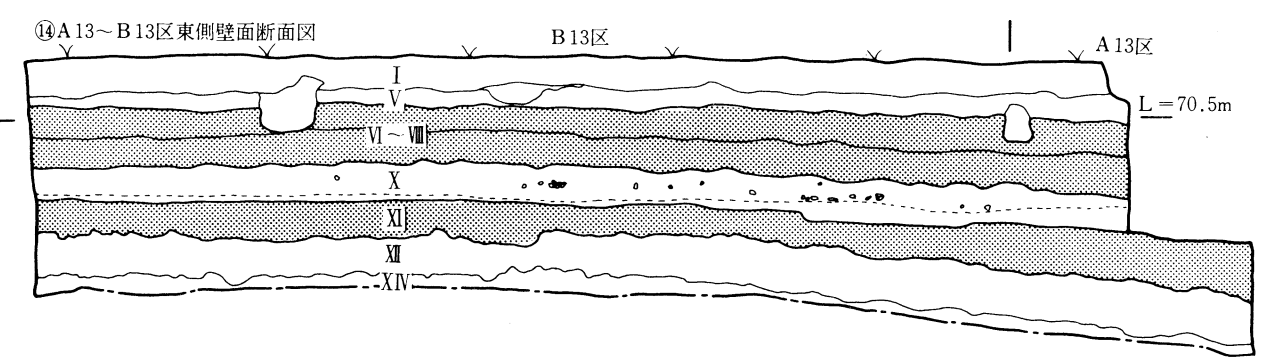
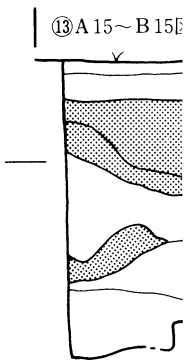
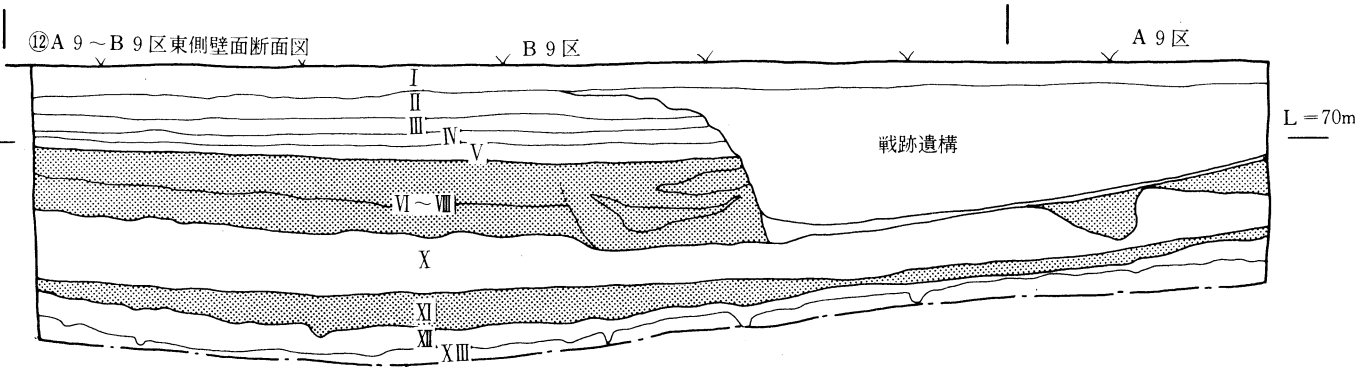
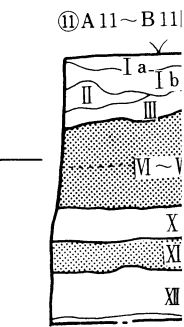
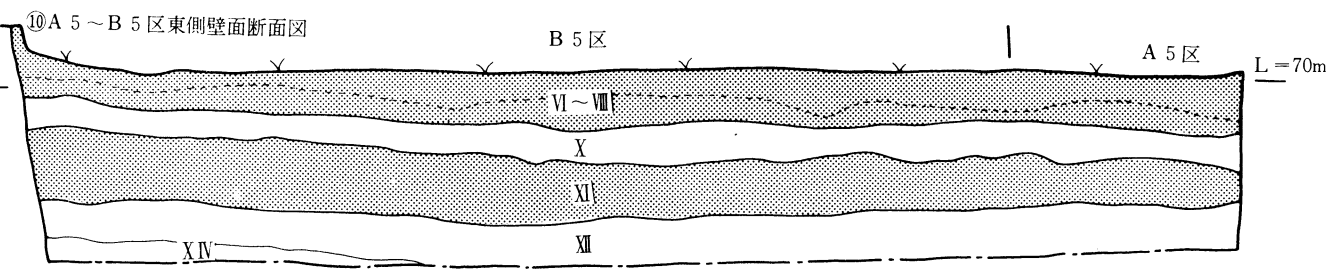
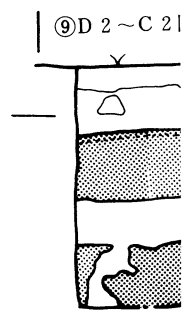
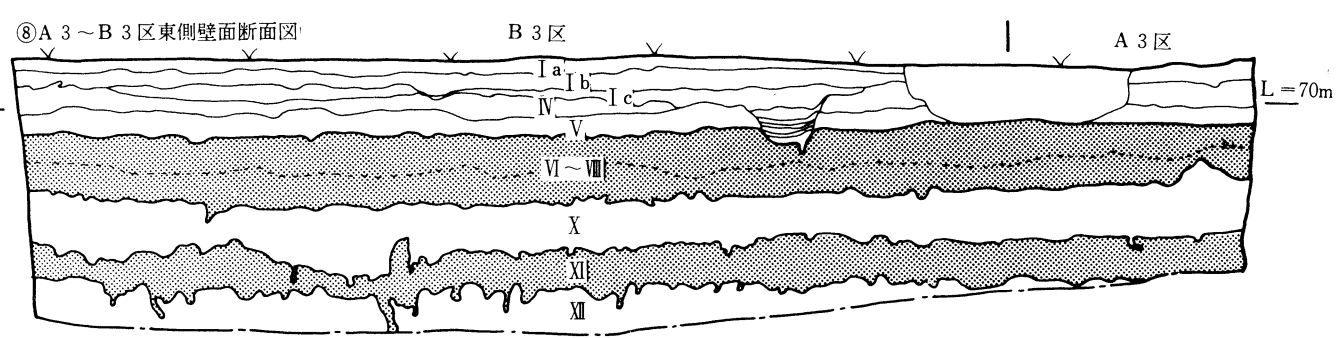


⑦ B 21 ~ B 22 区北側壁面断面図

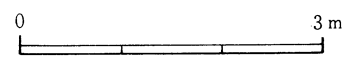
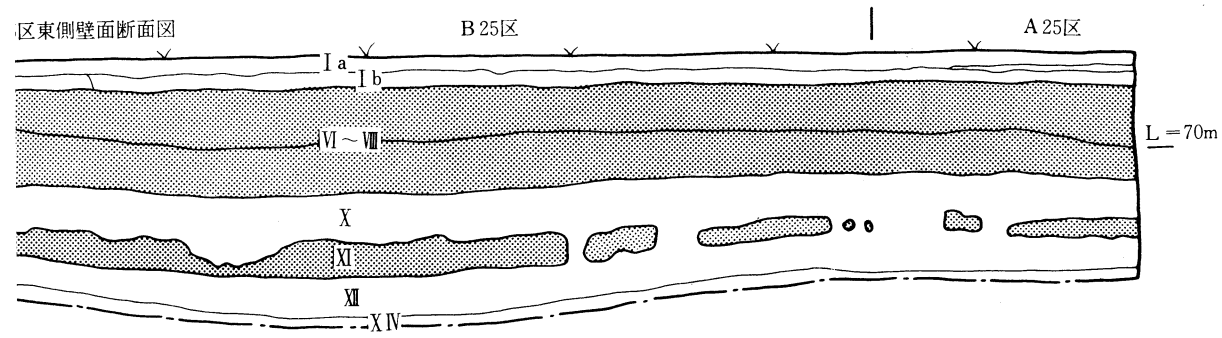
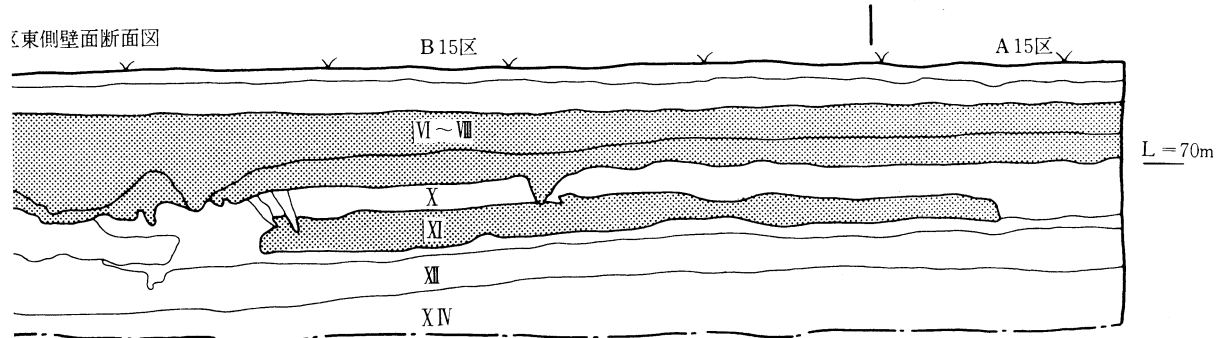
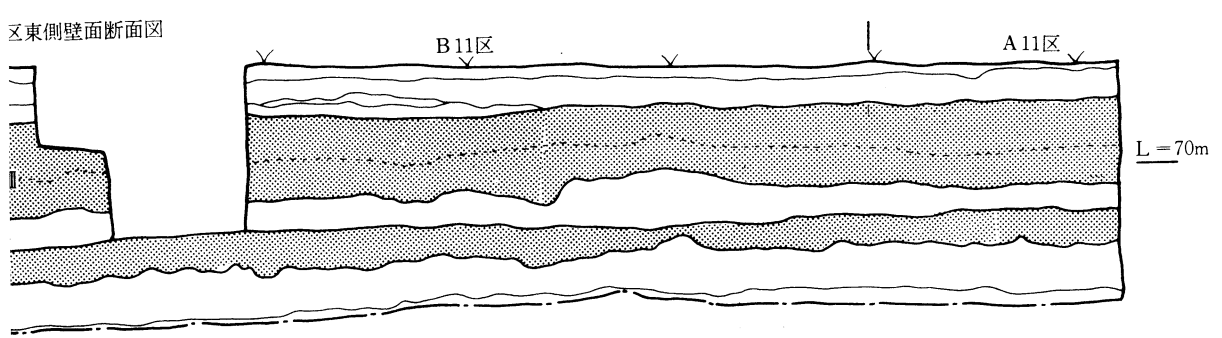
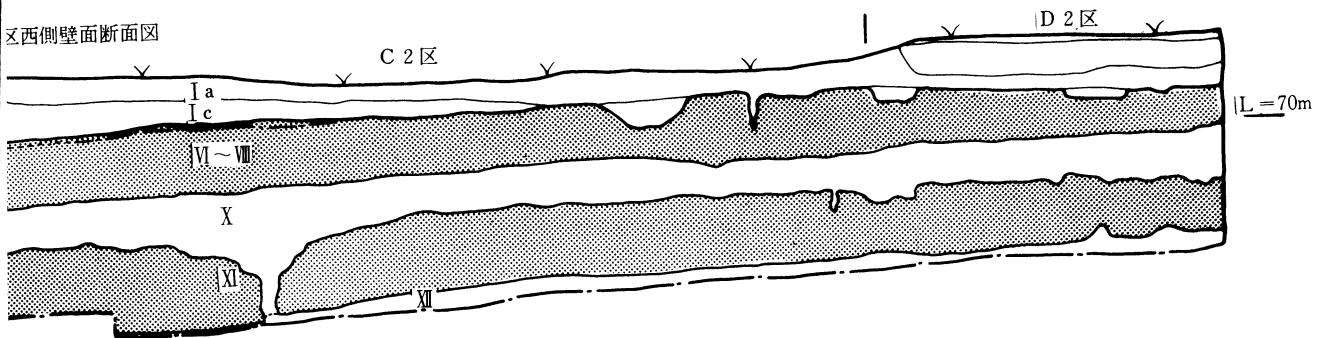


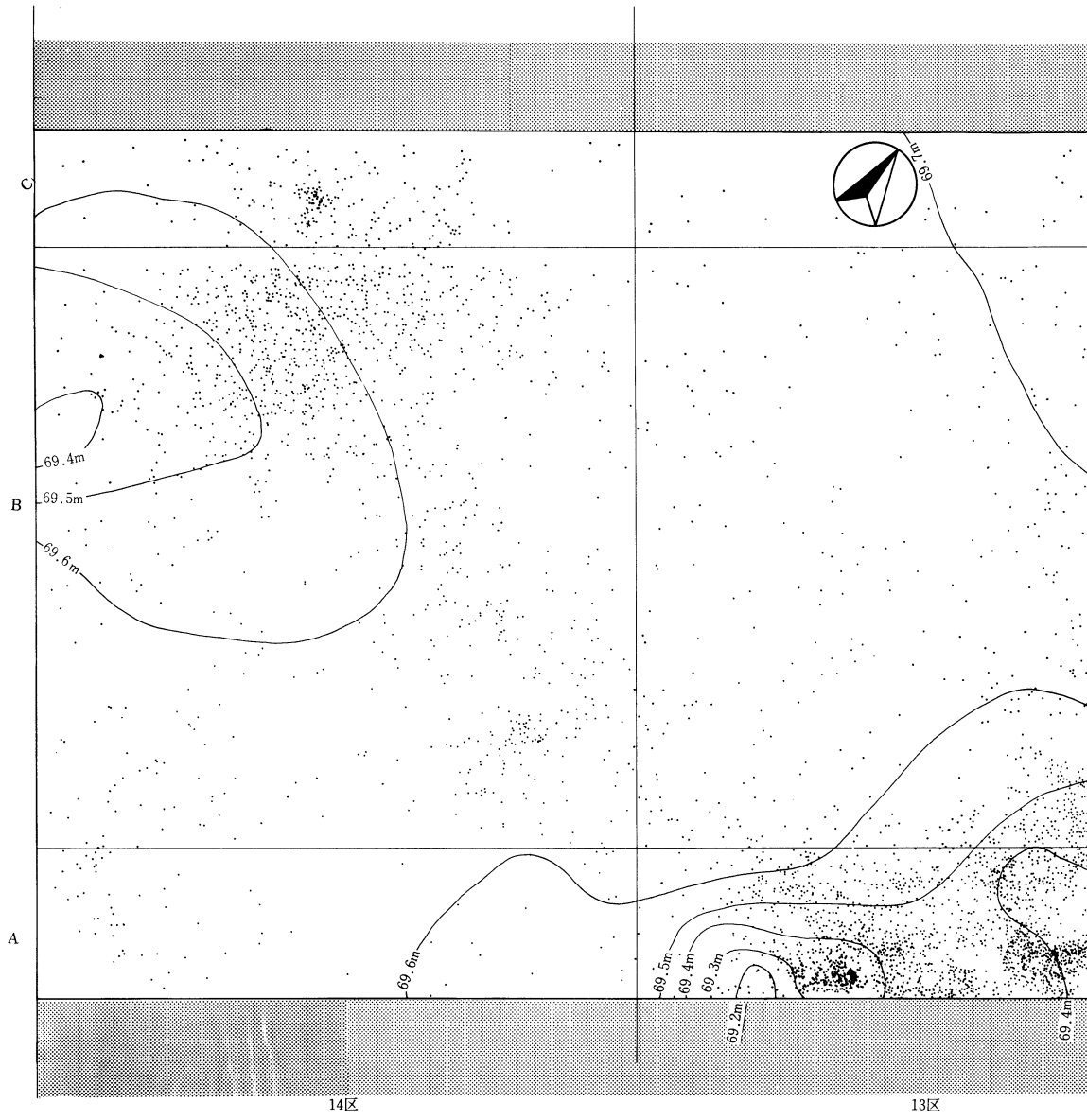


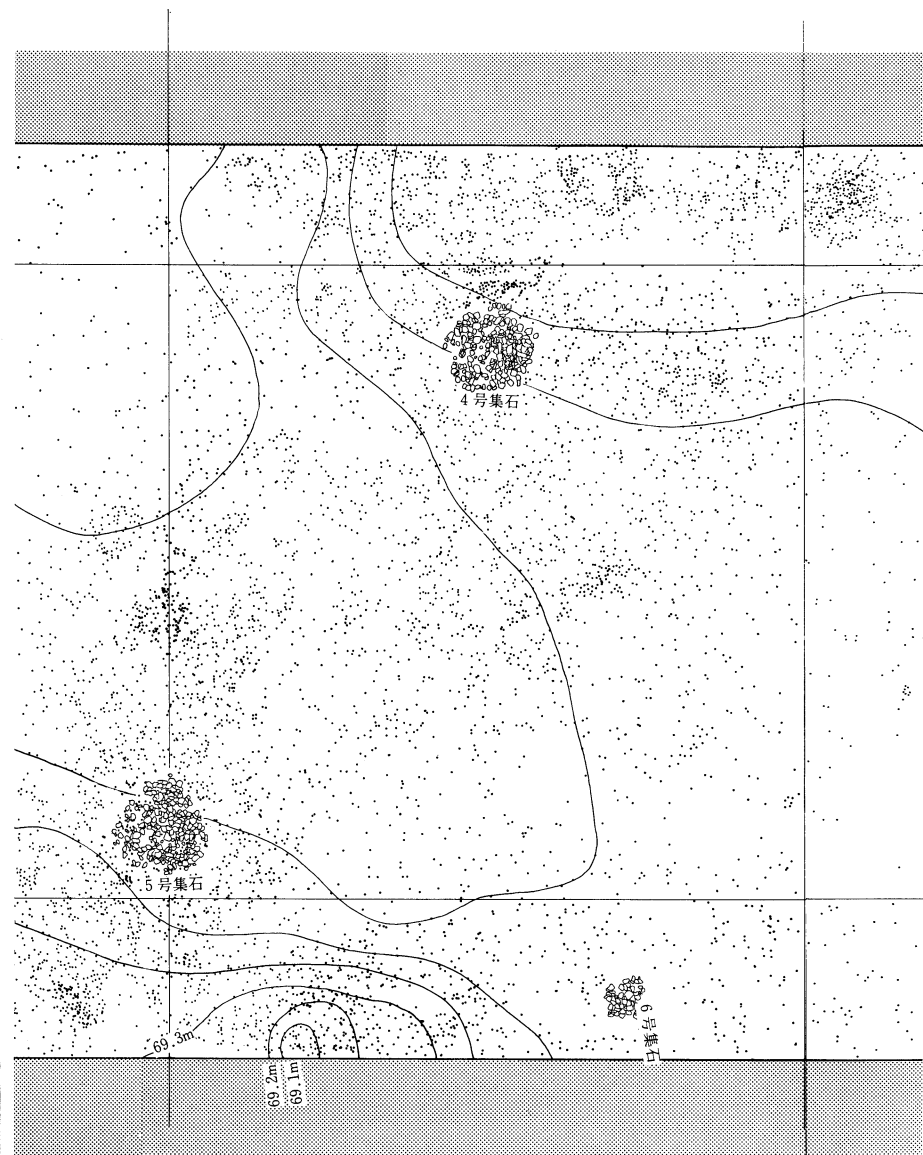
第3図 前畑遺跡の層位図(1)



第 4 図 前畑遺跡の層位図 (2)



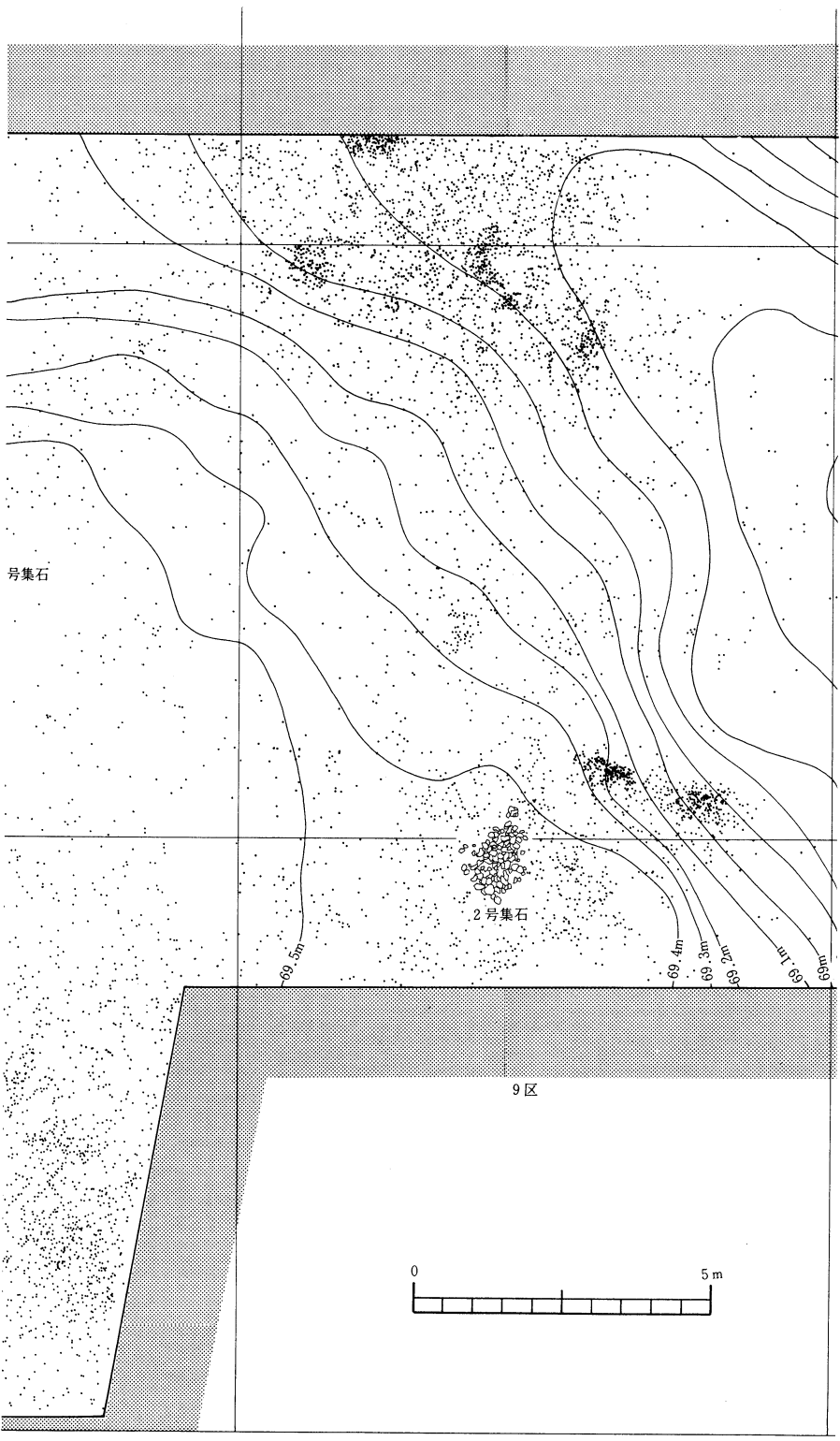


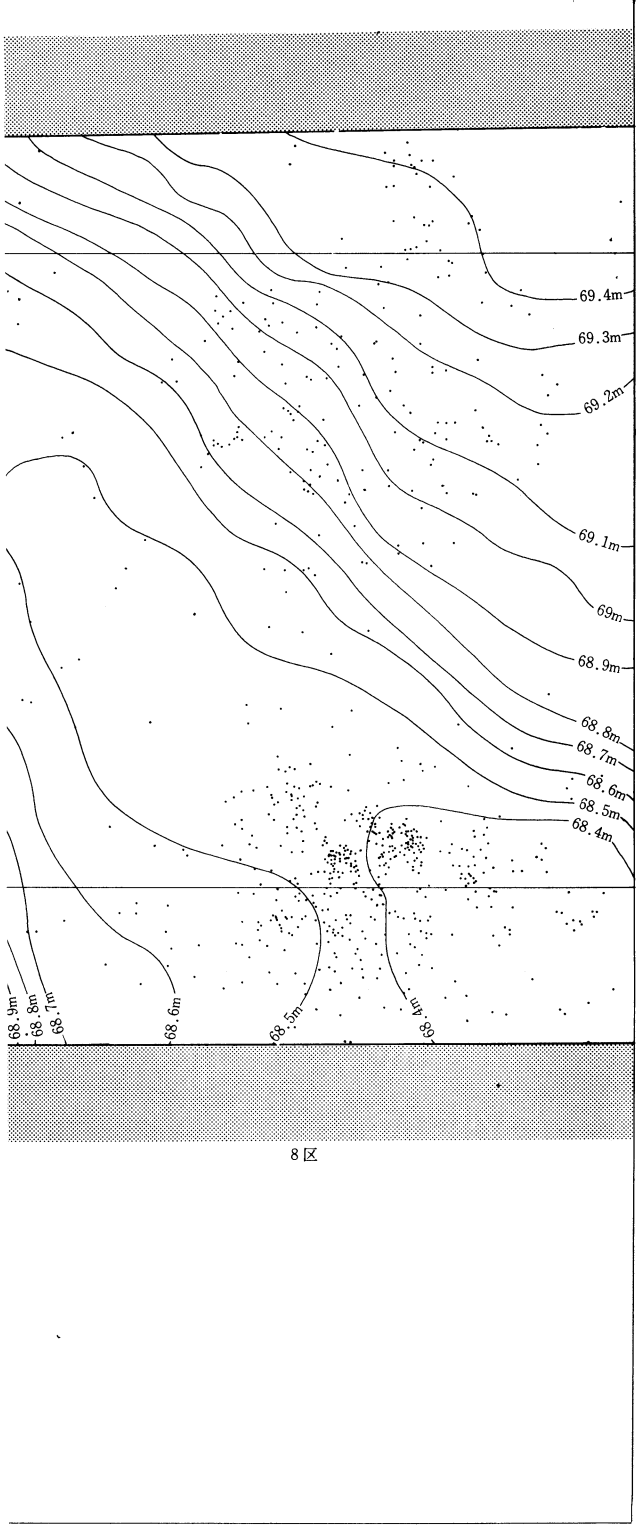


12区



第5図 集石遺構と礫の分布状況





8 区

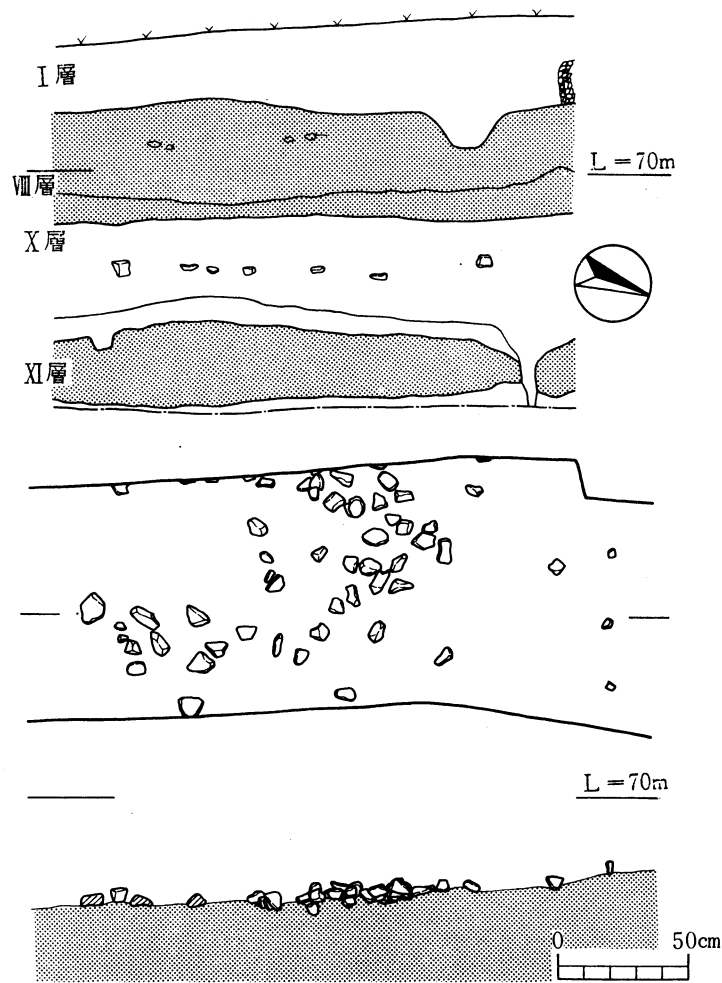
内においては住居址などの他の遺構は検出されていないが、遺跡の北端の様相を如実に示している。

(1) 集石遺構

集石遺構は、A B 1区からA B 14区間に6基検出されたが、礫の検出状況からこれ以外にも存在したことは確実である。1号のように礫の散乱したものは多数検出されたが、2号～6号のようなまとまりをもつ集石は5基の確認に留まった。集石遺構はほとんどが平坦面状に集積しており、下面が摺り鉢状をなす集石は3号の1基のみである。

集石1号 (第6図)

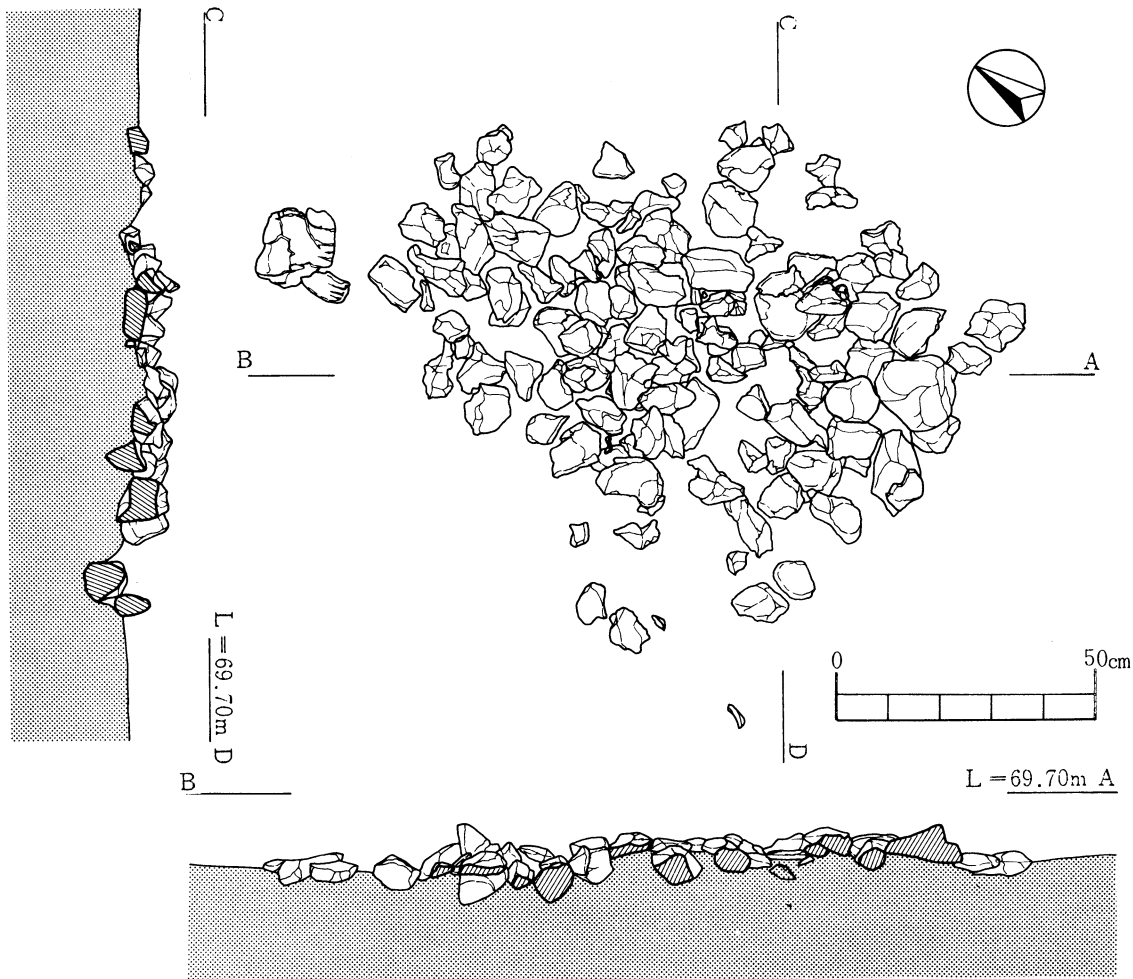
集石遺構1号は、B 1区の用地外に近い位置に検出されている。緑地保存地帯内の水道管理設溝内の検出である。集石1号は、第5図のように礫が散乱した状態であり、集石遺構とは呼び難いが、周辺には存在する可能性がみられる。集石は、層位的にはX層の中ほどに形成されており、包含層から出土する遺物の時期に対応することが考えられる。



集石2号 (第7図)

集石遺構2号は、A 9区の北部に位置し一部B 9区に広がって検出されている。集石の形状は、南北約130cm、東西約100cmの楕円形プランを呈したものである。集石は、掘り込みはみられず平坦

第6図 1号集石実測図

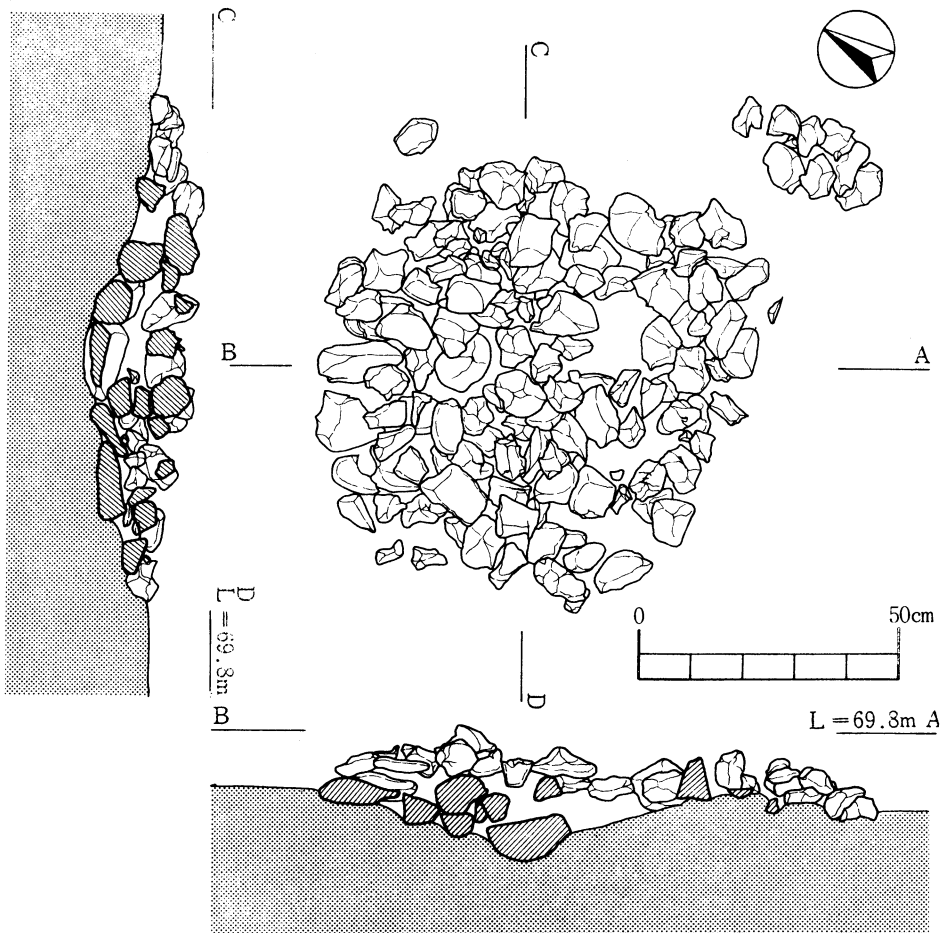


第7図 2号集石実測図

面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数423個を数えほとんどが破碎された角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが149個と10cm以上のものが52個で、他の大多数を占める222個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g=199個、101～200g=67個、201～300g=48個、301～400g=27個、401～500g=25個、501g以上=57個で、1～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石3号 (第8図)

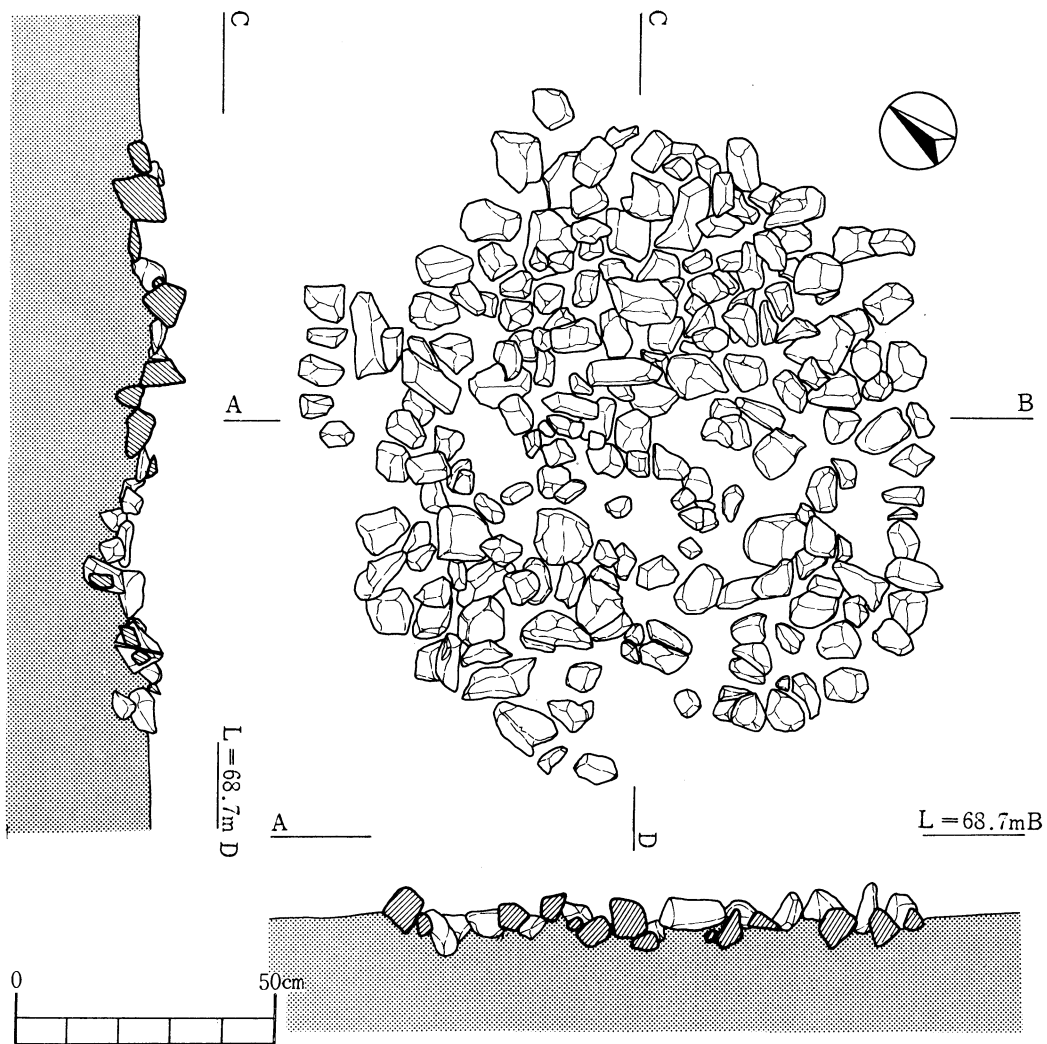
集石遺構3号は、B10区のほぼ中央に検出されている。集石1号は、径80cmの円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みがみられ、下面に比較的大きな礫が置かれた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数89個でほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが34個と10cm以上のものが13個で、他の大多数を占める42個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1～100g=39個、101～200g=10個、201～300g=12個、301～400g=10個、401～500g=4個、501g以上は14個で、1～500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第8図 3号集石実測図

集石4号 (第9図)

集石遺構4号は、B12区の北側に検出されている。集石4号は、径110cmの円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数389個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系(現在の採石場と同じ岩石)に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5cm未満のものが129個と10cm以上のものが59個で、他の大多数を占める201個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=166個、101~200g=60個、201~300g=59個、301~400g=38個、401~500g=19個、501g以上=47個で、1~500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重

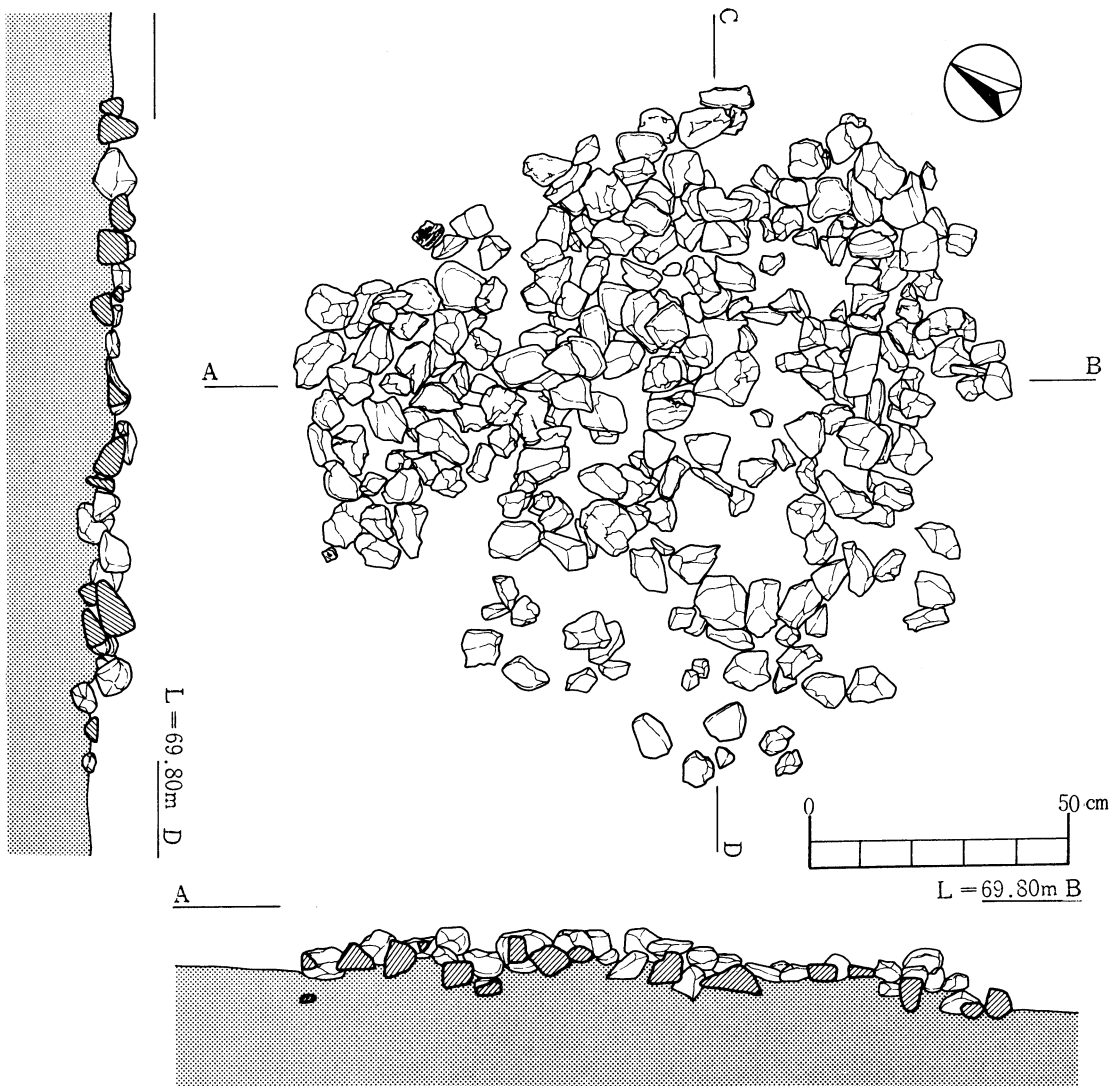


第9図 4号集石実測図

さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石5号 (第10図)

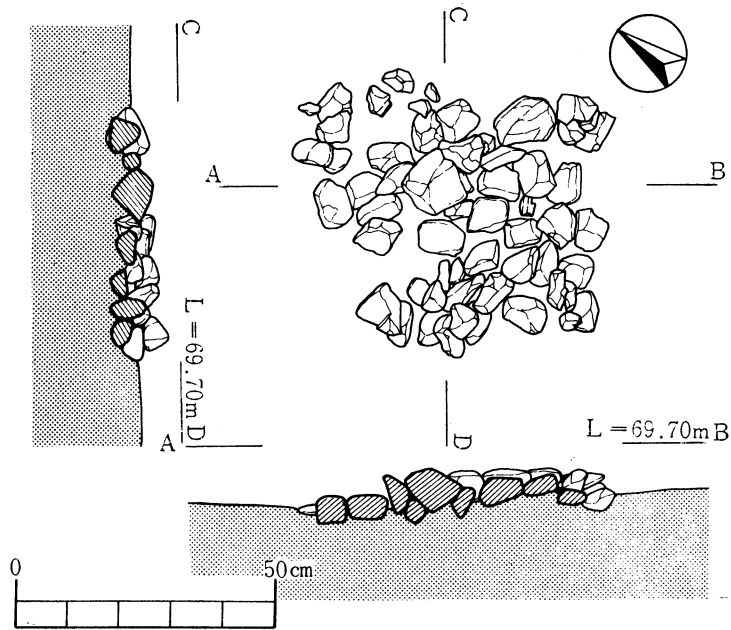
集石遺構5号は、B12区とB13区の南側の境上に検出されている。集石5号は、径130cmの略円形プランを呈した中規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数347個を数え、ほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩は、遺跡の北方の高隈山系(現在の採石場と同じ岩石)に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたためか若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの



第10図 5号集石実測図

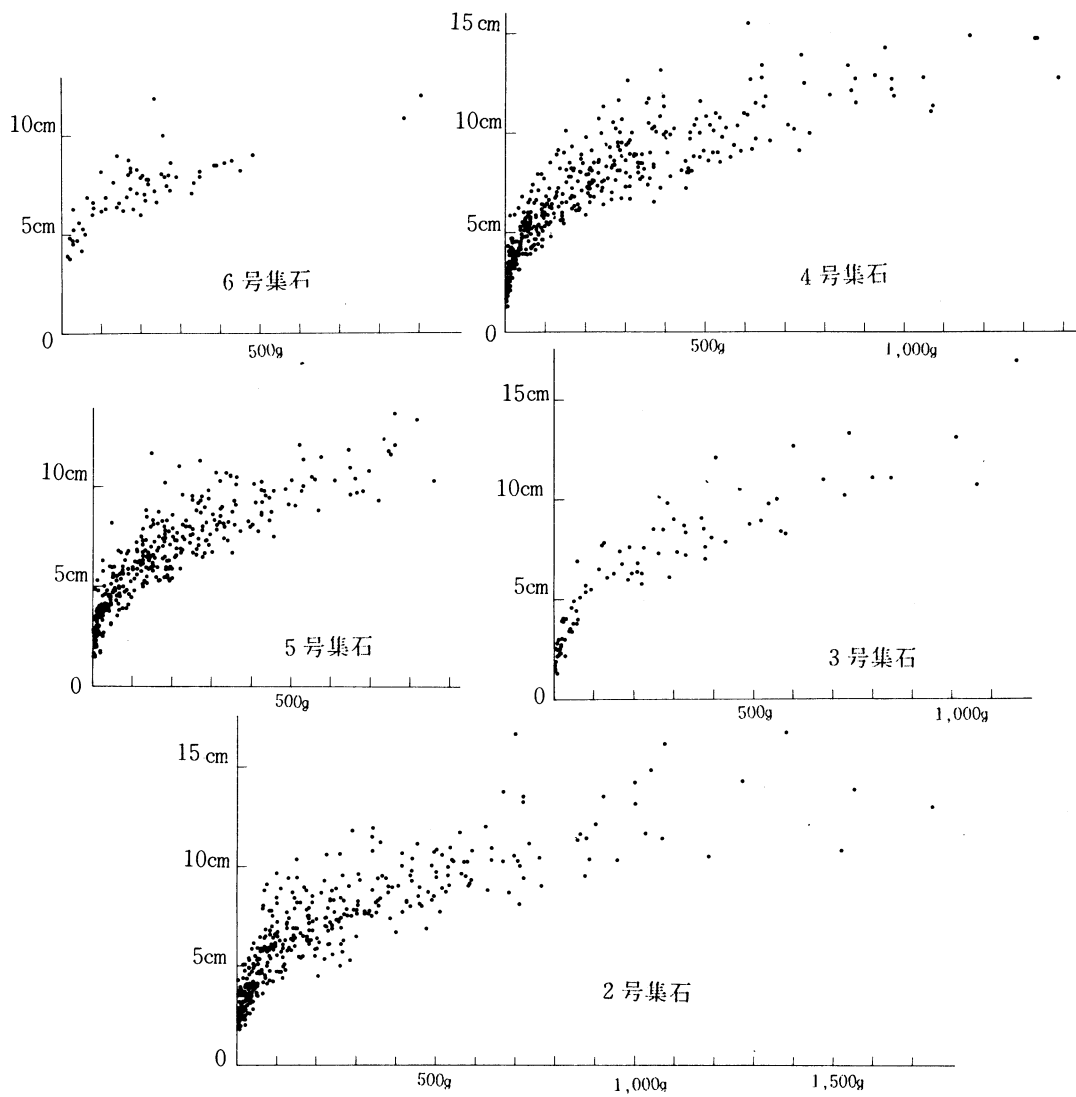
内訳は、次のようになる。大きさは、5 cm未満のものが108個と10cm以上のものが29個で、他の大多数を占める210個は5cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=139個、101~200g=89個、201~300g=50個、301~400g=28個、401~500g=18個、501g以上=23個で、1~500gの重さに集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さともに比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。

集石6号 (第11図)
 集石遺構6号は、A12区のA11区よりの北部に位置して検出されている。集石6号は、径60cmの円形プランを呈した最も小規模なものである。集石は、掘り込みはみられず平坦面に集められた状態である。集石の石材はすべて輝緑岩で、総数67個と最も少なくほとんどが角礫で構成されている。集石に使用された輝緑岩



第11図 6号集石実測図

は、遺跡の北方の高隈山系（現在の採石場と同じ岩石）に産する礫岩と考えられる。礫は、火を受けたため若干赤味を帯びている。石礫の大きさと重さの内訳は、次のようになる。大きさは、5 cm未満のものが10個と10cm以上のものが3個で、他の大多数を占める54個は5 cmから10cm内に納まる大きさである。重さでみると、1~100g=20個、101~200g=18個、201~300g=17個、301~400g=6個、401~500g=4個、501g以上=2個で、1~500gの重さにほとんど集中している。第12図は大きさ・重さの重量比を現わしたグラフであるが、大きさ・重さとも比較的小振りな礫を使用していることになり、縦座標軸の下面に集中する傾向にある。



第12図 集石遺構の石塊の最大長と重量比

3 出土遺物

(1) 土器

X層出土の土器は、形態上の特徴からⅠ類～Ⅵ類に大きく6つの類別を試みた。そのうち、今回の調査区においては、Ⅳ類に類別したものが圧倒的に多い。すなわち、本遺跡では、このⅣ類土器が主体を占める遺跡といえよう。Ⅰ類～Ⅲ類及びⅤ類・Ⅵ類は数量的にはわずかな出土で、本遺跡の今回の調査区においては客体としての様相を示している。

1. 類別の基準

次のような形態的特徴から、Ⅰ類～Ⅵ類土器に類別した。

①Ⅰ類土器 (第15図-1～8)

円筒形で平底を呈し、口縁部はわずかに外反する。口縁部付近は貝殻刺突文を施文し、胴部は斜位の無造作な条痕文が施されるタイプである。

②Ⅱ類土器 (第15図-9～10)

円筒形土器の胴部破片である。器面には、横位の太めの条痕が施文されるタイプである。

③Ⅲ類土器 (第16図-11)

山形の回転押型文土器である。わずか1点の出土であるが、同包含層出土の他の土器型式と関連して興味深い。

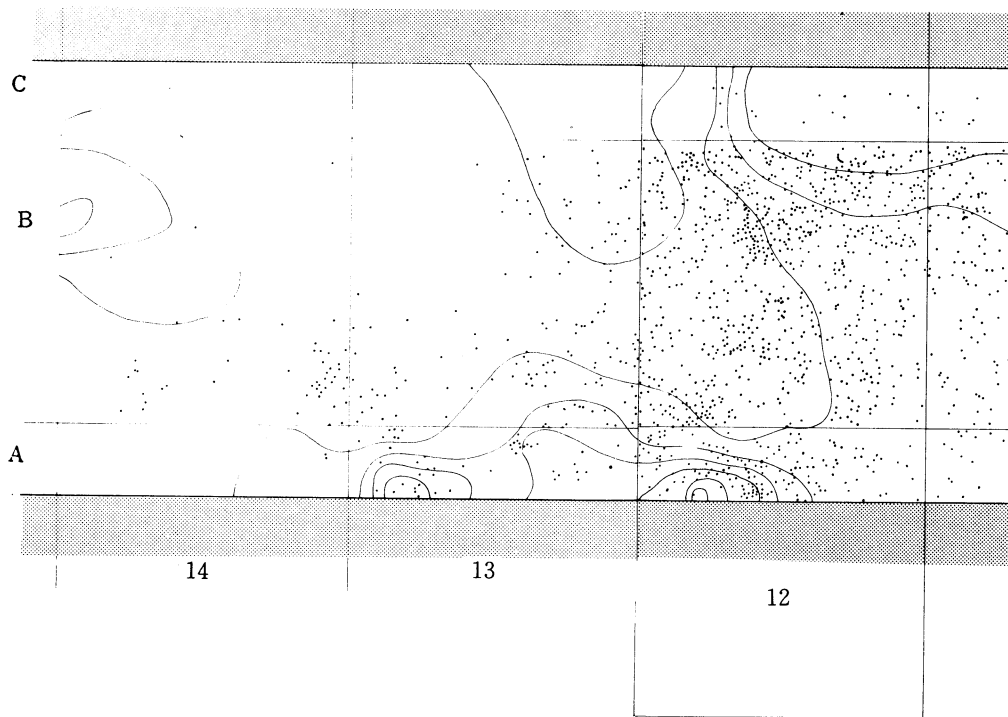
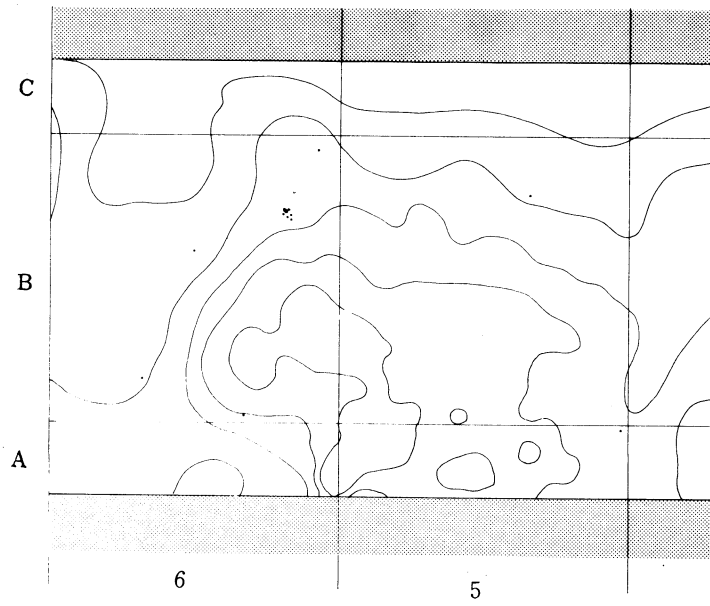
④Ⅳ類土器 (第18図-12～278)

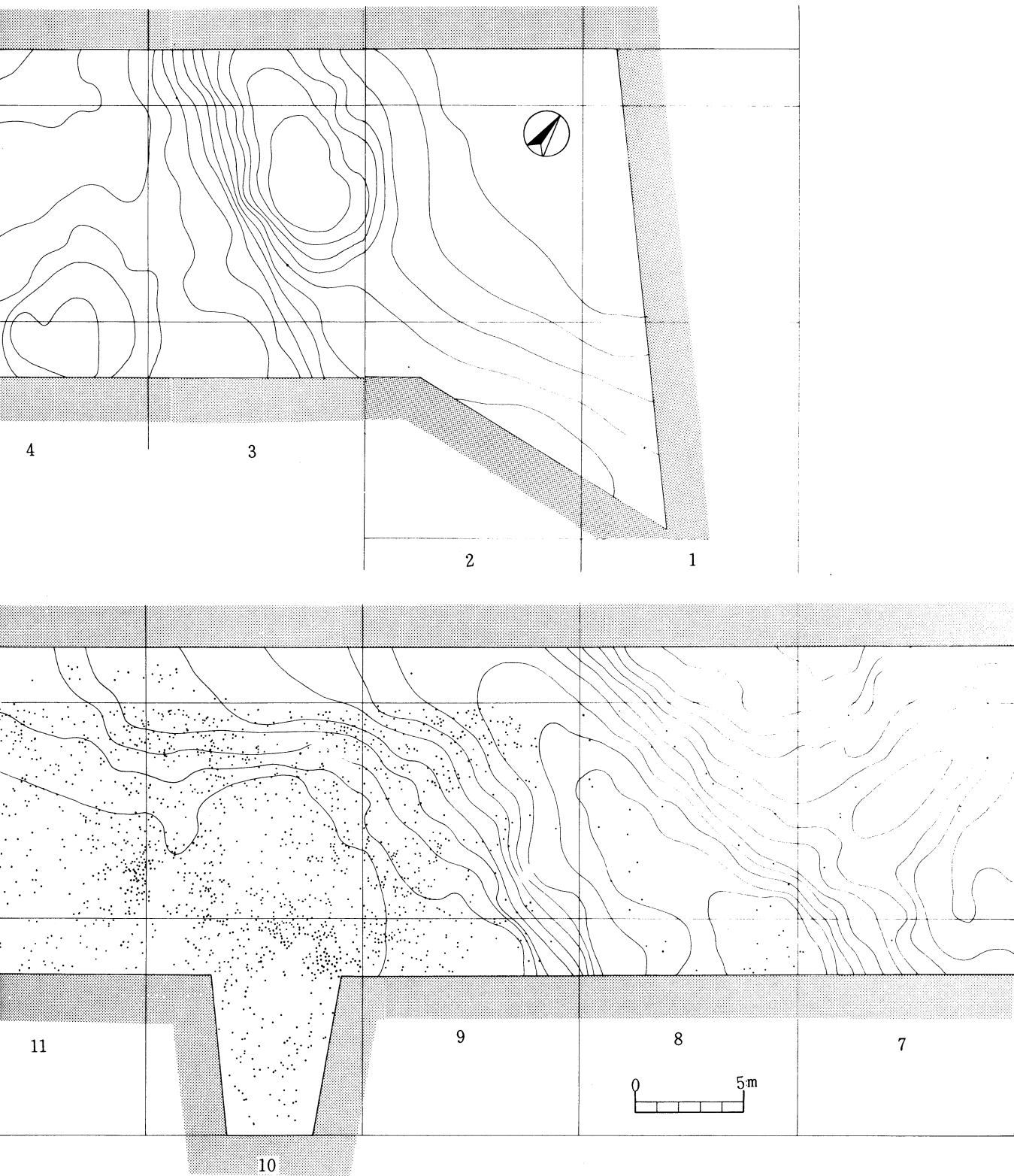
Ⅳ類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリエーションが多彩で、数量も多い。器形上、深鉢形(1)と壺形(2)の二者に分かれる。

(1) 深鉢形=口縁部に特徴があり、幅広肥厚口縁(イ)と幅狭肥厚口縁(ロ)とその他(ハ)に分けられる。さらに、各々は紋様の特徴からイ類=a～g、ロ類=a～c、ハ類=a・bに細別される。

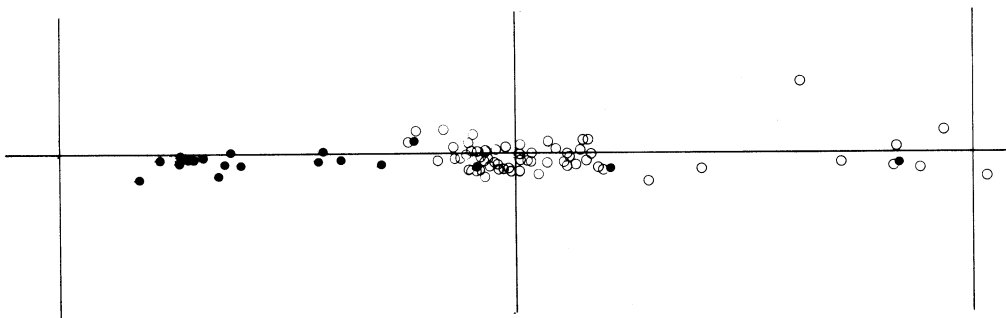
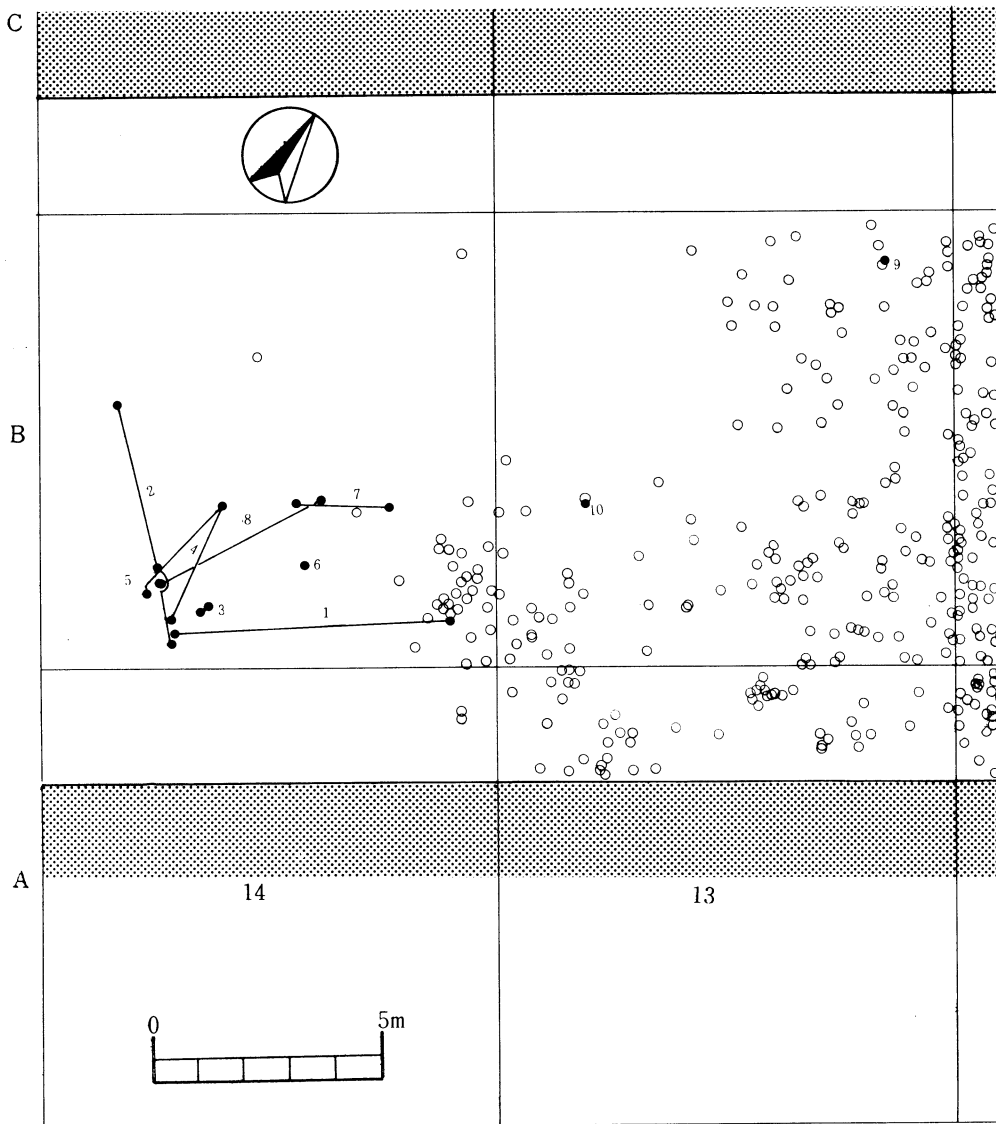
なお、頸部片、胴部片、底部片については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

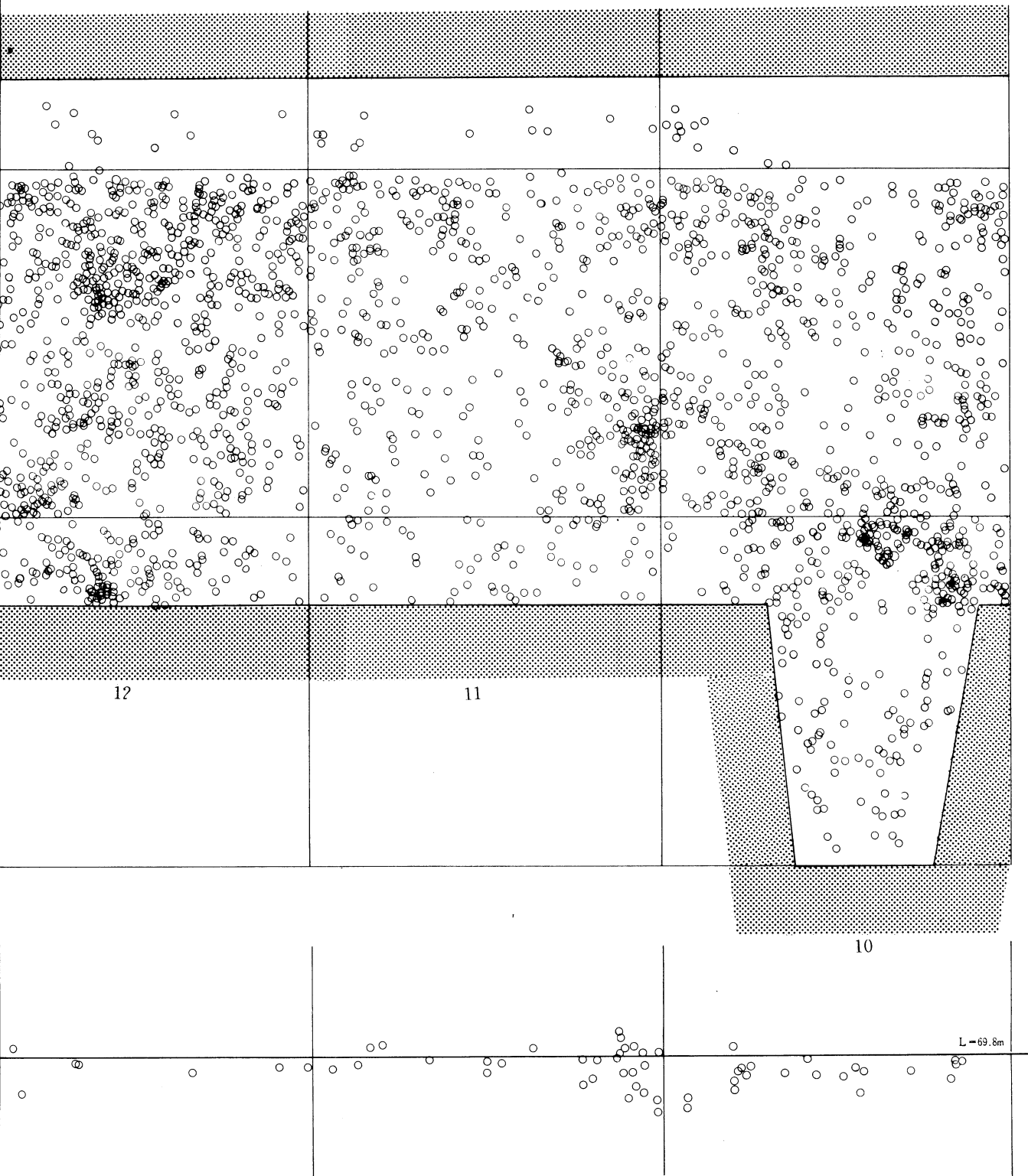
(2) 壺形=細部には若干のバリエーションがみられるものの壺形として一括して捉え、紋様の有無からa・bに細別して説明する。



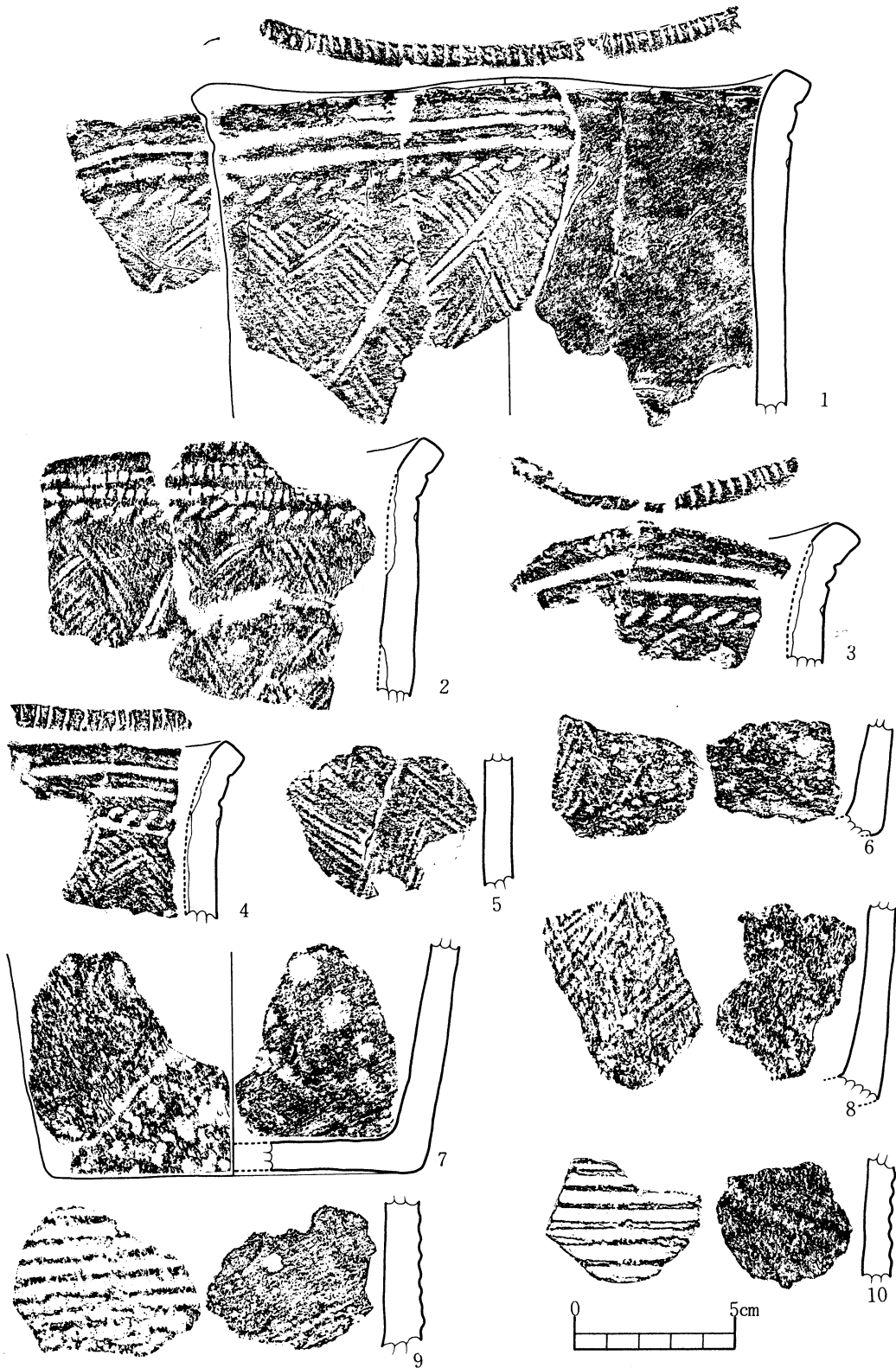


第13図 X層の遺物出土分布図





第14図 X層の土器出土分布図



第15圖 I類・II類土器実測図

⑤V類土器 (第42図-279~290)

口縁部は、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈し大きく外反する。胴部は円筒状を呈し、底部は平底のタイプである。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。胴部は、格子の撚糸文帯を縦位に施文する。華麗で特徴的なタイプである。

⑥VI類土器 (第45図-291)

口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみを持った円筒形を呈するタイプである。紋様は、口縁部は貝殻刺突連続文を施し、胴部は条線文帯で飾る。

以上の類別に従って、I類からVI類の順に説明する。

2. I類土器 (第15図-1~8)

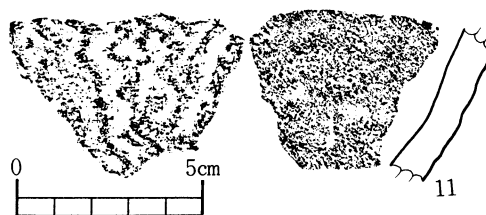
1~8は、すべてB14区からの出土である。1~4は、口縁部片である。1は口径17.8cmを測る。胴部は円筒形を呈し、口縁部はわずかに外反して波状をなす。口唇部は平坦に納め、その上に丁寧な刻目を施す。口縁外面には、櫛歯状(おそらく貝殻腹縁)の刺突文を連続施文した二条の沈線文を巡らす。その下端には同様の施文具で、斜位の刺突連点文を施している。胴部器面には、斜位の粗い条痕が確認される。6~8は底部片で、わずかな上げ底状の平底である。内面の整形は、胴部から口縁部にかけての上半に丁寧なナデ仕上げがみられ、下半はケズリ仕上げである。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

3. II類土器 (第15図-9・10)

円筒形土器の胴部破片である。B13区の出土である。器外面には、丁寧に横位に施されたうねりの多い条痕が施文される。内面は丁寧なナデ整形が施される。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒を含み堅緻である。

4. III類土器 (第16図-11)

11はA13区出土で、縦位に施文された山形の回転押型文土器である。山形の頂間は1.2cmと比較的大形で彫りも太い。わずか1点の出土であるが、他の土器型式と関連して興味深い。内面は丁寧なナデ整形である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石・石英粒のほかに金雲母を含み堅緻である。



第16図 III類土器実測図

5. IV類土器 (第18図-12~278)

IV類土器は本遺跡の主体を占める土器で、バリエーションが最も多彩で、数量も多い。出土区は、A B 9区~A B 13区の間に出土しているが、37 (C 6区) と 249 (B 3区) が離れた区に出土したものもある。器形上、深鉢形 (1) と壺形 (2) の二者に分けられる。

(1) 深鉢形 (第18~38図-12~265)

① 口縁部

深鉢は、口縁部に著しく特徴がみられ、その形態から (イ) 幅広肥厚口縁と (ロ) 幅狭肥厚口縁と (ハ) その他に分類される。さらに、各々は、紋様の特徴からイ類は a~g、ロ類は a~c、ハ類は a・b に細分されるが、これは個体差の可能性もある。

なお、頸部片、胴部片、底部片 (第29~38図-131~265) については、そのほとんどが深鉢に属するため、ここに含め説明する。

(イ) 幅広肥厚口縁 (第18~22図-12~58)

外反する口縁部は幅広くカマボコ状に肥厚するタイプである。口縁は四隅が山形を呈し、波状口縁をつくる。(なお、細片のため不明なものは平縁状に実測している)

口唇部は、平坦面をつくるものとわずかに丸くおさめるものがある。さらに、この口唇部には丁寧な刻目を施すのが一般的である。また、肥厚部分の下端にも刻目を施すものが多い。

この肥厚部分の外面に施される紋様によって、a~g に細別した。なおこの細別は、量的には少ないものであり、個体差を示すだけのものもある。

a: 凹線文と連続刺突文を組み合わせるもの (12~29)

凹線文を二本~三本を単位にして半弧状や三角形をつくり、その間に連続竹管文を施文するもので、12~29まではこれに該当する。凹線文と竹管文の組み合わせは、特に波状部分の頂部の位置においては、紋様構成上、複雑な構図が描かれ華麗さを増して表現している。

口唇部には丁寧な刻目が施されている。肥厚部分の直下には、刺突連続文が施文される。刺突連続文は、三日月状に施文される部分もみられるが、これは施文具のあて方によって生ずるもので施文具は半截竹管ではなく丸竹管である。

12は、完形に復元される数少ない土器の一つである。口縁部から頸部・胴部・底部の形態と紋様の把握が可能な資料である。口径21.3cm、器高17.5cmを測る。

器形は、底部は平底で若干上げ底状で凹面をつくる。底部から直線状に立ち上がり、胴部中央は僅かに丸味をもって張り、頸部付近では僅かに内湾する。頸部から口縁部へ大きく屈曲して外反し、口縁部は二重口縁状に大きく屈曲しながら外反する。口縁は、波状を呈する。

肥厚口縁部は a 類の紋様を呈するが、肥厚口縁直下には刺突文を横位に巡らしている。この場

合、施文具は、右から左へ横方向から突いている。さらに、口縁部下端には二列の連続刺突文を巡らせる。上列は、施文具を器面に垂直に突き、正円形文を横位に連続して施文する。下列は、下から上方向に突きながら連続刺突するという違いがある。この刺突文間には、凹線文の波状文が施文される。それ以下は胴部で、器面全体の底部側面まで二個の結節をもつ縄文（R L撚り）を転がして施文している。結節はLの撚りでつくる。

26～28は、三～四本の凹線と二列の連続刺突文線を半弧状に交互に施文し、28のように波頂部では円形文になって紋様を誇張するものもある。

b：連続刺突文と波状文を組み合わせて紋様を構成するもの（30・31）

肥厚口縁の上位と中位と下位にそれぞれ横位の連続刺突文線を巡らせる。連続刺突文は、上位列は下から上に突くタイプで、中位列は器面に垂直に突き、下位列は二条で下から上に突く手法で施文している。そして、この刺突文間に波状凹線文を施文する。肥厚口縁下には上下に波状凹線文を巡らせる。そして、屈曲部の頸部は突帯状に盛り上がり、その上に刻目が施される。胴部の紋様はLRの縄文にRの結節を結ぶ（30）。

c：凹線文で真線文と波状文を交互に施文するもの（32～34）

肥厚口縁の上・中・下位に凹線文の直線を巡らせ、その間に凹線文の波状文を巡らすものである。肥厚口縁の下端には刻目が施される。口縁下部と頸部以下は不明である。

d：凹線文帯で鋸歯文や渦文を描くもの（35・36）

口縁肥厚部に三条程度の凹線文で鋸歯文や渦文を描くもので、肥厚口縁下端には直線や連続刺突文が施される。35の口縁下部には、連続刺突文と波状文がみえる。

e：羽状文や斜線文を描くもの（37～41）

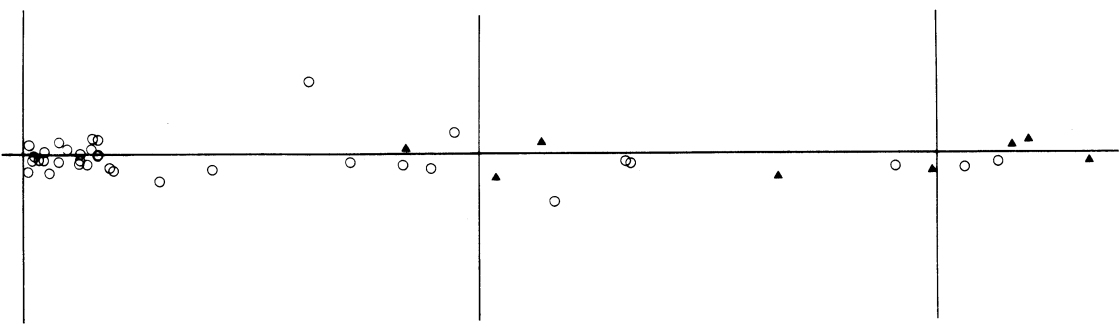
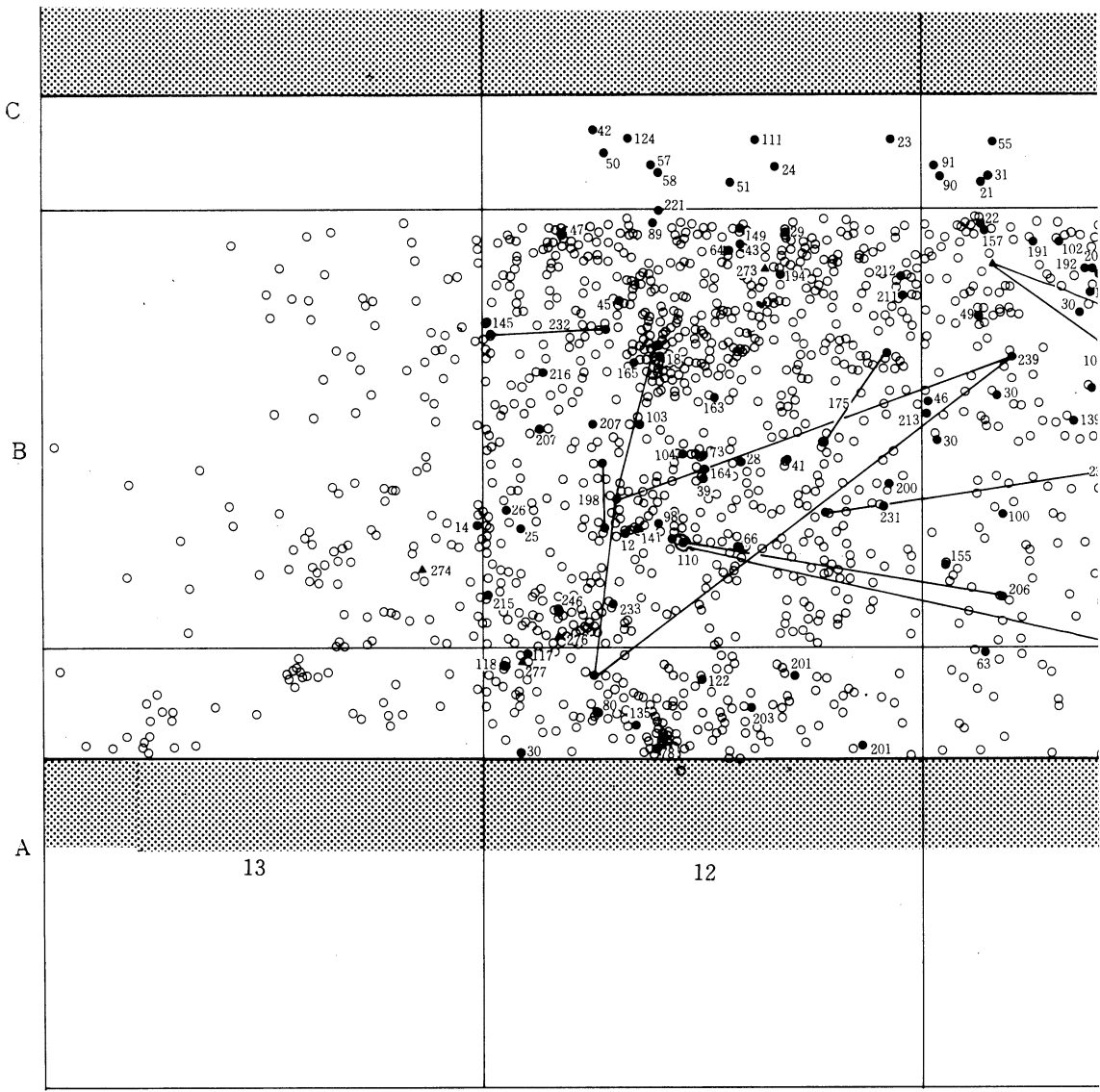
肥厚口縁全体に短線で羽状文や斜線文を描く最も単純な紋様構成であるが、肥厚部は厚く堅固である。口唇部と肥厚口縁下端には刻目が施される。41の肥厚口縁下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。

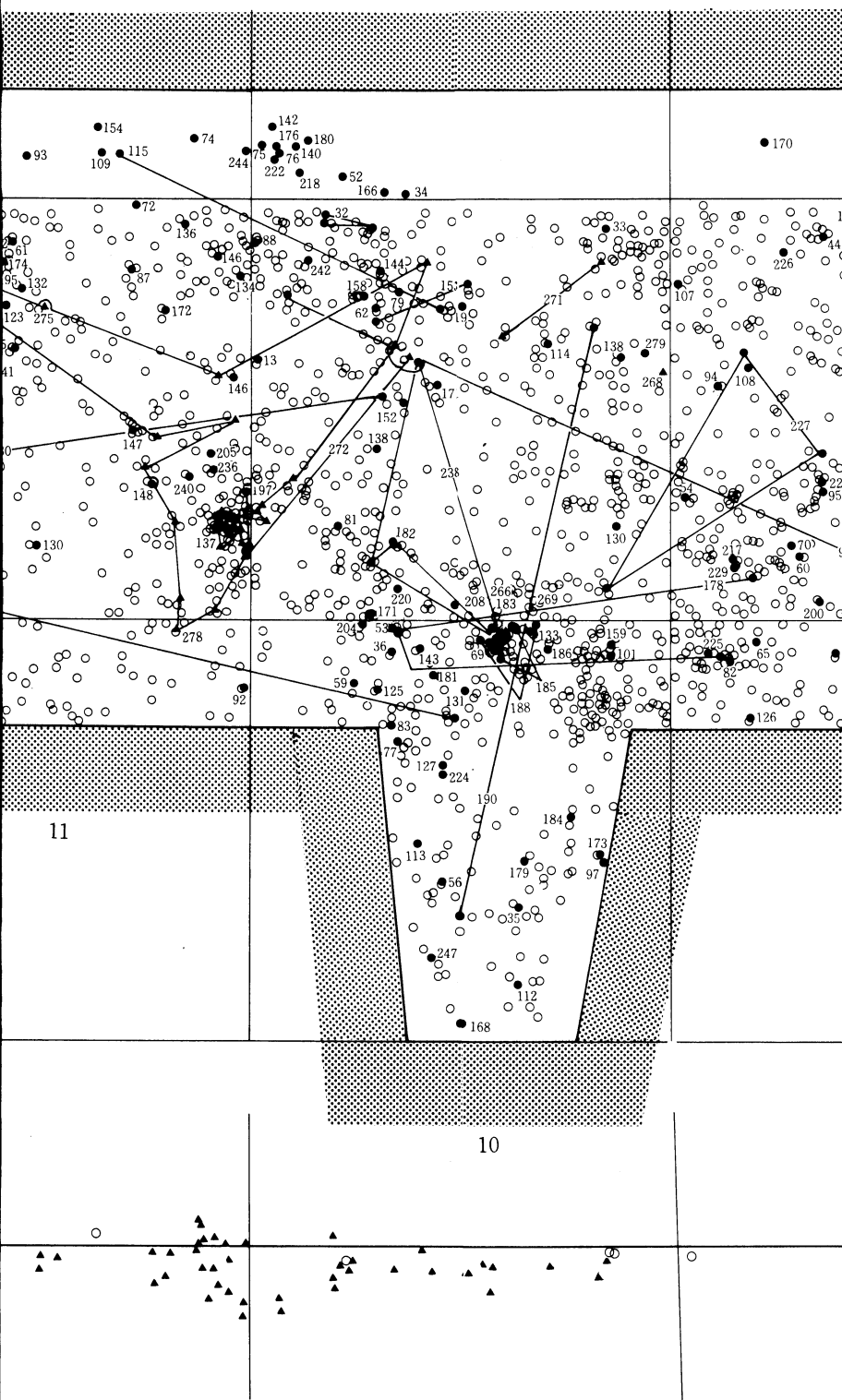
f：縄文が施されるもの（42～55）

肥厚口縁部の全面に、縄文が施文されるものである。縄文の他には、口唇部と肥厚口縁下端に刻目が施されるものやどちらか一方に刻目が施文されるものなどがある。

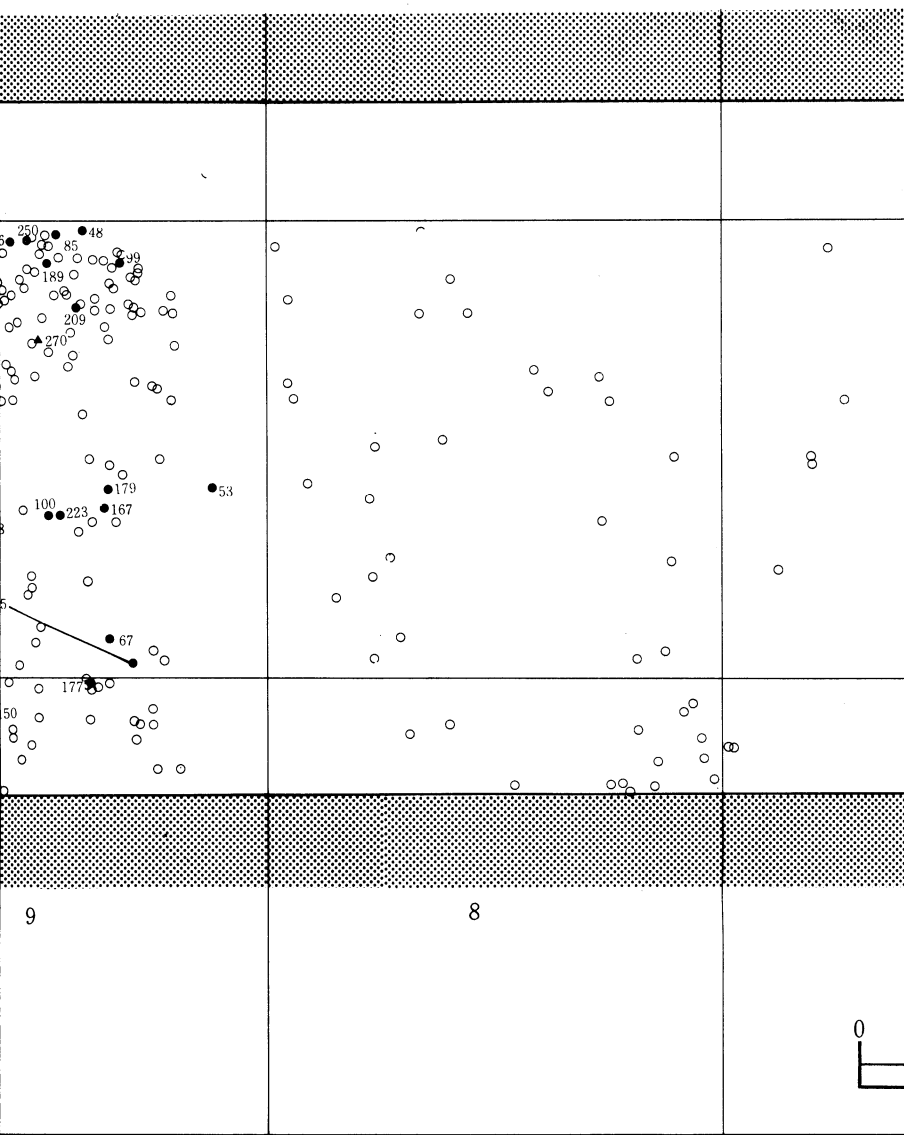
g：肥厚口縁が無文のもの（56～58）

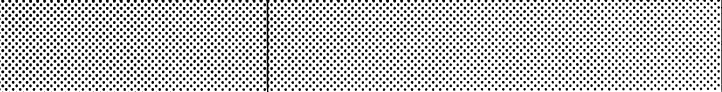
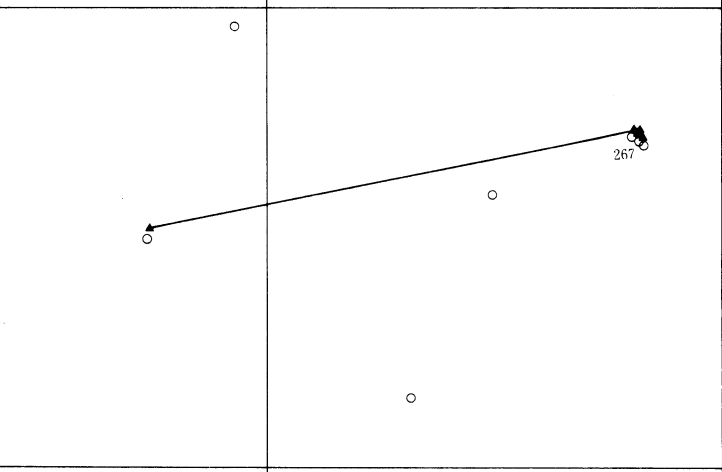
口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。





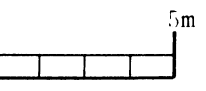
第17图 IV類土器出土分布区





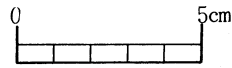
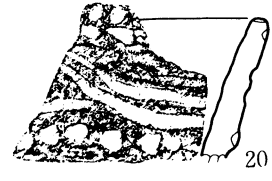
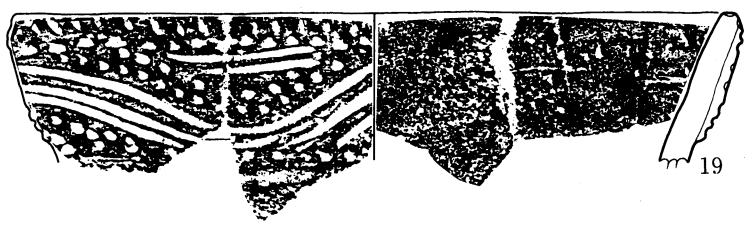
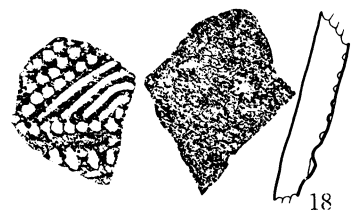
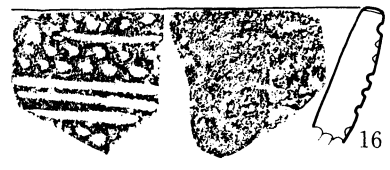
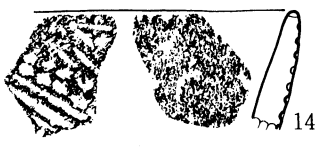
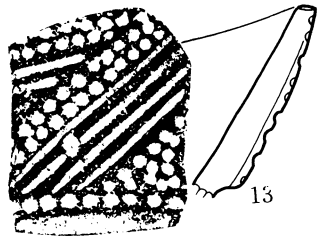
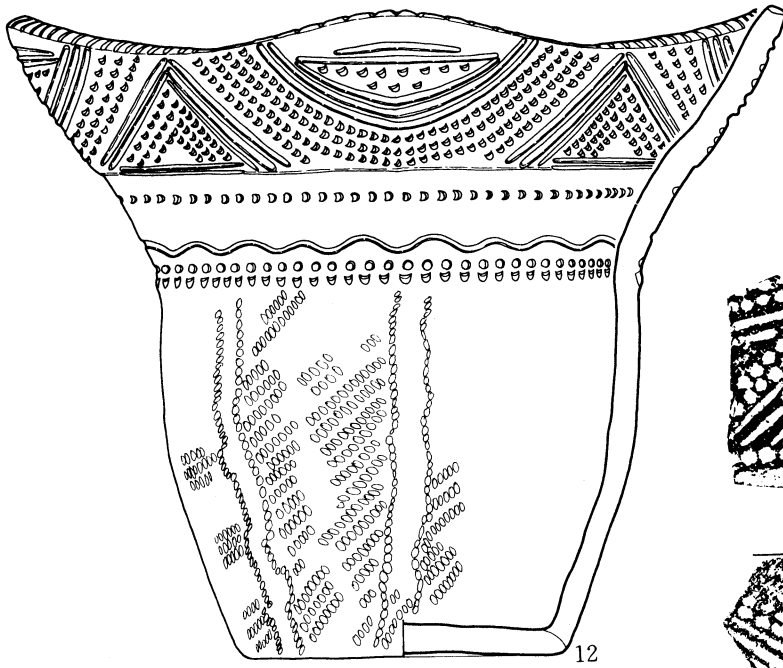
7

6

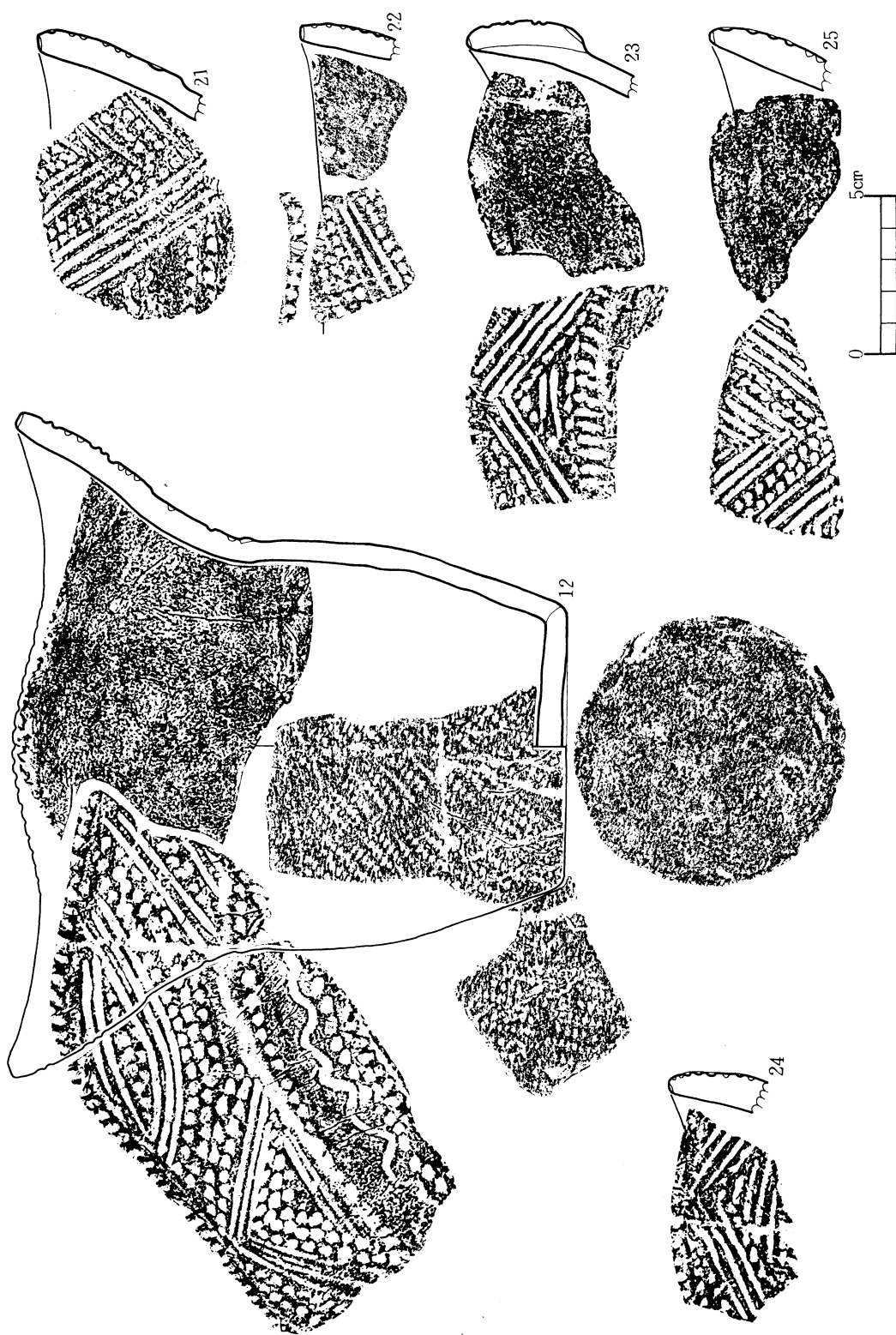


$L = 69.3 \text{ m}$

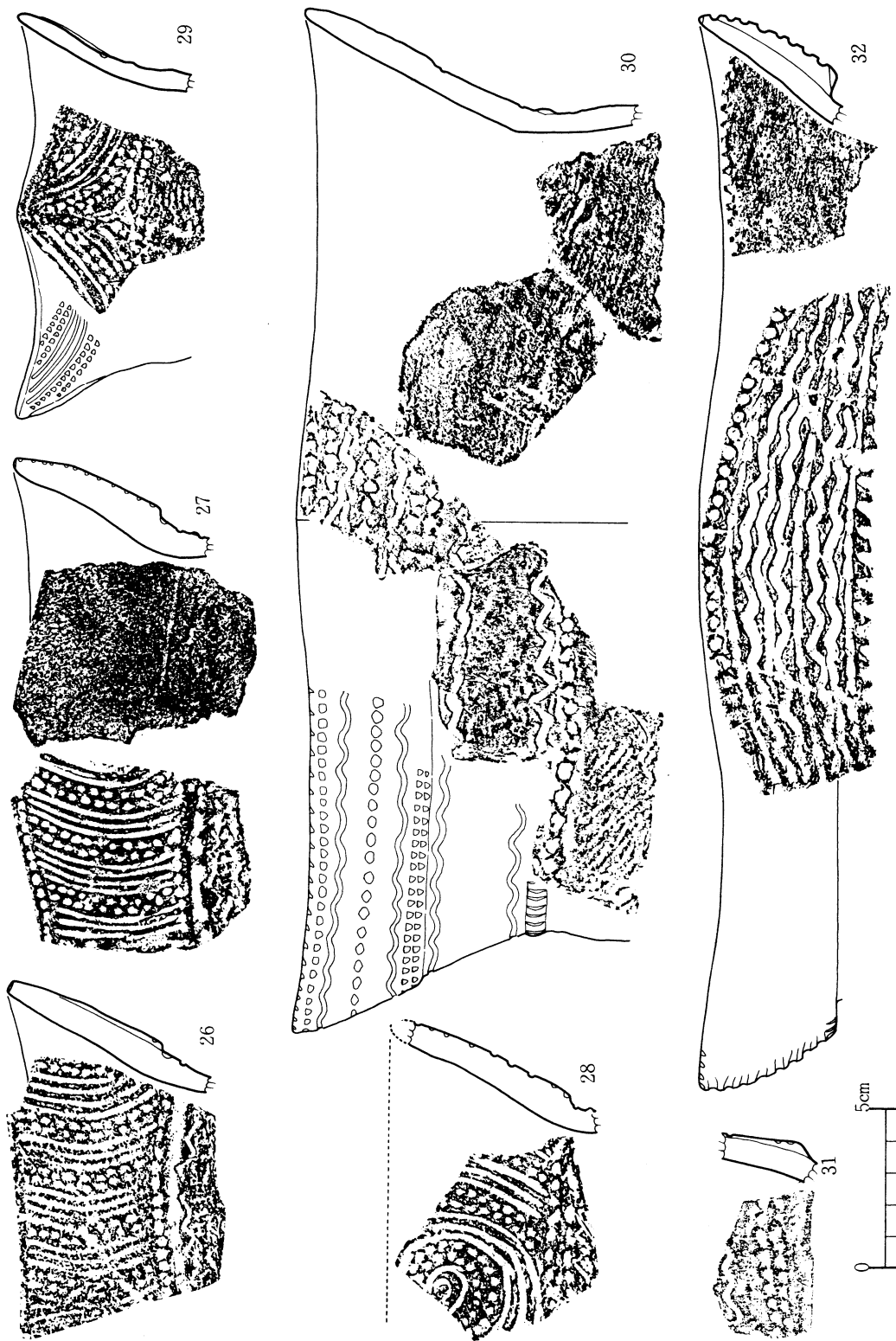




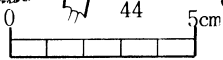
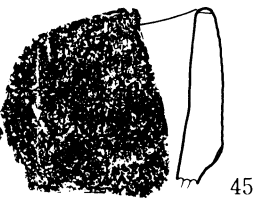
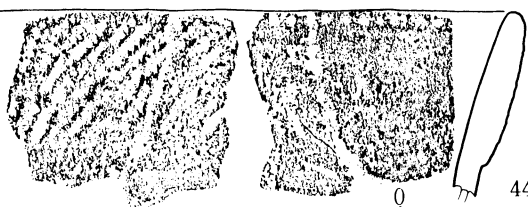
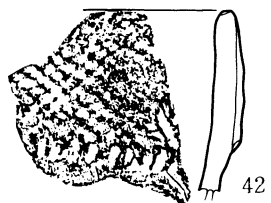
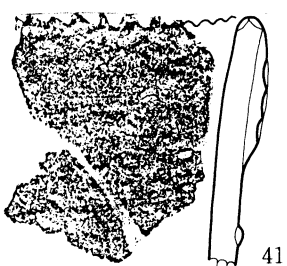
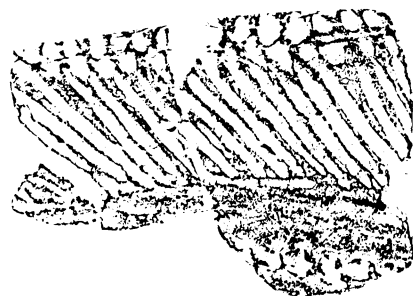
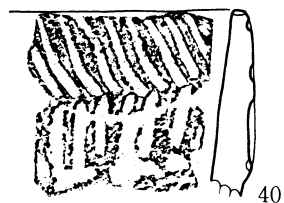
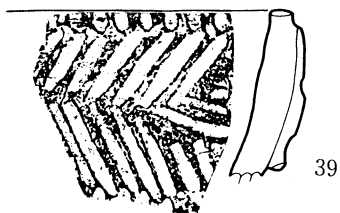
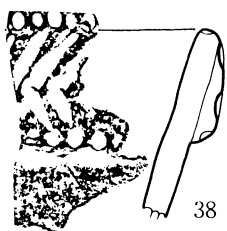
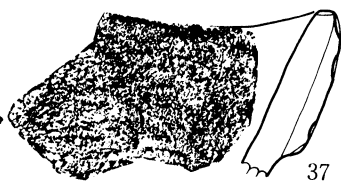
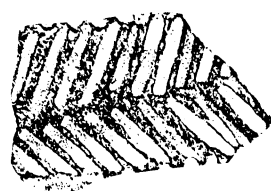
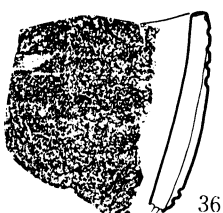
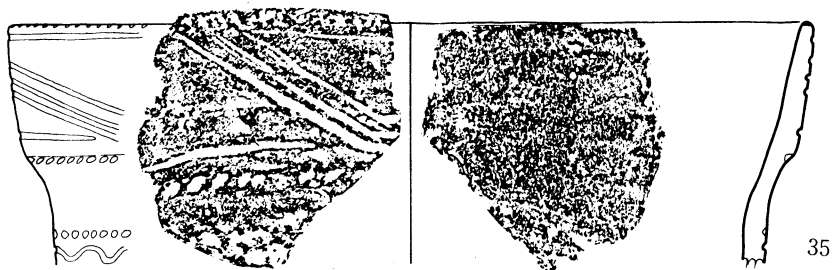
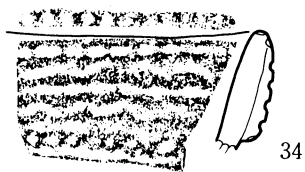
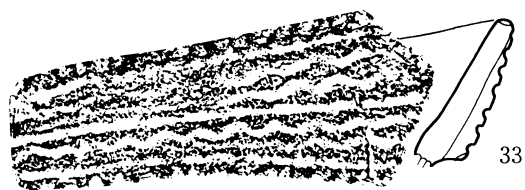
第18图 IV類土器実測図(1)



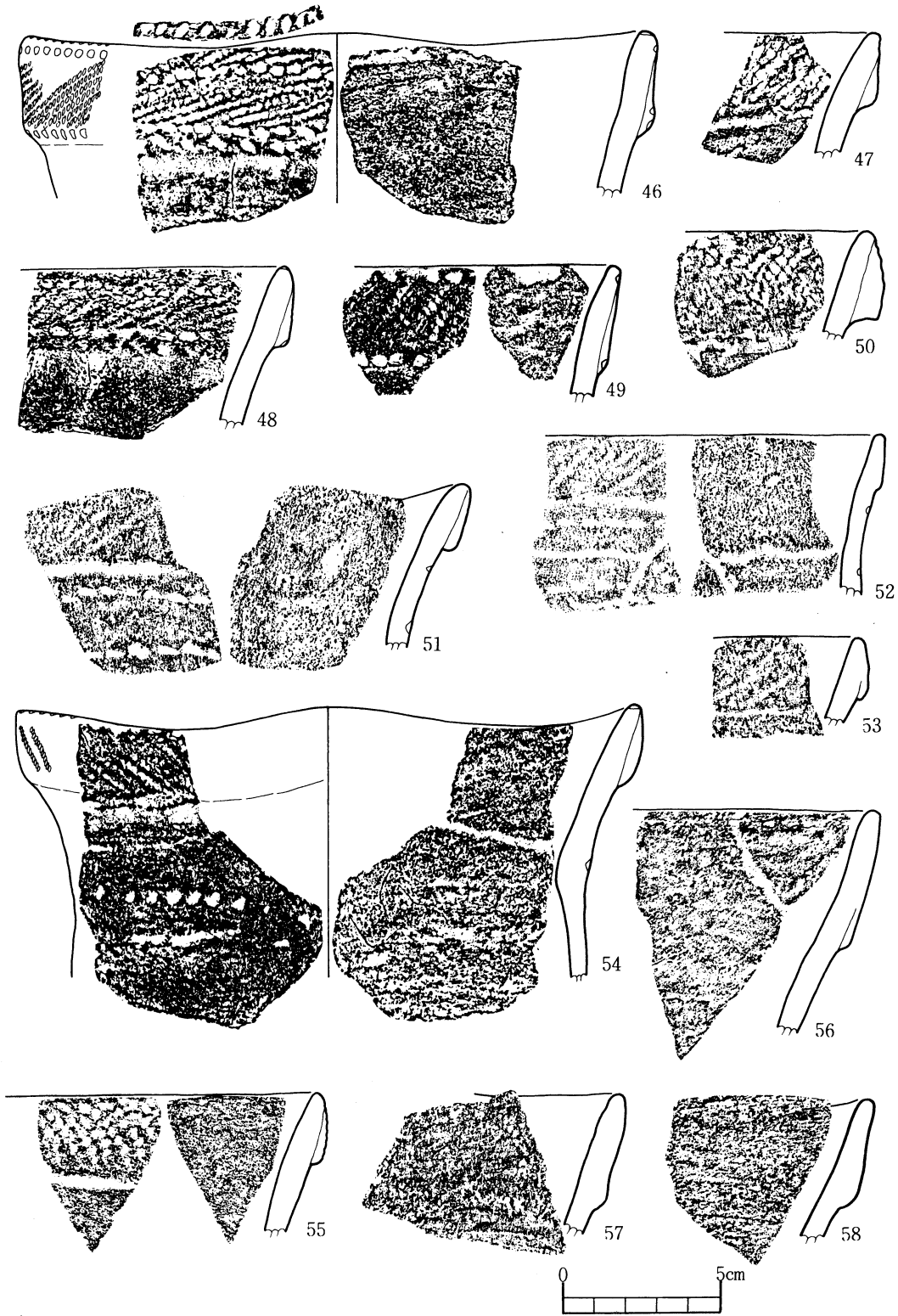
第19图 IV類土器実測図(2)



第20図 IV類土器美測図(3)



第21图 IV類土器実測图(4)



第22図 IV類土器実測図(5)

(口) 幅狭肥厚口縁 (第23～27図-59～112)

大きく外反する口縁部が、幅狭で玉縁状に肥厚するタイプである。細片のため平縁状に作図したが、83等のように口縁の四隅が山形を呈した緩やかな波状口縁をつくるものも多い。一般的に大型の器形が多く、100のように緩やかな波状を呈するものが多い。玉縁状の肥厚部は狭いため、紋様も単純化される傾向にある。この肥厚部分の外面に施される紋様によって、a～f 類別した。なおこの類別は、量的に少ないものがあり、個体差を示すだけのものもある。

a：凹線文で羽状文を描くほの (59～66)

肥厚口縁全体に短線で羽状文を描くものである。最も単純な紋様構成であるが、象徴的な紋様である。肥厚部は厚く、堅固である。口唇部には丁寧な刻目が施されるが、肥厚口縁下端にも施文されるものがある。41の肥厚口縁部直下には突帯文が巡らされ、その上には刻目が施される。このタイプは、幅広口縁(Ⅰ～e類)にも同施文があり、Ⅳ類の代表的な紋様の一つといえる。

b：凹線文で鋸歯文や斜線文を描くもの (67～79)

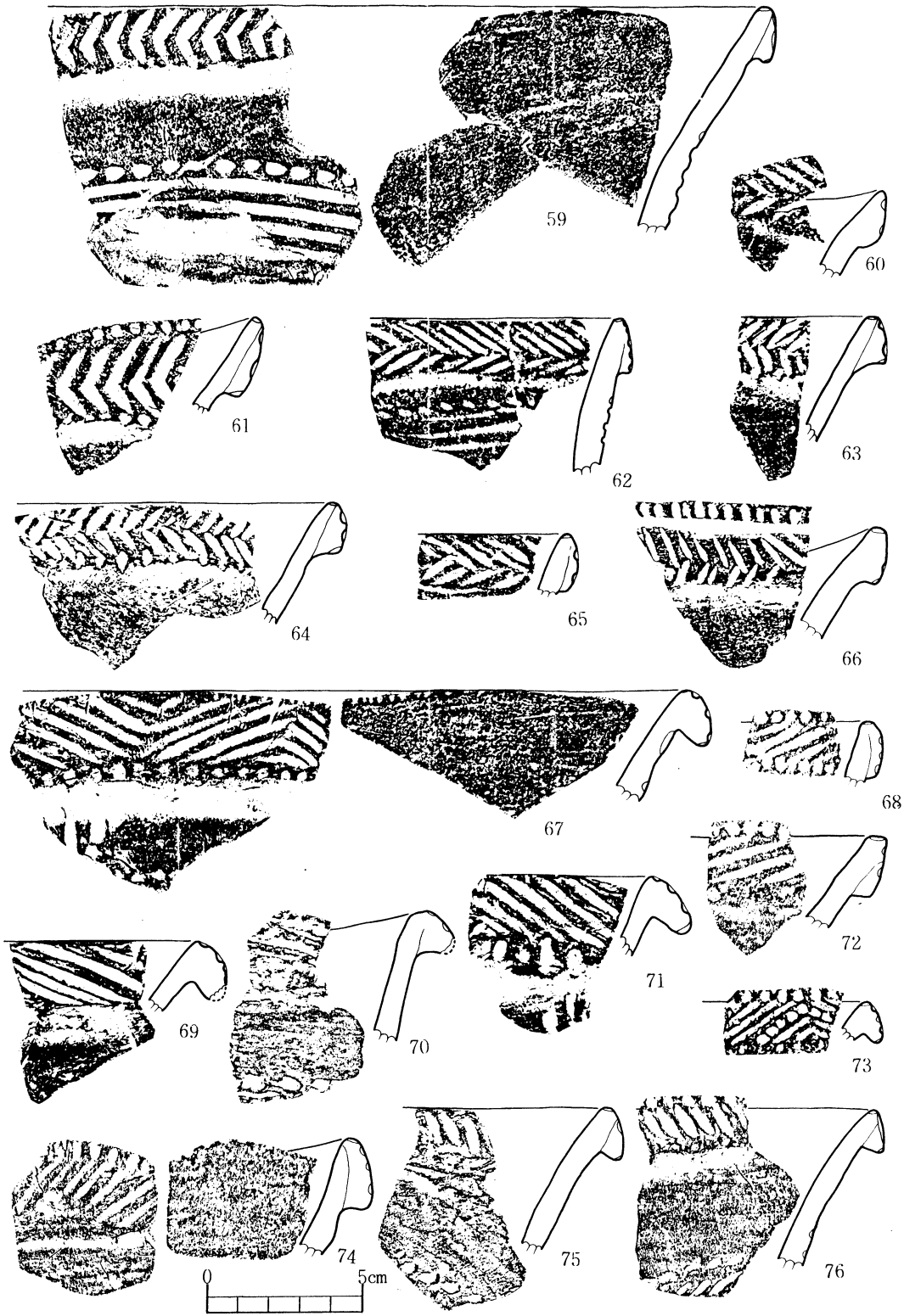
口縁肥厚部に大きく凹線文で鋸歯状の山形を描くもので、斜線文も含めた。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。73のように、鋸歯文の凹線文間に連続刺突文を施すものもある。Ⅰ～d類に凹線文帯で鋸歯文をつくるものがあるが、この類とは別であり、基本的には羽状文に含まれるであろう。

c：凹線文で平行線を描くもの (80～87)

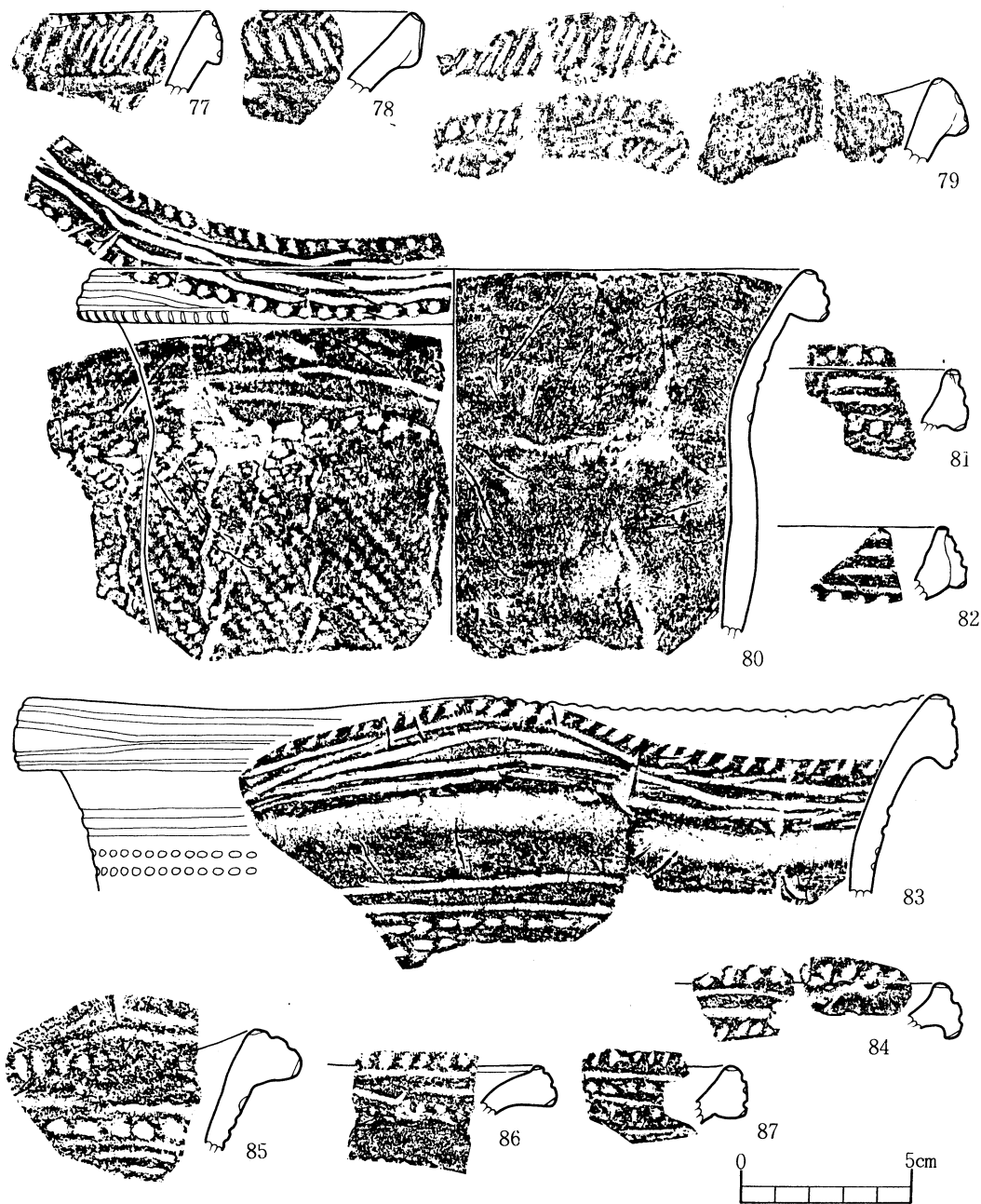
口縁肥厚部に平行線文を描くものである。肥厚口縁部下端には刻目が施されるものもある。波状の波頂部は、幅広になり凹線文間も広くして誇張する。80と83はこれに属する比較的大きい破片であるが胴部は僅かに張り、頸部で僅かに締まり、屈曲して口縁部は大きく外反する。口縁部は肉厚で幅狭い肥厚部となる。80は口径20.8cmを測る平縁口縁である。頸部から大きく外反した口縁部の肥厚部までの口辺部には、二条の凹線文が巡るだけで無文である。僅かに屈曲する頸部付近には、刺突文が巡る。胴部には一つの結節をもつ縄文が施される。縄文はLRで結節はRでつくる。

d：円弧状の波状文を描くもの (88～91)

肥厚口縁部に押し引き状の凹線文で、丁寧な円弧状の波状文を描くものである。押し引き状の手法で波状の凹線文はより華麗さを増す。88は、肥厚部下の口辺部に押し引き状の同手法で二条の凹線文を上・下位に巡らせ、その間には波状文を描いている。



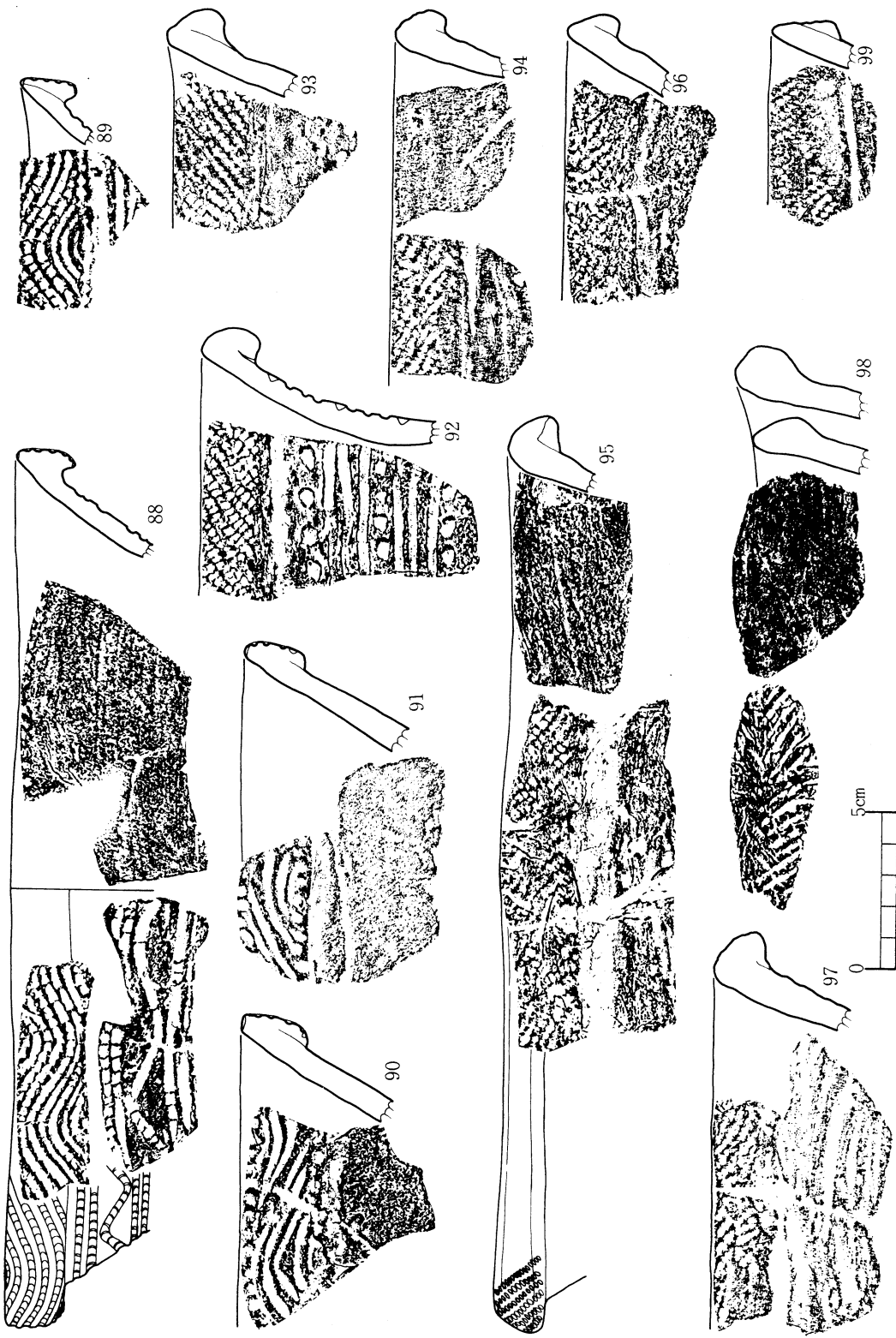
第23图 IV類土器実測図(6)



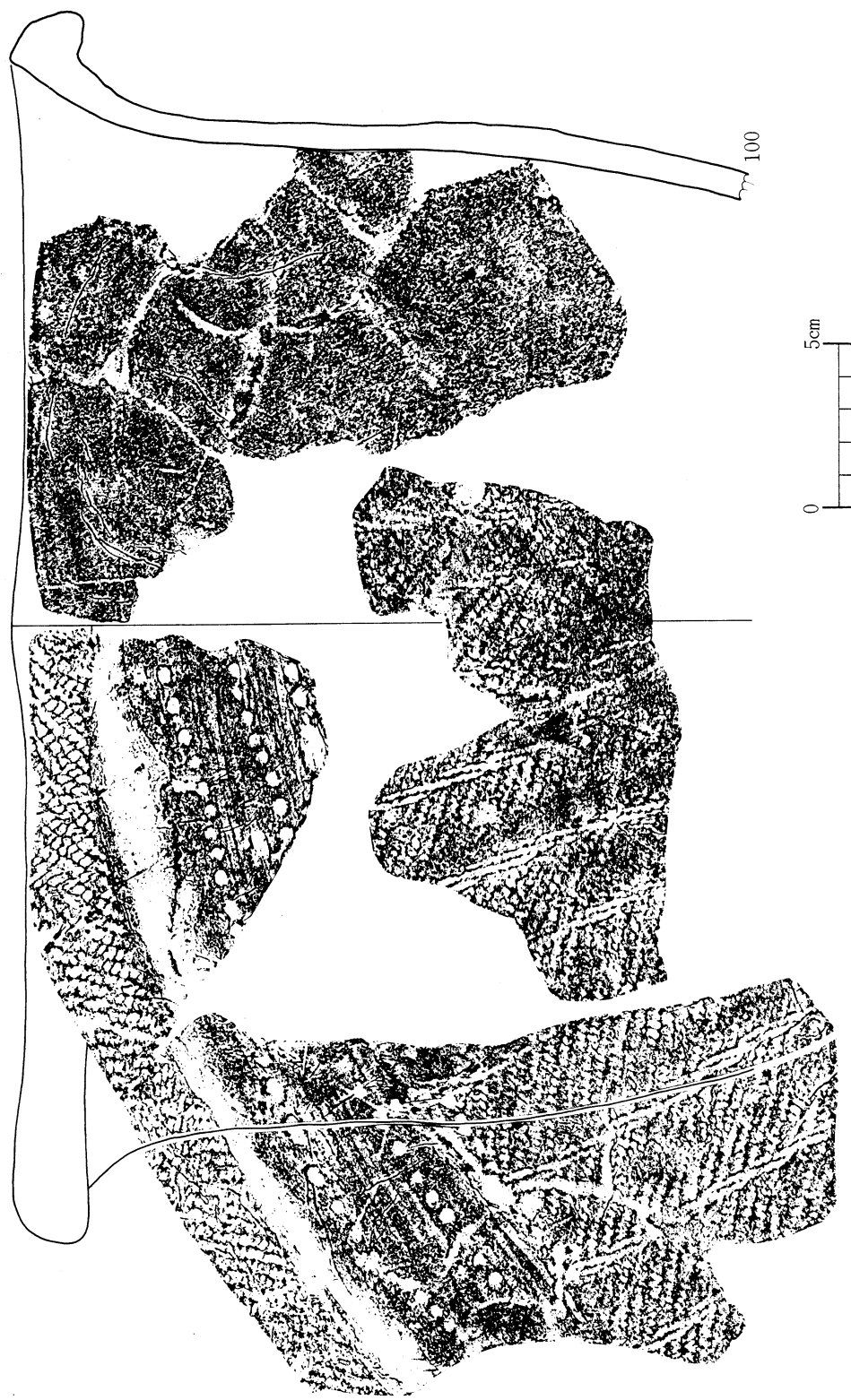
第24図 IV類土器実測図(7)

e: 肥厚部に縄文を施文するもの(92~100)

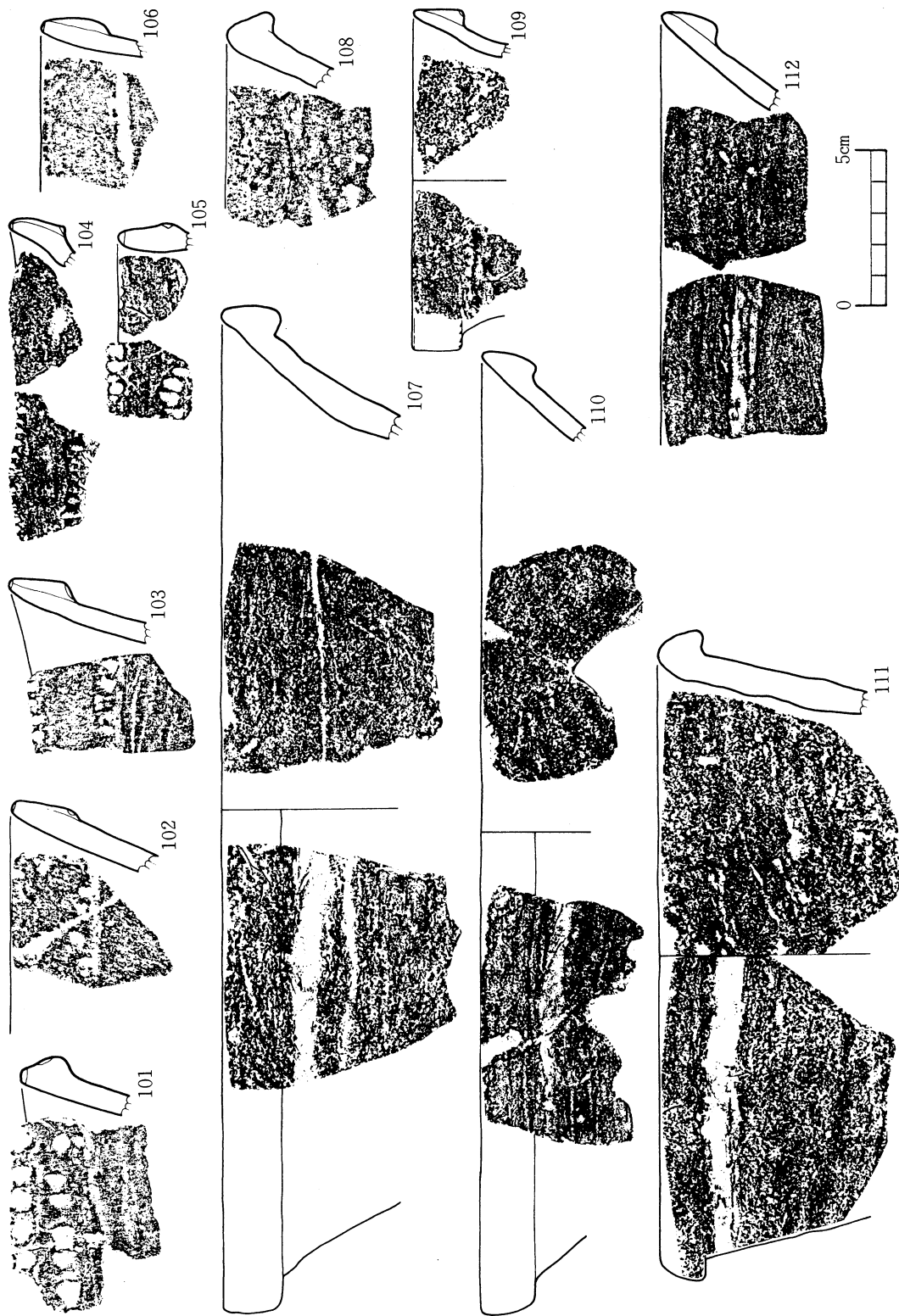
口縁肥厚部の全面に、縄文を施文するものである。この場合、口唇部や肥厚部下端には刻目は施されない。100は、胴部上半部が判明するものである。口径34.6cmを測る。口縁肥厚部は緩やかに波状を呈す。肥厚口縁部下から頸部付近には、刺突連点文が横位に3条程度巡る。



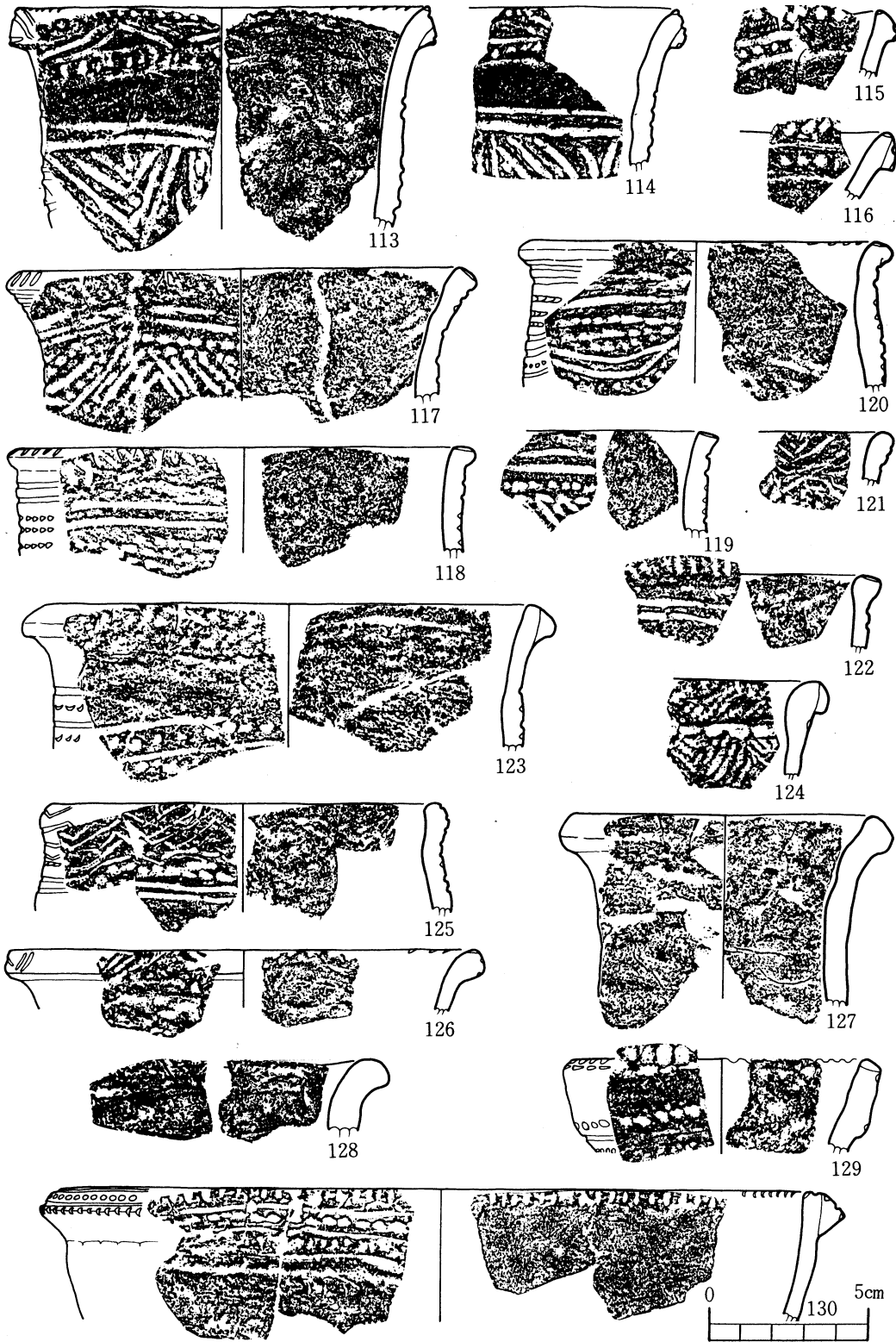
第25图 N類土器実測図 (8)



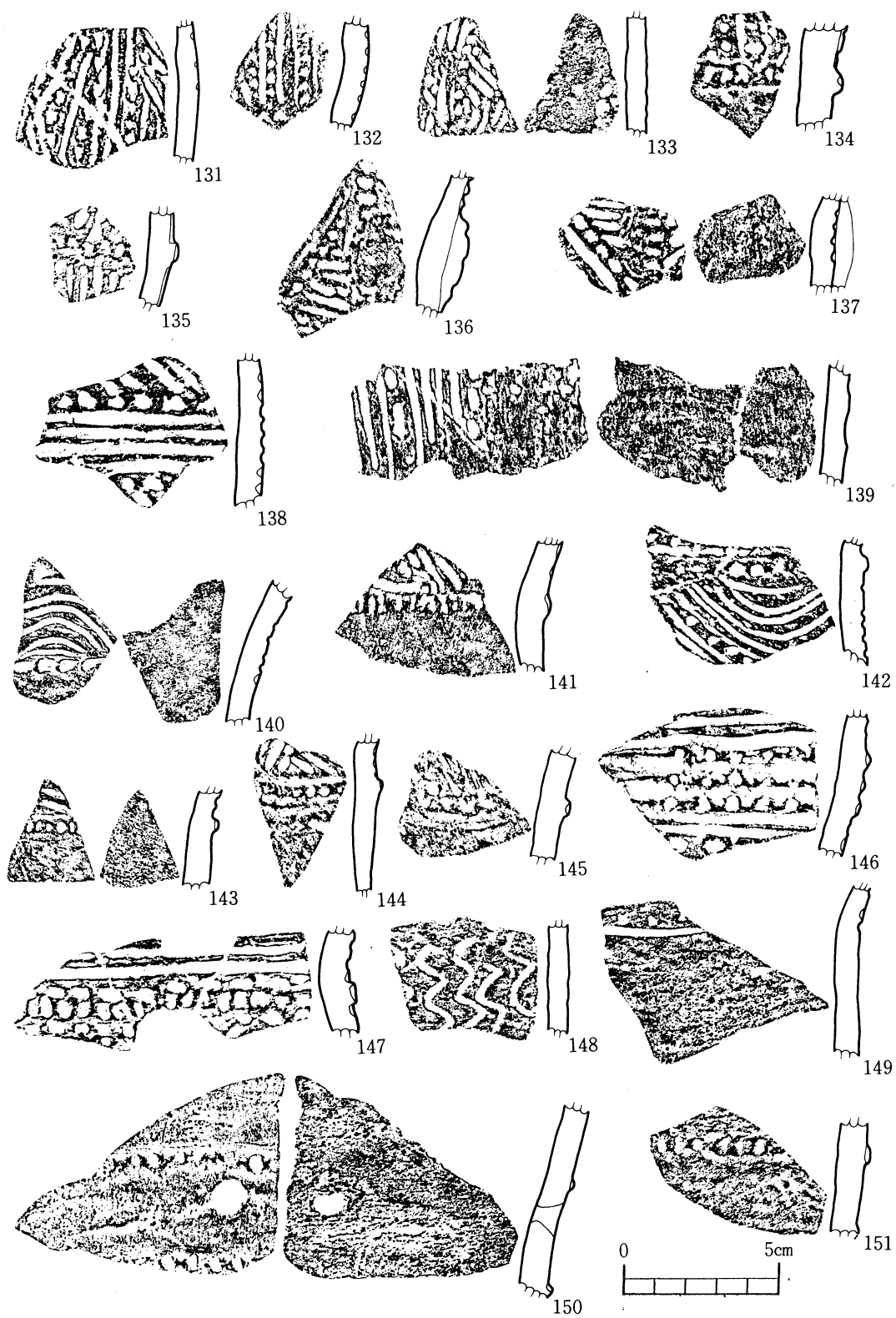
第26图 IV類土器実測図(9)



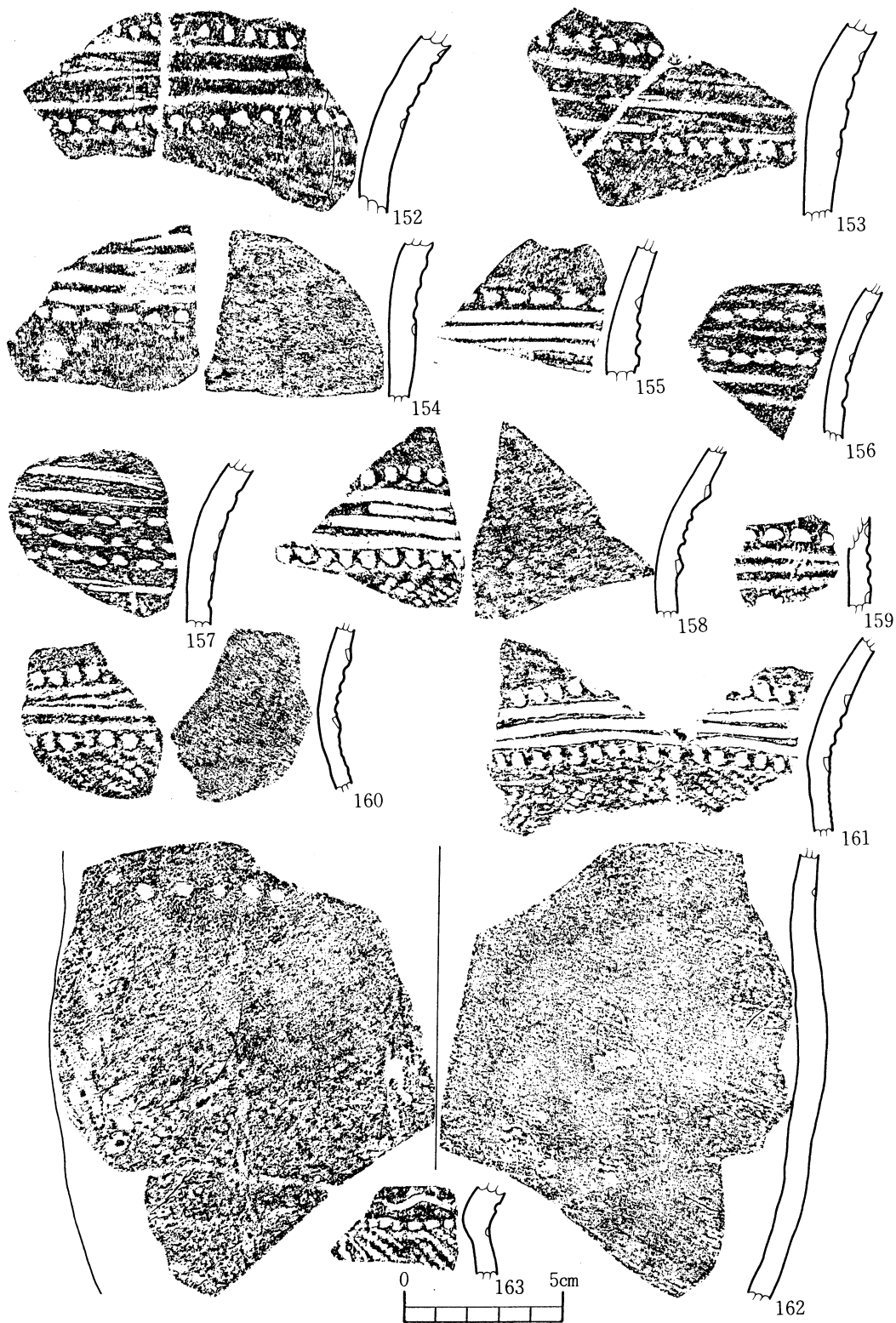
第27图 IV類土器実測図(10)



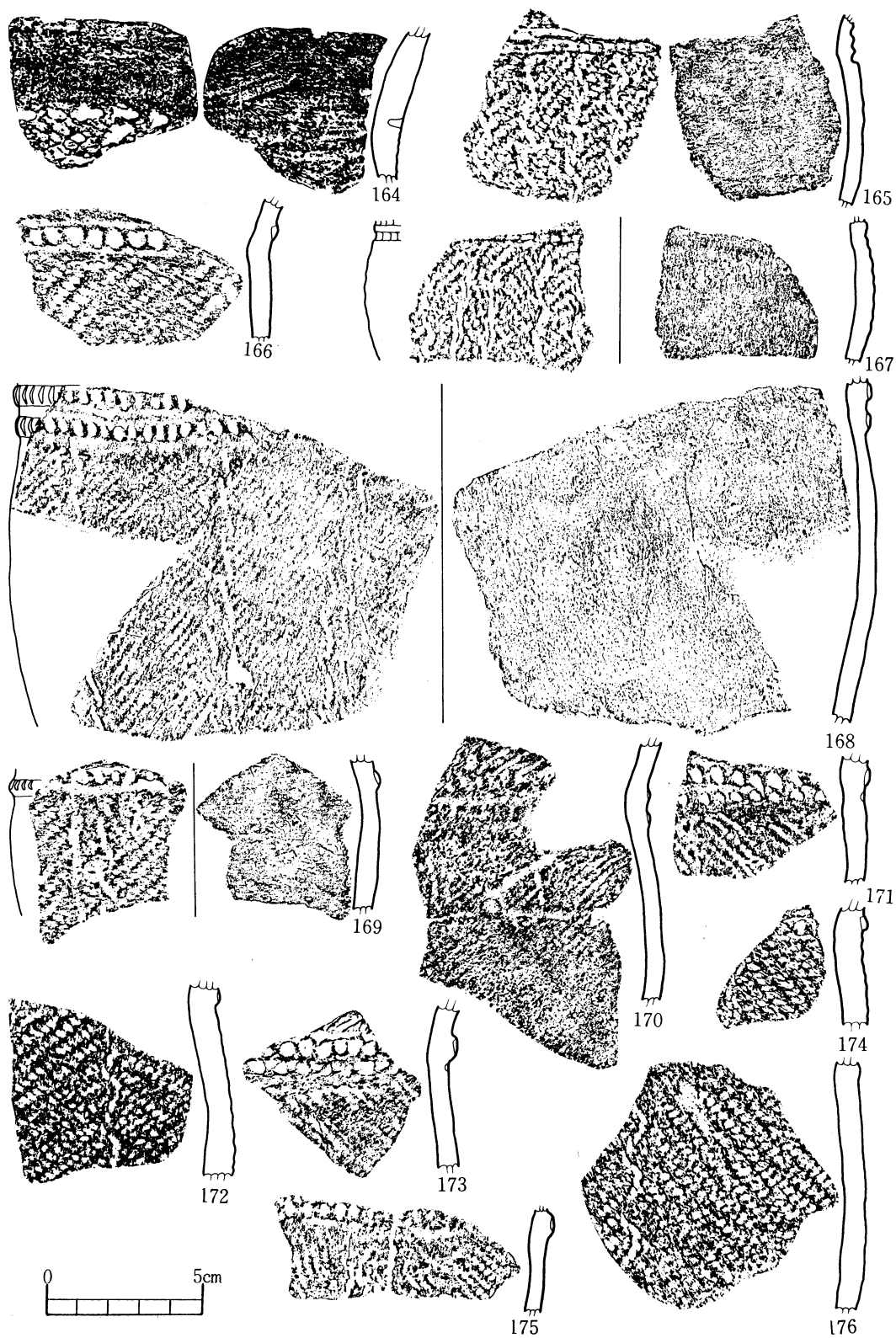
第28图 IV類土器実測図 (11)



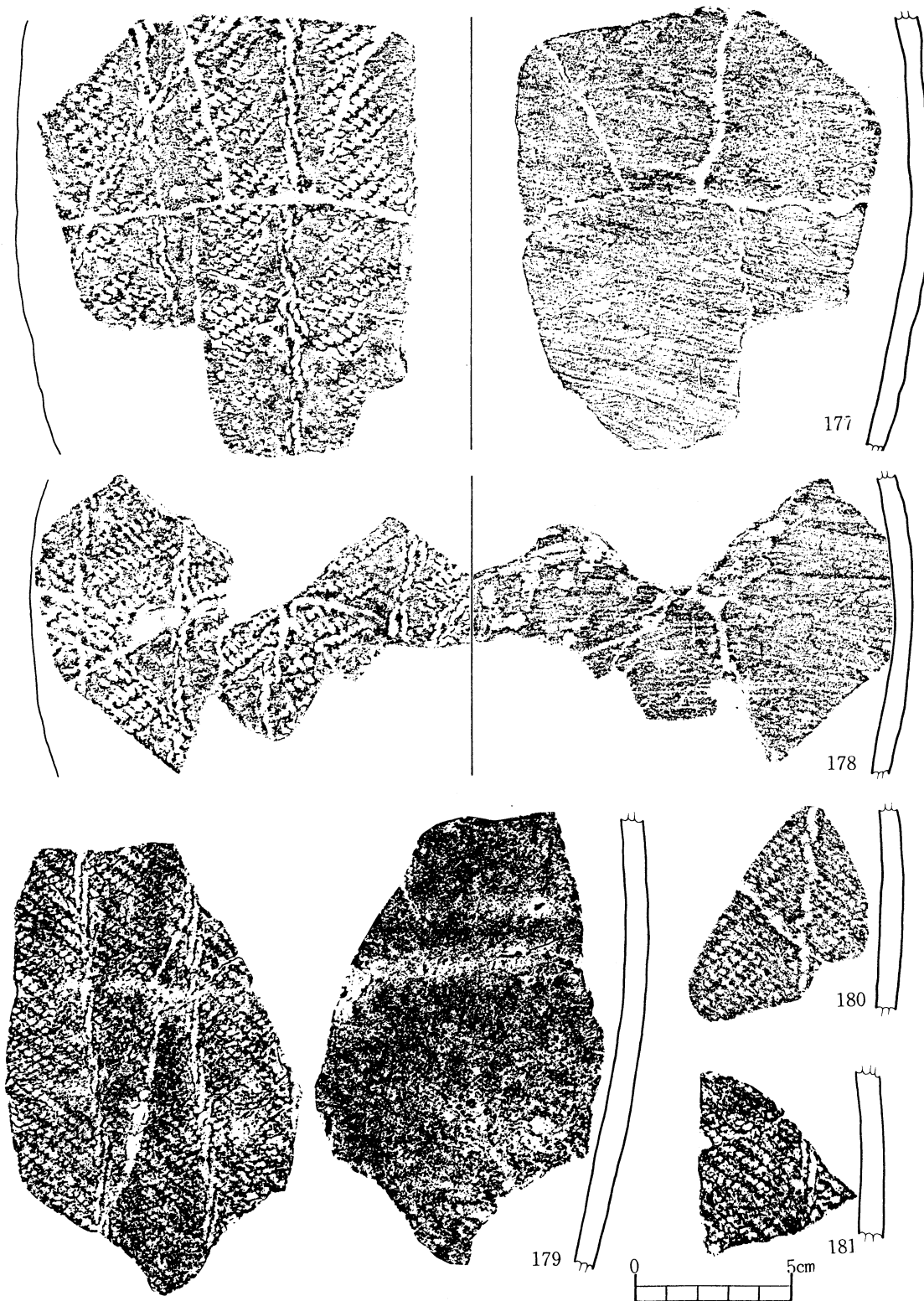
第29图 IV類土器実測图 (12)



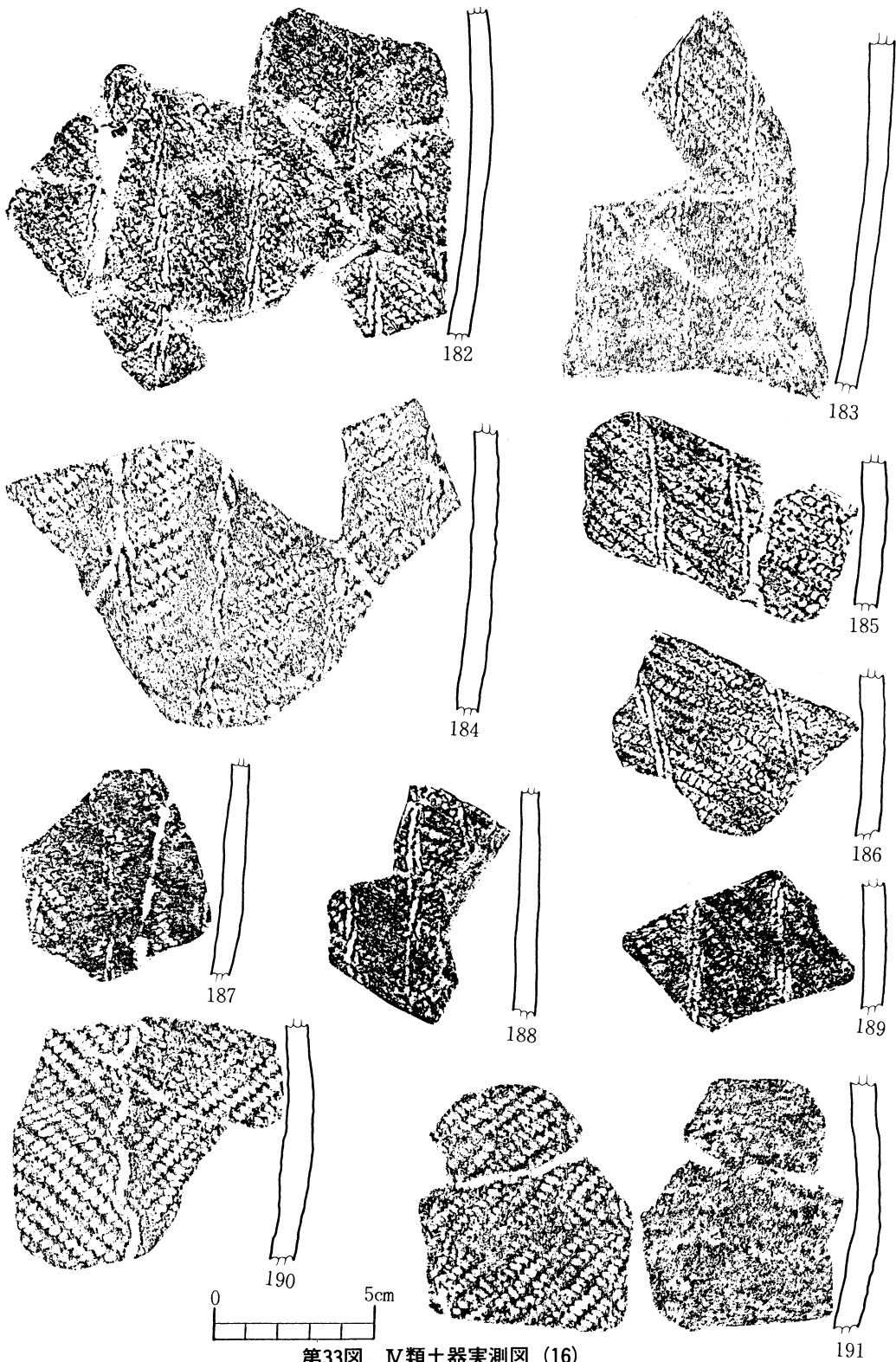
第30图 IV類土器実測図 (13)



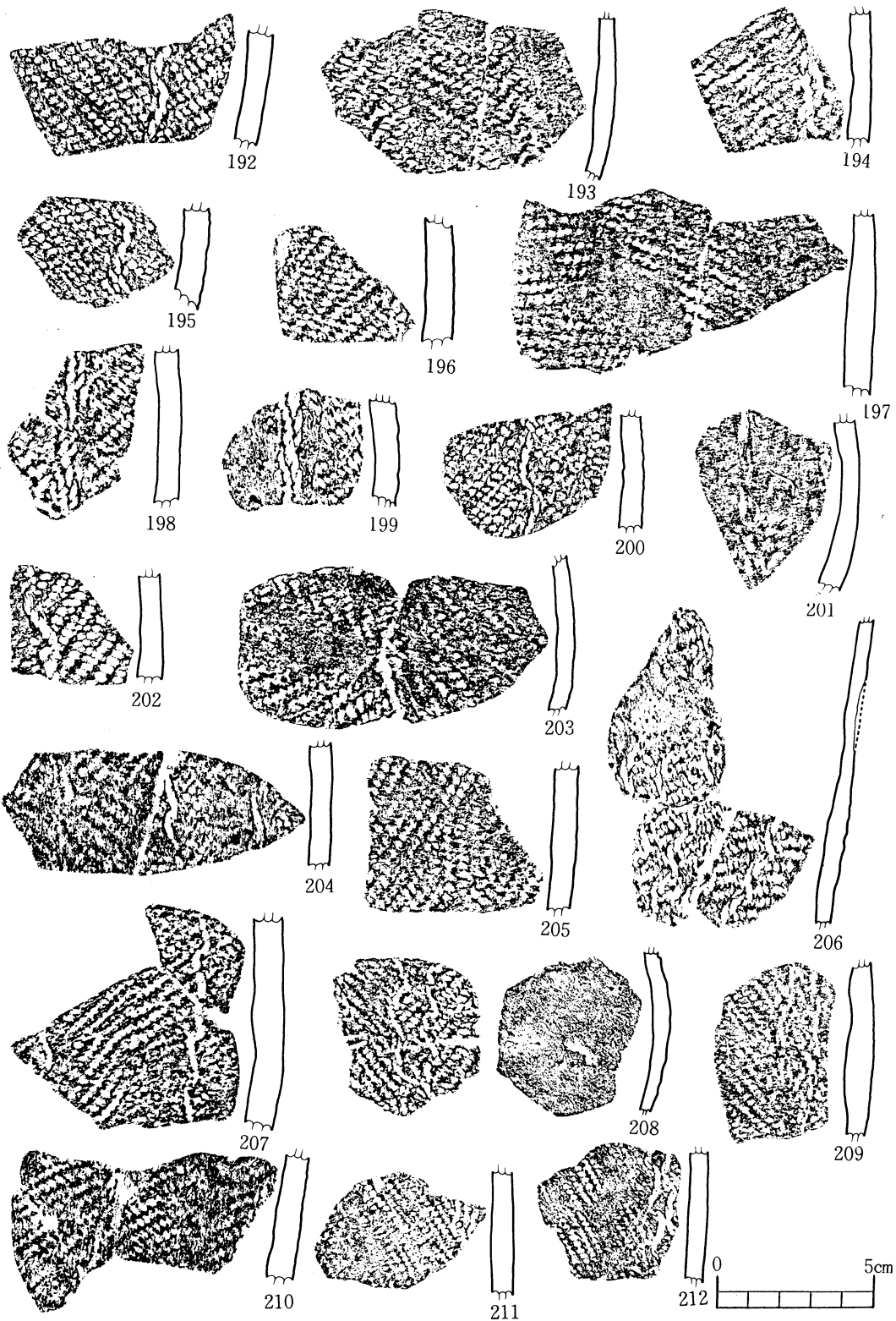
第31图 V類土器実測図(14)



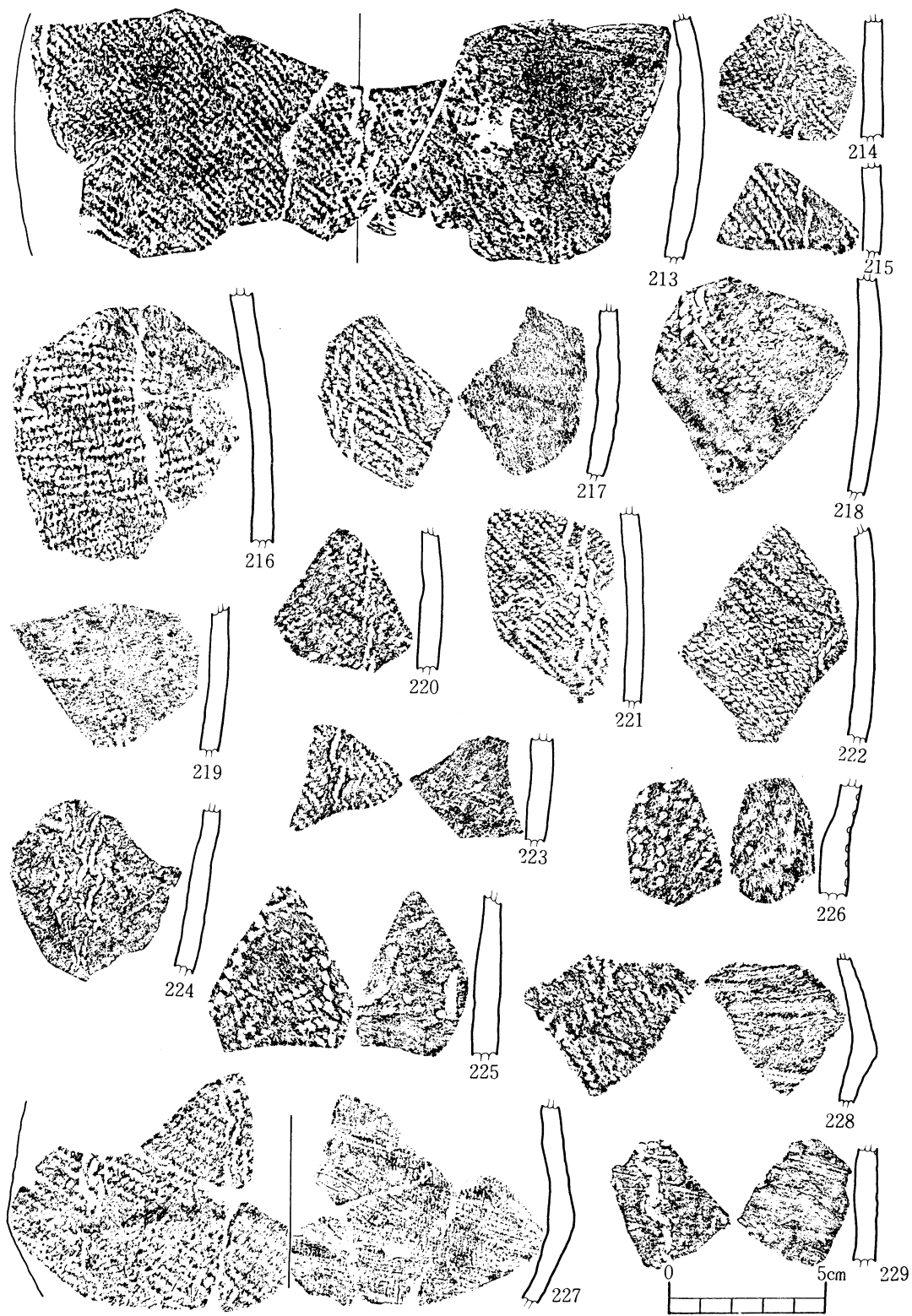
第32図 IV類土器実測図 (15)



第33图 IV類土器実測图 (16)



第34图 IV類土器実測图 (17)



第35图 IV類土器実測図 (18)

f：肥厚部が無文のもの (101～112)

口縁部の上半が肥厚するだけで、紋様が付けられないものである。101～105は口唇部と肥厚部下端に刻目を施すもので、この類で取り扱った。本遺跡出土のものには、僅かではあるが各器種や各器形に無文のものが含まれている。

(ハ) その他 (第28図-113～130)

その他として、イの幅広肥厚口縁や口の幅狭肥厚口縁に属さないものを一括してここで取り扱う。全体に小型の器形で、ミニチュア土器の形態でもある。113～116・120～123は、口縁部が肥厚するタイプで口類に属することも考えられるものである。紋様は凹線文と連点文で鋸歯状を構成する紋様である。胴部も口縁同様の紋様が繰り返され、縄文は施されない。124は小型の肥厚口縁部であるが、頸部付近に刺突文を巡らせ肥厚部と胴部には唯一縄文が施文されている。117～122は口縁部は肥厚せずにそのまま外反する。紋様は、凹線文と連点文を繰り返し施文する。125は口縁部を若干内湾気味に仕上げるものである。126～128は、口縁部は外反させ、口唇部は若干膨らませ丸くおさめる。129は小型の器形の肥厚口縁を呈する。口唇部と肥厚部下端に刻目が施される。130は、口縁外面に三角形の貼付突帯文を巡らせ、口唇部と突帯文の一边を併せて口唇部としている。器形は鉢状になる。紋様は凹線文間に刺突文を施すもので、口唇部両端には刻目が施される。以上、これらは定形化した器形ではなく、特殊な器形を持つものとして捉えた。

② 頸部 (第29図～第31図-131～176)

胴部が僅かに内湾し、そこから緩やかに屈曲し外反して口縁部をつくる。この緩やかな屈曲部が頸部に当たる。しかし、100のように胴部からそのまま外反して屈曲部をつくらないものもある。口縁部片で頸部の状態が判明する資料は少ないが、12のように頸部に刺突連点文を巡らすものや30のように突帯文状に盛り上げ刻目を付けるものなどがある。

第29図～第31図は、頸部から胴部上半の部位である。第29図は、頸部付近の破片で特殊な紋様が確認されたものを取り上げた。134は突帯文を貼付したもの、136・137は頸部付近にコブ状の突帯を貼付する特殊なものである。これらの中には胴部破片も存在しており、胴部に結節縄文を施さない一群も存在している。第30図・第31図は、一般的な施文がみられるものである。130～176のように、刺突文の間隔を若干あけて施文するものと168のように連続して密に施文し、刺突によって突帯文状に隆起させるものがある。この場合、ほとんどが胴部に結節縄文を施している。

③ 胴部 (第32図～第35図-177～229)

第32図～第35図は、胴部片である。胴部は、緩やかに膨らんだ胴張りが一般的である。しかし、227や228のように、胴部中央で稜をつくって屈曲する特殊なタイプもある。

胴部の紋様には、結節縄文が施される。結節は、一結と二結がある。縄文の撚りは、L Rは39片を数え、R Lは27片である。同一個体を考慮すればあまり両者の開きはみられない。そのほか173にRだけの撚りが確認されている。結節を境に右左撚りが替わるものは10点存在している。また、結節の撚りは、L Rの撚りはRで結び、R Lの撚りはLで結ぶものである。

225と226は縄文の上から刺突文を施文する珍しいものである。さらに、229はRの結節だけを縦位に転がすもので、僅か一片の出土である。

④ 底部 (第36図～第38図—230～265)

第36図～第38図は、底部である。底径は10cm程度の大きさが一般的であるが、264等のように5cm程度の小さいものも存在する。底部の底面の形態は、大きく上げ底を呈するもの、僅かに上げ底を呈するもの、ほぼ平坦面を呈するもの等に分けられる。底部側面の形態は、ほぼ垂直に近く立ち上がるもの、外方に広がって立ち上がるもの、大きく外方に広がって立ち上がるもの等がある。第36図は、底部側面に紋様が施文された比較的残りの良好なものである。これらのほとんどは、縄文や結節縄文が施文されている。

底部と側面の接着の仕方には、ほとんど同じ手法が看取される。249のように、底部円盤の中央を上げ底状に持ち上げて凸面をつくり、円盤の端部(円盤の周縁)は斜めに整形し、この斜めの周縁に胴部下端の側面を接着させる方法である。そのため側面は、若干外方に立ち上がり膨らみをつくって胴部へ続く。なお、上げ底の底部だけではなく、246や259のような平底の場合でも同じ手法がみられる。

⑤ 補修孔 (第29図—150)

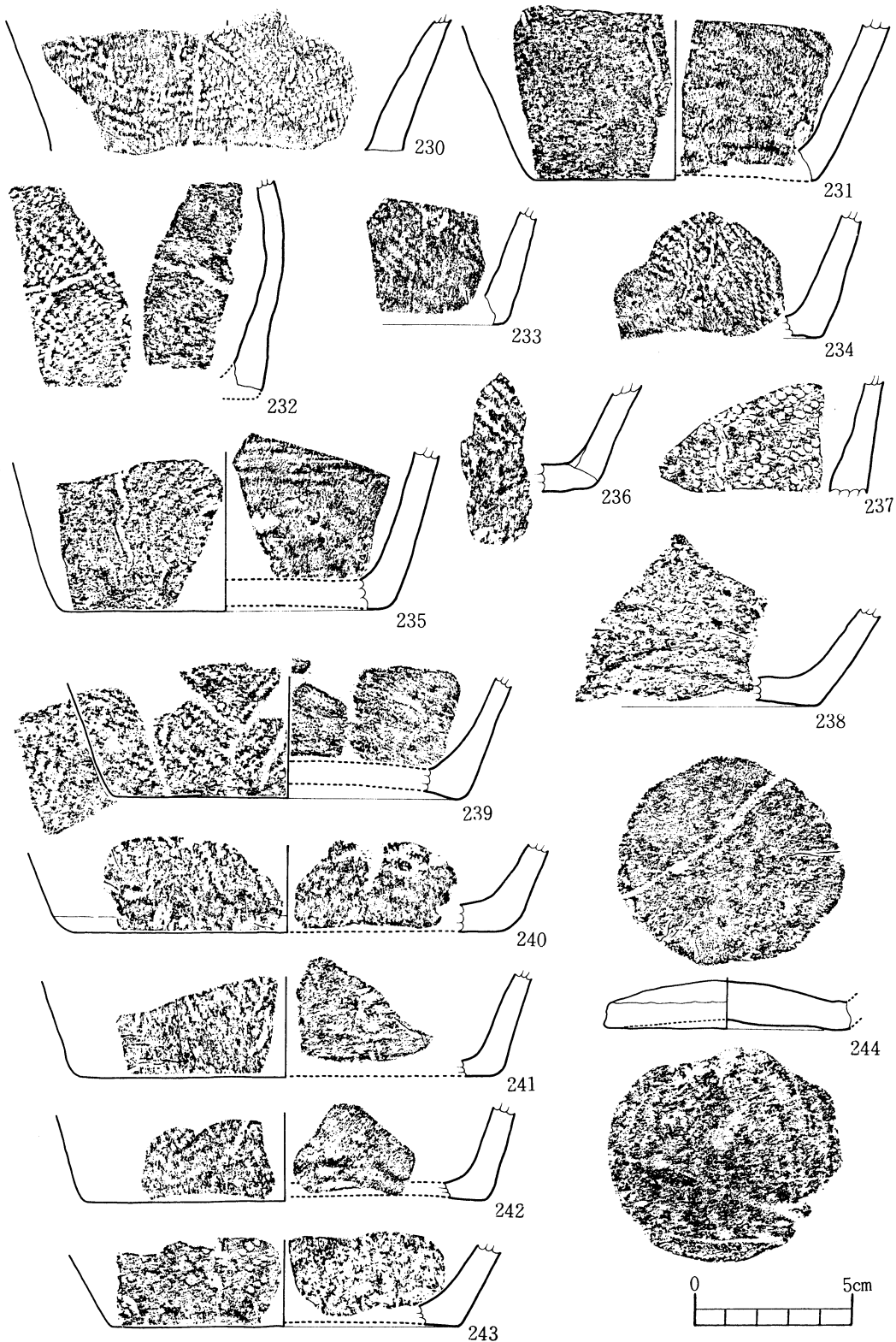
150は頸部の屈曲部の上位に穿孔した穴が存在する。外側の穴径は1.2mm程度を測り、内側は4mm程度と小さくなる。円穴は、外側からドリル状の器具で丁寧に穿孔されている。右側面はシャープな縦割れが確認され、この割れ部分の補修孔と考えられる。

(2) 壺形 (第39・40図—266～278)

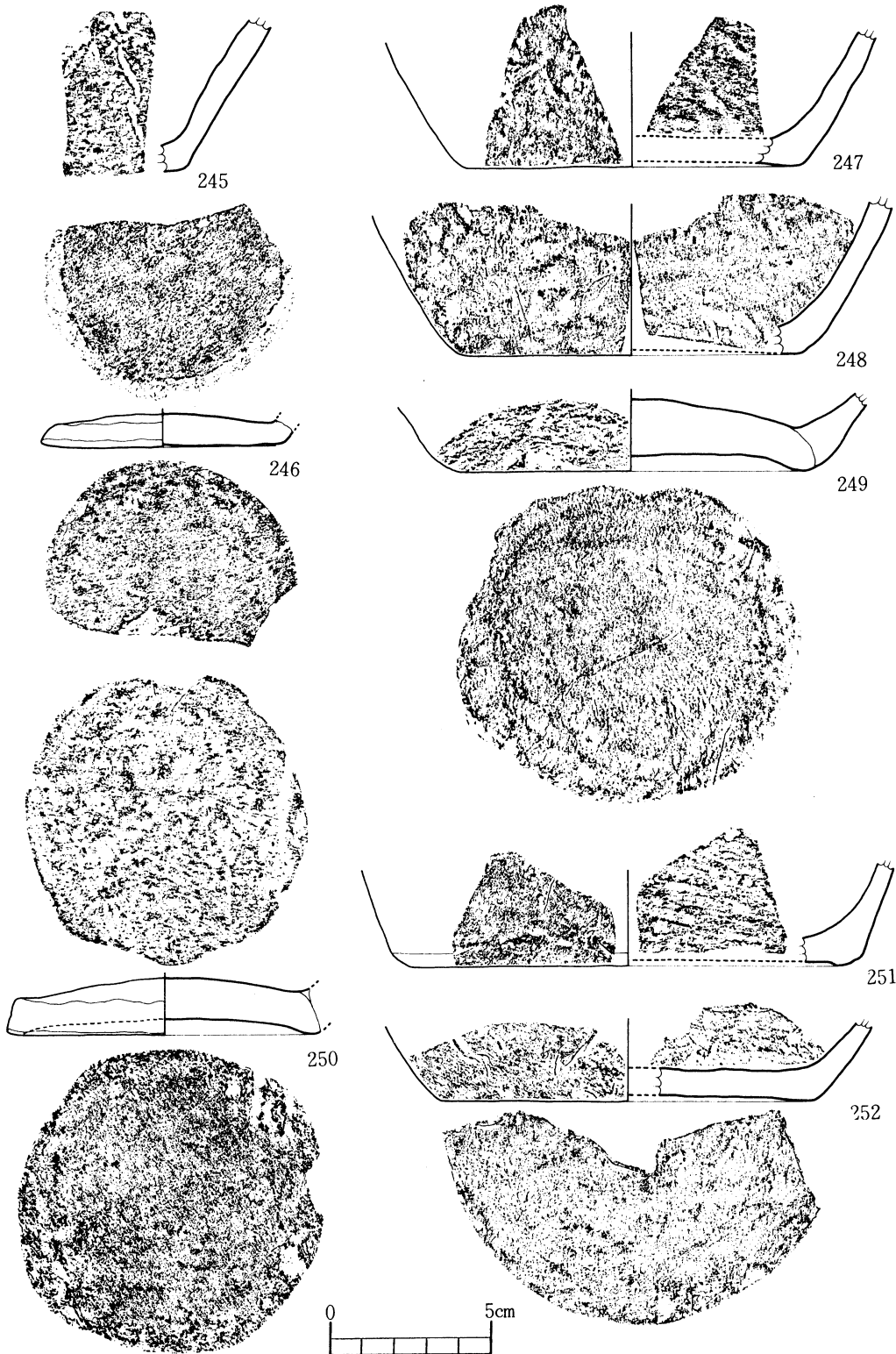
壺形は、細部には若干のバリエーションがみられるものの壺形として一括して促え、紋様上からa・bに細別して説明する。a類は紋様の付いた有文で、b類は紋様の付かない無文のものである。南九州の縄文時代の早期に該当する土器型式に、壺形土器の存在が近年明らかになりつつある。縄文土器の壺形土器という呼称の仕方には多くの問題があるが、一応ここでは、形態状から「壺形土器」として細分した。

a：有文 (266～272)

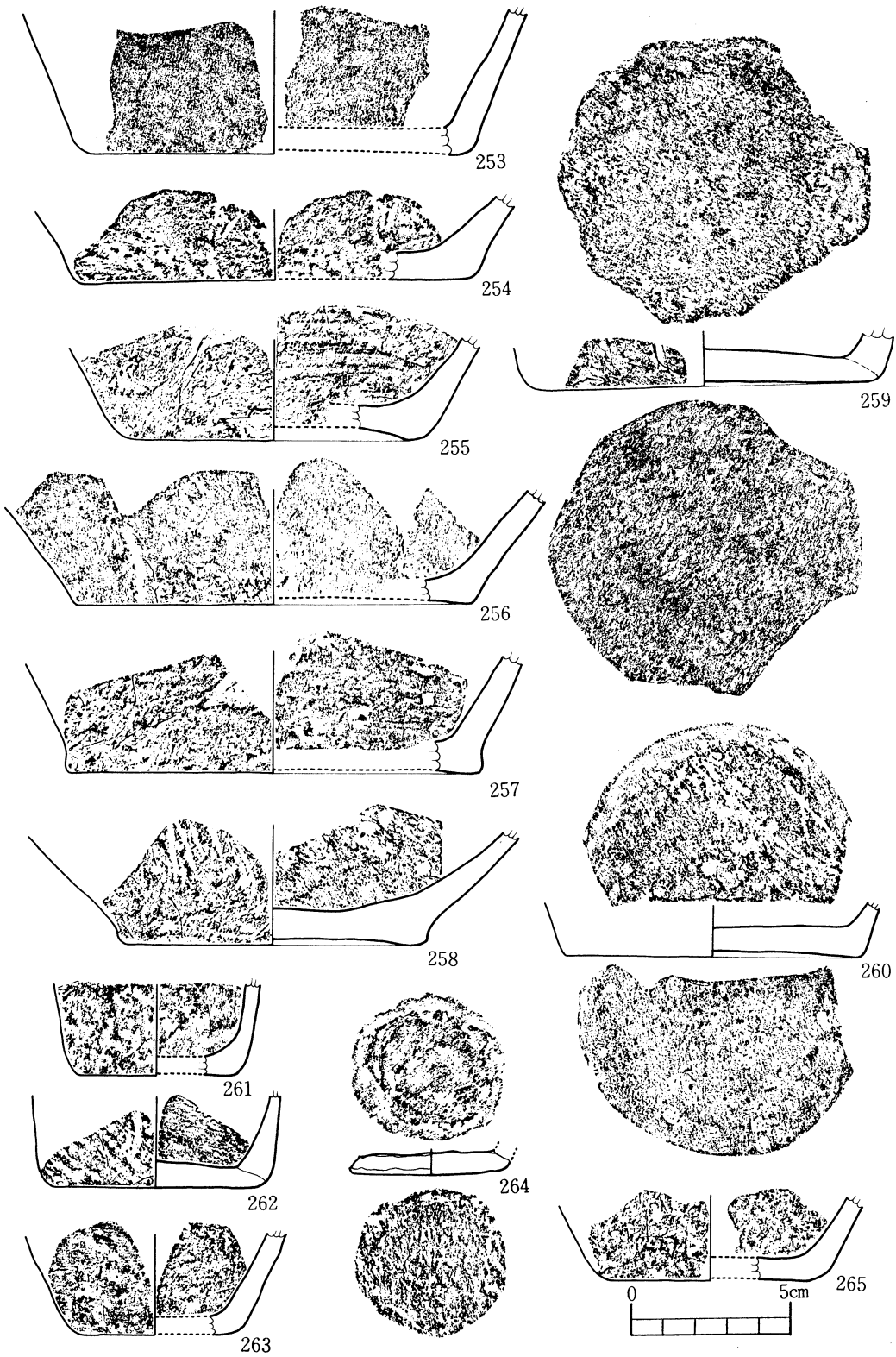
266～272は、A B 9区からA B 11区の間に出土している。壺形の器形を呈し、有文のものである。器形状はほぼ類似するが、紋様の施文が異なる。器形は、口縁部は内傾し、口縁上端に



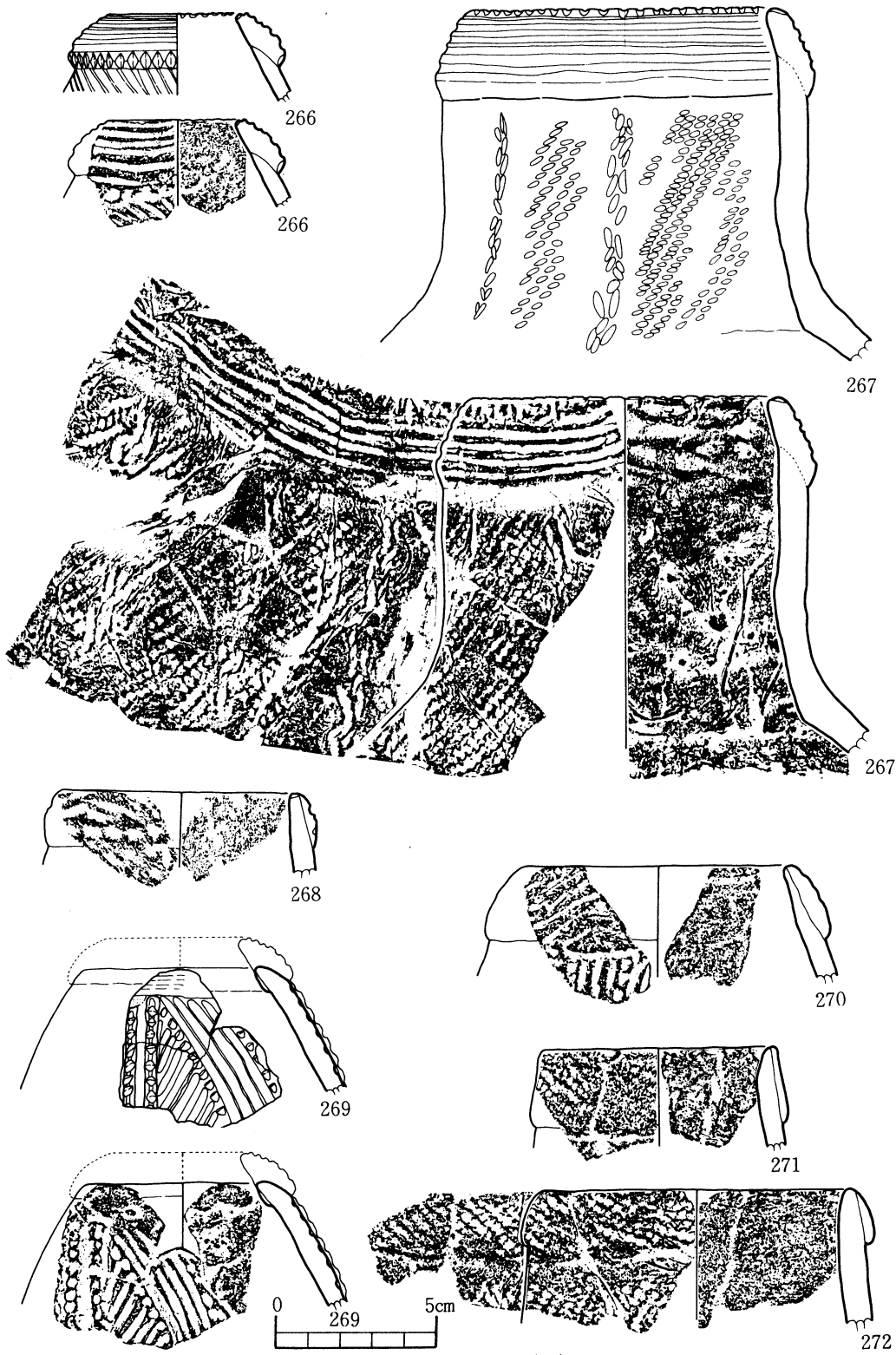
第36图 IV類土器実測图 (19)



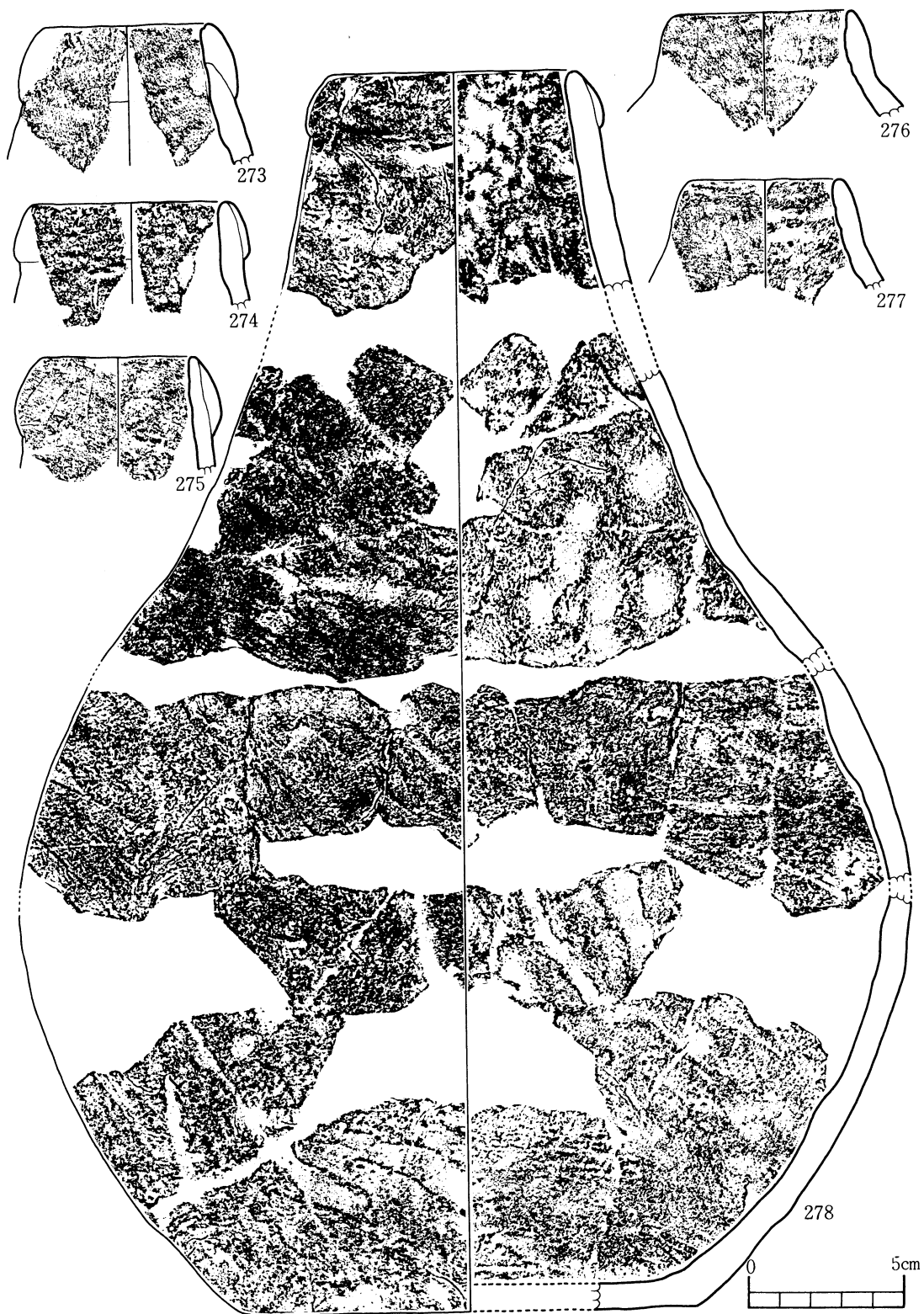
第37图 IV類土器実測図 (20)



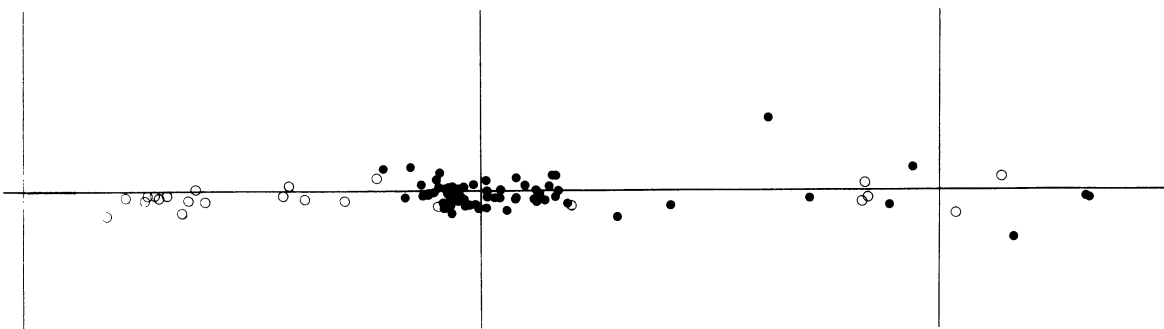
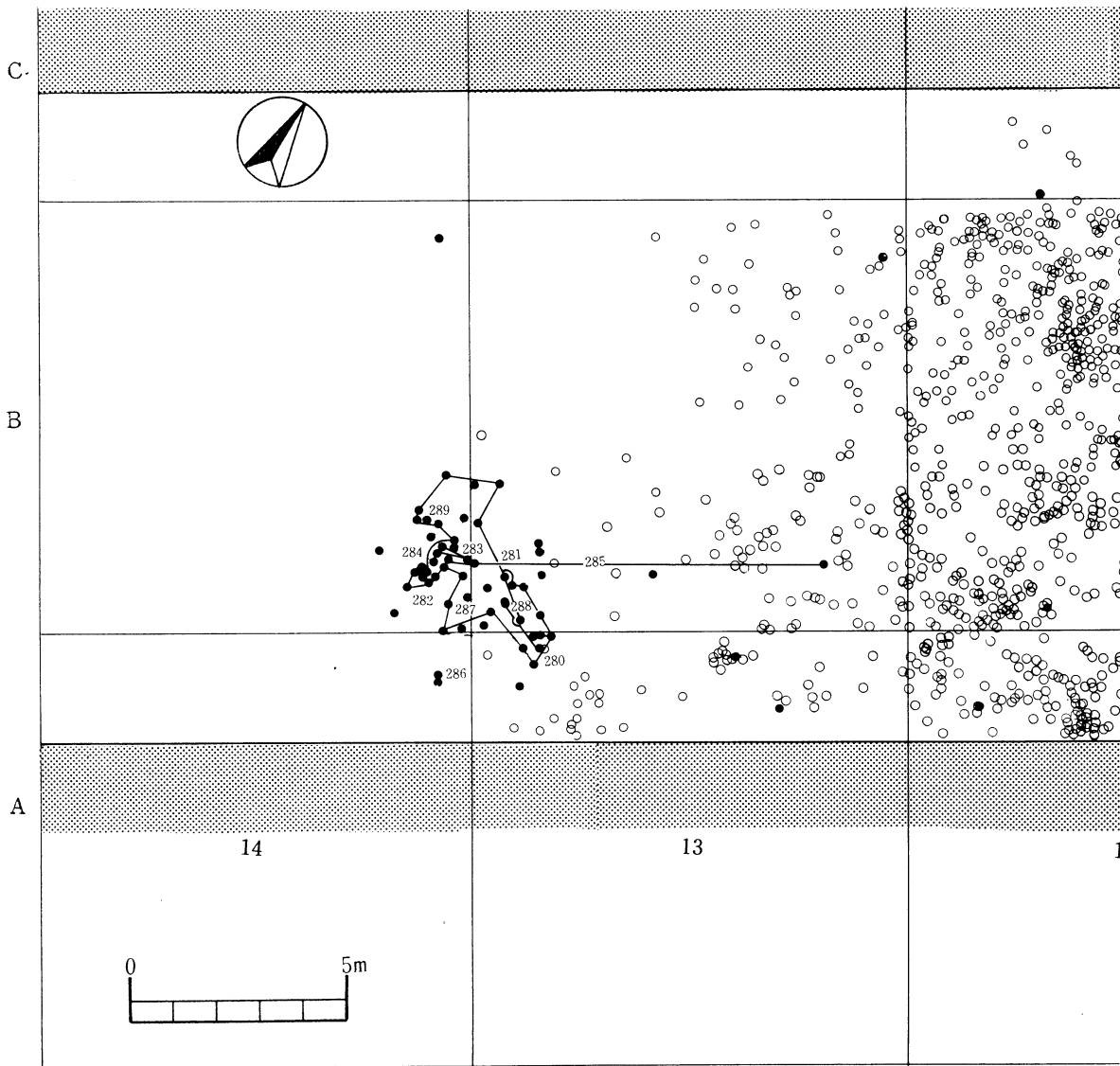
第38图 IV類土器実測図 (21)



第39图 IV類土器実測图 (22)



第40図 IV類土器実測図 (23)



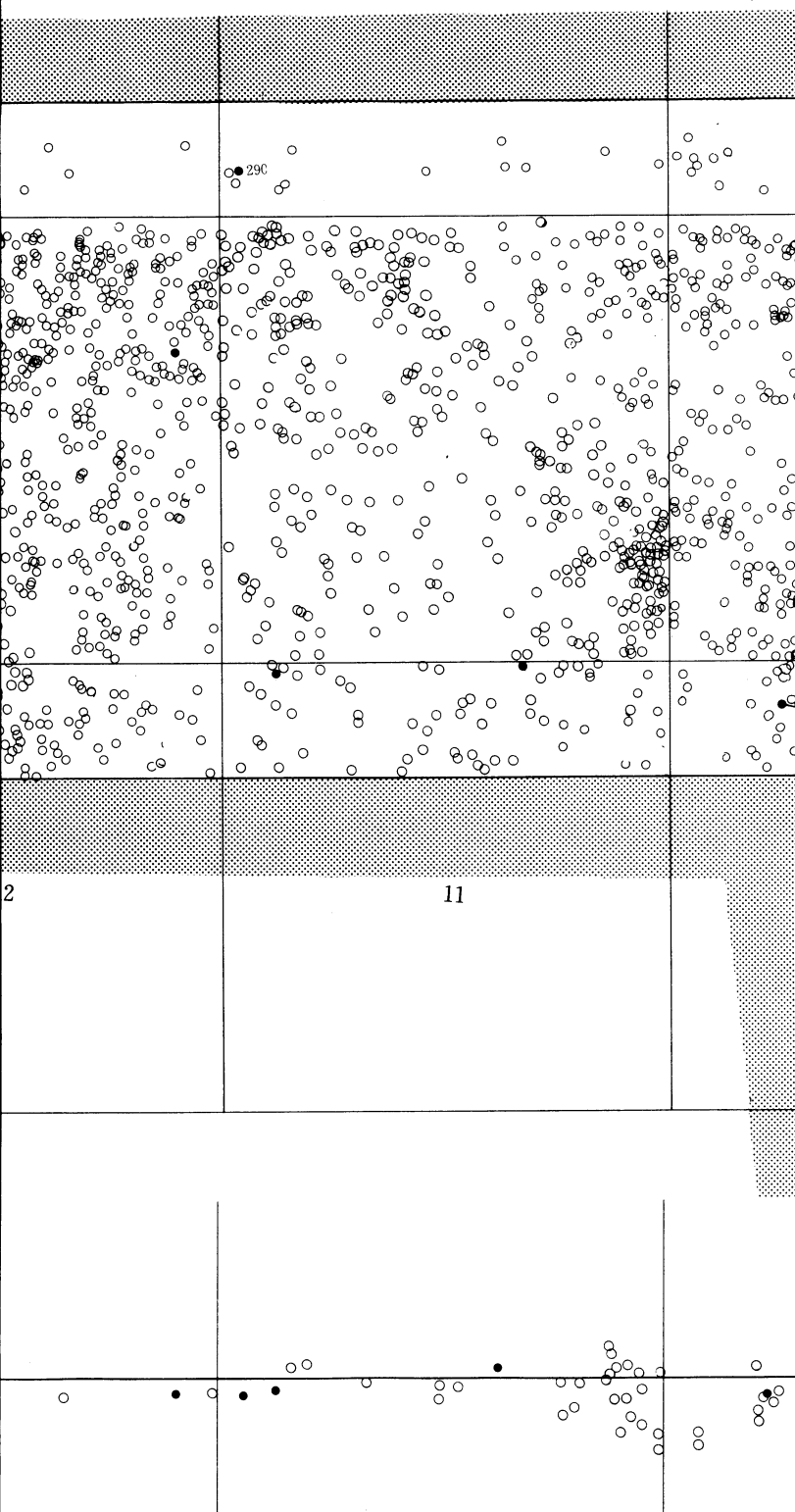
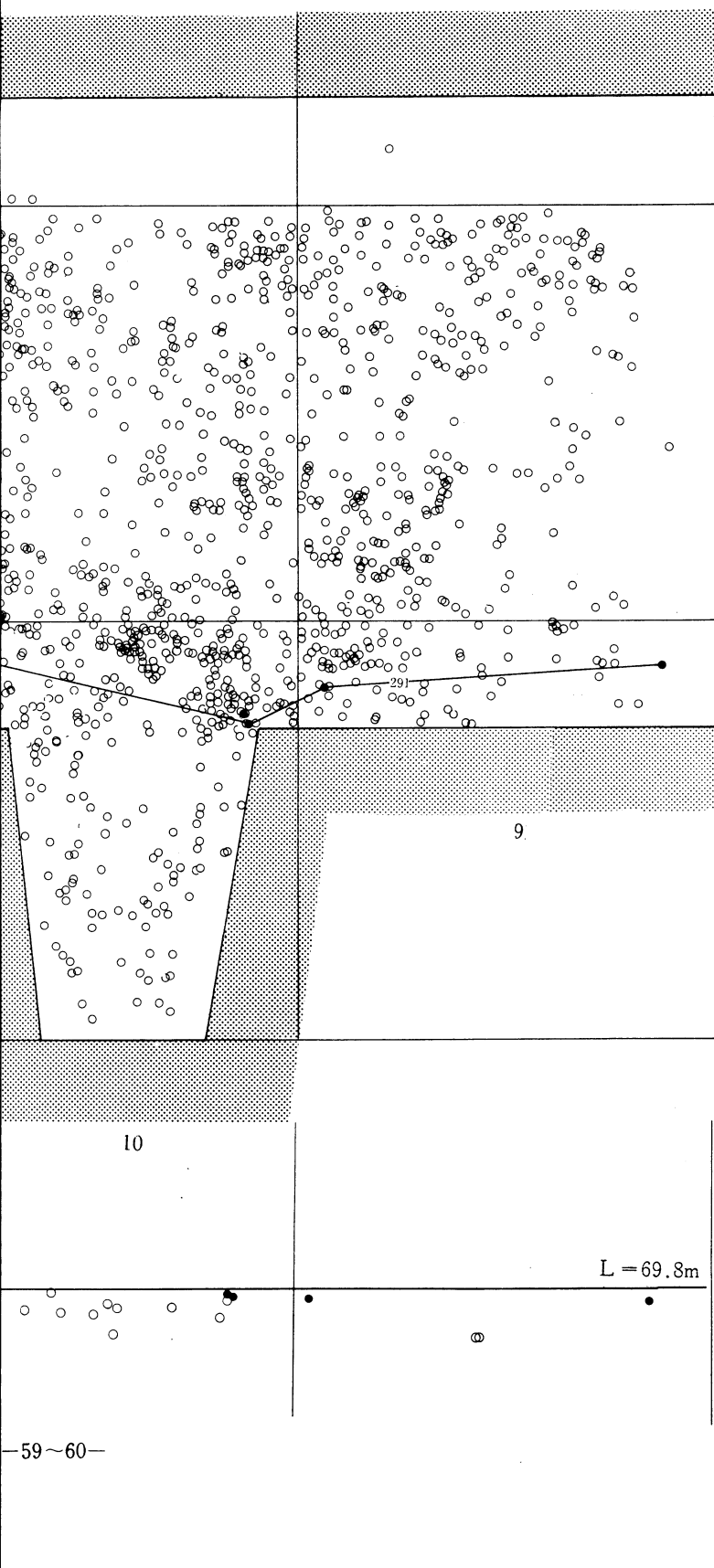


図 V類土器の分布と他類土器との比較



肥厚させた粘土帯を貼付して、さらにすぼまった形を呈するものである。

266・268～270は、同類の紋校構成がみられるものである。

266は、口縁上面の肥厚部分の口唇部に刻目を施し、肥厚部分には横位の凹線文を5条程度巡らせ紋様とする。肥厚部分の下端にも刻目が施される。肥厚部分より下位の部分には、斜位の凹線文が連続して施されている。口径は約4cmと小さい。

269は、口縁上面の肥厚部分が剥落しているもので、肥厚部分は輪積み状に積み足した状態が良く分かる。肥厚部分下の口縁部の紋様は、二条の粘土帯を縦位に貼付して、粘土帯の上には刻目を施す。粘土帯の側面には、両側に刺突文を施した凹線文帯を鋸歯状に構成して施文する。270は細片ではあるが、同様な紋様構成がみられる。

267は、頸部から口縁部を残す比較的大きな破片である。胴部から頸部では内湾し、頸部で屈曲して、直上して口縁部へいたる。口縁部上面では、粘土帯を輪積み状に積み足して、さらに狭まった肥厚口縁をつくる。口径は、9.5cmを測る。肥厚口縁の口唇部は丸くおさめ、上端に刻目を施す。肥厚口縁部には四条程度の凹線文を巡らす。肥厚口縁下には、結節縄文が施文される。縄文はRLで、結節はLで結ぶ。内面はナデ整形の丁寧な仕上げで、焼成は良好で精緻である。271と272は、肥厚口縁を若干側面に輪積み貼付するものである。肥厚部分とその下位には、縄文を施文する。

b：無文（273～278）

273～278は、A B11区からA B13区の間に出土している。壺形の器形を呈し、無文のものである。器形状は、口縁の形に二通りがある。一つは有文と同様で、口縁部は内傾し、口縁上端に肥厚させた粘土帯を貼付して、さらに細まった形を呈するものである。他は、口縁部を内傾して丸く納めるだけで、粘土帯は貼付しないものである。

273～278は、有文同様肥厚口縁をつくるタイプである。肥厚口縁の貼付の仕方にも二通りがみられる。273は、口縁上端に輪積み状に積み足す手法である。274～278は口縁部側面に粘土帯を貼付して肥厚させるタイプである。278は、直接接合しない部分もあるが、同一個体と考えられるもので復元を試みたものである。器高約40cm、口径8cm、胴径約28cm、底径約15cmを測る。底部は幅広く、器高の3分の1の高さで最大となり約28cmを測る。そこから口縁部には大きく内傾し、口縁部は径約8cmと小さくなる。口縁外側には粘土帯を貼付し、肥厚口縁をつくる。口縁部周辺は、丁寧なナデ整形が行なわれる。器面全体は、ナデ整形が施されるが手捏ね状の凹凸が多い。

276・277は、口縁部に粘土帯を貼付しないものである。口縁部は内傾し、そのまま細まって丸くおさめる。口径は5cm～6cm程度を測り、器壁厚は6mm程度である。

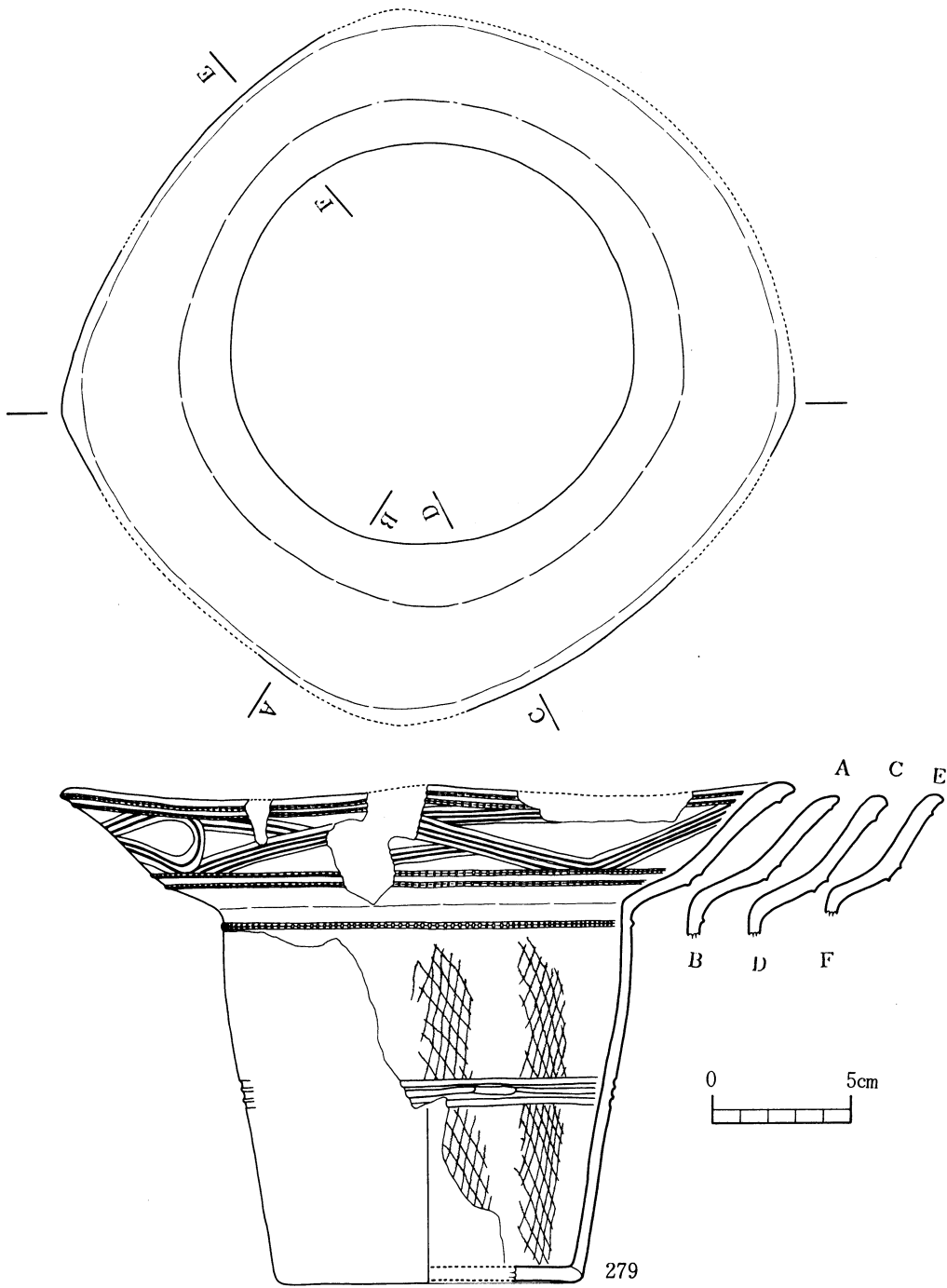
6. V類土器（第42図—279～290）

B-14区を中心に出土したもので、完形に復元されるものである。V類の主体を占める279～

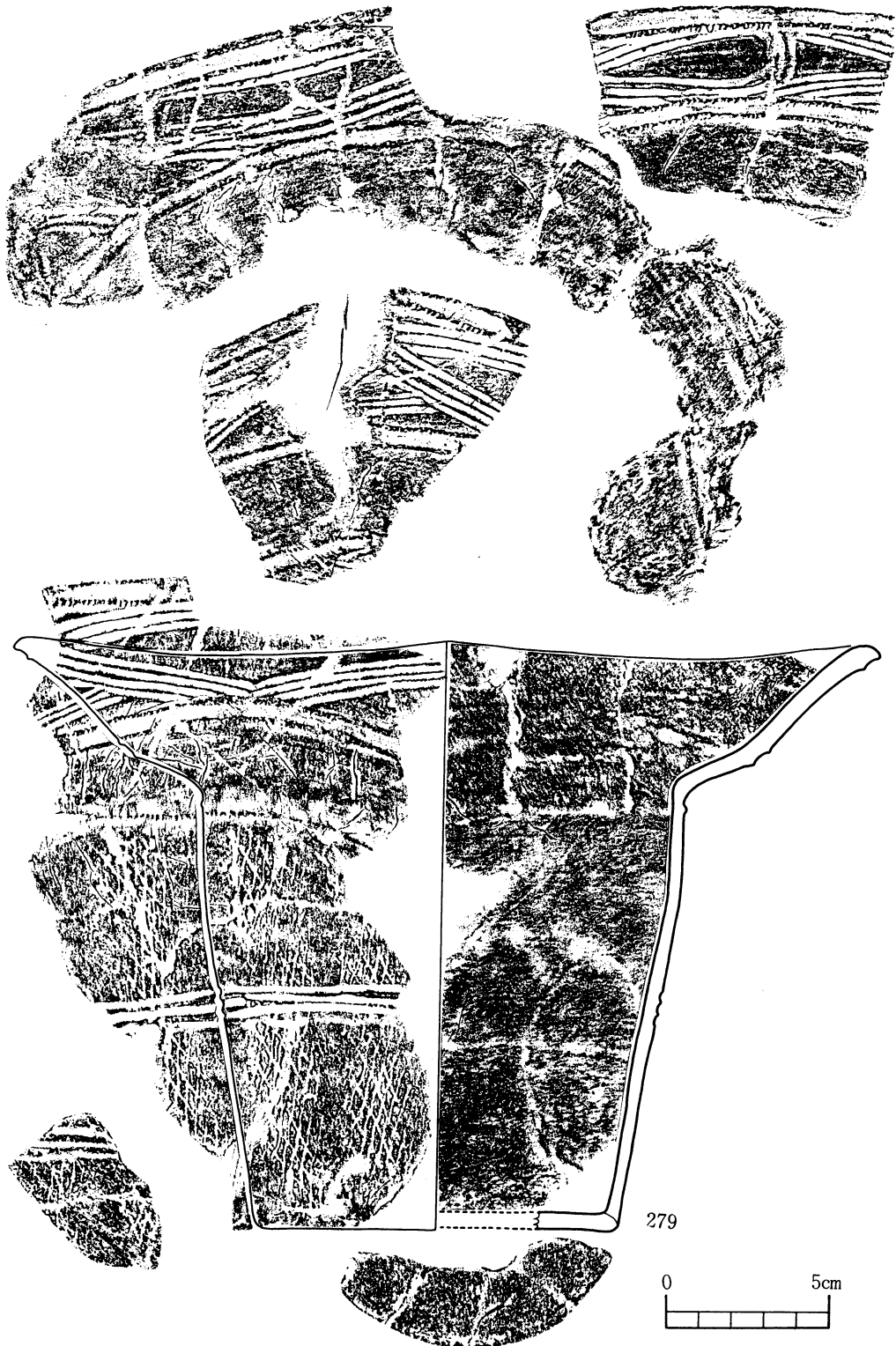
289は、一個体をなす破片である。290の一片だけは形態が異なり、別個体の破片である。口縁部は頸部から大きく外反し、二重口縁状に屈曲して波状口縁を呈する。波状口縁は四隅が山形に高くなり、上位からの平面形は方形を呈する。波状口縁の頂部での口径は、27cmを測る。頸部の直径は、約15cmを測る。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がり、円筒形を呈する。底部は直径11cmを測り、平底を呈する。底部の底面の厚さは5mm程度の薄い仕上げであるが、均整な仕上げと堅緻な焼きがみられる。胴部の器壁は、4mm～5mm程度と非常に薄い。口縁部の紋様は微隆突帯文と凹線文で飾る。口唇部外面直下と口縁下部の屈曲部には二条の、頸部には一条の微隆起突帯文を巡らせる。そして、二条の微隆起突帯文間には、四本を単位とした凹線文帯で幾何学文を描く。胴部は、格子の撚糸文帯を縦位に施文する。撚糸文は、R撚りの細い縄文を左から右に巻き、さらにそのうえを右から左に巻き返したものである。そして、胴部の中央部には三本の凹線文を撚糸文体の上から巡らせる。口縁部の紋様と併せ、華麗で特徴的な構図をつくる紋様帯である。

7. VI類土器 (第45図-291)

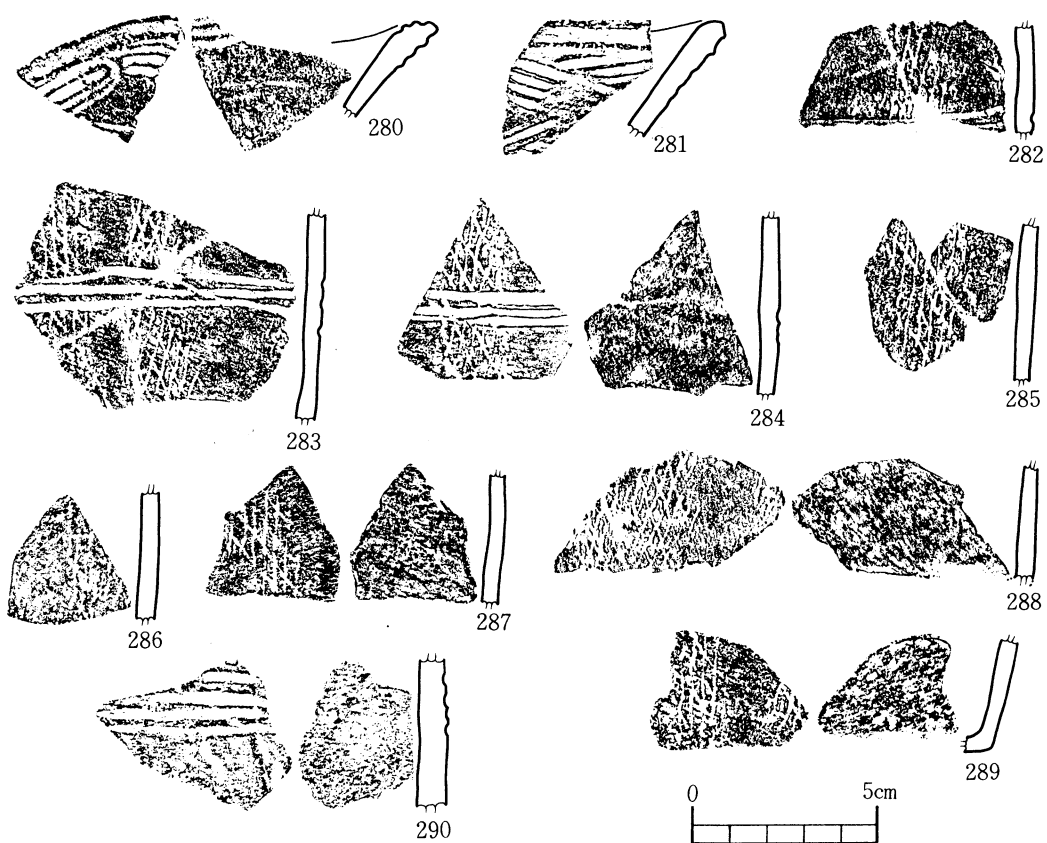
細片ではあるが、口縁部から胴部まで復元できる破片である。復元口径は、約26cmを測る。口縁部は大きく外反し、胴部は若干膨らみをもった円筒形を呈する。口縁部は、若干内湾気味に外反する。口唇部は僅かに斜めに尖り、この部分に刻目を施す。紋様は、頸部から口縁部外面は貝殻刺突連続文を横位に施し、胴部は条線文帯で飾る。条線文帯は、横位に施文されるが、一部屈曲する部分もみられ幾何学模様を描くことも考えられる。



第42図 V類土器実測図(1)



第43図 V類土器実測図(2)



第44图 V類土器実測図(3)



第45图 VI類土器実測図

(2) 石器

X層からは、打製石鏃(11点)、石匙(1点)、未詳品(2点)、磨製石斧(2点)、局部磨製石斧(9点)、扁平打製石斧(2点)、小型石斧(2点)、石片(3点)、磨石・敲石類(9点)、凹石(2点)、石皿(5点)、軽石製品(1点)、棒状敲石(40点)の総数89点の石器が出土している。以下、石器の製作と形態について記述する。

(a) 打製石鏃 (第47図-292~302)

製作は、298と301以外はすべて、二次加工が表裏全面におよんでいる。298は、表裏に剥片素材の主要剥離面を大きく残し、その剥離方向は同方向である。厚さも薄く、二次加工も縁辺部にとどまるのみである。先端が平たく未製品の可能性もある。301は、節理面を大きく残す。

形態のうち、全体的な大きさから見れば、297・299のような小形のものから、302のような大形のものまで変異がある。威力を考えて使い分けがなされていたのであろうか。柄との装着部には、すべてえぐりがあり、293・294・296のように全長に対しえぐりの深いものから、300・301・302のようにえぐりの浅いものまで変異がある。301・302のように大形のもの、えぐりが浅い。

石材は、292、293、298~300が黒耀石で、294~297、301、302がホルンフェルスである。

(b) 石匙 (第48図-303)

表面に原面を残す横長剥片を素材とし、二次加工は縁辺にとどまる。つまみ部分もつくり出された縦長形の形状をもつ。石材は、粗粒砂岩を使用している。

(c) 未詳品 (第48図-304・305)

304は、表面に原面を残す剥片であり、二次加工も見られる。つまみ部分のつくり出された横長形の石匙とも思われるが、判然としない。

305は、二次加工が表裏面に入念に施されている。石鏃・石槍の類とも思われるが、出土完形品の中に同大同形のものは見当たらない。

(d) 磨製石斧 (第49~50図-306・307)

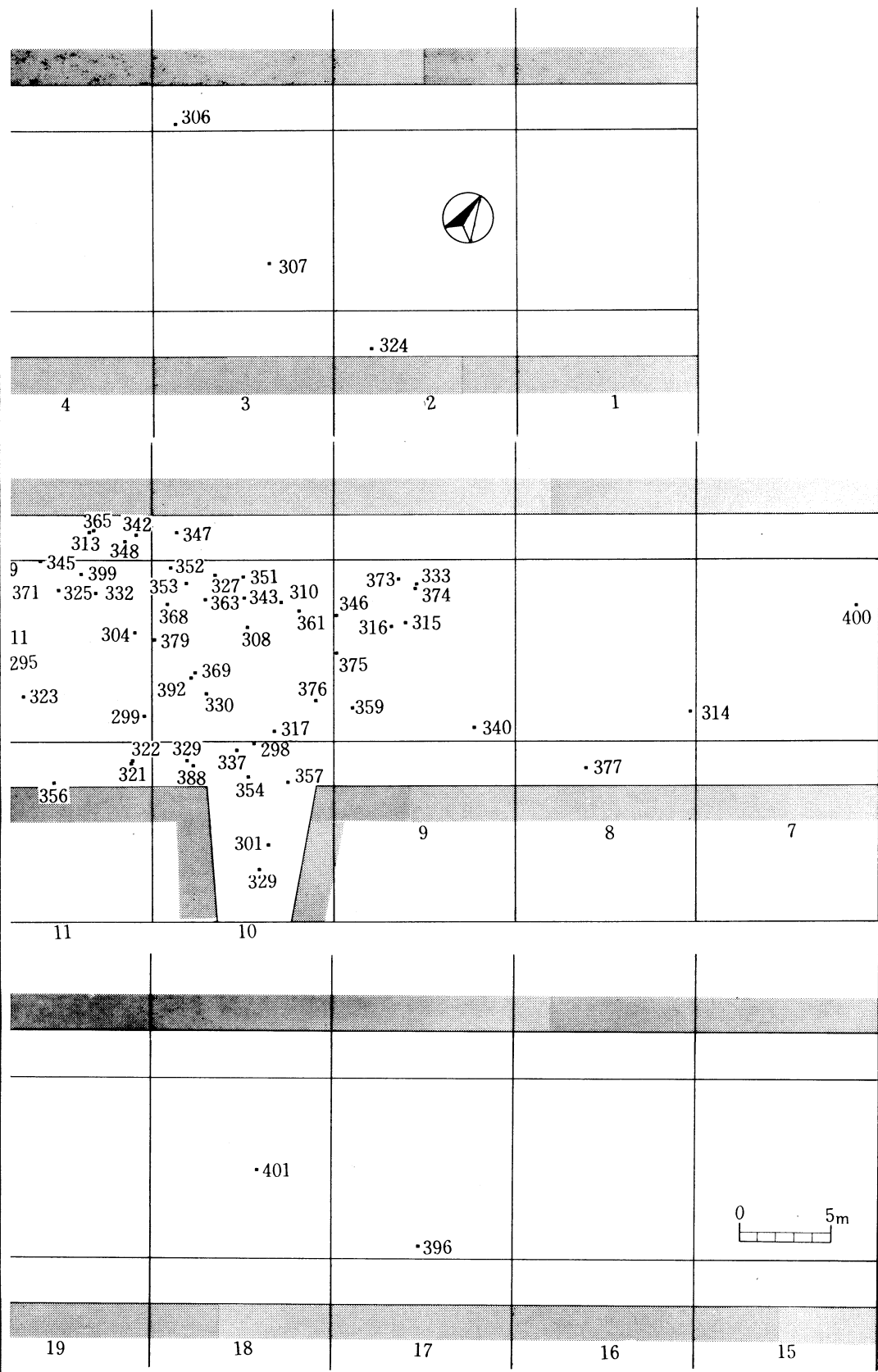
306は、全形が棒状で細長く、刃部は円刃となる。また、刃先の方から見ると刃部は、湾曲している。表面側では、上位に突出部が2ヶ所作り出され、裏面は平坦に仕上げられており、柄との装着に適した形状となっている。全面に整形の際の敲打の痕跡を見せるが、一応、器面は滑らかになっている。刃部付近は入念な研磨がなされ、非常に滑らかになっている。石材は、ホルンフェルスである。

307は、全形が棒状をなし、刃部に近くなるにつれて、幅狭となっている。片刃をなす刃部

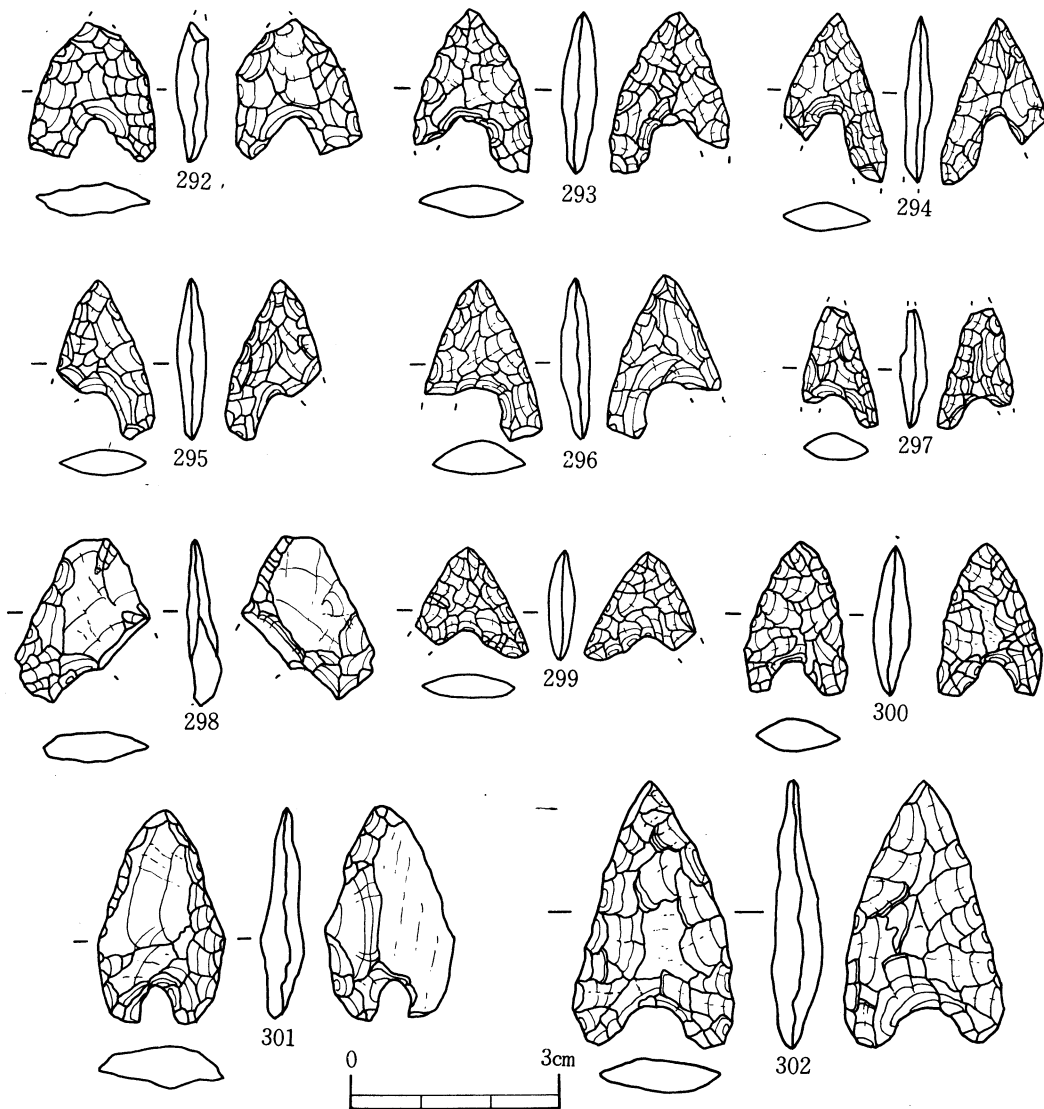
C		
B	334	358
A	6	5

C			
B	302	303	344, 297, 394, 391, 378, 335, 355, 380, 350, 305, 309, 300, 293, 372, 312, 349, 31, 3
A	364, 339		320, 326, 336, 296, 366, 362, 370, 381
	14	13	12

C			
B	398, 397, 392	393, 390	395
A			
	22	21	20



第46图 X類石器出土分布图



第47図 石器実測図(1)

の一面のみに縦位の線状痕も見られる。使用によるのであろうか。ただし、加工痕との識別は難しい。器面は、表裏共に滑らかになり、敲打痕は目立たない。側片および後端に敲打痕を残すものの、側片は摩耗しやや滑らかになっている。刃部付近は、入念に研磨され刃部が作り出されているが、裏面には剝離痕もとどめている。滑らかとなった器面には、線状痕もわずかに見られる。研磨加工の痕跡であろう。石材はホルンフェルスである。

(e) 局部磨製石斧

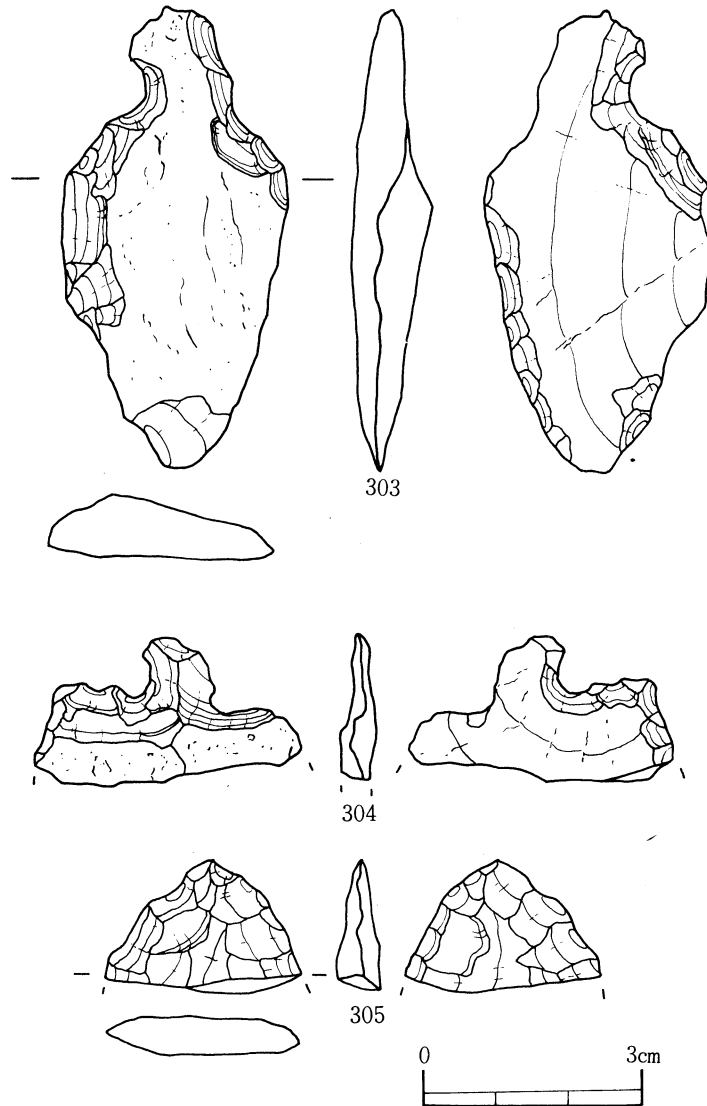
(第50～52図)

—308～316)

これらは、器面が剥離面と滑らかな面とからなる石斧形状をなすもので、石質は、硬質の粘板岩とホルンフェルスである。

316は、滑らかな面を見出せないが、石質・形状から、ここに加えた。全形は、308～311が細長く、312～316は幅広となっており、どれも厚みを有する。308は、円刃をなす刃部に入念な研磨がなされている。309は、スクリーン・トーン部分が非常に滑らかになり、一部に敲打痕も残す。

310は、滑らかな面に加工痕と思われる線状痕をわずかに見せる。312は、わずかに円みをもつ幅広の刃部に入念な研磨がなされている。313、314は、滑らかで平坦な面を側面から見ると石斧の刃部のような傾斜をなしている。石材は、308、310～312、314、315が粘板岩で、309、313、316はホルンフェルスである。

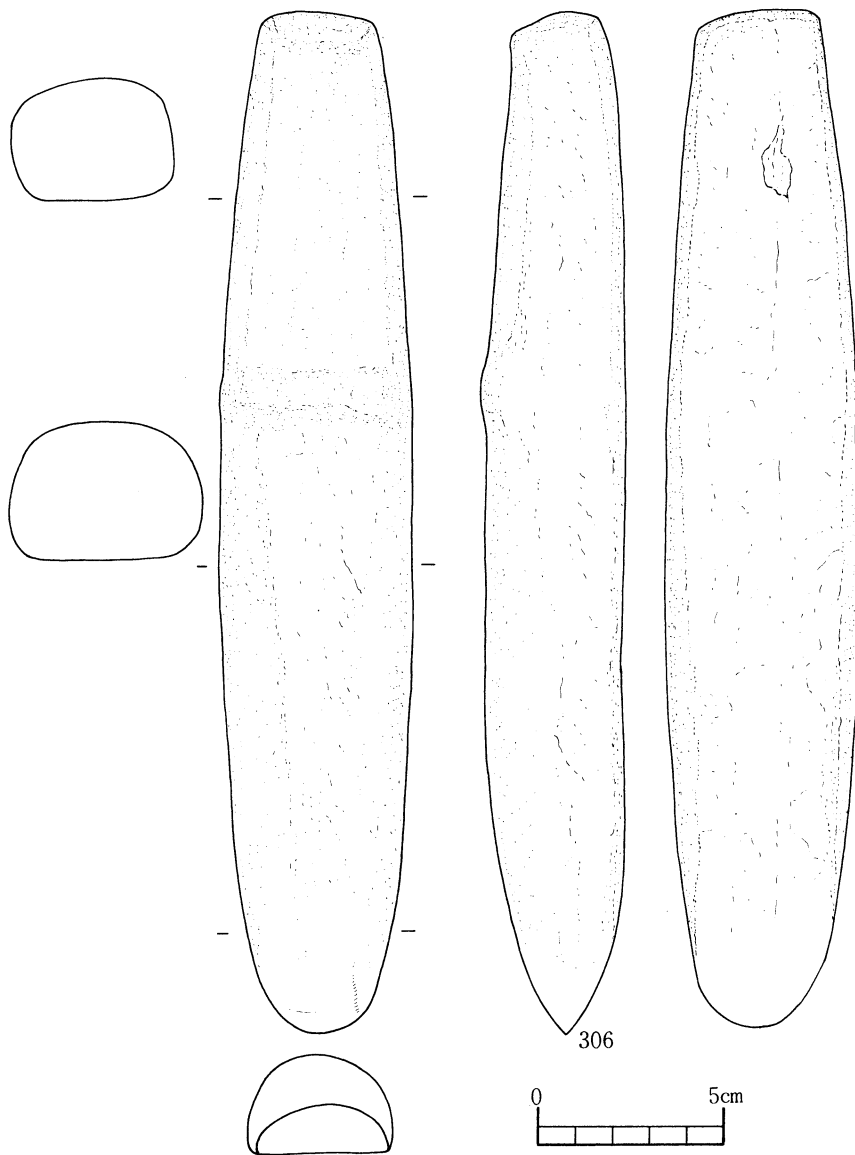


第48図 石器実測図(2)

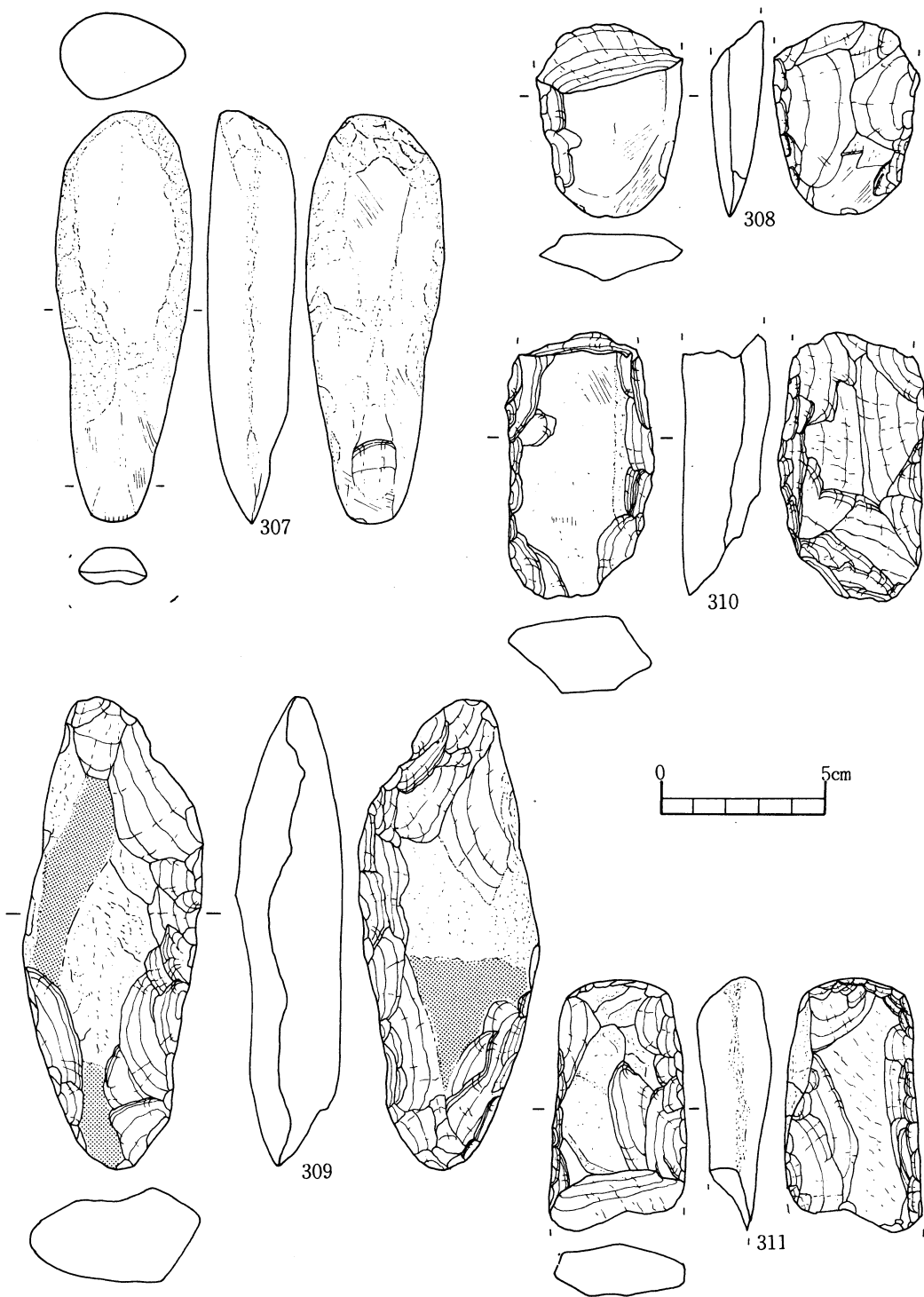
石材は、308、310～312、314、315が粘板岩で、309、313、316はホルンフェルスである。

(f) 扁平打製石斧 (第52図—317・318)

器面が、剥離面からなる石斧形状をなすものである。石斧の未製品とも考えられるが、形状は扁平で、しかも石質が軟質であることから、扁平打製石斧に分類した。石材は、粘板岩である。



第49图 石器实测图(3)

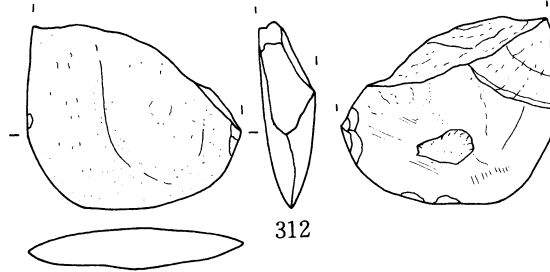


第50图 石器实测图(4)

(g) 小型扁平石斧

(第52図-319・320)

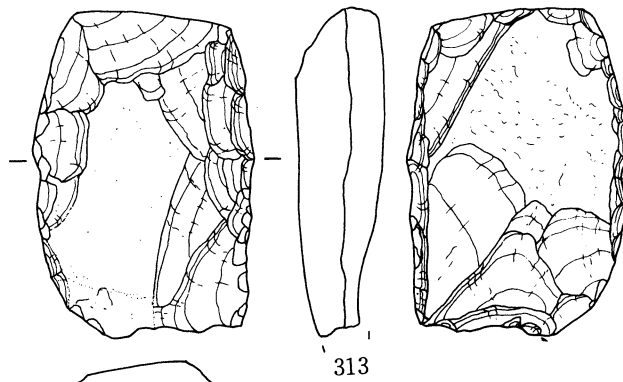
319は、入念な研磨がなされている。破損が著しいものの、刃部をわずかに残す。石材は、頁岩である。320は、剥離、摩擦が著しい。石材は、粘板岩である。



(h) 石片

(第52図-321~323)

おそらく破損した磨製石器から生じた石片であろう。



(i) 磨石・敲石

(第53~54図-324~333)

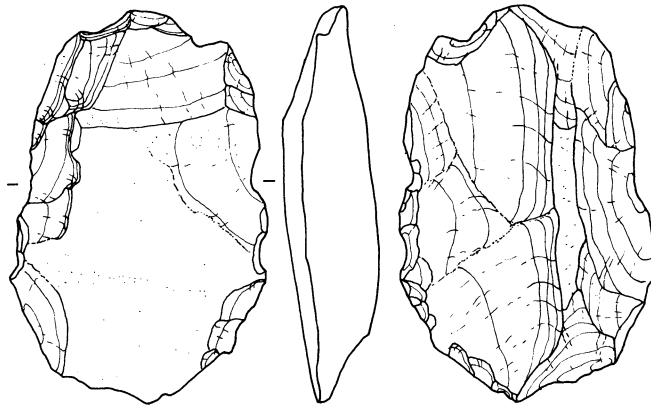
器面が滑らかな礫素材である。324~330は、側辺において、器面が粗い平坦面をもっている。



(j) 凹石

(第54図-334・335)

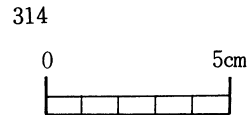
敲打によるくぼみをもつ。334は一端にも敲打痕をもち、335は側辺の一部が滑らかな平坦面となっている。



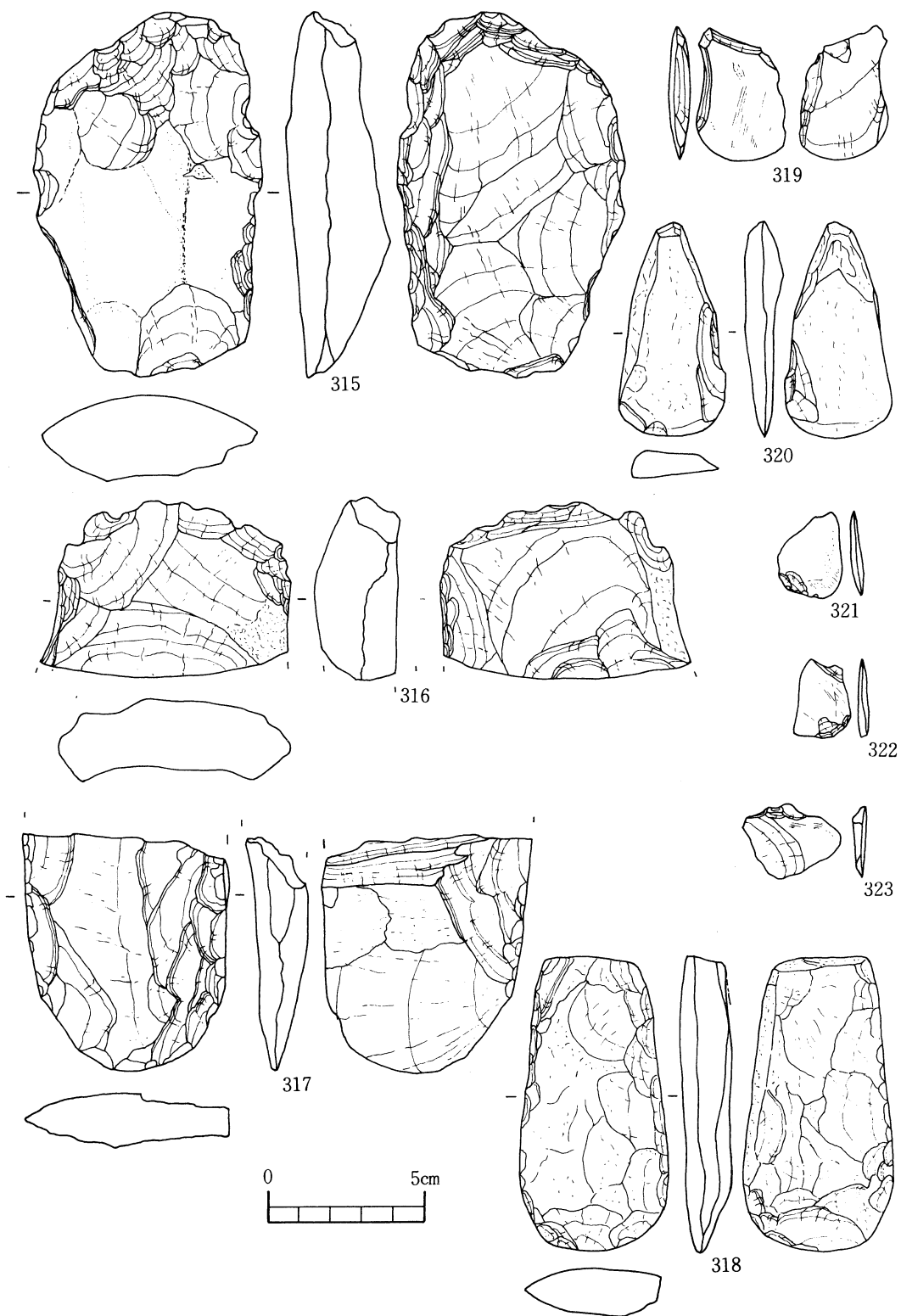
(k) 石皿

(第55図-336~340)

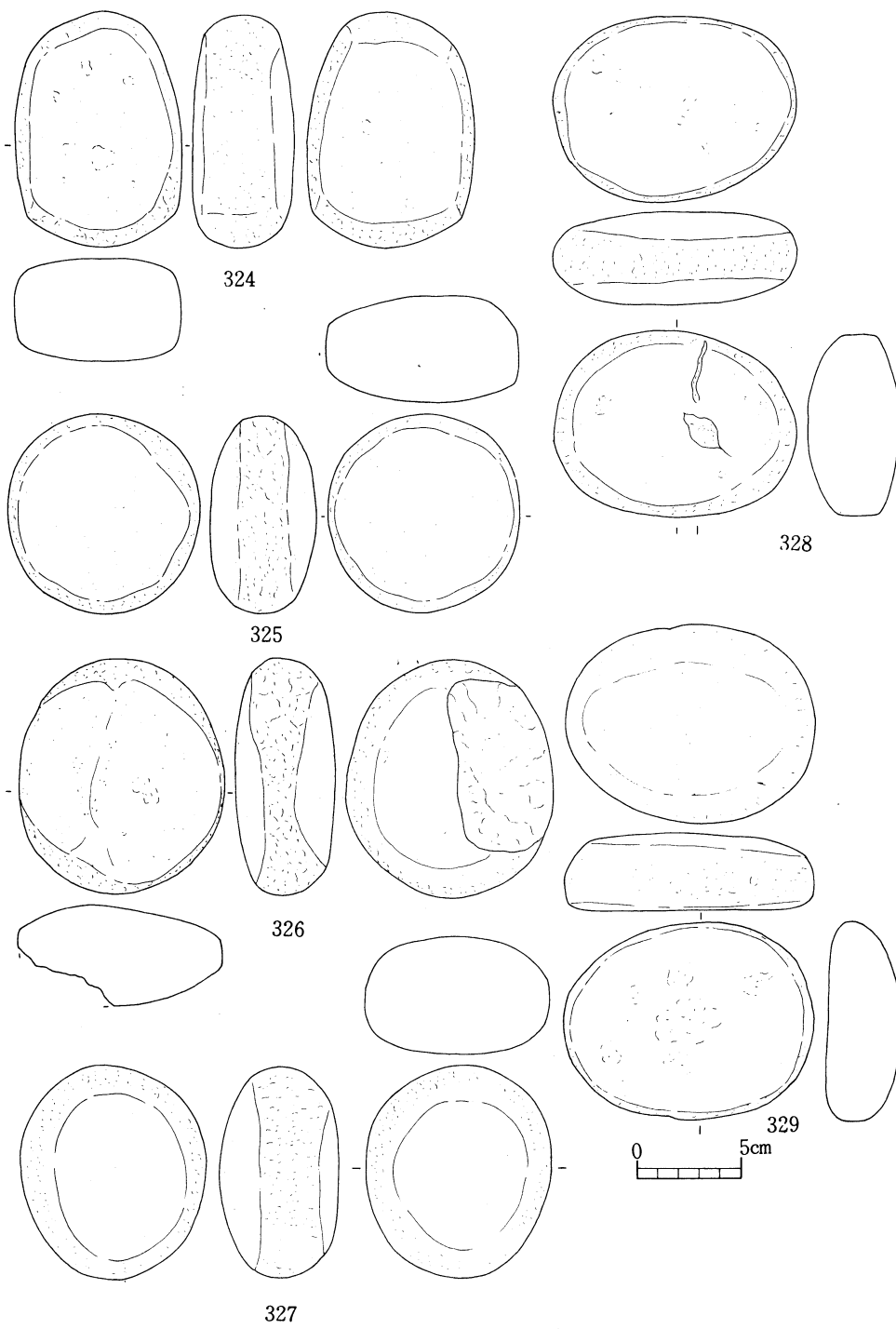
平坦面をもつ円礫素材による336、337と、扁平な角礫素材による338~340がある。スクリーン・トーン部分は、器面が非常に滑らかになっている。また、338は中央のくぼみが顕著である。



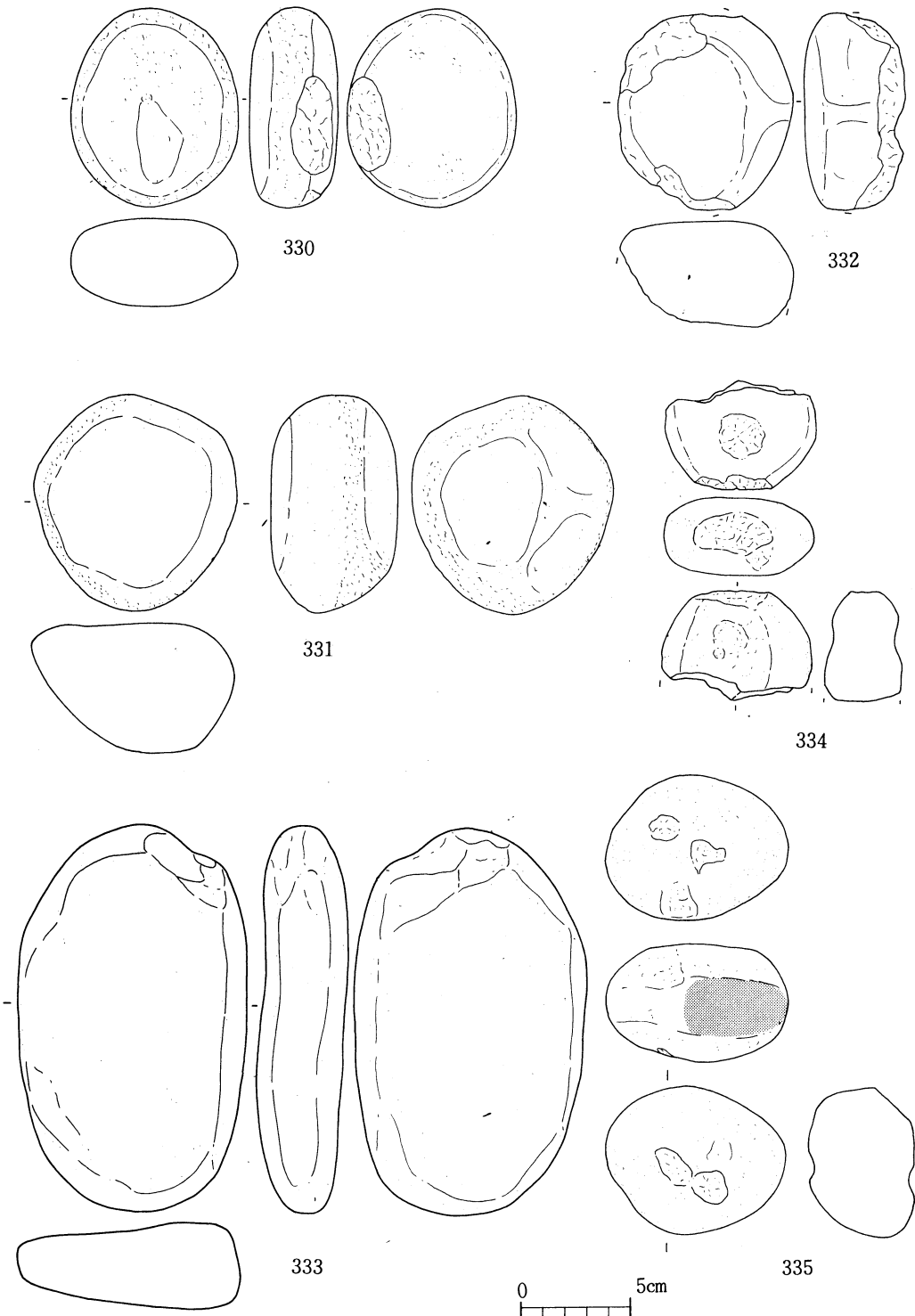
第51図 石器実測図(5)



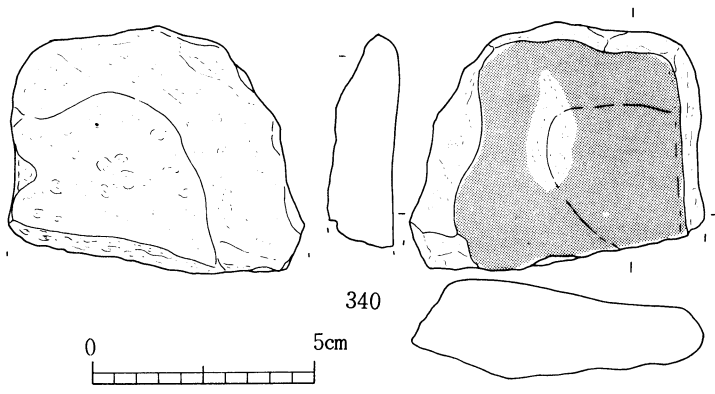
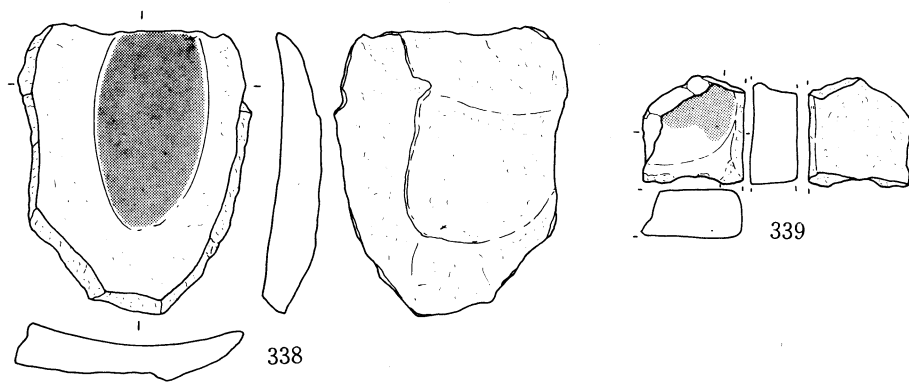
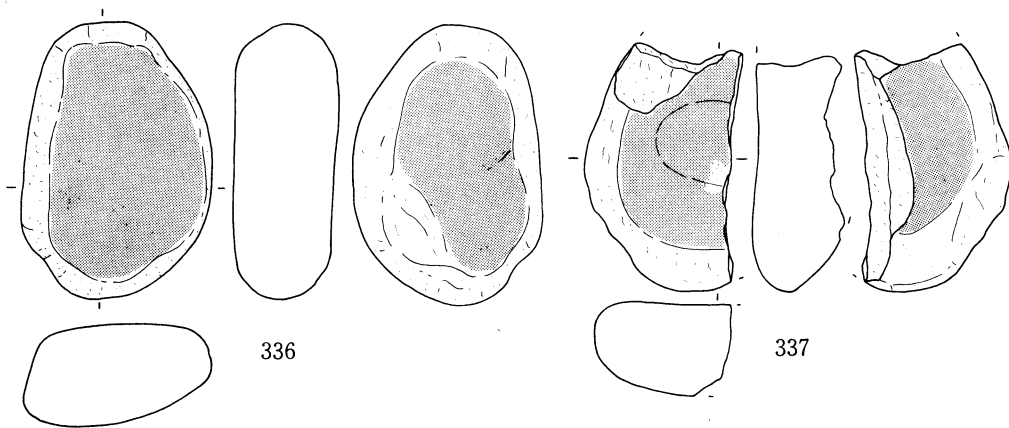
第52図 石器実測図(6)



第53图 石器实测图(7)



第54图 石器实测图(8)

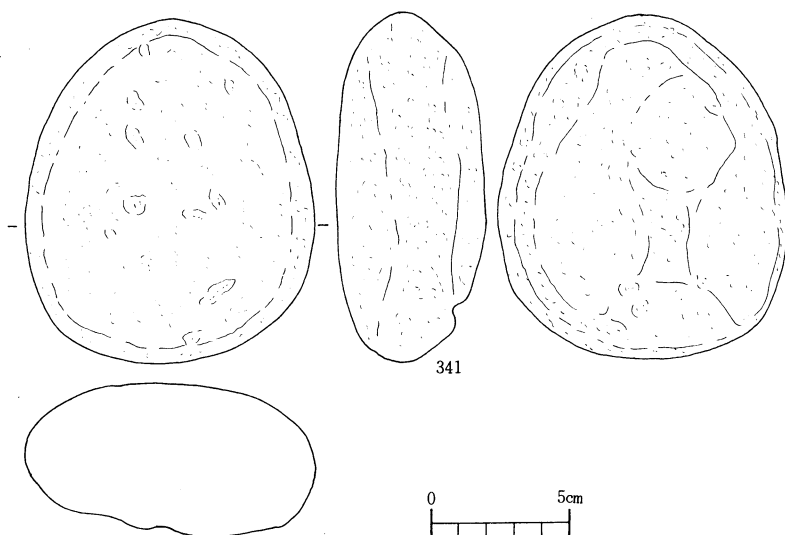


第55图 石器实测图(9)

る。

(I) 軽石製品 (第56図-341)

確かな加工の痕跡は見当たらないが、軽石製品の可能性をもつものとして一応取り上げたい。
いびつな楕円形状を呈し、磨石・敲石類に似る。



第56図 石器実測図 (10)

(M) 棒状敲石 (第57図～第61図-342～381)

棒状の形態の敲石を一括して棒状敲石とした。全体で40点確認されたが、他の敲石の出土数と比較して著しくその数が多い。円形もしくは球形の敲石と比べて棒状敲石は、握り易さや着柄性の容易さ、さらには二次的な敲打器 (例えばパンチ) としての利用が考えられる。このため、石器製作から植物加工等も含め、幅広い範囲の使用方が推測されるものである。なお、石材は354は砂岩であるが、他はすべてホルンフェルスである。

形態の分類は、使用痕の形状を中心に使用部位等でおこなった。

I類= 敲打による「つぶれ」の使用痕を残すもの

a: 長軸の一端に使用痕を有するもの

b: 長軸の両端に使用痕を有するもの

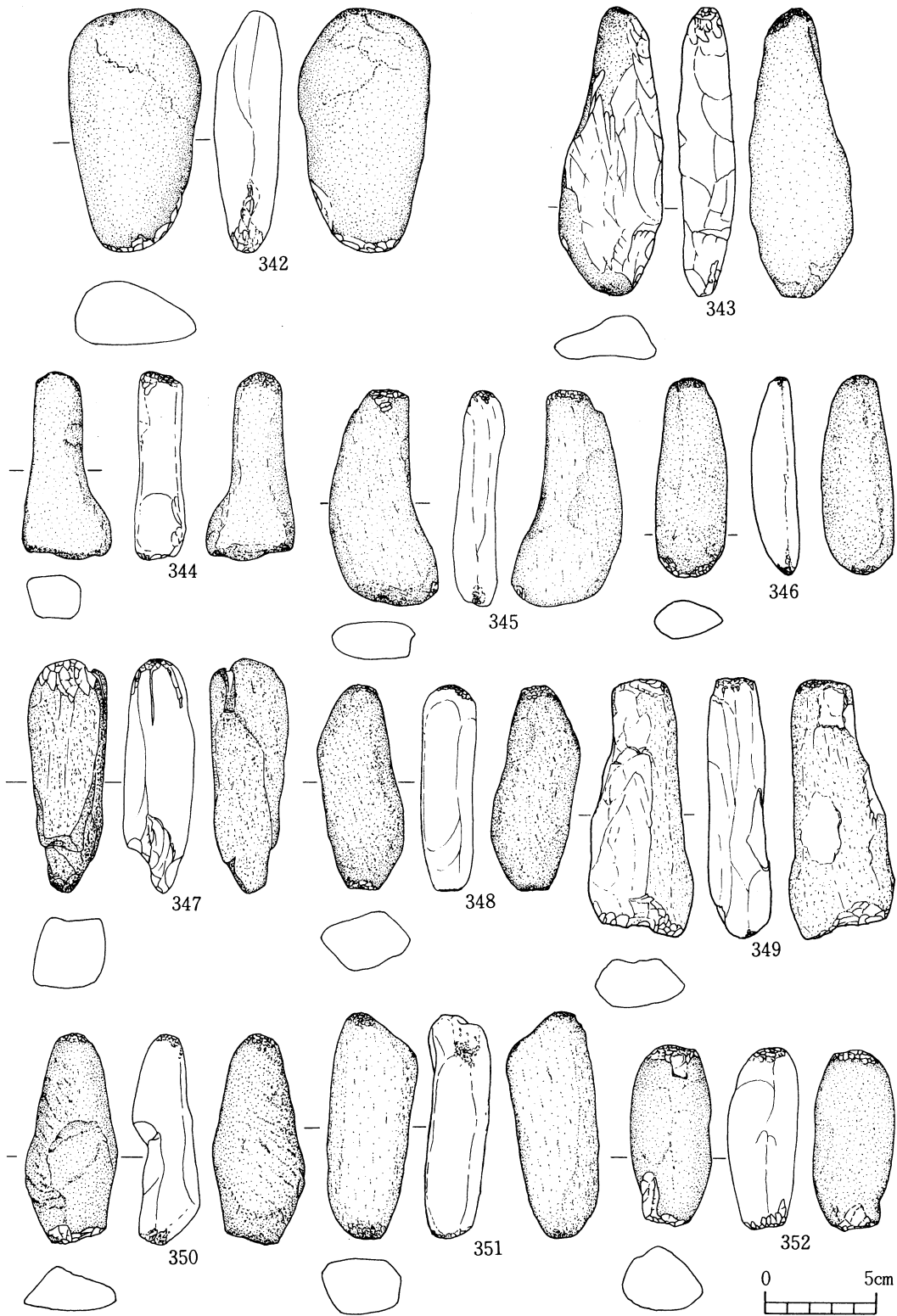
II類= 剝離状の「われ」の使用痕を残すもの

a: 長軸の一端に使用痕を有するもの

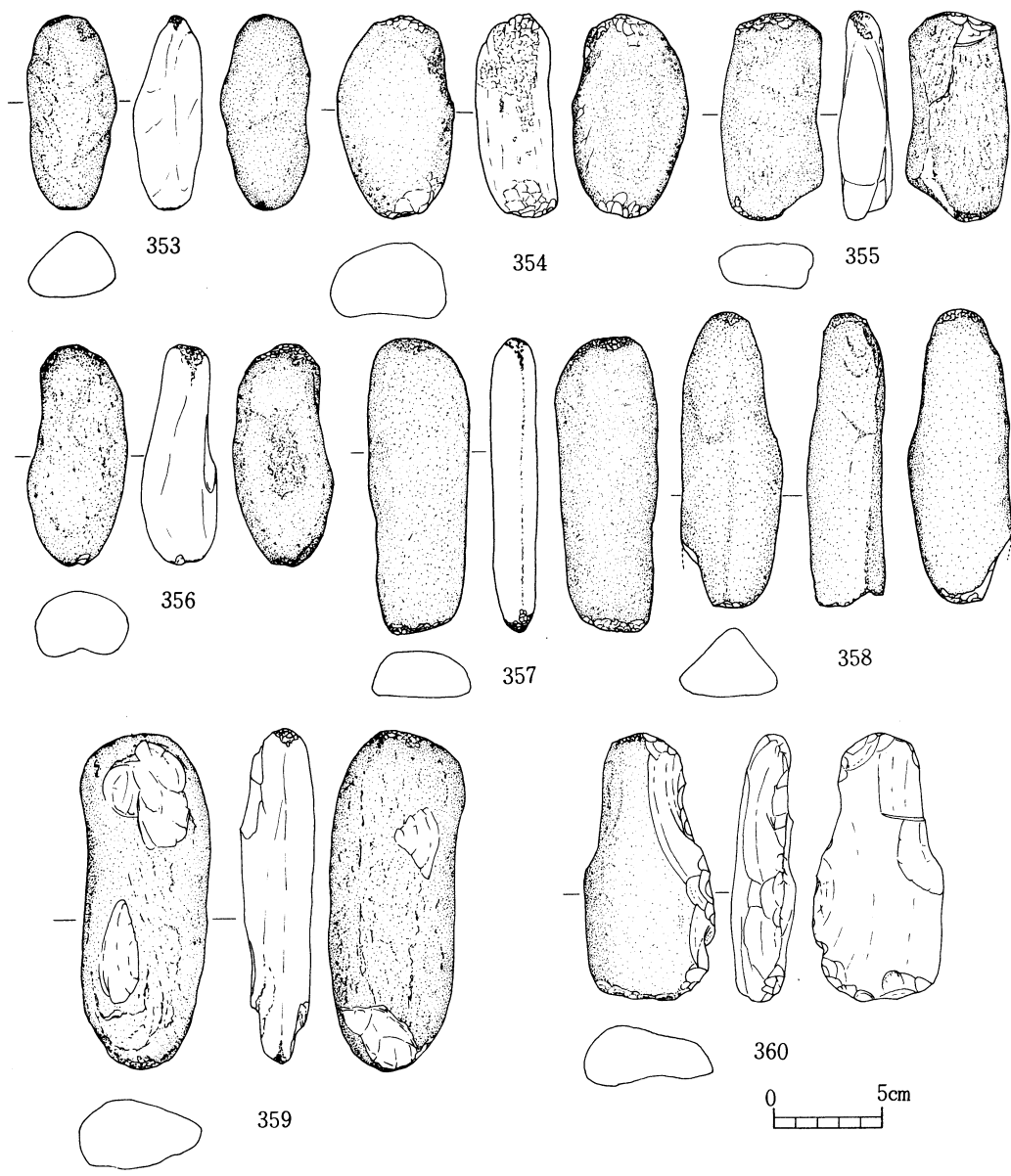
b: 長軸の両端に使用痕を有するもの

III類= 「つぶれ」「われ」の使用痕を一端にそれぞれ残すもの

IV類= その他



第57图 石器实测图 (11)



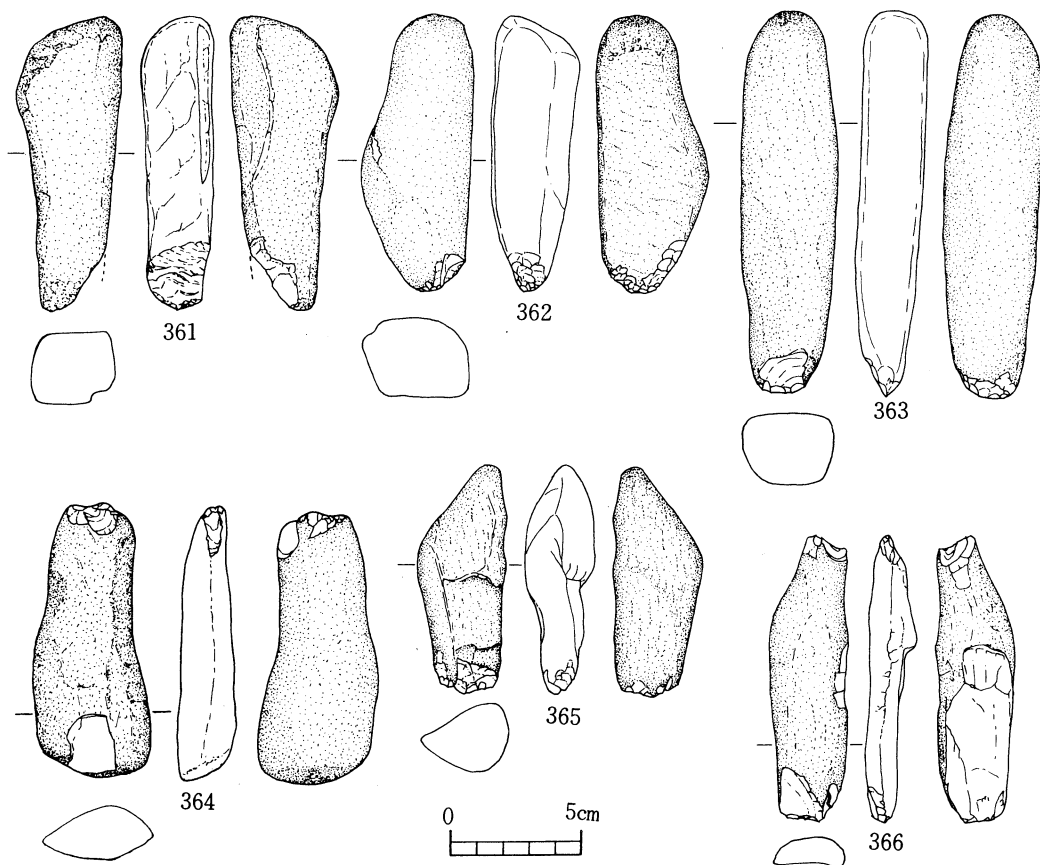
第58图 石器实测图 (12)

I a類 (第57図-342~345)

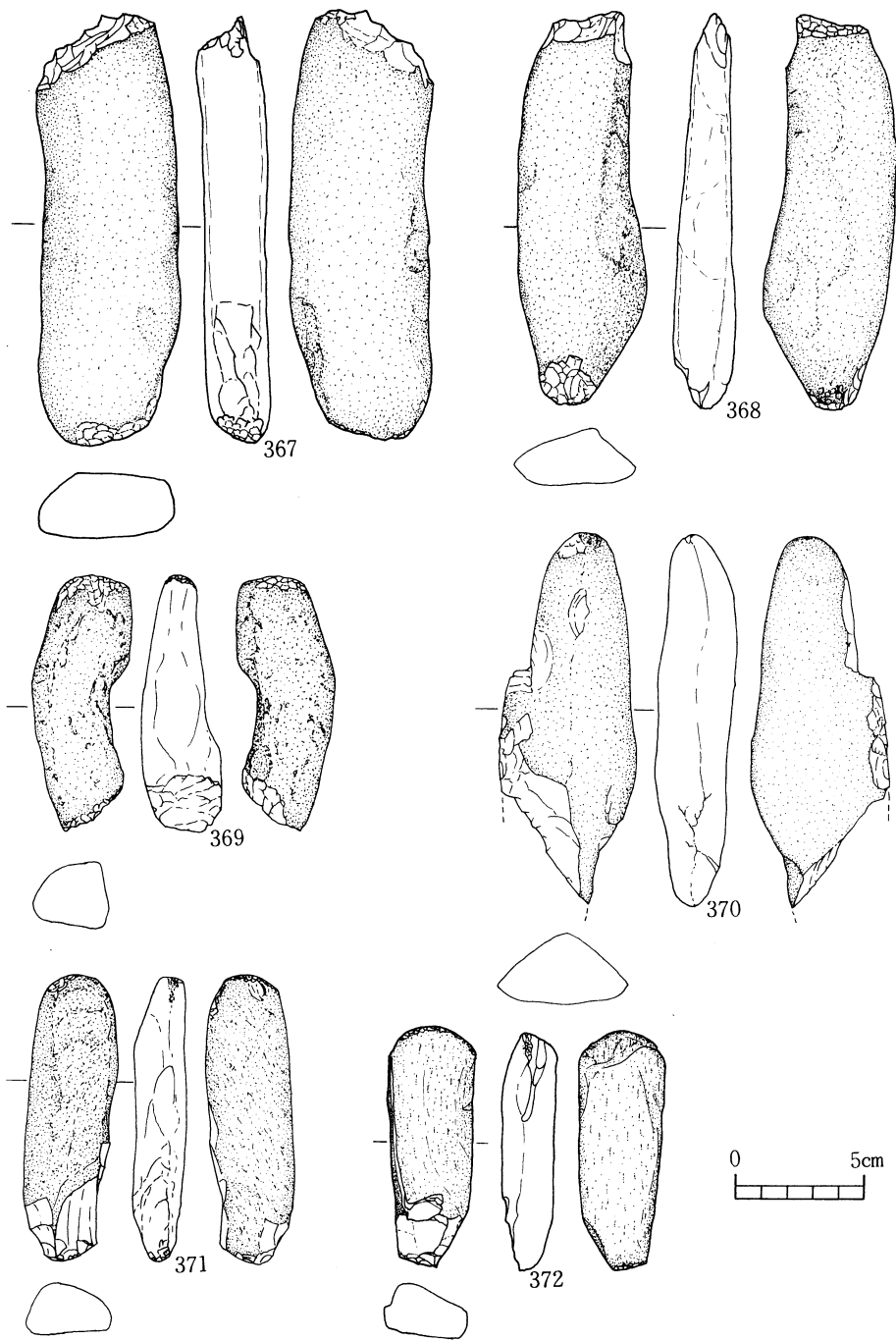
比較的扁平な自然礫を利用しており、長軸の尖った方に使用痕がみられる。342、344は、最も特徴的な激しい使用痕が認められる。343は、両端が尖る傾向にあり、表面に剝離がみられるが直接敲打によるものとは言い難い。

I b類 (第57図・第58図-346~360)

全体の中で15点で37.5%を占め、最もその数が多い。348・352~354・356は、両端部にそれぞれ同等の敲打痕を有するものである。354は、ここで取り上げた棒状敲石の中では最も円形に形をなし、側面の一部にも敲打痕を認め、唯一砂岩製である。352は一部剝離状の「われ」もみられるが、敲打痕が中心であり、度重なる敲打の結果、石材の亀裂によるものもしくは過度の衝撃を伴う敲打のためと考えられる。347・349・350・355~360は両端の使用の度合いが異なるものである。360は唯一剝片を利用した敲石である。側面に整形剝離を有するが長軸両端には明らかに敲打痕をもつものである。346・351は、わずかに使用痕を残すものである。



第59図 石器実測図 (13)



第60图 石器实测图 (14)



第61图 石器实测图 (15)

Ⅱ a類 (第59図-361~365)

棒状の自然礫の尖部に「われ」状の剝離を有するものである。363は尖部に交互剝離状の使用痕がみられる。364の「われ」は、石質劣化による石材の敲打によって生じた可能性もある。

Ⅱ b類 (第59図-366)

扁平な自然礫を用い、両端に剝離状の「われ」を有する。連続的な弱い敲打によるものではなく、強い衝撃が窺われる。

Ⅲ類 (第60図-367~372)

一端に「われ」面を残し、一端に敲打痕を有するものである。367は大型の棒状敲石で、長さ17cm、重さ444gを測り最大である。使用痕も顕著であり、強い衝撃による痕跡と考えられる。368は一見Ⅱ b類のようであるが敲打による石材の劣化のための剝離が観察される。

Ⅳ a類 (第61図-373~376)

激しい衝撃等によって破損した同類の敲石の欠損品である。Ⅱ類・Ⅲ類に近い分類に属すると考えられるが、全体形が不明なためⅣ a類とする。

Ⅳ b類 (第61図-377~381)

ここに取り上げた4点には、明確な使用痕は認められないが、同類の棒状敲石の可能性もあると考えられるため対象とした。

第3節 V層の調査

(1) V層の概要

V層は、A～C、6～8区に集中して出土遺物がみられた。特に、B6区の西側では、口縁部と底部を欠損してはいるが、完形に近い状態の胴部（387）が逆さで置かれたと考えられる状態で検出された。出土遺物は、VI層（アカホヤ火山灰の二次堆積層で縄文時代前～後期該当の層）の上面に位置するV層（茶褐色土層）から出土している。出土遺物は量的には少ないが、薄い包含層は形成されており、近辺にV層該当の遺跡の中心が存在する可能性が強い。なお、V層は、縄文時代晩期に該当する。

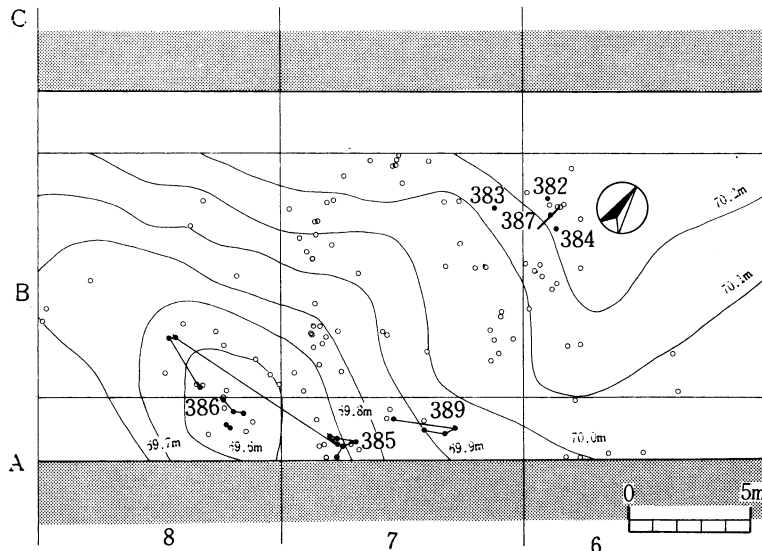
(2) 出土遺物

遺物は総数117点の出土がみられ、土器と石器に分かれる。

1. 土器（第64図-382～389）

382～386は、口縁部片である。口縁部片は、深鉢と浅鉢の器形に分かれる。382・383は深鉢の口縁部片である。頸部で外反し、屈曲して口縁部をつくる。口唇部は薄くなり、丸くおさめる。器内外面は、丁寧なヘラ磨きの整形が施される。382は、口径19cmを測る。

384～386は、浅鉢の口縁部である。胴部は屈曲して稜をつくり、内湾して直上から大きく外反して口縁部にいたる。口縁部は若干肥厚してその部分に凹線文を巡らすタイプである。いずれも破片の復元口径であるが、384は口径40cm、385と386は口径45cmを測る大型のものである。器内外面は、丁寧なヘラ磨き整形が施される。387は、胴部から頸部付近で、原位置の状態で出土したものである。口縁部の方を下にした逆さの状態出土しているが、口縁端部と底



第62図 V層出土遺物分布図

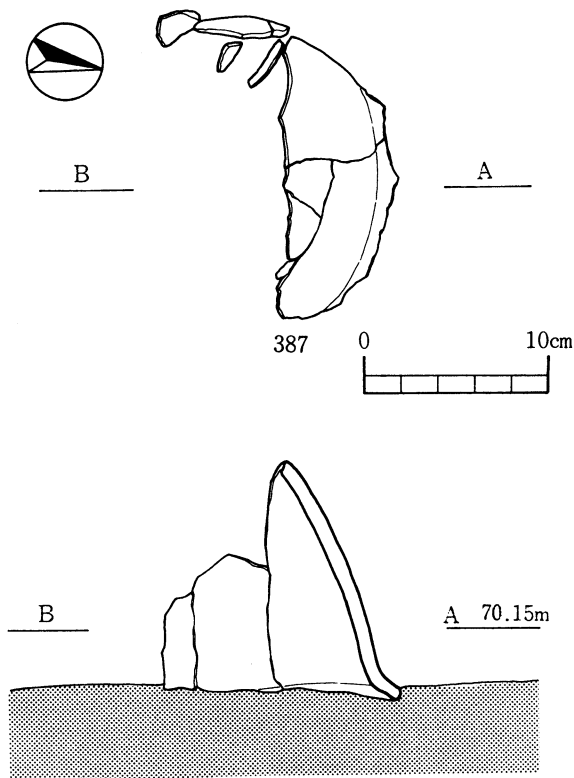
部は欠損している。胴部は胴張りで、頸部は縮まり屈曲する。胴部最大径は17cm、頸部の屈曲部は15.5cmを測る比較的小型のものである。

388と389は、胴部から底部破片である。388は底径は9cm、389は10cmを測る。388は、ほんの僅か上げ底状を呈する平底である。底部側端は垂直に仕上げ、その上から外反して胴部へ立ち上がる。389も同様であるが、より大きく外反する。いずれも、丁寧なヘラ磨き整形が施される。

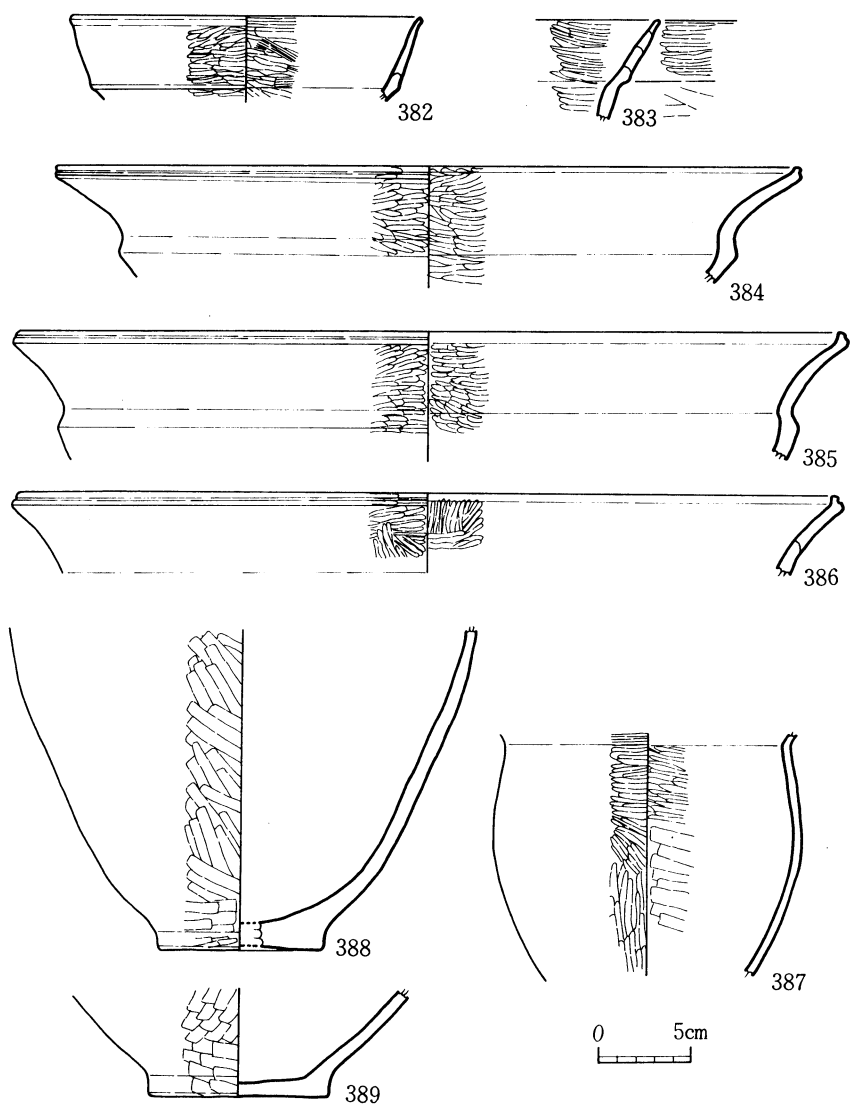
2. 石器 (第65図-390~401)

石器は、12点出土している。

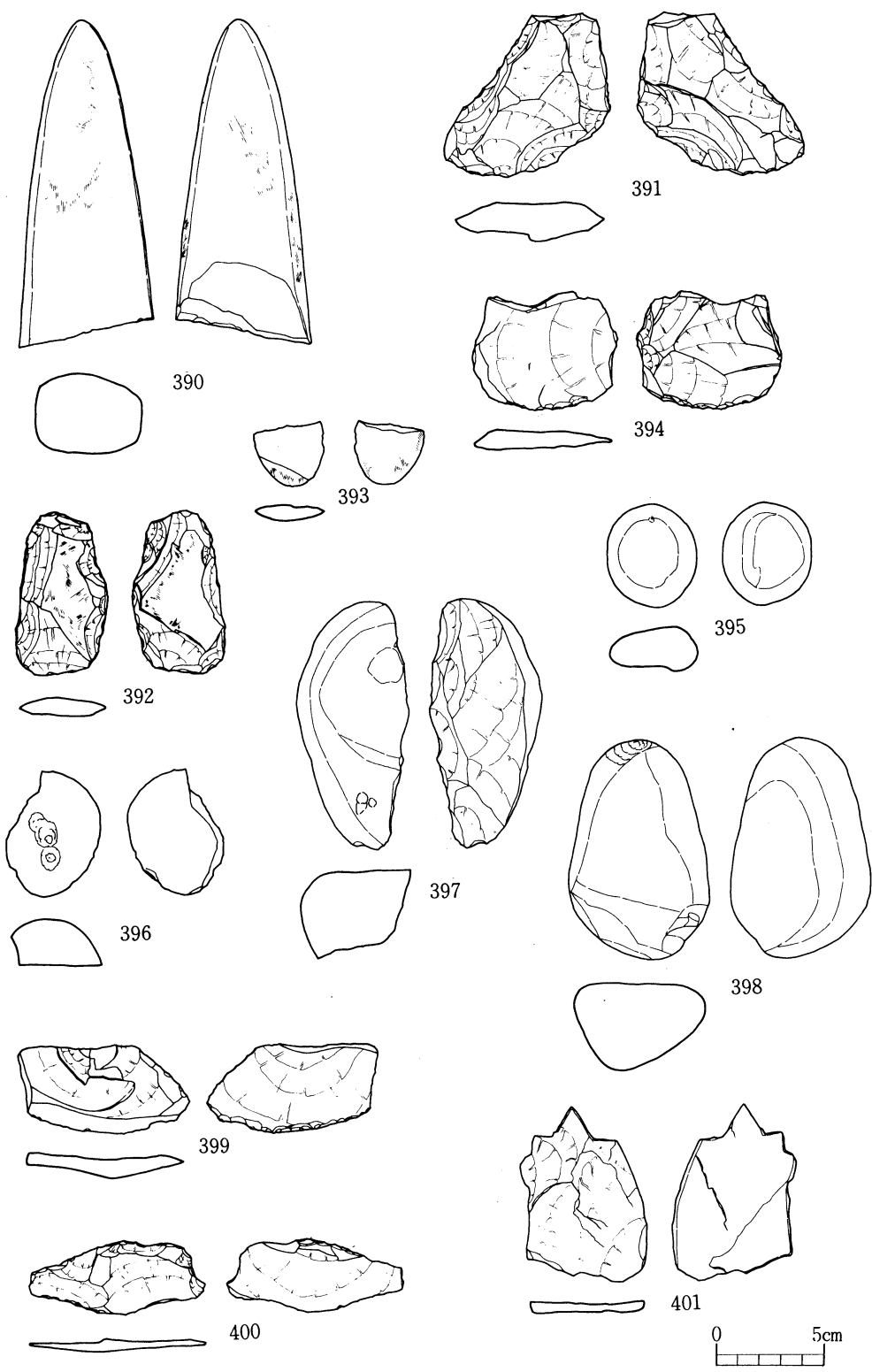
390は、刃部が折れた磨製石斧である。表面は丁寧に磨かれ、乳棒状の形態をもつ。391~394は打製石斧の一部と考えられるものである。丁寧な交互剥離がみられる。395~398は、磨石である。また、一部には敲打痕も確認され、敲石としても使用されている。395と396は小形の自然礫が使用され、397と398は扁平な比較的大形の自然礫が使用されている。391~401は、剝片である。



第63図 V層土器 (387) 出土状態



第64图 土器实测图



第65图 石器实测图

第1表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
1	I	69.66他	B-14 X	深鉢	口縁部	口径 17.8	長石・石英	ナデ	堅緻	茶褐色	器壁厚 0.9~1.2
2	〃	69.725他	〃	〃	〃	器壁厚 0.95~1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
3	〃	69.715他	〃	〃	〃	〃 1.0~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
4	〃	69.73他	〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
5	〃	69.775	〃	〃	胴部	〃 0.9	〃	〃	〃	〃	
6	〃	69.77	〃	〃	底部 付近	〃 0.8~1.25	長石・石英	内-ナデ ケズリ	堅緻	茶褐色	
7	〃	69.74他	〃	〃	底部	底経 11.6	〃	〃	〃	〃	
8	〃	69.755	〃	〃	底部 付近	器壁厚 0.9~1.35	〃	〃	〃	〃	
9	II	69.74	B-13	〃	胴部	〃 1.15~1.3	〃	外-条痕 内-ナデ	〃	茶褐色	
10	〃	69.69	〃	〃	〃	〃 0.85~0.9	〃	〃	〃	〃	
11	III	69.46	A-13	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・石英 金雲母	内-ナデ	〃	暗茶褐色	
12	IV	69.33他	C-12	〃	復元	復元口径21.3復元高17.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~0.9
13	〃	69.505	B-10	〃	口縁部	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
14	〃	69.7	B-13	〃	〃	〃 0.3~0.8	〃	〃	〃	〃	
15	〃	表層	〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
16	〃	69.2	B-9	〃	〃	〃 1.0~1.1	長石・石英(多)	〃	〃	〃	
17	〃	69.42	A-9	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	褐色	
18	〃	69.76	B-12	〃	胴部	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	黄褐色	
19	〃	69.51他	B-10	〃	口縁部	口径 19.2	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~1.0
20	〃	69.58	B-9	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0	長石・石英	〃	〃	〃	
21	〃	69.52	C-11	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	〃	
22	〃	69.69	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
23	〃	69.475	C-12	〃	〃	〃 0.8~1.3	長石・石英	〃	良	〃	
24	〃	69.46他	〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	〃	〃	良好	〃	
25	〃	69.815	B-12	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	〃	〃	〃	
26	〃	69.725	〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	〃	
27	〃	69.76	〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	赤褐色	
28	〃	69.72	〃	〃	口縁部 付近	〃 0.8~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
29	〃	69.485	〃	〃	口縁部	〃 0.7~0.8	〃	〃	普通	〃	
30	〃	69.71他	B-11	〃	〃	口径 30.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7~1.0
31	〃	69.51	C-11	〃	胴部	器壁厚 0.9~1.1	〃	〃	〃	〃	
32	〃	69.14他	B-10	〃	口縁部	口径 33.4	〃	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.7~1.4
33	〃	69.49	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.4	〃	〃	〃	〃	
34	〃	69.525	C-10	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	良	〃	
35	〃	69.46他	A-10	〃	〃	口径 21.5	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6~0.8
36	〃	69.57	〃	〃	〃	〃 13.2	〃	〃	良好	〃	〃 0.4~0.9
37	〃	69.795	C-6	〃	〃	器壁厚 0.9~1.4	長石・石英(多)	〃	〃	黄褐色	
38	〃	69.73他	B-13	〃	〃	〃 0.6~1.3	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
39	〃	69.735	B-12	〃	〃	〃 0.8~1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
40	〃	69.515他	A-13	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	赤褐色	
41	〃	69.575他	B-12	〃	〃	口径 32.0	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.7~1.1
42	〃	69.54	C-12	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0	長石	〃	〃	黄褐色	

第2表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
43	Ⅳ	69.44	B-12 X	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8~1.2	長石・石英(多)	ナデ	良好	黄褐色	
44	〃	69.25 他	B-9 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	長石・石英	〃	良	褐色	
45	〃	69.73	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	良好	黄茶褐色	
46	〃	69.67	B-11 〃	〃	〃	口径 19.9	〃	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.8~1.3
47	〃	69.62	B-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.9~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
48	〃	69.14	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	普通	〃	
49	〃	69.71	B-11 〃	〃	〃	口径 11.5	〃	〃	良好	黄褐色	器壁厚 0.8~1.1
50	〃	69.625	C-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
51	〃	69.25	B-9 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	〃	
52	〃	69.425	C-10 〃	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	黄褐色	
53	〃	68.98	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	
54	〃	69.59 他	〃 〃	〃	〃	口径 19.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.6~1.3
55	〃	69.59	C-11 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2	〃	〃	〃	黄褐色	
56	〃	69.665 他	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	暗褐色	
57	〃	69.445	C-12 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	暗茶褐色	
58	〃	69.425	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	〃	
59	〃	69.61	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	〃	茶褐色	
60	〃	69.63	B-9 〃	〃	〃	〃 0.8~1.2	〃	〃	〃	〃	
61	〃	69.64	B-11 〃	〃	〃	〃 0.6~1.2	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	赤褐色	
62	〃	69.58 他	A-10 〃	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃 〃	〃	黄褐色	
63	〃	69.705	A-11 〃	〃	〃	〃 0.5~1.3	長石・石英 雲母	〃 〃	〃	褐色	
64	〃	69.45	B-12 〃	〃	〃	〃 0.5~1.2	〃	〃 〃	〃	暗褐色	
65	〃	69.74	A-9 〃	〃	〃	〃 0.8~1.3	長石・石英	〃	良好	黄褐色	
66	〃	69.68	B-12 〃	〃	〃	〃 0.8~1.3	〃	〃	〃	茶褐色	
67	〃	69.2 他	B-9 〃	〃	〃	口径 47.4	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.9
68	〃	69.865	B-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.1	〃	〃	〃	〃	
69	〃	69.74	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.8	〃	〃	〃	〃	
70	〃	69.425 他	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.7	長石・石英 雲母	〃	〃	灰褐色	
71	〃	69.29	〃 〃	〃	〃	〃 0.7~1.9	長石・石英	〃	普通	暗褐色	
72	〃	69.64	B-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	〃	〃	良好	黄褐色	
73	〃	69.775	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.4	〃	〃	〃	〃	
74	〃	69.5	C-11 〃	〃	〃	〃 0.9~1.5	〃	〃	〃	茶褐色	
75	〃	69.325	C-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
76	〃	69.315	〃 〃	〃	〃	〃 0.8~1.4	〃	〃	〃	〃	
77	〃	69.57	A-10 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英	〃	〃	〃	
78	〃	69.485	A-12 〃	〃	〃	〃 1.0~1.1	〃	〃	〃	〃	
79	〃	69.56 他	B-10 〃	〃	〃	〃 0.8~1.5	〃	〃	〃	〃	
80	〃	69.36	A-12 〃	〃	〃	口径 20.8	〃	〃	〃	〃	
81	〃	69.58	B-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.3	〃	〃	普通	黄褐色	
82	〃	69.515	A-9 〃	〃	〃	〃 1.4	〃	〃	良	〃	
83	〃	69.55 他	A-10 〃	〃	〃	口径 27.0	〃	〃	良好	黄~暗褐色	器壁厚 0.6~1.7
84	〃	69.735	A-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.4	〃	〃	〃	茶褐色	

第3表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
85	Ⅳ	69.115	B-9 X	深鉢	口縁部	器壁厚 0.8~1.8	長石・石英(多)	ナデ	良好	茶褐色	
86	〃	69.725	B-13 〃	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英	〃	良	〃	
87	〃	69.585	B-11 〃	〃	〃	〃 0.6~1.6	長石	〃	良好	褐色	
88	〃	69.685他	B-10 〃	〃	〃	口径 27.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	器壁厚 0.7~0.4
89	〃	69.755	B-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.3	〃	〃	〃	赤褐色	
90	〃	69.445	C-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
91	〃	69.5	〃 〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	〃	〃	良	〃	
92	〃	69.64	A-11 〃	〃	〃	口径 35.6	長石・石英	〃	良好	〃	器壁厚 0.8~1.3
93	〃	69.61	C-11 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~2.0	〃	丁寧な ナデ	〃	褐色	
94	〃	69.565	B-9 〃	〃	〃	〃 0.7~1.4	〃	ナデ	〃	黄褐色	
95	〃	69.42 他	B-10 〃	〃	〃	口径 27.1	〃	ナデ ナズリ	普通	茶褐色	器壁厚 0.8~2.0
96	〃	69.355	B-9 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.4	〃	ナデ	良	〃	
97	〃	69.455他	A-10 〃	〃	〃	口径 16.8	〃	〃	良好	〃	器壁厚 0.9~1.6
98	〃	69.745	B-12 〃	〃	〃	〃 31.0	〃	〃	良	〃	〃 0.8~1.8
99	〃	69.225	B-9 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.3	〃	〃	普通	〃	
100	〃	69.63 他	B-10 〃	〃	復元	口径 34.6	〃	〃	〃	〃	
101	〃	69.67	A-10 〃	〃	口縁部	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英 雲母	ナデ	良好	茶褐色	
102	〃	69.595	B-11 〃	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃	普通	黄褐色	
103	〃	69.82	B-12 〃	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	丁寧な ナデ	良好	灰褐色	
104	〃	69.785	〃 〃	〃	〃	〃 0.5~0.9	〃	研磨 (ナデ)	〃	黄褐色	
105	〃	69.95	B-11 〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	ナデ	〃	褐色	
106	〃	69.81	B-13 〃	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	ナデ	〃	黄褐色	
107	〃	69.425他	B-9 〃	〃	〃	口径 31.8	石英	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.8~1.0
108	〃	69.045	〃 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.8	長石・石英	不明	普通	〃	
109	〃	69.415	C-11 〃	〃	〃	口径 10.8	〃	ナデ	〃	暗褐色	器壁厚 0.5~1.0
110	〃	69.71 他	B-12 〃	〃	〃	〃 30.4	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7
111	〃	69.85 他	C-13 〃	〃	〃	〃 19.4	角閃石 石英	〃	〃	暗褐色	器壁厚 0.8~1.0
112	〃	69.55	A-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2	長石・石英	〃	〃	茶褐色	
113	〃	69.645	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	〃	良好	〃	
114	〃	69.68	B-10 〃	〃	〃	口径 17.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.0
115	〃	69.74	〃 〃	〃	〃	〃 13.0	〃	ナデ	普通	黄褐色	〃 0.5~1.0
116	〃	69.685	B-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.5~1.0	〃	〃	〃	〃	
117	〃	69.66	A-12 〃	〃	〃	口径 13.8	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.0
118	〃	69.645	〃 〃	〃	〃	〃 13.8	〃	〃	〃	〃	〃 0.6~1.0
119	〃	69.59	A-13 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.7	〃	〃	良好	灰褐色	
120	〃	69.545	〃 〃	〃	〃	口径 11.2	〃	〃	普通	黄褐色	器壁厚 0.6~1.0
121	〃	69.595	B-10 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
122	〃	69.545	A-12 〃	〃	〃	口径 12.3	長石	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~0.9
123	〃	69.675	B-11 〃	〃	〃	〃 15.2	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.7~1.2
124	〃	69.525	C-12 〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.2	〃	〃	良好	赤褐色	
125	〃	69.64 他	B-10 〃	〃	小型 深鉢	口径 12.0	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.0
126	〃	69.65	A-9 〃	〃	深鉢	〃 14.6	長石	〃	普通	褐色	〃 0.5~1.0

第4表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
127	IV	69.49	A-10 X	深鉢	口縁部	口径 9.4	長石・石英	ナデ	普通	茶褐色	器壁厚 0.7~1.2
128	〃	69.78	〃	〃	〃	〃 12.7	〃	〃	良好	〃	〃 0.8~1.1
129	〃	69.62	B-13	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	赤褐色	〃 0.7~0.9
130	〃	69.78 他	B-10	〃	〃	〃 23.1	長石・石英(多)	〃	〃	茶褐色	〃 0.5~1.5
131	〃	69.66 他	A-10	〃	胴部	器壁厚 0.6	長石・石英	〃	〃	〃	
132	〃	69.55	B-11	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	
133	〃	69.7	A-10	〃	〃	〃 0.7	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
134	〃	69.375	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.4	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
135	〃	69.655	A-12	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
136	〃	69.43	B-11	〃	〃	〃 0.7~1.5	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
137	〃	69.865	〃	〃	〃	〃 0.7~1.4	〃	〃	〃	〃	
138	〃	69.75	B-10	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	〃	〃	
139	〃	69.715	B-11	〃	〃	〃 0.7~1.1	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
140	〃	69.305	C-10	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	
141	〃	69.955	B-12 あせ	〃	〃	〃 0.8~1.2	長石・石英	〃	〃	〃	
142	〃	69.33 他	C-10	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	
143	〃	69.575	A-10	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	〃	〃	
144	〃	69.63	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	〃	
145	〃	69.59	〃	〃	〃	〃 0.9~1.2	長石・石英	〃	〃	黄褐色	
146	〃	69.56	B-11	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
147	〃	69.805他	〃	〃	口縁部	〃 0.8~1.2	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
148	〃	69.69	〃	〃	胴部	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	茶褐色	
149	〃	69.485	B-12	〃	口縁部 付近	〃 0.7~0.8	〃	〃	良	黄褐色	
150	〃	69.52	A-9	〃	胴部	〃 0.9~1.2	〃	〃	良好	暗褐色	
151	〃	69.55	C-7	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	灰褐色	
152	〃	69.745他	B-10	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	〃	黄茶褐色	
153	〃	69.505他	〃	〃	〃	〃 0.95~1.25	〃	〃	〃	茶褐色	
154	〃	69.41	C-11	〃	〃	〃 0.7~1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	
155	〃	69.61	B-11	〃	〃	〃 0.6~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	
156	〃	69.17	B-9	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	〃	良	黄茶褐色	
157	〃	69.53	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	普通	黄褐色	
158	〃	69.245	B-10	〃	口縁部 付近	〃 0.7~0.9	〃	〃	良好	暗褐色	
159	〃	69.71	A-10	〃	胴部	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	〃	暗茶褐色	
160	〃	69.345	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	〃	〃	暗褐色	
161	〃	69.08 他	〃	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	RL) 節
162	〃	69.63 他	A-13	〃	〃	〃 0.6~0.9	〃	〃	〃	暗~黄褐色	RL 節L
163	〃	69.65	B-12	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	茶褐色	LR
164	〃	69.715	〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	RL
165	〃	69.81	〃	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	RL 節L
166	〃	69.42	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	普通	黒褐色	〃
167	〃	69.45	B-9	〃	〃	〃 0.6	〃	ナズリ	〃	茶褐色	〃
168	〃	69.505他	A-10	〃	〃	〃 0.4~0.9	長石(多) 石英・雲母	〃	〃	〃	〃

第5表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
169	Ⅳ	69.715	B-13 X	深鉢	胴部	器壁層 0.7	長石・雲母	ナデ	良好	黄褐色	RL 節L
170	〃	69.275	C-9	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英 雲母	〃	良	茶褐色	〃
171	〃	69.605	B-10	〃	〃	〃 0.6~1.0	長石・石英	〃	良好	〃	LR
172	〃	69.555	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.0	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR) 節R
173	〃	69.6	A-10	〃	〃	〃 0.6~1.0	〃	〃	〃	〃	R
174	〃	69.47	B-11	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石・石英	〃	〃	〃	LR 節R
175	〃	69.76 他	B-12	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	良	〃	LR
176	〃	69.32	C-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英 雲母	〃	良好	暗茶褐色	LR) 節R
177	〃	69.59 他	A-9	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	ケズリ	〃	黄茶褐色	RL 節L
178	〃	69.605他	A-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	ナデ ケズリ	〃	茶褐色	〃
179	〃	69.55	〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	ナデ	〃	赤黄褐色	LR 節R
180	〃	69.37	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	良	茶褐色	LR) 節L
181	〃	69.52	A-10	〃	〃	〃 0.8	〃	〃	良好	〃	LR 節R
182	〃	69.64 他	B-10	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英(多)	内面ケズリ	〃	赤褐色	〃
183	〃	69.64 他	A-10	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英	ナデ	〃	茶褐色	〃
184	〃	69.54 他	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
185	〃	69.6他	〃	〃	〃	〃 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	LR 節R
186	〃	69.725	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	LR 節R
187	〃	69.645	〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
188	〃	69.66 他	〃	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	〃	〃
189	〃	69.09	B-9	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
190	〃	69.615他	A-10	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	ナデ ケズリ	〃	〃	LR) 節R
191	〃	69.595他	B-11	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	ナデ	〃	〃	LR
192	〃	69.46	〃	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	〃	LR) 節R
193	〃	69.545他	B-13	〃	〃	〃 0.4~0.6	〃	〃	〃	暗褐色	LR) 片
194	〃	69.57	B-12	〃	〃	〃 0.7~0.8	長石・石英	〃	〃	茶褐色	RL 節L
195	〃	69.725	B-11	〃	〃	〃 0.8~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	赤褐色	LR 節R
196	〃	69.37	〃	〃	〃	〃 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	RL 節?
197	〃	69.69 他	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	〃	〃	LR
198	〃	69.946他	B-12	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
199	〃	69.77	B-13	〃	〃	〃 0.8~0.9	〃	〃	〃	黒褐色	〃
200	〃	69.71	B-9	〃	〃	〃 0.7	長石・石英	内面ケズリ	良好	茶褐色	LR) 節R
201	〃	69.715	A-12	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	ナデ	〃	〃	LR 節R
202	〃	69.46	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	LR) 節R
203	〃	70.2 9他	A-12	〃	〃	〃 0.5~0.6	〃	〃	〃	暗褐色	LR) 節なし
204	〃	69.47 他	B-9	〃	〃	〃 0.8	長石・石英	〃	良	茶褐色	RL 節L
205	〃	69.6	B-11	〃	〃	〃 0.7~0.9	〃	〃	良好	〃	LR
206	〃	69.62 他	A-10	〃	〃	〃 0.5~0.7	〃	〃	〃	〃	RL 節L
207	〃	69.93 他	B-12	〃	〃	〃 0.9~1.0	〃	〃	〃	〃	〃
208	〃	69.68	B-10	〃	〃	〃 0.4~0.6	長石	〃	〃	〃	〃
209	〃	69.095	B-9	〃	〃	〃 0.6~0.9	長石・石英	〃	普通	赤黄褐色	LR 節R
210	〃	69.735他	B-13	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	良好	黄褐色	RL 節L

第6表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
211	Ⅳ	69.6	B-12 X	深鉢	胴部	器壁厚 0.6~0.7	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	LR 節R
212	〃	69.551	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
213	〃	69.695他	B-11	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
214	〃	69.77	B-14	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
215	〃	69.8	B-12 あぜ	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
216	〃	69.845	B-12	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
217	〃	69.56	B-9	〃	〃	〃 0.5~0.7	〃	〃	〃	〃	〃
218	〃	69.285	C-10	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	〃	〃	〃	RL 節L
219	〃	69.175	B-13	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃	LR 〃R
220	〃	69.66	B-10	〃	〃	〃 0.6~0.8	〃	〃	〃	〃	〃
221	〃	69.515	B-12	〃	〃	〃 0.6~0.7	長石・石英	〃	〃	〃	〃
222	〃	69.35	C-10	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	良	〃	〃
223	〃	69.14	B-9	〃	〃	〃 0.7~0.8	〃	〃	良好	〃	〃
224	〃	69.555	A-10	〃	〃	〃 0.6	〃	〃	〃	黄褐色	〃
225	〃	69.705	A-9	〃	〃	〃 0.8~1.0	〃	〃	〃	〃	RL
226	〃	69.285	B-9	〃	〃	〃 0.7~1.1	〃	〃	〃	〃	〃
227	〃	69.36 他	B-9	〃	〃	〃 0.5~0.8	〃	ナズリ	〃	茶褐色	LR 節R
228	〃	69.375	〃 〃	〃	〃	〃 0.4~0.9	長石	条痕仕上げ	〃	〃	〃
229	〃	69.78	〃 〃	〃	〃	〃 0.6~0.8	長石・石英	ナデ	良好	赤褐色	節L
230	〃	69.535他	B-10	〃	底部	底径 11.0	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.6~1.4 LR 節R
231	〃	69.665	B-12	〃	〃	〃 9.0	〃	〃	〃	〃	RL 節L
232	〃	70.04 他	B-12 あぜ	〃	底部 付近	器壁厚 0.7~1.0	〃	〃	〃	〃	(RL 節R)
233	〃	69.675	B-12	〃	底部	〃 0.9	〃	〃	〃	黄褐色	LR 〃R
234	〃	69.665	〃 〃	〃	底部	〃 0.6~1.1	〃	〃	〃	茶褐色	〃
235	〃	69.805	B-13	〃	〃	底径 10.0	〃	〃	〃	黄茶褐色	RL 節L
236	〃	69.56	B-11	〃	〃	器壁厚 0.9	〃	〃	〃	茶褐色	LR
237	〃	69.605	B-12	〃	底部 付近	〃 0.6~1.2	〃	〃	〃	〃	(LR 節R?) RL 節R
238	〃	69.55	B-10	〃	底部	底径 16.3	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.8
239	〃	69.785	B-12	〃	〃	〃 11.0	〃	〃	〃	〃	LR 節L
240	〃	69.74	B-11	〃	〃	〃 14.0	〃	〃	〃	赤褐色	LR 節R
241	〃	69.455	A-13	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	黄褐色	RL 節R
242	〃	69.49	B-10	〃	〃	〃 12.6	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚0.7~0.8 RL 節L
243	〃	69.885	A-13	〃	〃	〃 11.0	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	RL 節L
244	〃	69.29	C-10	〃	〃	〃 7.5	長石・石英	〃	〃	〃	器壁厚 0.7~1.2
245	〃	69.865	B-12	〃	底部 付近	器壁厚 0.8~0.9	〃	〃	〃	黄褐色	〃
246	〃	69.68	B-12	〃	底部	底径 7.5	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.7~1.1
247	〃	69.505	A-10	〃	〃	〃 10.5	長石・石英	〃	〃	〃	〃 0.9~1.3
248	〃	69.79	B-12	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	〃
249	〃	69.035	B-3	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 1.1~1.8
250	〃	69.065	B-9	〃	〃	〃 9.5	〃	〃	〃	〃	〃
251	〃	69.985	B-13 あぜ	〃	〃	〃 13.5	〃	〃	〃	〃	〃
252	〃	69.655他	B-12	〃	〃	〃 11.5	〃	〃	〃	茶褐色	〃

第7表 遺跡出土遺物一覽表

番号	類別	標高	区・層	品種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
253	IV	69.685	B-12 X	深鉢	底部	底径 12	長石・石英	ナデ	良好	茶褐色	
254	〃	69.765	A-10	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	〃	
255	〃	69.775	B-12	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
256	〃	69.73 他	〃	〃	〃	〃 12	〃	〃	〃	〃	
257	〃	69.7	A-11	〃	〃	〃 12.5	〃	〃	〃	黄茶褐色	
258	〃	70.425	B-13	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	茶褐色	器壁厚 0.9~1.7
259	〃	69.835	B-13	〃	〃	〃 10.5	〃	〃	〃	〃	
260	〃	69.68	B-10	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	〃	
261	〃	69.61	A-12	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	〃	
262	〃	69.66 他	B-11	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~0.9
263	〃	69.555	C-12	〃	〃	〃 5	〃	〃	〃	赤茶褐色	
264	〃	69.975	B-13	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	赤褐色	器壁厚 0.7
265	〃	69.62	B-10	〃	〃	〃 6.5	〃	〃	〃	茶褐色	
266	〃	69.65	A-10	壺	口縁部	口径 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	〃	器壁厚 0.5~0.9
267	〃	69.345他	B-6	〃	〃	〃 9.3	長石・石英	〃	〃	〃	0.8~1.2
268	〃	69.63	B-10	〃	〃	〃 7.3	〃	〃	〃	黄褐色	0.7~0.9
269	〃	69.65 他	A-10	〃	〃	〃 4.2	長石・石英 雲母	〃	〃	茶褐色	0.7~1.0
270	〃	69.255	B-9	〃	口縁部	〃 8.2	〃	〃	〃	〃	0.7~1.0
271	〃	69.52 他	B-10	〃	〃	〃 7.0	長石・石英	〃	〃	黄褐色	0.7~1.0
272	〃	69.725他	B-11	〃	〃	〃 9.6	〃	〃	〃	〃	0.8~1.1
273	〃	69.635	B-12	〃	〃	〃 5.4	〃	〃	〃	茶褐色	0.7~1.0
274	〃	69.855	B-13	〃	〃	〃 6.1	〃	〃	〃	〃	0.6~1.0
275	〃	69.795	B-11	〃	〃	〃 4.8	長石・石英 雲母	〃	〃	黄褐色	0.6~0.9
276	〃	69.88	B-12	〃	〃	〃 5.7	長石・石英	〃	〃	〃	0.5~0.8
277	〃	69.63	A-12	〃	〃	〃 4.8	〃	〃	〃	〃	0.6~0.7
278	〃	69.88 他	B-11	〃	復元	口径 8.0 復元高 40.0	〃	ナデ	〃	〃	0.6~1.0
279	V	69.62 他	B-14	深鉢	〃	〃 25.6 〃 18.2	〃	〃	深	茶褐色	0.4~0.6
280	〃	69.75	A-13	〃	口縁部	口径 31.0	〃	〃	〃	〃	0.5~0.7
281	〃	69.9	B-13	〃	〃	〃 32.5	〃	〃	〃	〃	0.5~0.7
282	〃	69.785他	B-14	〃	胴部	器壁厚 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
283	〃	69.835他	B-14	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
284	〃	69.675他	B-14	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
285	〃	69.68	B-13	〃	〃	〃 0.4~0.5	〃	〃	〃	〃	
286	〃	69.73	B-14	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
287	〃	69.69	〃	〃	〃	〃 0.4	〃	〃	〃	〃	
288	〃	69.735他	B-13	〃	〃	〃 0.5	〃	〃	〃	〃	
289	〃	69.94	B-14	〃	底部	底径 10.2	〃	〃	〃	〃	
290	〃	69.67	C-11	〃	胴部	器壁厚 0.7~0.8	〃	〃	〃	〃	
291	VI	69.635他	A-10	〃	口縁部	口径 26.0	〃	〃	〃	黒褐色	器壁厚 0.6~0.7
382	晩期	70.365	B-6 VI	深鉢	〃	〃 19.0	〃	〃	〃	〃	0.4~0.8
383	〃	70.2	B-7	〃	〃	器壁厚 0.4~0.8	〃	〃	〃	〃	
384	〃	70.3	B-6	浅鉢	〃	口径 40	〃	〃	〃	〃	器壁厚 0.6~1.2

第8表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(往・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
385	晩期	69.735他	A-7 Ⅲ下	浅鉢	口縁部	口径 45.0	長石・石英	ヘラ磨き	良好	黒褐色	器壁厚 0.6~1.1
386	〃	69.545他	A-8 Ⅲ下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.7~0.8
387	〃	70.31 他	B-6 Ⅲ下	深鉢	器壁部 頸部付近	器壁厚 0.5	〃	〃	〃	〃	
388	〃	70.155他	A-19Ⅳ上	〃	底部	底径 9.0	〃	〃	〃	〃	
389	〃	70.03 他	A-7 Ⅲ下	〃	〃	〃 10.0	〃	〃	〃	〃	

第9表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重 き g	備考
292	石 鏃	B-12	X	69.73	黒 耀 石	2.0	1.7	1.28	
293	〃	〃	〃	69.79	〃	2.4	1.7	1.3	
294	〃	B-10	〃	69.575	ホルンフェルス 泥	2.3	1.5	0.74	
295	〃	B-11	〃	69.86	〃	2.3	1.3	0.81	
296	〃	A-12	〃	69.63	〃	2.2	1.6	1.14	
297	〃	B-12	〃	69.35	〃	2.5	1.4	1.29	
298	〃	A-10	〃	69.625	黒 耀 石	2.3	2.0	1.45	
299	〃	B-11	〃	69.55	〃	1.5	1.6	0.6	
300	〃	B-12	〃	69.97	〃	2.4	1.2	1.22	
301	〃	A-10	〃	69.53	ホルンフェルス 泥	3.1	1.8	2.32	
302	〃	B-14	〃	69.98	〃	3.9	2.3	4.9	
303	石 匙	B-13	〃	69.78	粗 粒 砂 岩	6.4	3.0	15.4	
304	未 詳 品	B-11	〃	70.035	ホルンフェルス 泥	3.7	2.0	2.32	未 詳 品
305	〃	B-12	〃	69.74	〃	1.8	2.8	2.5	
306	磨 製 石 斧	C-3	〃	69.315	ホルンフェルス	27.8	5.2	868	
307	〃	B-3	〃	68.92	〃	12.6	4.3	178	
308	局 部 磨 製 石 斧	B-10	〃	69.76	粘 板 岩	5.9	4.5	38.1	
309	〃	B-12	〃	69.595	ホルンフェルス	14.4	5.5	265	
310	〃	B-10	〃	69.67	粘 板 岩	8.2	4.3	125.0	
311	〃	B-11	〃	69.645	〃	7.8	3.9	82.7	
312	〃	C-12	〃	69.475	〃	5.0	4.1	48.6	
313	〃	C-11	〃	69.455	ホルンフェルス	13.5	6.1	172.0	
314	〃	B-8	〃	68.62	粘 板 岩	10.8	6.0	150.0	
315	〃	B-9	〃	69.26	〃	11.8	6.9	280.0	
316	〃	〃	〃	69.32	ホルンフェルス	5.8	8.0	160.0	
317	扁 平 打 製 石 斧	B-10	〃	69.635	粘 板 岩	7.6	6.0	115.7	
318	〃	B-12	〃	69.665	〃	9.5	4.4	96.5	
319	小 形 扁 平 石 斧	B-11	〃	69.745	頁 岩	4.4	2.9	3.27	
320	〃	A-12	〃	69.615	粘 板 岩	6.9	3.4	25.7	
321	石 片	A-11	〃	69.75	頁 岩	2.2	2.7	2.01	
322	〃	〃	〃	69.765	〃	1.8	2.5	1.75	
323	〃	B-11	〃	69.75	〃	3.2	2.3	3.16	
324	磨 石 + 敲 石	A-2	〃	68.73	安 山 岩	11.4	8.2	710	
325	〃	B-11	〃	69.62	〃	14.7	14.3	675	

第10表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長 cm	最大幅 cm	重さ g	備考
326	磨石+敲石	A-12	X	69.69	安山岩	11.6	10.0	743.0	
327	〃	B-10	〃	69.5	砂岩	20.4	19.0	780.0	
328	〃	A-10	〃	69.63	安山岩	11.9	9.0	627.0	
329	〃	〃	〃	69.585	〃	12.1	9.7	710.0	
330	〃	B-10	〃	69.55	〃	9.2	7.8	395.0	
331	〃	B-6	〃	69.445	巨晶花崗岩	10.0	9.5	718.0	
332	〃	B-11	〃	69.605	花崗岩	9.0	8.0	425.0	
333	〃	B-9	〃	68.545	ホルンフェルス	17.7	10.6	1,235.0	
334	凹石	B-6	〃	69.485	安山岩	7.0	5.0	158.0	
335	〃	C-12	〃	69.555	ホルンフェルス	8.4	6.8	354.0	
336	石皿	A-12	〃	69.625	花崗岩	24.8	17.0	6,050.0	
337	〃	A-10	〃	69.69	〃	22.3	13.9	3,500.0	
338	〃	〃	〃	69.57	〃	25.6	20.4	3,450.0	
339	〃	B-14	〃	69.71	〃	9.3	8.3	450.0	
340	〃	B-10	〃	69.29	〃	26.4	22.0	5,100.0	
341	軽石製品	A-5	〃	69.61	軽石	12.5	10.5	177.0	
342	棒状敲石	C-11	〃	69.33	ホルンフェルス	11.2	5.9	269.0	I a類
343	〃	B-10	〃	69.715	〃	13.1	4.6	170.0	〃
344	〃	B-12	〃	69.83	〃	9.4	4.0	99.7	〃
345	〃	B-11	〃	69.58	〃	9.7	4.5	131.0	〃
346	〃	B-9	〃	69.535	〃	10.0	3.2	79.1	I b
347	〃	C-10	〃	69.31	〃	10.6	3.5	152.0	〃
348	〃	C-11	〃	69.35	〃	9.3	3.5	142.0	〃
349	〃	C-13	〃	69.84	〃	11.7	4.6	217.0	〃
350	〃	B-12	〃	69.45	〃	9.6	4.0	121.0	〃
351	〃	B-10	〃	69.525	〃	10.2	3.7	180.0	〃
352	〃	〃	〃	69.41	〃	8.2	3.6	132.0	〃
353	〃	〃	〃	69.425	〃	9.0	4.0	155.0	〃
354	〃	A-10	〃	69.6	〃	9.4	5.4	264.0	〃
355	〃	C-12	〃	69.38	〃	9.7	4.4	163.0	〃
356	〃	A-11	〃	69.595	〃	10.3	4.4	195.0	〃
357	〃	A-10	〃	69.64	〃	13.6	4.6	258.0	〃
358	〃	B-5	〃	69.55	〃	13.8	4.8	278.0	〃
359	〃	B-9	〃	69.645	〃	15.7	5.7	477.0	〃
360	〃	C-12	〃	69.565	〃	12.5	6.0	233.0	〃
361	〃	B-10	〃	69.655	〃	11.3	4.1	164.0	II a類
362	〃	A-12	〃	69.64	〃	10.6	4.2	197.0	〃
363	〃	B-10	〃	69.5	〃	14.8	3.7	240.0	〃
364	〃	B-14	〃	69.755	〃	10.5	4.4	142.0	〃
365	〃	C-11	〃	69.45	〃	8.8	3.4	80.9	〃
366	〃	A-12	〃	69.795	〃	11.0	3.0	71.0	II b類
367	〃	A-1	〃	69.05	〃	16.8	5.25	444.0	III類

表11表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長	最大幅	重さ	備考
368	敲石	B-10	X	69.445	ホルンフェルス	15.4	5.0	234	Ⅲ類
369	〃	〃	〃	69.61	〃	9.9	3.5	146.0	〃
370	〃	A-12	〃	69.48	〃	14.5	5.4	238.0	〃
371	〃	B-11	〃	69.715	〃	11.2	3.4	111.8	〃
372	〃	B-12	〃	69.46	〃	9.3	3.4	86.4	〃
373	〃	B-9	〃	69.21	〃	10.9	5.1	151.0	Ⅳa類
374	〃	〃	〃	69.08	〃	7.7	2.8	47.2	〃
375	〃	〃	〃	69.54	〃	10.8	3.7	82.5	〃
376	〃	B-10	〃	69.715	〃	10.6	3.5	117.3	Ⅳb類
377	〃	A-8	〃	68.965	〃	10.4	4.3	76.1	〃
378	〃	B-12	〃	69.78	〃	11.0	3.7	147.0	〃
379	〃	B-10	〃	69.545	〃	8.8	3.8	110.3	〃
380	〃	C-12	〃	69.355	〃	9.5	6.0	188.0	〃
381	〃	A-12	〃	69.62	〃	10.2	3.4	124.0	〃
390	磨製石斧	B-21	〃	70.175	〃	14.4	6.15	460.0	〃
391	打製石斧	B-12	〃	69.84	頁岩	7.7	7.5	114.9	〃
392	〃	A-22	Ⅵ	71.32	粘板岩	7.5	4.3	42.76	〃
393	〃	B-22	〃	〃	ホルンフェルス	2.8	3.25	8.37	〃
394	〃	B-12	X	70.37	頁岩	5.2	6.5	44.64	〃
395	磨石	B-20	Ⅵ	70.39	ホルンフェルス	4.8	4.1	58.95	〃
396	〃	B-17	〃	70.595	〃	5.8	4.25	60.38	〃
397	〃	B-22	〃	70.185	〃	11.3	5.15	295.0	〃
398	〃	〃	〃	70.56	〃	10.1	6.57	350.0	〃
399	スクレイパー	B-11	X	70.37	粘板岩	3.8	7.6	31.54	〃
400	〃	B-7	〃	70.215	半花崗岩	8.15	3.4	13.91	〃
401	〃	B-18	Ⅵ	70.535	〃	7.85	5.3	38.0	〃

第 Ⅲ 章 弥生時代の調査

第 1 節 調査の概要

弥生時代の調査は、確認調査の結果をもとに上層の戦跡遺構や近世遺構の発掘調査終了後に行なったが、道路建設工事の進行と年度毎の発掘調査の進捗状況との関係から各区の調査行程は若干異なっている。

調査区域は、道路用地の24mのうち当面開通の南側片車線の12mが対象となっている。つまり、北側の12mは緑地帯として保護されるため、今回の調査区域からは除外している。しかし、C19区～C21区にかけては、遺構の一部が緑地帯に拡がって検出されたため、その遺構の性格を明らかにするために拡張して調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構の新知見や集落の構成を知る新資料を得た。

第 2 節 Ⅲ層の調査

1. 遺 構

(1) 遺構の概要

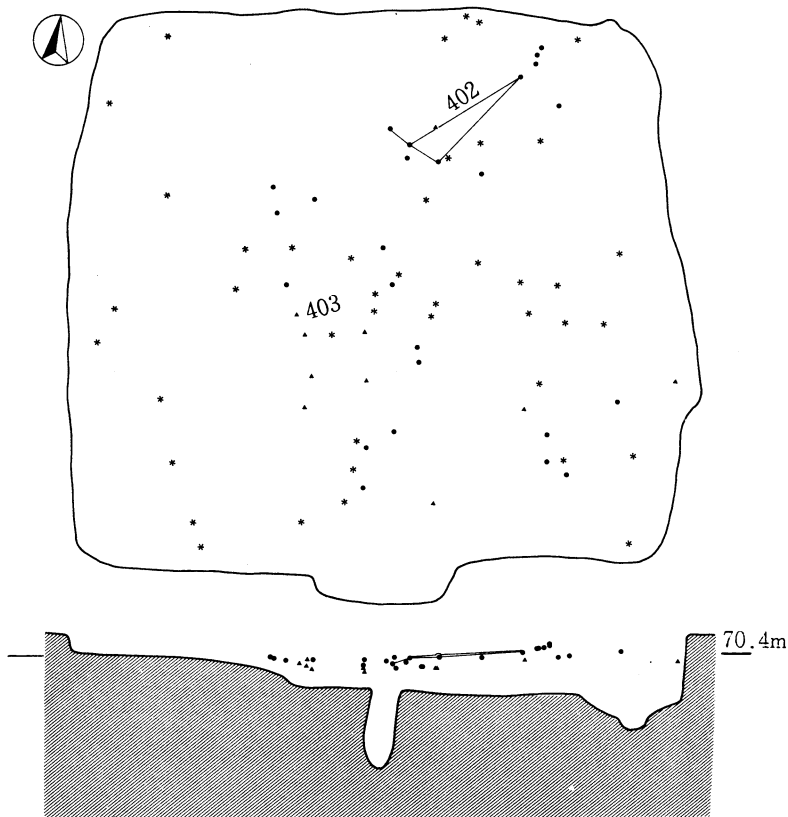
前畑遺跡の弥生時代は、Ⅲ層中に包含層が形成され、その下層に薄い黄褐色のⅣ層が確認される位置で遺構が検出された。遺物包含層及び遺構は、A B16区～A B25区の間にとんでいいる。遺構は、竪穴住居址3基、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基、溝状遺構3基（但し、建物に付随するものが2基）検出された。

住居址は、B7区(1号)、B C19区(2号)、B20区(3号)に所在し、いずれも方形の平面プランを呈するものである。1号及び2号住居址は、住居址内の床面に炭化木が多量に出土しており焼失家屋と考えられる。

掘立柱建物跡は、二通りのタイプがみられる。一つのタイプは1号～3号建物で、梁間が3間のものである。3号は、現水路建設時に破壊されているため全形は知り得ない。1号及び2号建物跡は、北側側辺の片側に溝が付く。いずれも2号及び3号住居址の西～北側近くのB C20区付近に位置し、住居址との関係が注目される。

二つ目のタイプは、梁間が1間のものである。4号建物は、1間×1間のタイプである。5号建物は用地外に延びるが、1間×2間の建物の可能性が高い。6号～8号建物は、1間×2間の同一タイプのものである。外側の4本柱の掘り方は大きくて深く、主柱に想定される。中柱は小さく浅い。いずれも住居址群から西南側に離れたA B21区～24区に検出された。

さらに、A20区の拡張区において、2号及び3号建物跡と切り合って円形周溝遺構が検出さ



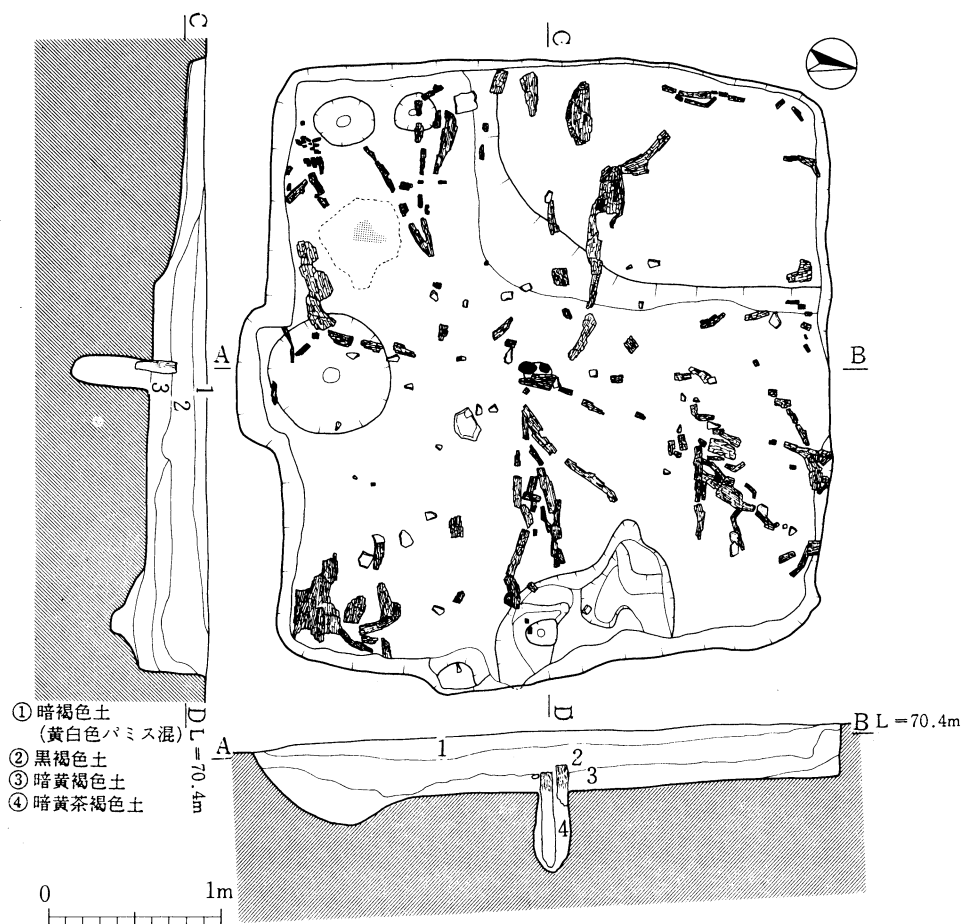
第67図 1号住居址遺物分布図

さらに、東側辺に接して、幅50cm、長さ100cmの不定形なピットが検出されたが、用途は不明である。

住居址内からは、総数35点の遺物が出土している。しかし、土器片はいずれも細片で形態の明らかなものは少ない。402は、唯一実測できた壺形土器の底部片である。また、住居址2号の中心に出土した、完形に復元される甕形土器（417）に接合する細片が二片出土している。この417の甕形土器は在地系とは著しく形態が異なり、移入土器であることが想定される。在地系土器との関係や住居址間での接合関係を含めて、極めて注目される資料である。403は、粒子の滑らかな石質で中央がやや凹んではいるが、平坦で滑らかな面をもつ砥石状の石器である。

2) 2号住居址 (第71~76図)

2号住居址は、B19区にわずかにかかる状態でC19区を中心に検出された。わずかに東西に長い方形プランを呈する住居址である。検出面での平面規模は、略東西4.6m×略南北3.75m



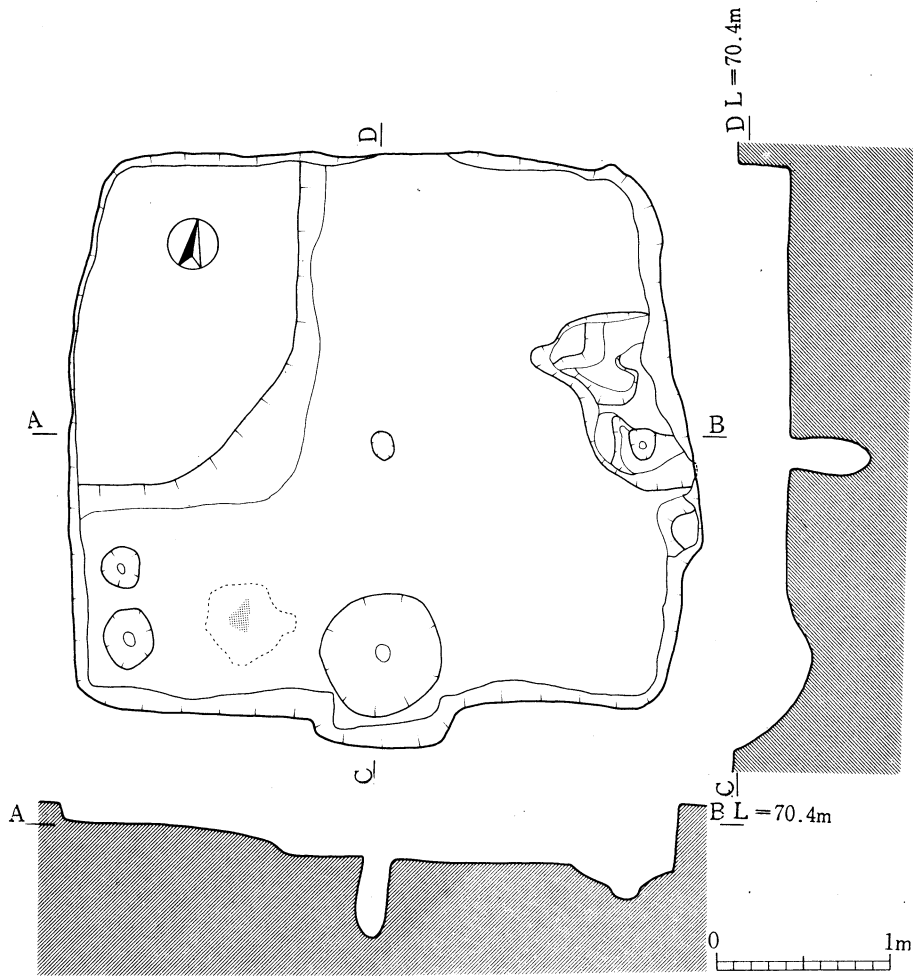
第68図 1号住居址遺物出土状況図

を測る。床面は、約50cmの深さを測る。北側辺の東寄りに、1m程度の張り出し部をもつ。

住居址のほぼ中央に、径15cm～20cmで深さ35cmの小規模な小さい二本の柱穴が検出された。その両脇、すなわち西側辺及び東側辺の北寄りに、ベッド状遺構を備えている。西側辺のベッド状遺構は幅1.30m×長さ1.60mを測り、東側辺のベッド状遺構は幅1.15m×長さ2.00mを測る。東側辺のベッド状遺構は床面より23cm高い壇をつくり、西側のものは11cmとやや低い。

床面のほぼ中央には炭化木が集中して検出された。主柱と考えられる二本の柱穴の中央の南寄りに、15cm～20cm程度の焼土が確認された。また南側辺寄りの中央部に径30cmの円形ピットが位置し、ピット外側の側辺寄りに長さ34cmを測る台石状の河原石（418）が出土した。

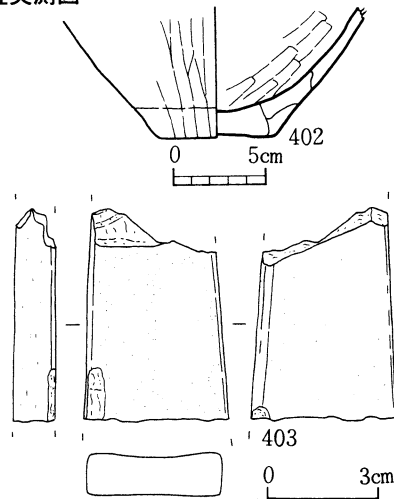
住居址内からは、総数242点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、口縁部は逆L字状に外反し、胴部にはシャープな二条の突帯文を巡らすタイプ（404）と、く字に外反して数条の突帯文を巡らすタイプ（405）とがある。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台をもつタイプで底部の中央はわずかに上がる。



第69図 1号住居址実測図

底部裾部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施される。411は壺形土器の頸部で、412は底部片である。414は突帯文を巡らさない甕形土器である。415は、鉢形土器のラッパ状の脚部であろう。416は円盤状の裾拡がりの脚部で、端部には三角突帯文を巡らす珍しいタイプの脚部である。417は、甕形土器の完形に復元されるものである。口縁部は大きく外反し、丸みをもっておさめる。胴部は膨らみをもち、底部は平底である。器外面は粗い刷毛目状の条痕仕上げで、胴部上半から頸部にかけては煤の付着が多い。

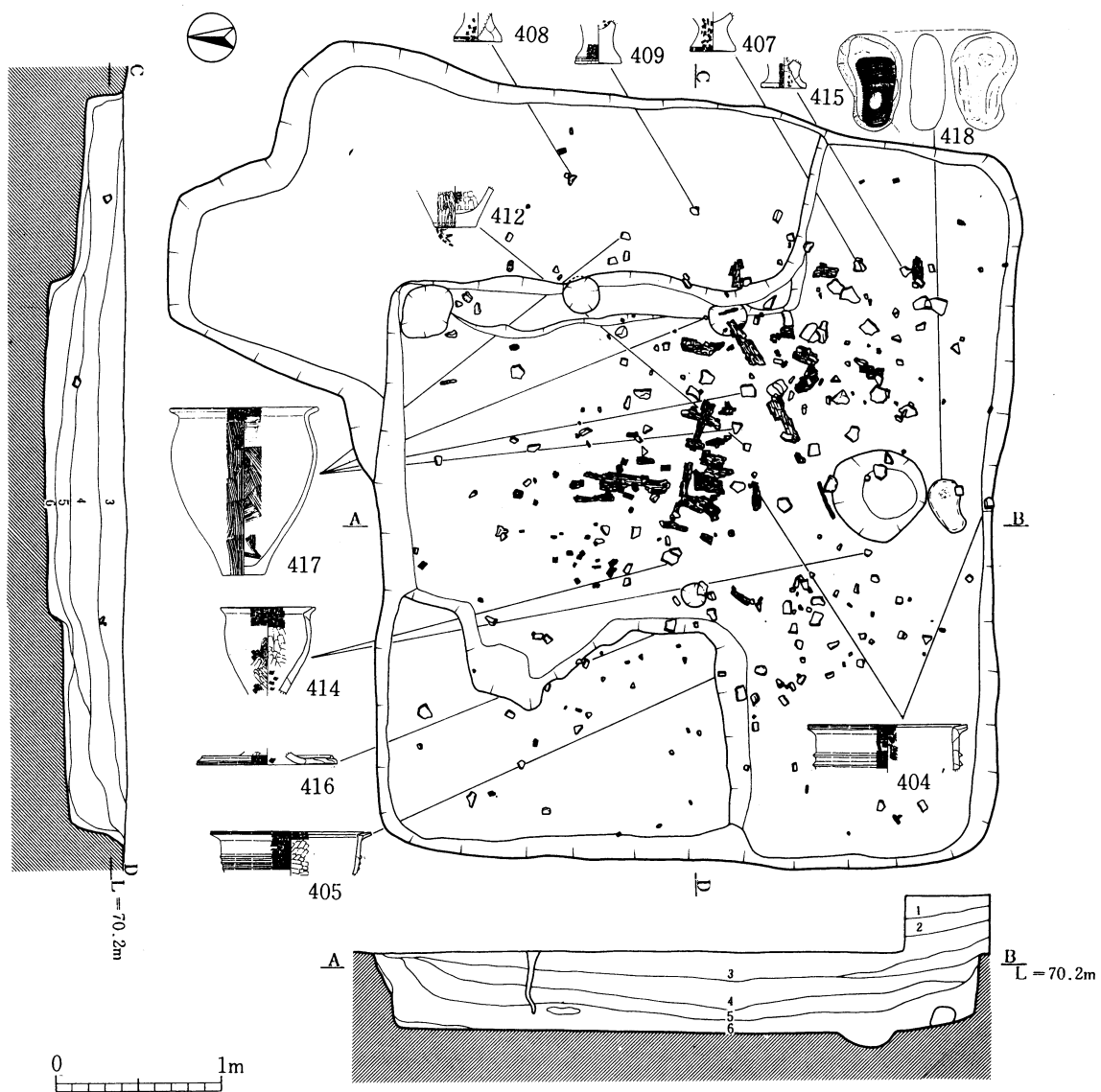
418は平坦面を持った大型の石器で、平坦面は滑



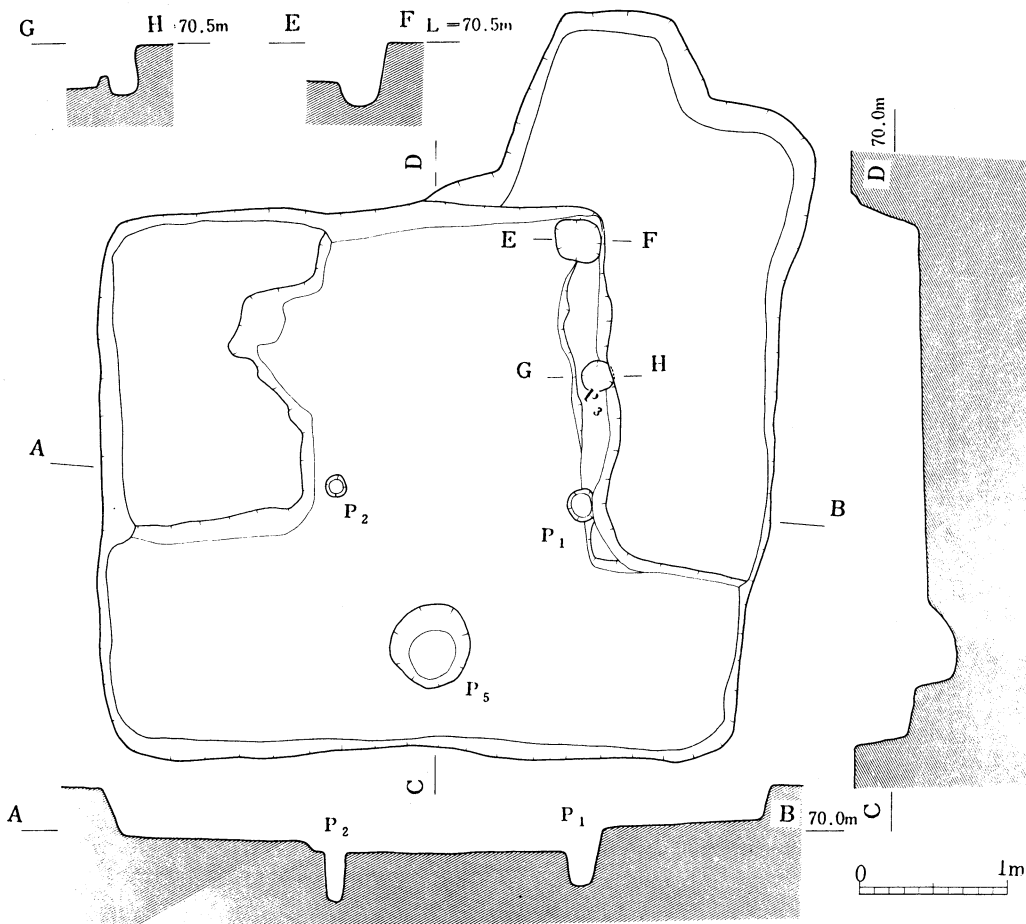
第70図 1号住居址出土遺物実測図



第71图 2号住居址遺物分布图



第72图 2号住居址遺物出土狀況図

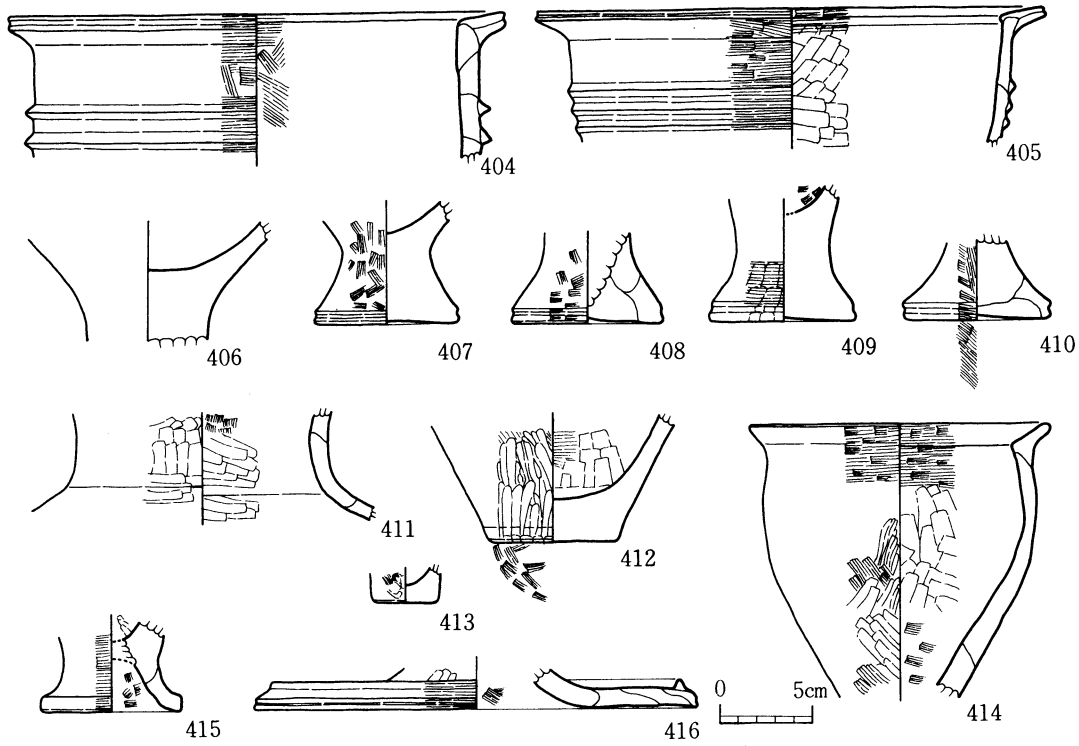


第73図 2号住居址実測図

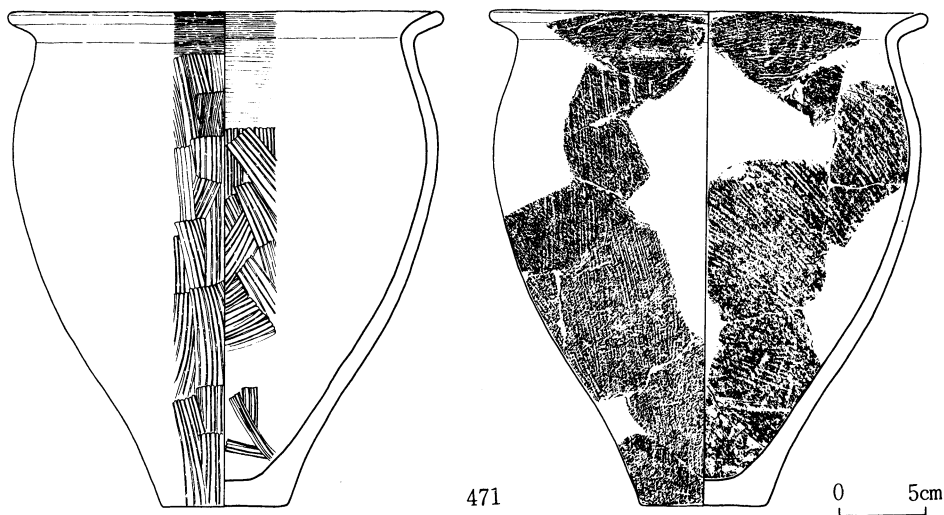
らか（スクリーン・トーン部分）となり、一部に敲打痕もみられる。石皿あるいは台石的な使用が考えられる台石である。

2) 3号住居址 (第77~79図)

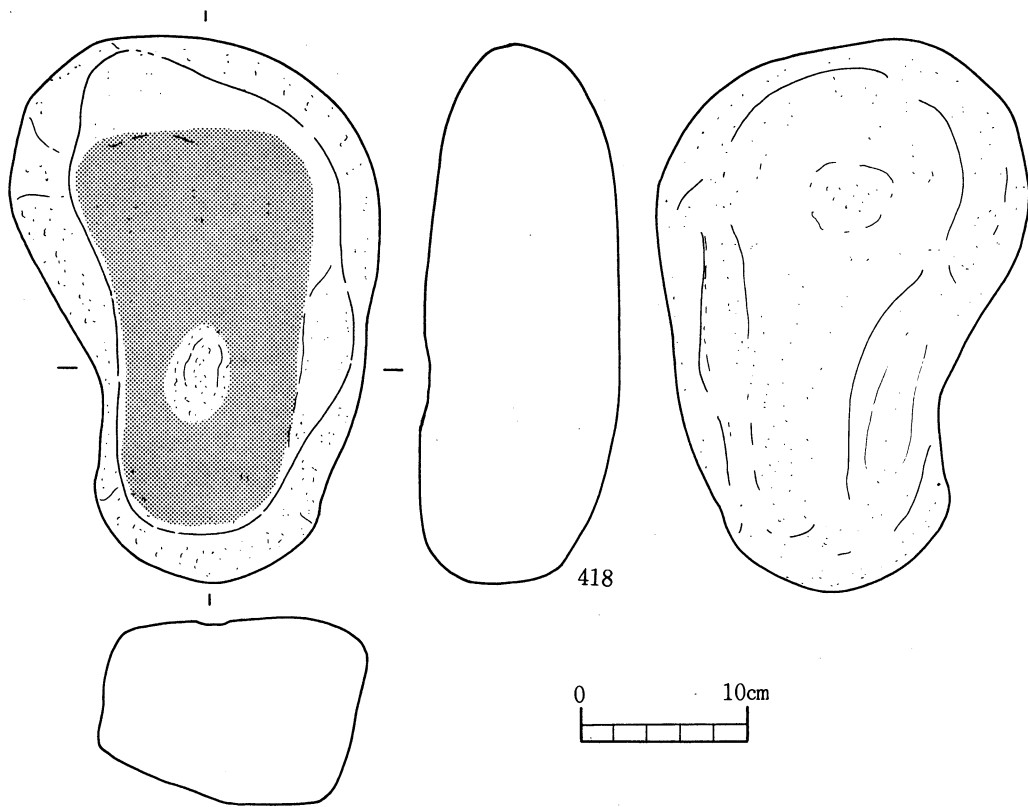
2号住居址は、B21区に張り出す状態でB20区を中心に検出された。南北に長い方形プランを呈する住居址である。検出面の平面規模は、略東西3.8m×略南北4.6mを測る。床面は、約25cmと浅く、上面が相当削平されたことが考えられる。住居址内のほぼ中央には、85cm×50cmの楕円形の焼土が確認された。その北側辺寄りに、50cm×70cm程度の楕円形で深さ50cmのピットが存在し、その他には北西隅と南東隅に浅いピットが存在するのみである。しかし、住居



第74图 2号住居址出土遗物实测图(1)



第75图 2号住居址出土遗物实测图(2)

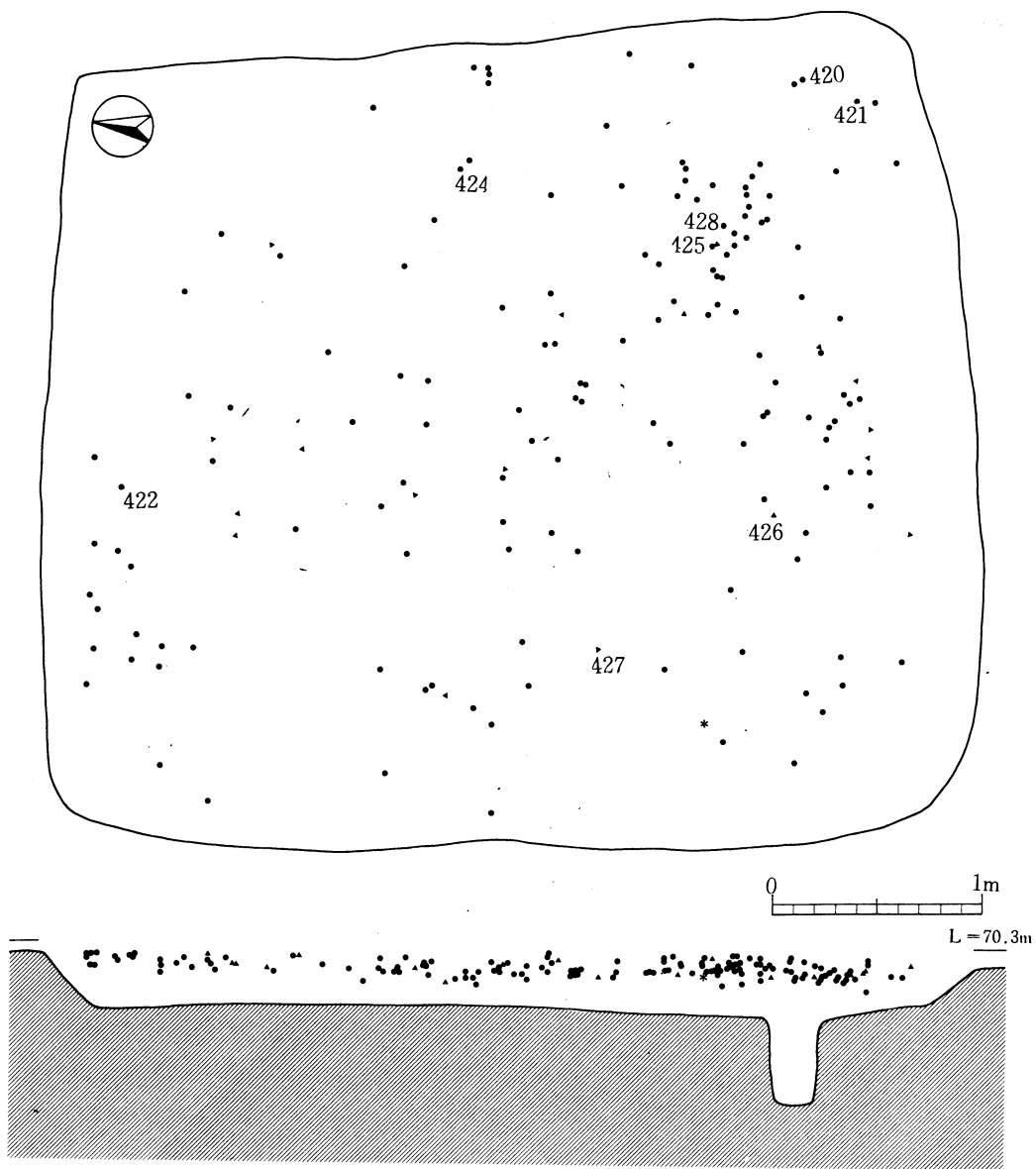


第76図 2号住居址出土遺物実測図(3)

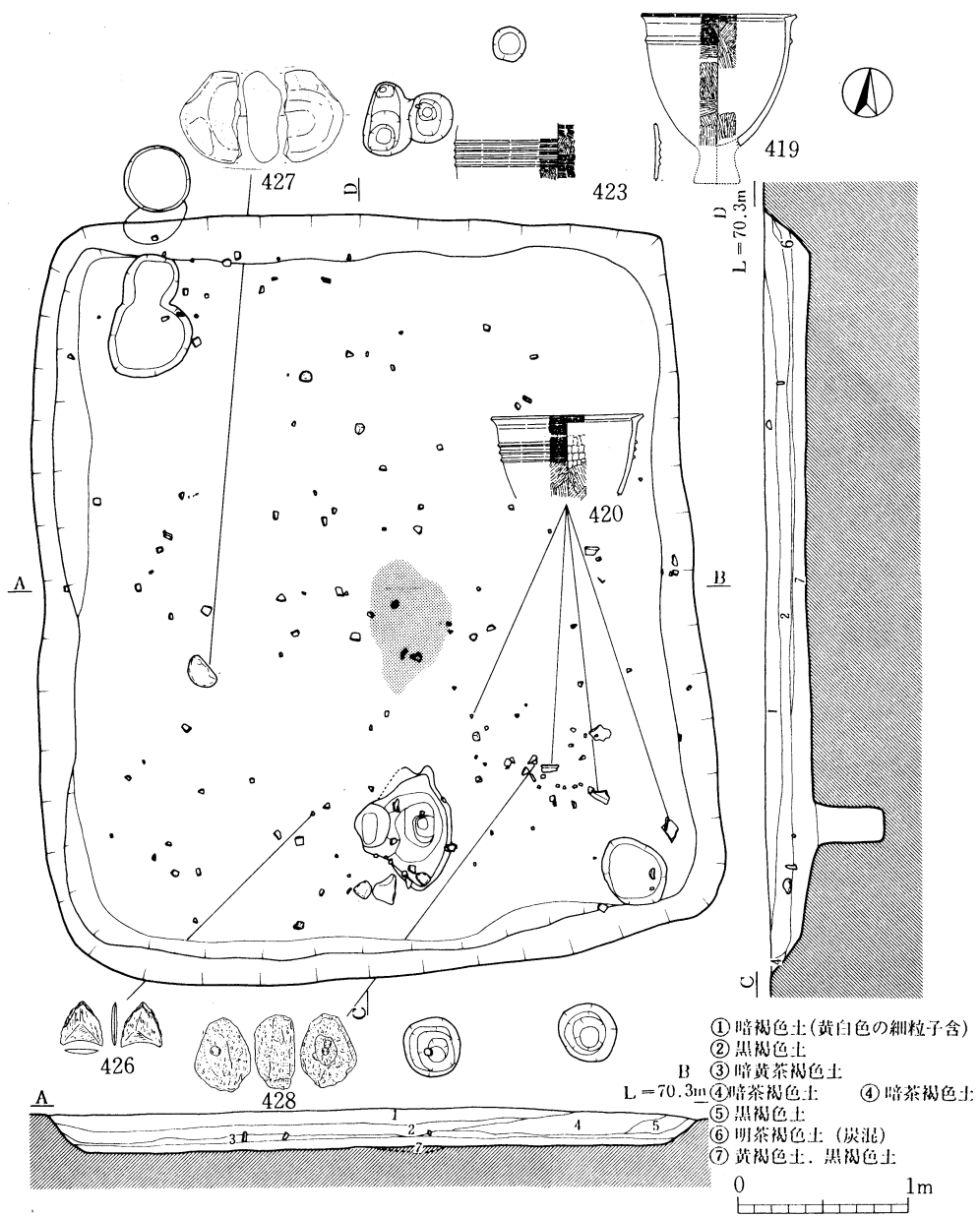
址の外側に住居址と関連すると考えられる柱穴が確認されている。P₁、P₂はいずれも住居址長辺の中央延長上に位置し、棟持ち柱的性格の柱穴と考えられる。

住居址内からは、総数151点の遺物が出土している。土器は、甕形・壺形土器などの破片がある。甕形土器は、く字に外反して一条から数条の突帯文を巡らすタイプであるが、口縁の外反部の内面が張り出すという特徴がみられる。また、422のような短い外反部をもつものもある。424は壺形土器の口縁部で、425は底部と考えられる。

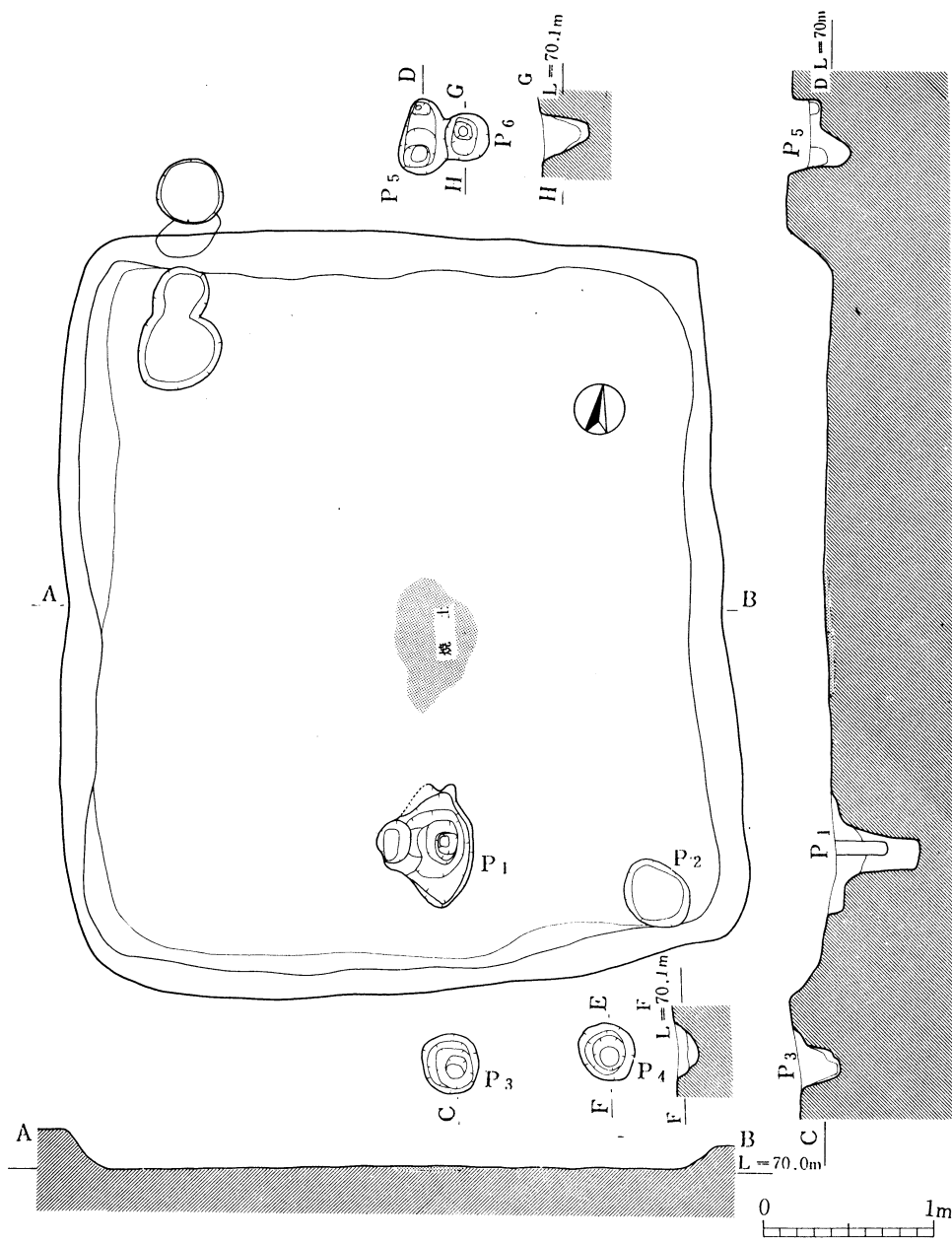
出土石器426は磨製石鏃である。入念に研磨されたえぐりの浅い三角形状を呈する。縁辺に剝落がみられる。427は中央のくぼんだ大型の石器で、表裏に敲打痕がみられる。石皿的な使用が考えられる台石である。428は軽石製品で深くくぼみをもつものである。くぼみは三ヶ所ある。



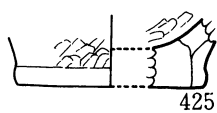
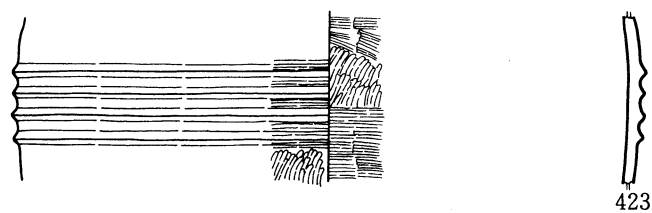
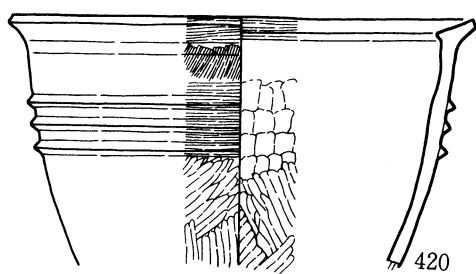
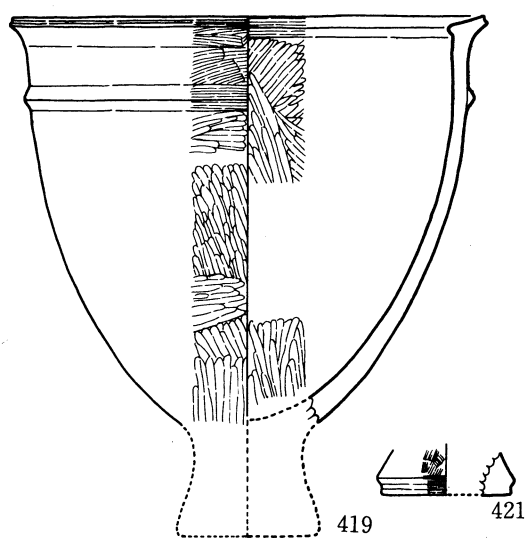
第77图 3号住居址遺物分布图



第78図 3号住居址遺物出土状況図

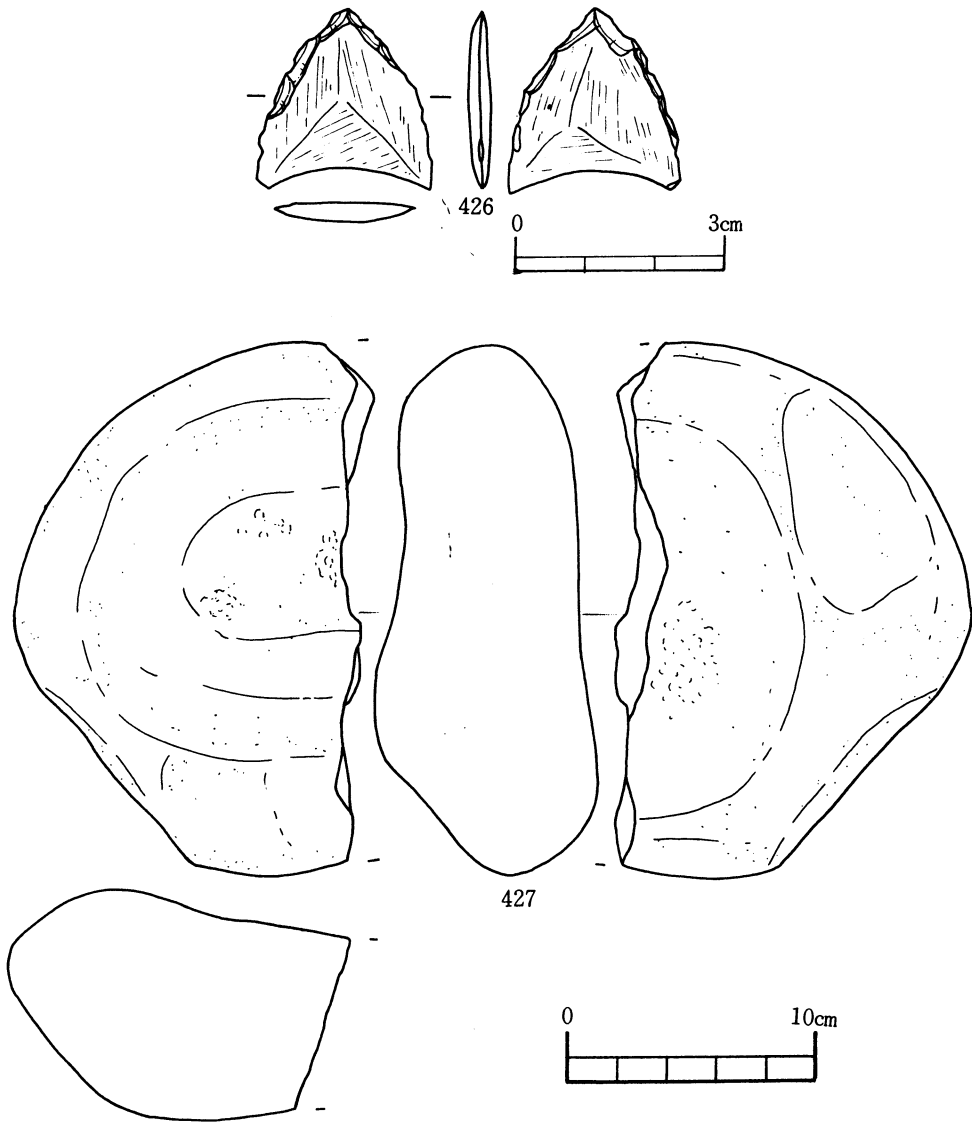


第79图 3号住居址实测图

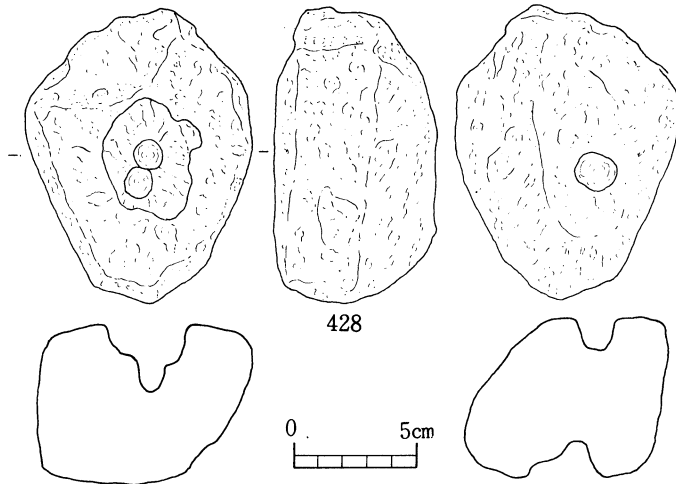


0 5cm

第80图 3号住居址出土遗物实测图(1)



第81图 3号住居址出土遺物実測図(2)



第82図 3号住居址出土遺物実測図(3)

(3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、幅12mという狭い調査区にもかかわらず総数8棟が発見された。8棟の内訳は、3間×4間のタイプが3棟、1間×1間が1棟、1間×2間が4棟である。さらに、3間×4間のタイプには、棟持ち柱を持つものと持たないものに分かれる。建物跡は、いずれも弥生時代の包含層のⅢ層下面で検出されたが、4号建物跡～8号建物跡付近はⅢ層包含層とともに若干の削平を受けていることが考えられる。

1) 1号掘立柱建物跡 (第83～85図)

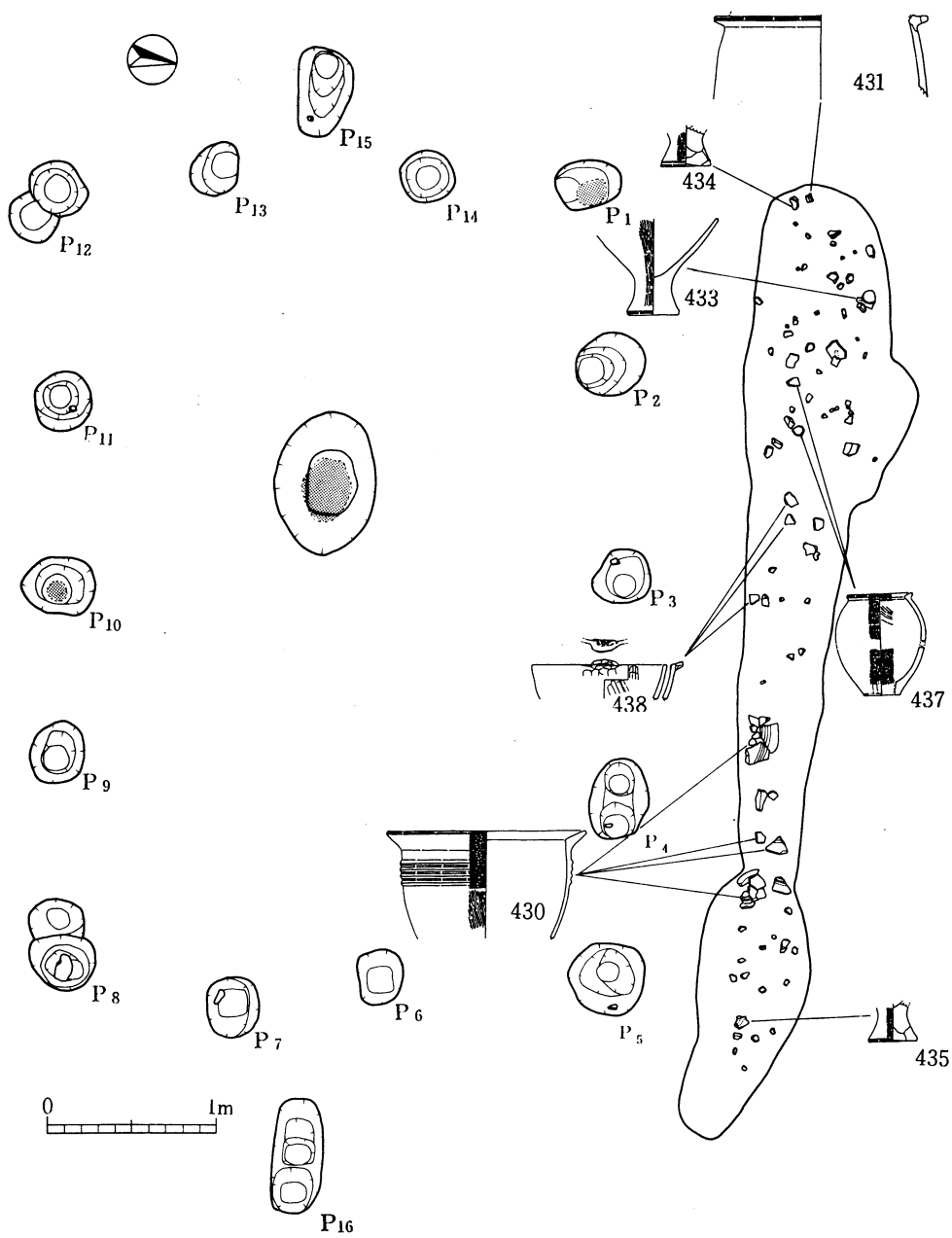
1号掘立柱建物跡は、B20区とC20区の境に検出された。2号竪穴住居址の西側に位置し、3号竪穴住居址の北東側に接近する位置にある。

掘立柱建物跡は3間×4間の建物規模で、主軸をN-78°-Eの略東西方向にとる。掘立柱建物跡の形態は、略東西の梁間側に棟持ち柱を備えるタイプで、建物内の床面には炉跡状の焼土が確認され、北側の桁行間の外側には溝状の落ち込み部分が検出されるものである。

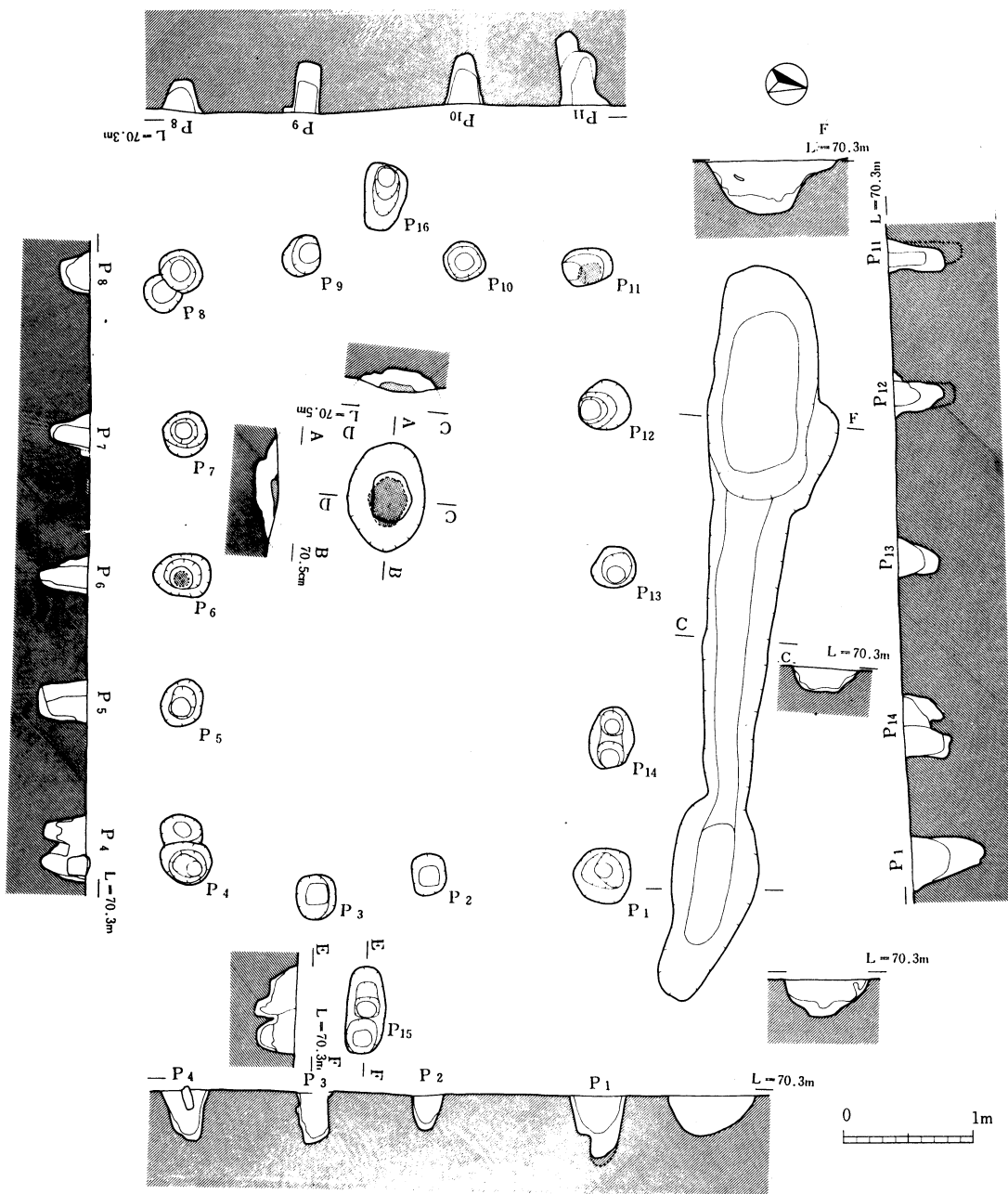
各柱穴は径35cm～50cm程度の比較的大きな掘り方がみられ、柱痕跡が確認されるものも存在する。特に、棟持ち柱のP₁₅とP₁₆は、柱穴の掘り方は梁間方向に拡った楕円形を呈し、柱痕跡は外側に寄った位置に検出されている。

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

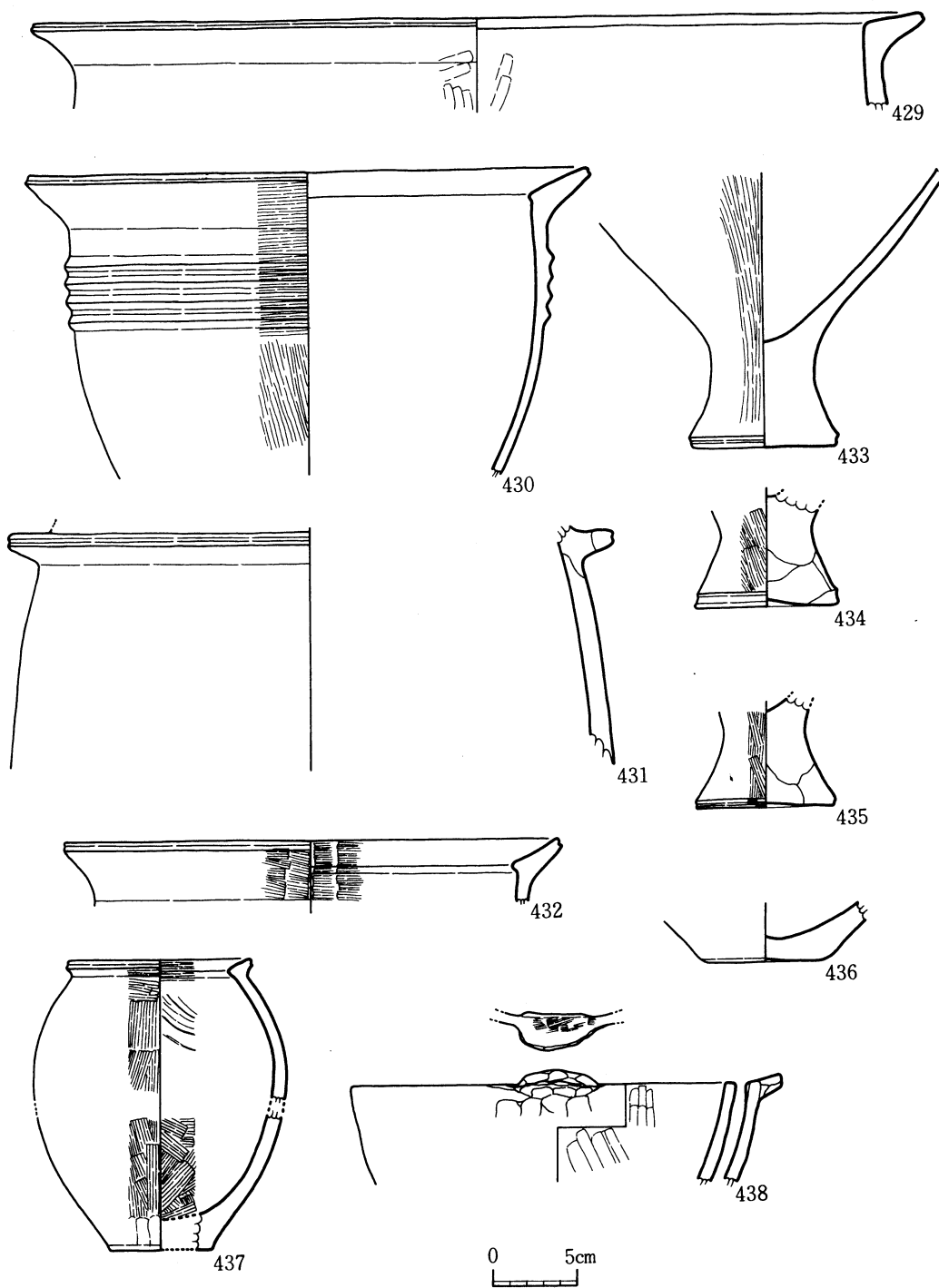
西側の梁間間(P₁-P₁₂)は324cmで、東側の梁間間(P₅-P₈)は329とほぼ等距離を測る。北側の桁行間(P₁-P₅)は471で、南側の桁行間(P₁₂-P₈)は470cmと全く等距離を測るもので、柱穴の均整な配置がおこなわれた建物跡である。しかし、各柱穴の



第83图 1号掘立柱建物跡遺物出土狀況図



第84图 1号掘立柱建物跡実測图



第85图 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第12表 1号掘立柱建物跡の一覧表

P：柱穴 単位：cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
BC20区	N-78°-E	W-3間 324	N-4間 471	P ₁₆ -P ₁₇ 680	1	40×30×58	13	30×30×40
		E-3間 329	S-5間 470		2	40×40×49	14	35×30×40
梁間柱間		梁間間	桁行柱間	行行間	3	35×35×33	15	55×35×30
					4	50×35×37	16	70×31×35
P ₁ -P ₁₄ :100 P ₁₄ -P ₁₃ :122 P ₁₃ -P ₁₂ :104 P ₅ -P ₆ :136 P ₆ -P ₇ :90 P ₇ -P ₈ :105		P ₁ -P ₁₂ 324	P ₁ -P ₂ :108 P ₂ -P ₃ :132 P ₃ -P ₄ :120 P ₄ -P ₅ :114	P ₁ -P ₅ 471	5	45×45×55	備考	
	P ₁₂ -P ₁₁ :125 P ₁₁ -P ₁₀ :117 P ₁₀ -P ₉ :110 P ₉ -P ₈ :127		P ₁₂ -P ₈ 470		6	33×25×30		
		P ₅ -P ₈ 329			7	35×30×40		
						8	40×35×40	
					9	35×33×38		
					10	45×35×38		
					11	45×35×32		
					12	35×35×25		

柱間をみると若干いびつに配列している。柱間の計測数値は、西側の梁間柱間はP₁-P₁₄=100 cm、P₁₄-P₁₃=122 cm、P₁₃-P₁₂=104 cm、東側の梁間柱間はP₅-P₆=137 cm、P₆-P₇=90 cm、P₇-P₈=105 cmを測る。桁行柱間の北側はP₁-P₂=108 cm、P₂-P₃=132 cm、P₃-P₄=120 cm、P₄-P₅=114 cmで、南側はP₁₂-P₁₁=125 cm、P₁₁-P₁₀=117 cm、P₁₀-P₉=110 cm、P₉-P₈=127 cmを測る。また、P₄と隅柱のP₈とP₁₂には二ヶ所の掘り込みが認められ、立替えの可能性が考えられる。

棟持ち柱はP₁₅とP₁₆であるが、ほぼ梁間間の中央の線上に配置されている。なお、P₁₆には、柱痕跡と考えられる落ち込みが同じ掘り方内に二個確認されている。そのため、P₁₆の掘り方は長径70 cmと長楕円形を呈している。棟持ち柱間の距離は、P₁₅とP₁₆の建物寄りの柱穴で660 cm、P₁₅とP₁₆の外側の柱穴で680 cmを測る。なお、柱穴の掘り方は、梁間方向へ向いた楕円形を呈しており、掘り方内の柱痕跡の位置から観察しても、斜めに掘られていることになる。柱穴位置からの建物の床面積は、約15㎡にあたる。

1号掘立柱建物跡には、北側の桁行間に並行して溝状遺構が検出されている。溝状遺構は、西側は梁間の線上から始まり、東側は梁間の線上からさらに1 m程度東へ延びている。溝内は東西両端の一部が幅広くなり、この部分は検出面からの深さも深い。溝幅は、最大幅105 cm、最小幅35 cmを測る不定形な平面形を呈する。溝内からは、多量の遺物が出土している。

柱穴に囲まれた建物内床面の梁間間のほぼ中央で、桁行間の西側から3分の1の位置に、焼土が確認された。焼土部分の周辺は、長径85 cm×短径60 cmの楕円形状の変色部分が確認され、その中央に長径43 cm×短径33 cmの楕円形状の掘り方がある。この掘り方の上部に、長径38 cm×短径30 cmの楕円形状の焼土が存在している。焼土は、標高70.37 mの高さで検出されている。

溝や柱穴は検出面の形状からみると若干の削平を受けていることが考えられるが、焼土はほぼ原位置の高さで検出されたことが考えられる。この焼土面の高さで、建物の床面を想定することは可能である。

429～438は、1号掘立柱建物跡に付設された溝内出土の遺物である。

429～435は、甕形土器である。429は逆「L」字状に外反する口縁部片である。430・432は、口縁部が「く」字状に外反するタイプである。口縁内面は僅かに張り出し、稜をつくる。430は、口径33.6cmを測る。頸部に僅かに隙間を置き肩部には四条の貼付突帯文を巡らせる。口縁部と突帯文間は丁寧な横位の刷毛ナデ整形で、胴部は刷毛目が施される。431は、口縁直下に台形上の幅広い貼付突帯文を巡らせる大型の甕形土器である。433～435は、甕形土器の底部である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施されている。底面は、一般的には平坦な平底を呈するが、434・435は僅かに上げ底状の凹面をつくる。

436は、壺形土器の底部で平底である。

437は、口径11.0cm、復元器高17.3cmの完形に復元される小壺である。底部は平底で、胴部は球状に張る。口縁部は内湾し、「く」字状の短い拡張部を付ける。端部には凹線文状の凹みを施す。口縁部付近は横位の丁寧なナデ整形が行なわれ、胴部は刷毛目で仕上げられる。

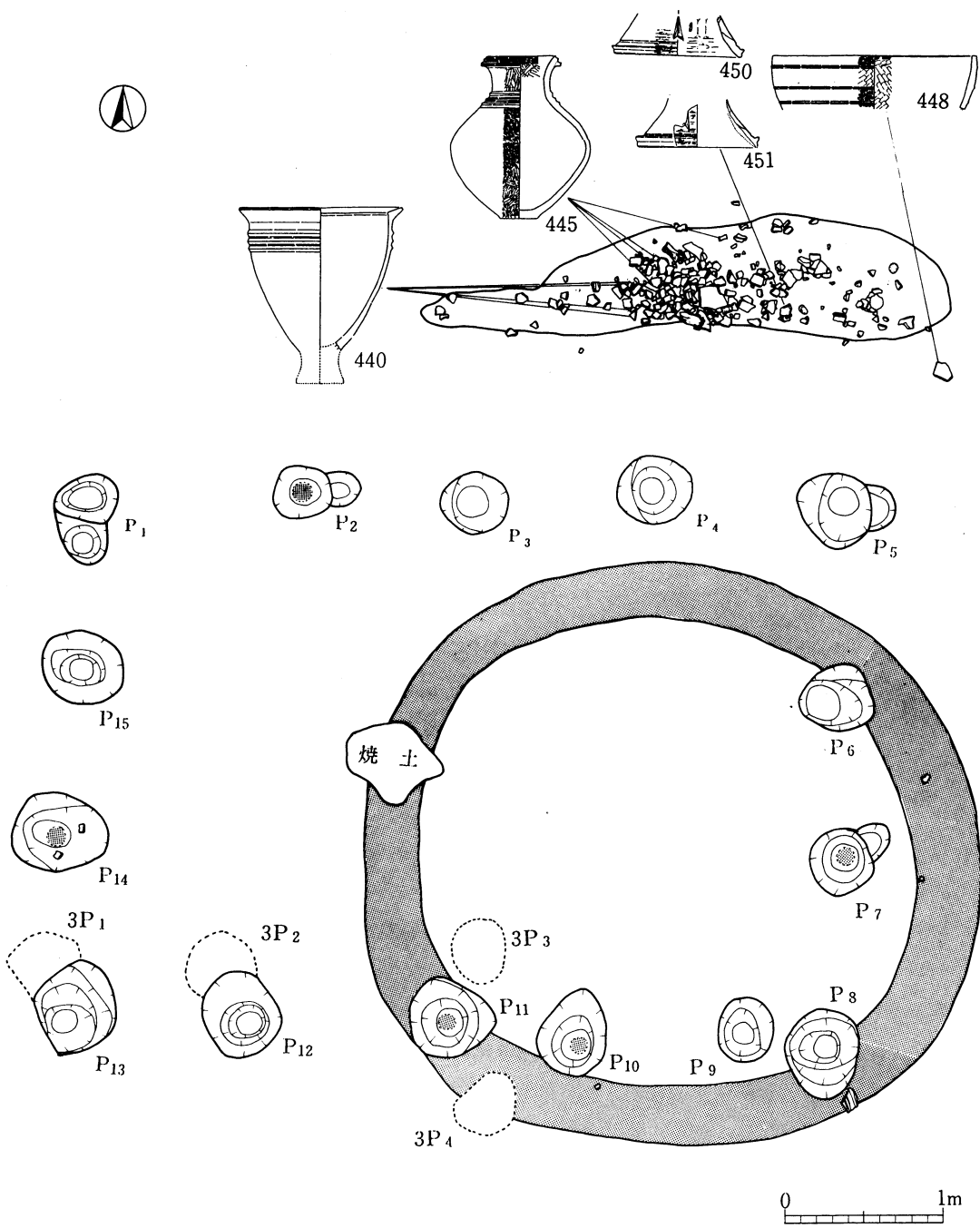
438は、口縁部が内湾気味に外反した鉢状の器形を呈す。口縁部は平坦におさめるが、幅5cm程度の把手状の張り出し部を付ける。

2) 2号掘立柱建物跡 (第86～90図)

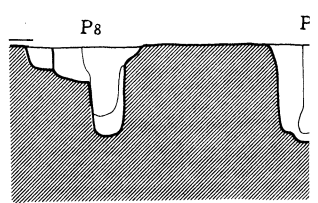
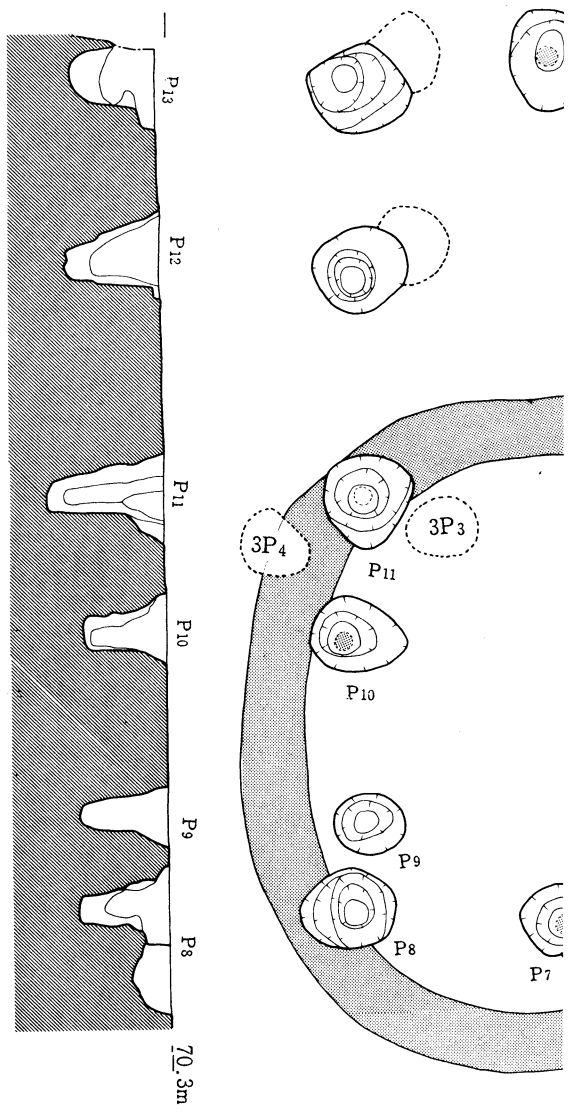
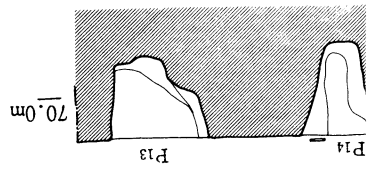
2号掘立柱建物跡は、C20区とC21区の境に検出された。2号竪穴住居址の西側に位置し、3号竪穴住居址の北西部に位置する。また、2号掘立柱建物跡は、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係を観察すると、円形周溝遺構を3号掘立柱建物跡が切り、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構を2号掘立柱建物跡が切った関係になる。すなわち、円形周溝遺構→3号掘立柱建物跡→2号掘立柱建物跡の順に構築されたことになる。第87図でみると、3号掘立柱建物跡のP₄が円形周溝遺構を切り、2号掘立柱建物跡のP₁₂とP₁₃が3号掘立柱建物跡のP₁とP₂を切り、2号掘立柱建物跡のP₆、P₈、P₁₁と炉跡状の変色部分が円形周溝遺構を切っている。

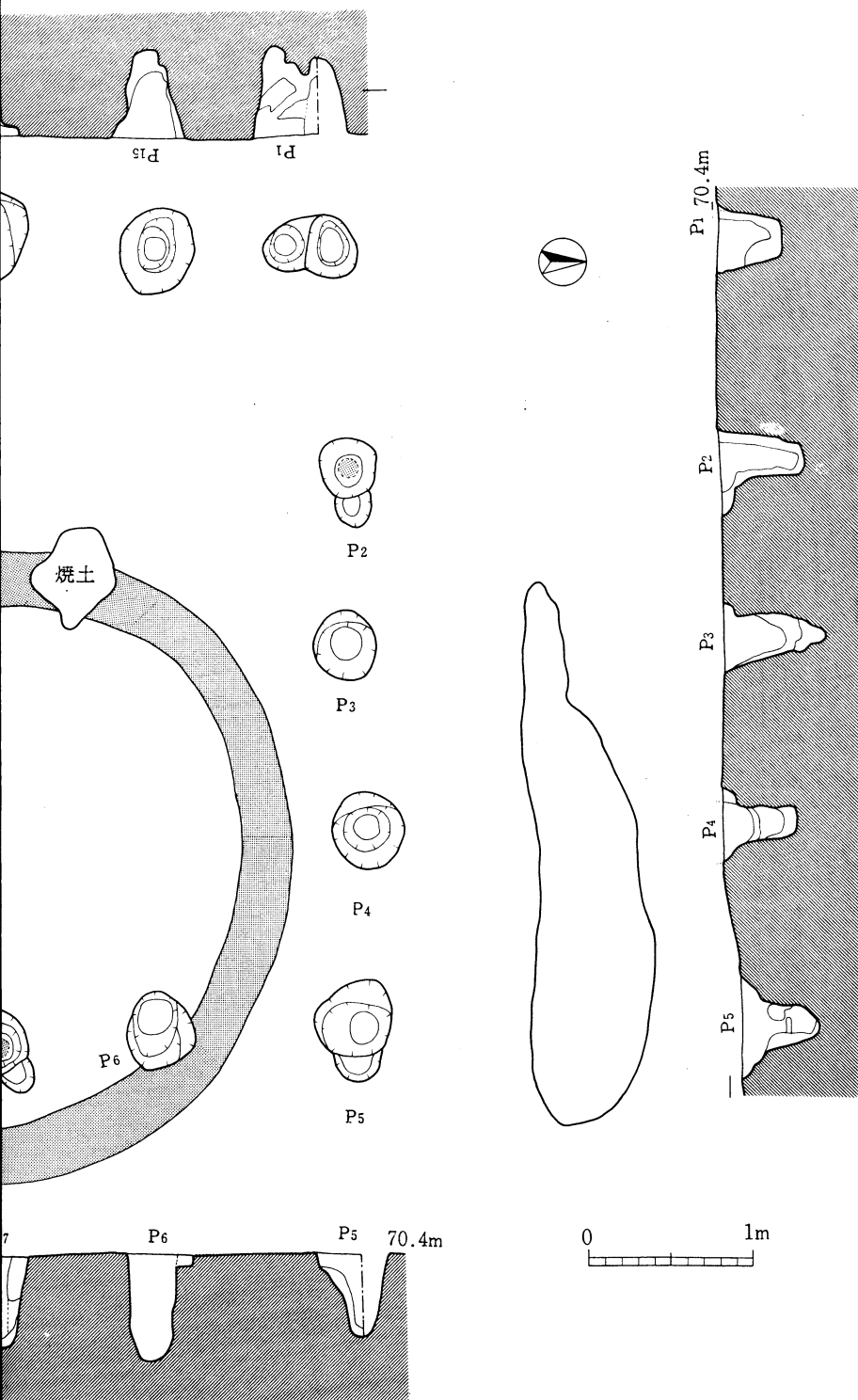
2号掘立柱建物跡は3間×4間(南側の桁行間は5間)の建物規模で、主軸はN-86°-Eを向く。2号掘立柱建物跡は、建物内の床面に炉跡状の変色部分が確認され、北側の桁行間の外側には1号掘立柱建物跡と同様の溝状の落ち込みが検出された。1号掘立柱建物跡に付くような棟持ち柱は存在しない。

各柱穴は径50cm～60cm程度の大きさに1号掘立柱建物跡より若干大きな掘り方がみられ、柱痕跡が確認されるものも多い。また南側桁行柱間が、北側桁行間より1間多い事実は注目される。

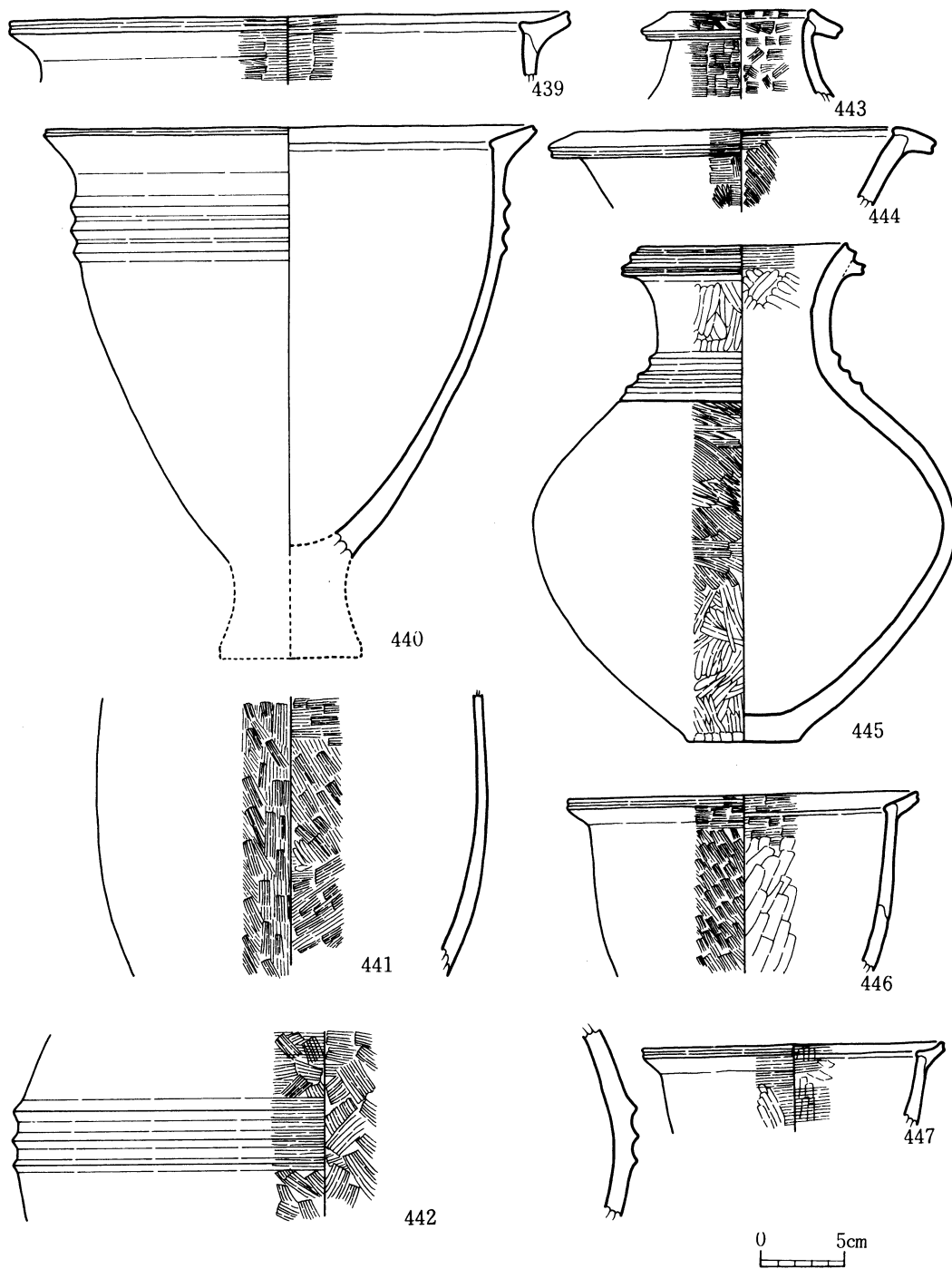


第86图 2号掘立柱建物跡遺物出土状況図





第87图 2号掘立柱建物跡実測图

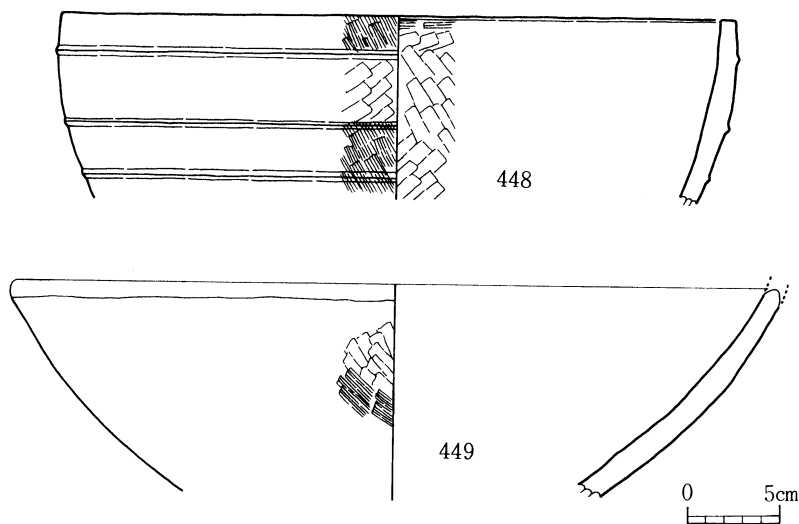


第88图 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(1)

第13表 2号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
C20・21区	N-86°-E	W-3間 336	N-4間 485		1	40×35×58	13	60×50×50
		E-3間 349	S-5間 487		2	35×35×54	14	60×50×55
					3	45×40×63	15	55×50×56
					4	50×45×47		
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間			備考		
P ₁ -P ₁₅ :110	} P ₁ -P ₁₃ 3 3 6	P ₁ -P ₂ :138	} P ₁ -P ₅ 4 8 5	5	50×50×51			
P ₁₅ -P ₁₄ :108		P ₂ -P ₃ :109		6	50×45×66			
P ₁₄ -P ₁₃ :119	} P ₅ -P ₈ 3 4 9	P ₃ -P ₄ :115	} P ₁₃ -P ₈ 4 8 7	7	45×40×58			
P ₅ -P ₆ :130		P ₄ -P ₅ :124		8	55×50×53			
P ₆ -P ₇ :99		P ₁₃ -P ₁₂ :118		9	40×35×52			
P ₇ -P ₈ :122		P ₁₂ -P ₁₁ :127		10	55×45×48			
		P ₁₁ -P ₁₂ :85		11	55×52×68			
		P ₁₀ -P ₉ :107		12	55×50×56			
		P ₉ -P ₈ :53						



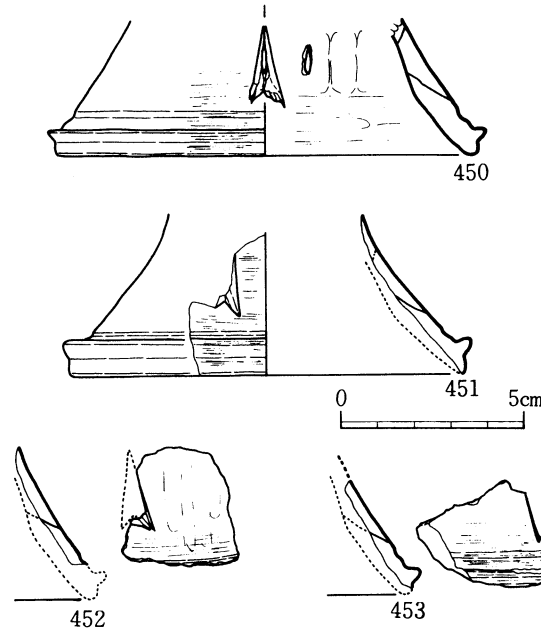
第89図 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(2)

柱穴位置での建物規模は、次の通りである。

西側の梁間間(P₁-P₁₃)は338cmで、東側の梁間間(P₅-P₈)は352cmと若干長い。北側の桁行間(P₁-P₅)は488cmで、南側の桁行間(P₁₃-P₈)は490cmと全く等距離を測る。各柱穴の柱間をみると若干いびつに配列している。柱間の計測数値は、西側の梁間柱間はP₁-P₁₅=110cm、P₁₅-P₁₄=108cm、P₁₄-P₁₃=119cm、東側の梁間柱間はP₅-P₆=130cm、P₆-P₇=99cm、P₇-P₈=122cmを測る。桁間柱間の北側はP₁-P₂=138cm、P₂-P₃=109cm、P₃-P₄=115cm、P₄-P₅=124cmで、南側はP₁₃-

$P_{12} = 118\text{ cm}$ 、 $P_{12} - P_{11} = 127\text{ cm}$ 、
 $P_{11} - P_{10} = 85\text{ cm}$ 、 $P_{10} - P_9 = 107\text{ cm}$ 、
 $P_9 - P_8 = 53\text{ cm}$ を測る。また、
 P_2 と P_7 と隅柱の P_1 と P_5 には二
ヶ所の掘り込みが認められ、立替えの
可能性が考えられる。

2号掘立柱建物跡には、北側の桁行
間に並行して溝状遺構が検出されてい
る。溝状遺構は、西側は桁行柱 P_3 が
ら東側に残り、東側は梁間間の線の上
からわずかに東へ延びている。溝は床
面をわずかに残す程度の残存であるが、
上部には遺物は重なって多量に出土し
ている。溝は、最大幅80cm程度が残存
している。



第90図 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図(3)

柱穴に囲まれた建物内床面の梁間間のほぼ中央で若干西側梁間間寄りに、焼土によると考えられる変色部分が確認された。変色部分は、長径65cm×短径55cmの楕円形状を呈する。変色部分は、標高70.30mで1号掘立柱建物跡の焼土と同レベルの高さである。溝や柱穴は検出面の形状から若干の削平を受けていることが考えられるが、変色部分はほぼ原位置の高さで検出されたものと考えられる。この焼土面の高さで、建物の床面を想定することが可能である。柱穴位置からの建物の床面面積は、約16㎡にあたる。

439～453は、2号掘立柱建物跡に付設された溝内出土の遺物である。

439～441は、甕形土器である。440は、口径29.4cmを測る。口縁部は「く」字状に外反し、口縁直下には若干隙間を置いて貼付突帯文を三条巡らす。441は、胴部下端に近い部位であるが、若干不安定な器形を呈する。

442～445は、壺形土器である。口縁部の器形は、それぞれ異なる。443は、内湾気味にすぼまった口縁部に、垂れ下がった口縁拡張部を付ける。口径は、8.5cmと小さい。444は、大きく外反した口縁部に若干垂れ下がり気味の幅広い口縁拡張部を付けるタイプである。445は、壺形土器の完形品である。口径12cm、器高29.7cmを測る。口縁部は直線的に外反し、比較的短い。口縁端部の外側に台形状の貼付突帯文を巡らせ、口縁拡張部とする。頸部には三条の貼付突帯文を巡らせる。胴部は、ソロバン玉状に大きく張る。底部は、安定した平底を呈する。口縁拡張部と突帯文間は横位の丁寧な刷毛ナデ整形で、頸部や胴部は刷毛目やヘラ磨き整形で堅固に仕上げる。442は最大胴部に貼付突帯文を巡らしている。

446・447は、口径20.8cmと18.0cmを測る鉢形土器である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は「く」字状に外反する。

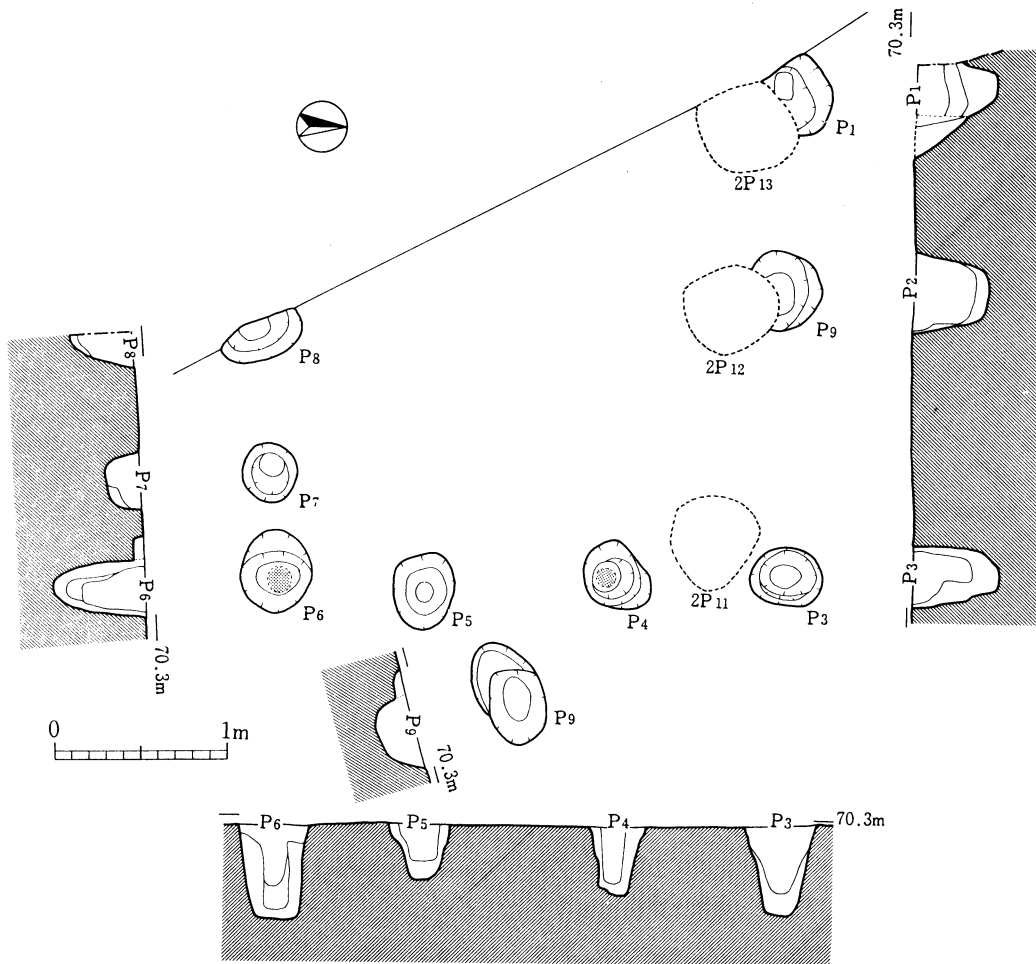
448は、浅鉢形を呈する珍しい器形である。口縁部は内湾気味に外反し、口唇部は平坦におさめる。器外面には、間隔を置いて細い丁寧な貼付突帯文を巡らせる。

449は、底部に近い胴部片で、上端は粘土帯が剥落した部分である。珍しい器形である。

450～453は、高杯の脚部で、ほぼ同個体と考えられる。脚部は接地面へ大きく広がる。底部側面は面取り状に整形され、上端は上方にはねる。器面には矢羽根状の透かしが彫られ、透かしは裏面まで貫通している。裏面には、しぼり痕も観察される。底部付近は横位の丁寧なナデ整形がみられ、上位はへら磨き状の仕上げで堅固である。

3) 3号掘立柱建物跡 (第91図)

3号掘立柱建物跡は、C21区を中心にC20区へわずかに延びる位置に検出された。3号竪穴住居址の北西側に位置する。また、3号掘立柱建物跡は、2号掘立柱建物跡と円形周溝遺構との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係は先に説明した通りである。



第91図 3号掘立柱建物跡実測図

第14表 3号掘立柱建物跡の一覧表

P：柱穴 単位：cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
C20・21区	N-82°-E	W-3間：?	?	?	1	45×40×47	8	50×?×37
		E-3間：295			2	45×45×43	9	60×40×22
梁間柱間		梁間間	桁行柱間	桁行間	3	43×35×51	備考 棟持ち柱付	
$P_3 - P_4 : 105$ $P_4 - P_5 : 106$ $P_5 - P_6 : 85$		$P_3 - P_6$ 295	$P_1 - P_2 : 122$ $P_2 - P_3 : 164$	$(285+a)$	4	40×40×40		
			$P_6 - P_7 : 79$ $P_7 - P_6 : 67$		$(146+a)$	5	45×35×33	
						6	50×40×55	
					7	35×33×18		

なお、3号掘立柱建物跡は、西側の梁間間と南側の桁行間の一部は用水路によって破壊されている。検出された柱穴は、東側の梁間間と北側の桁行柱間2間と南側の桁行柱間2間だけである。なお、東側の梁間間の東方向に棟持ち柱が検出されている。柱穴の配置から、3号掘立柱建物跡の棟持ち柱と想定される。各柱穴は径35cm～50cm程度の規模の大きいものである。

3号掘立柱建物跡は西側梁間間部分は削平されているため、桁行間方向からの主軸はN-82°-Eを測る。

柱穴位置での建物規模は次の通りである。

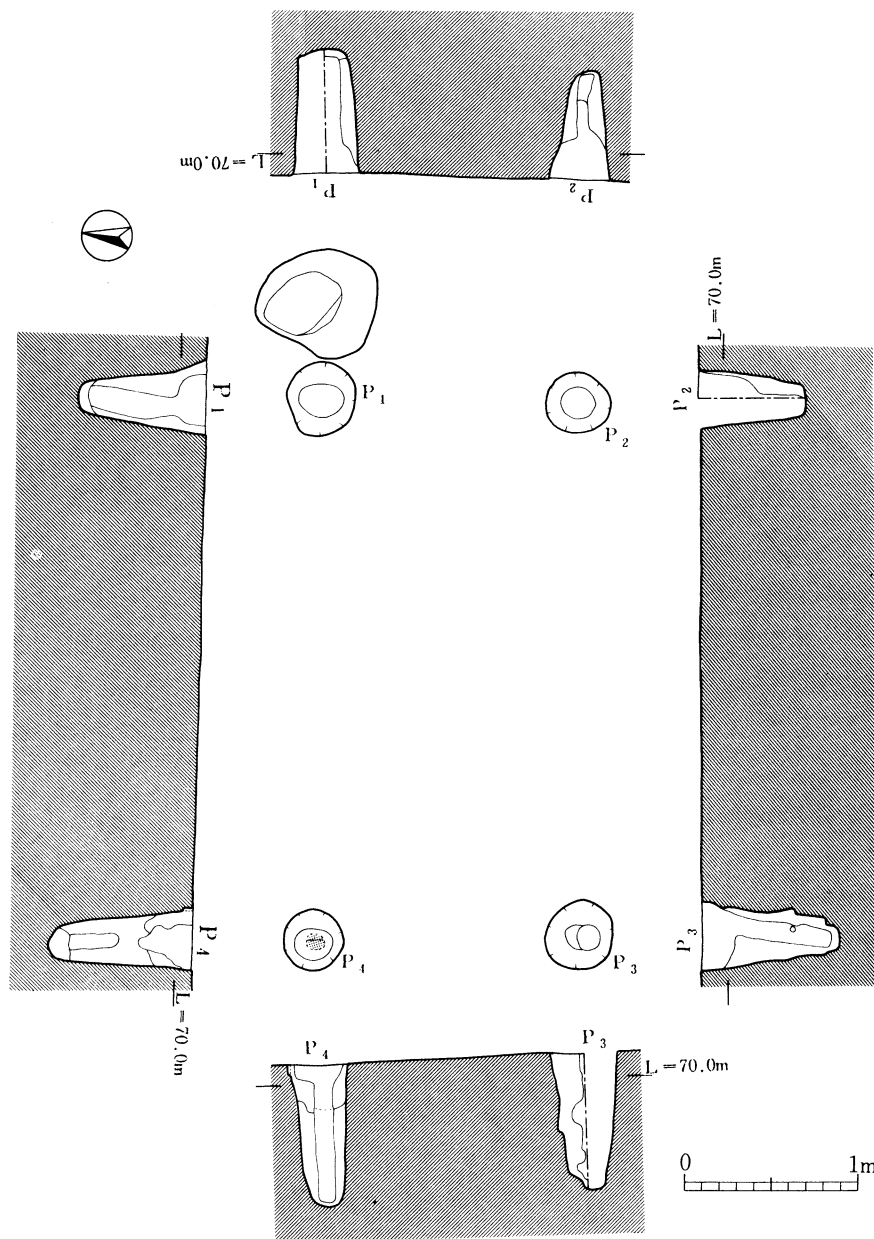
東側の梁間 ($P_3 - P_6$) は 295 cm を測るが、西側の梁間は削平のため不明である。残存する柱穴の柱間をみると柱間の距離が不均整である。特に、南側の桁行柱間の $P_6 \cdot P_7$ は、柱間が近く、2号掘立柱建物跡と同様、南側桁行柱間は1間多く柱間をもつタイプと考えられる。柱間の計測数値は、東側の梁間柱間は $P_3 - P_4 = 105$ cm、 $P_4 - P_5 = 106$ cm、 $P_5 - P_6 = 85$ cm を測る。桁行柱間はいずれも西側が削平されており、第11表に記載した柱間だけが判明しているだけである。なお、棟持ち柱にあたる柱穴の中心は、東側の梁間間の線上から東方向に約70cm程度離れた距離に位置する。

4) 4号掘立柱建物跡 (92図)

4号掘立柱建物跡は、A21区を中心にB21区へわずかに延びる位置に検出された。これまでの3号掘立柱住居址や1号～3号掘立柱建物跡とは、若干距離をもって南方向へ離れた位置に所在する。直ぐ北側には、直角に曲がる形態の不明な溝状の遺構が配置する。柱間の長い方を主軸にとれば、主軸はN-82°-Eを向く。

4号掘立柱建物跡は、略東西に長い1間×1間の建物跡である。柱間の長い方を桁行間とすれば、西側の梁間柱間は $P_1 - P_4 = 150$ cm で、東側は $P_2 - P_3 = 158$ cm を測る。北側の桁行柱間は $P_1 - P_2 = 312$ cm で、南側は $P_4 - P_3 = 316$ cm を測る。

4号掘立柱建物跡で注目すべきは、柱穴の規模である。柱穴の大きさは径35cm～45cm程度を測るが、第12表のように柱穴の深さは検出面から62cm～85cmと非常に深いことが大きな特徴と



第93図 5号掘立柱建物跡実測図

第15表 4号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

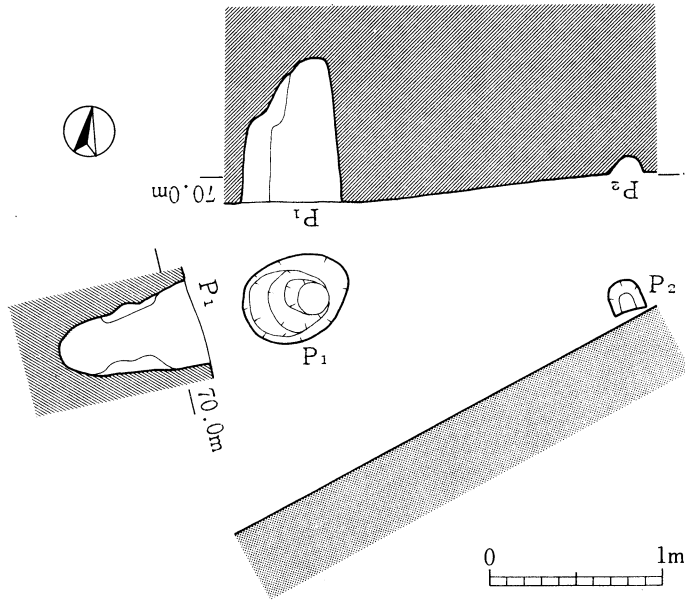
出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A・B21区	N-82°-E	W-1間 150	N-1間 312		1	38×35×62	
		E-1間 158	S-1間 316		2	40×40×80	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	37×35×84		
P ₁ -P ₂ :150		P ₁ -P ₄ :312		4	45×40×75		
P ₃ -P ₄ :158		P ₂ -P ₃ :316		5			

してあげられる。

5) 5号掘立柱建物跡 (第93図)

5号掘立柱建物跡は、A22区に位置するが、柱穴の位置から建物の中心は用地外に延びることが考えられる。主軸はN-83°-Eを向き、4号掘立柱建物跡の略南西方向に位置する。

5号掘立柱建物跡からは、柱穴が二本検出された。P₁はその規模から主柱と考えられ、長径65cm、短径50cm、深さ85cmの大きなものである。P₂



第93図 5号掘立柱建物跡実測図

は長径20cm、短径20cm、深さ10cmと規模は小さく、これは1間×2間の建物の中柱(添柱)と考えられる。柱間(これは桁行柱間にあたる)は、P₁-P₂ = 183cmを測る。

6) 6号掘立柱建物跡 (第94図)

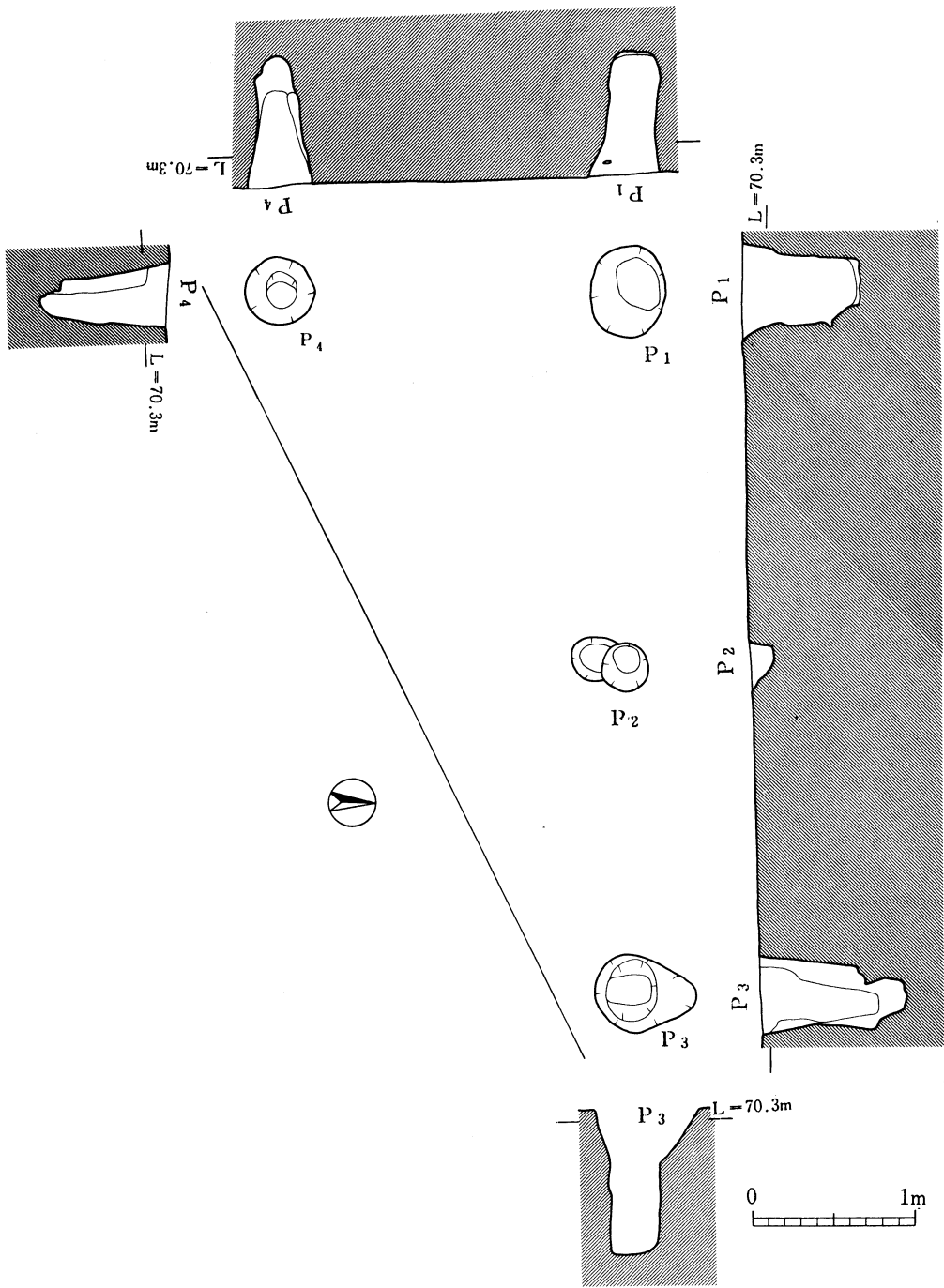
6号掘立柱建物跡は、A23区に検出された。1間×2間が想定される建物で、南側の桁行方向の二本は用地外に延びている。柱間の長い方を主軸とすれば、主軸はN-84°-Eを向く。

西側の梁間柱間は、P₁-P₄ = 214cmを測る。北側の桁行間は、P₁-P₃ = 444cmを測る。桁行柱間はP₁-P₂ = 234cm、P₂-P₃ = 210cmを測る。なお、主柱にあたるP₁、P₃、P₄はいずれも深く74cm~91cmを測る。中柱にあたるP₂は、わずか16cmと浅い。

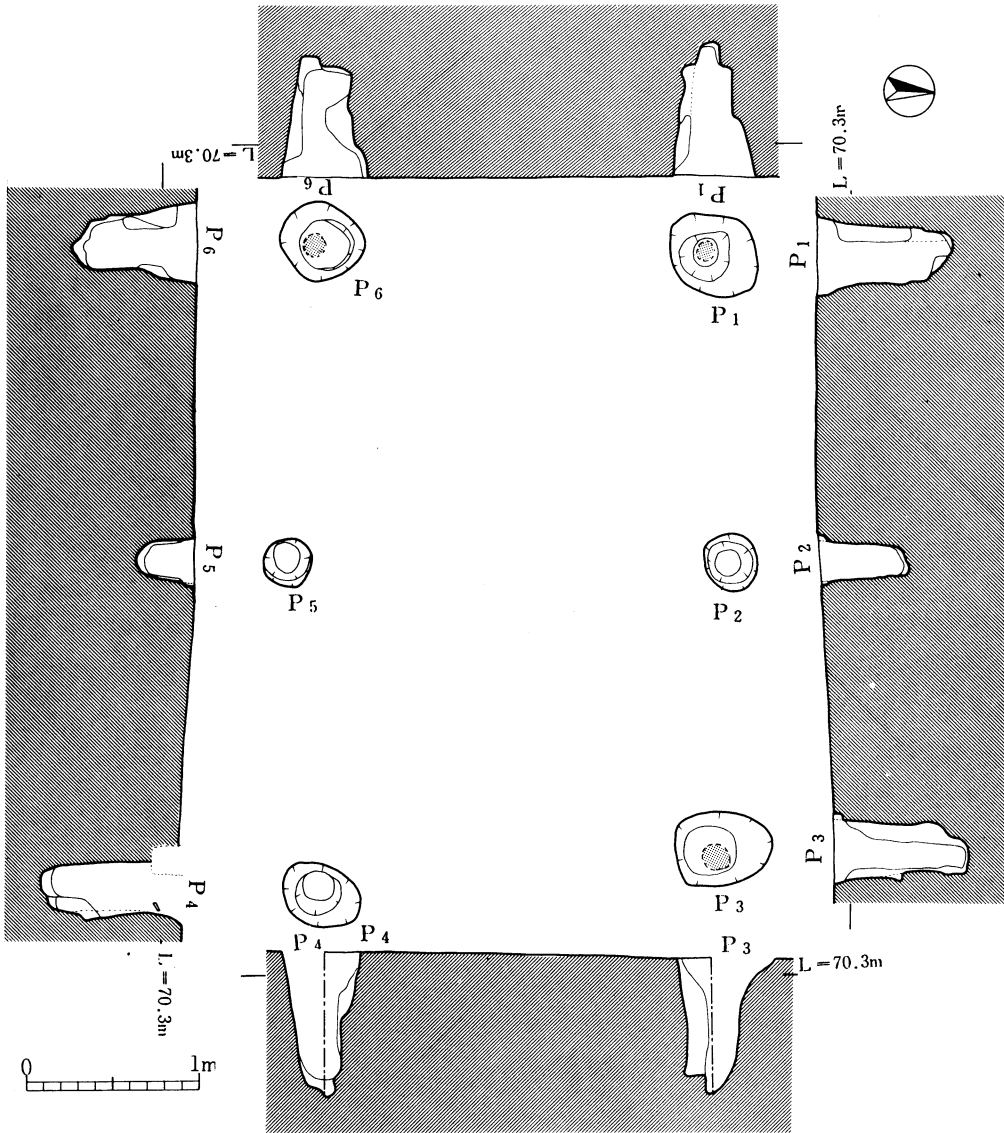
第16表 6号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A23区	N-84°-E	W-1間 214	N-2間 444		1	57×50×74	
					2	30×30×16	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間		3	65×50×91	
P ₁ -P ₄ :214		P ₁ -P ₂ :234 P ₂ -P ₃ :210	P ₁ -P ₃ 444		4	43×42×81	
				5			



第94图 6号掘立柱建物迹实测图



第95図 7号掘立柱建物跡実測図

第17表 7号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
A・B23区	N-89°-E	W-1間 228	N-2間 353		1	50×45×79	
		E-1間 230	S-2間 372		2	32×32×52	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	55×47×79		
P ₁ -P ₆ :228		P ₁ -P ₂ :182	} P ₁ -P ₃	4	48×40×80		
P ₃ -P ₄ :230		P ₂ -P ₃ :170		} 3 5 3	5	30×29×35	
		P ₆ -P ₅ :182	} P ₆ -P ₄	6	50×48×72		
		P ₅ -P ₄ :191		} 3 7 2	7		

7) 7号掘立柱建物跡 (第95図)

7号掘立柱建物跡は、B23区を中心に検出され一部A23区に延びる。ほぼ6号掘立柱建物跡の北側に並列する。建物は、1間×2間である。主軸方向は、N-89°-Eを向く。

建物の規模は、梁間間がP₁-P₆ = 228 cmとP₃-P₄ = 230 cmで、ほぼ同距離であるが、桁行間はP₁-P₃ = 353 cmとP₆-P₄ = 372 cmと南側桁行間が若干長い。そのため、建物の柱穴の配列は、若干いびつになる。

柱穴の規模は、主柱が深さ72cm~80cmで、中柱は深さ35cmと52cmを測る。7号掘立柱建物跡の特徴の一つは、この中柱が深いことがあげられる。

8) 8号掘立柱建物跡 (第96図)

8号掘立柱建物跡はB24区に検出されているが、この建物跡は本調査区では最も西方に位置することになる。建物の規模は1間×2間で、7号掘立柱建物跡の西方に位置する。主軸方向は、N-90°-Eを向く。

建物の規模は、梁間間がP₁-P₆ = 224 cmとP₃-P₄ = 227 cmを測り、桁行間はP₁-P₃ = 396 cmとP₆-P₄ = 394 cmのほとんど同距離を測る。このように8号掘立柱建物跡の柱穴は、最も均整に配列している建物である。

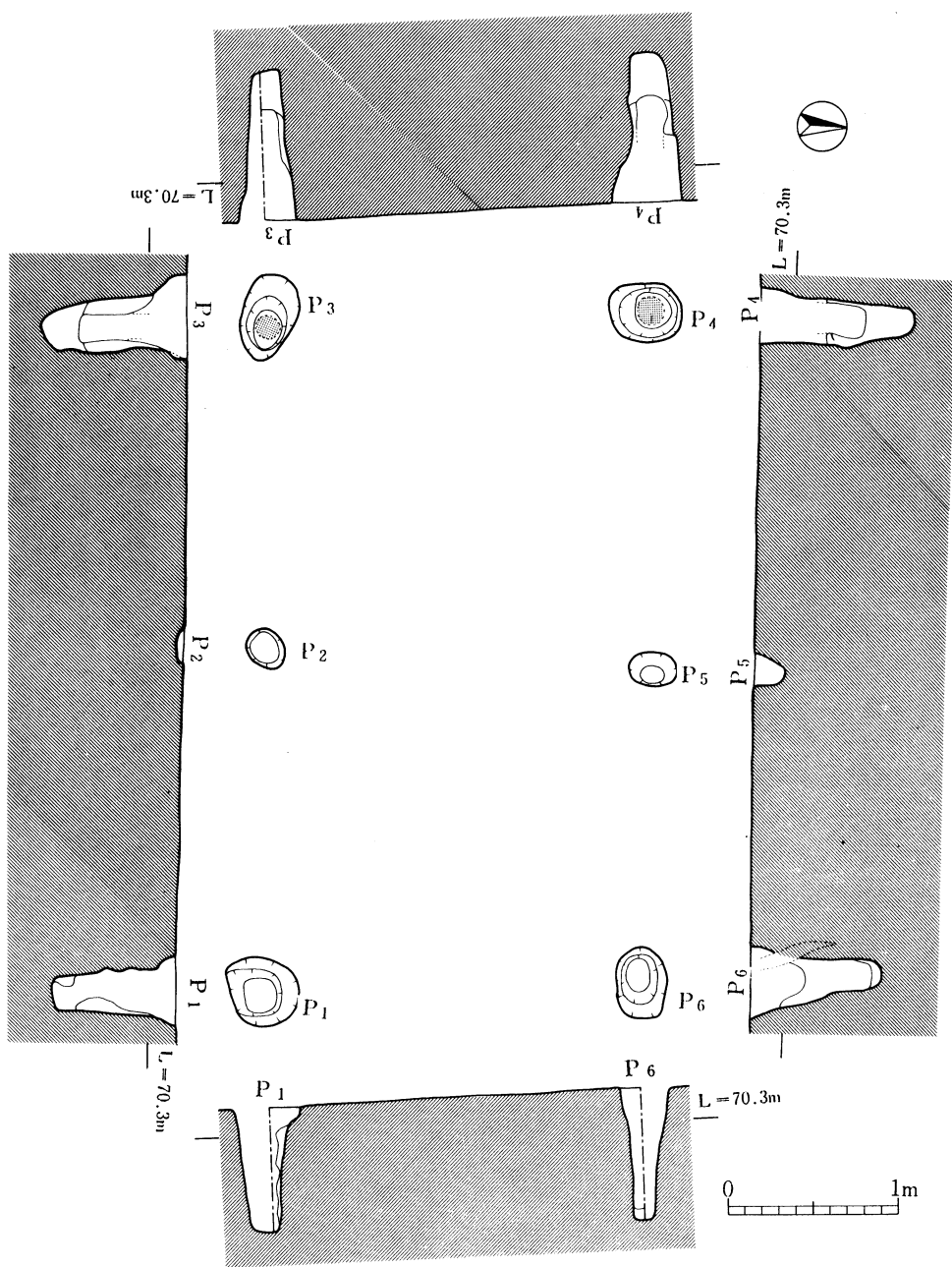
柱穴の規模は、主柱は74cm~91cmと深い、中柱は5 cmと18cmを測る浅いものである。

453は、建物のP₅の埋土中から出土した甕形土器の口縁部片である。口縁部は、逆「L」字状に外反するタイプで、外方に拡張した端部平坦面には凹線文状の凹みを施す。口径は、19 cmを測る。口縁部付近は丁寧な横位の刷毛ナデ整形がおこなわれ、その他は刷毛目が施される。

第18表 8号掘立柱建物跡の一覧表

P:柱穴 単位:cm

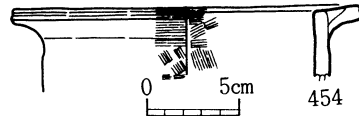
出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
B24区	N-90°-E	W-1間 224	N-2間 396		1	42×40×74	
		E-1間 227	S-2間 394		2	25×22×5	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	51×33×87		
P ₁ -P ₆ :224 P ₃ -P ₄ :227			P ₁ -P ₂ :204	} P ₁ -P ₃	4	43×35×91	
			P ₂ -P ₃ :191		} 396	5	
			P ₆ -P ₅ :178	} P ₆ -P ₄	6	43×30×79	
			P ₅ -P ₄ :216		} 394		



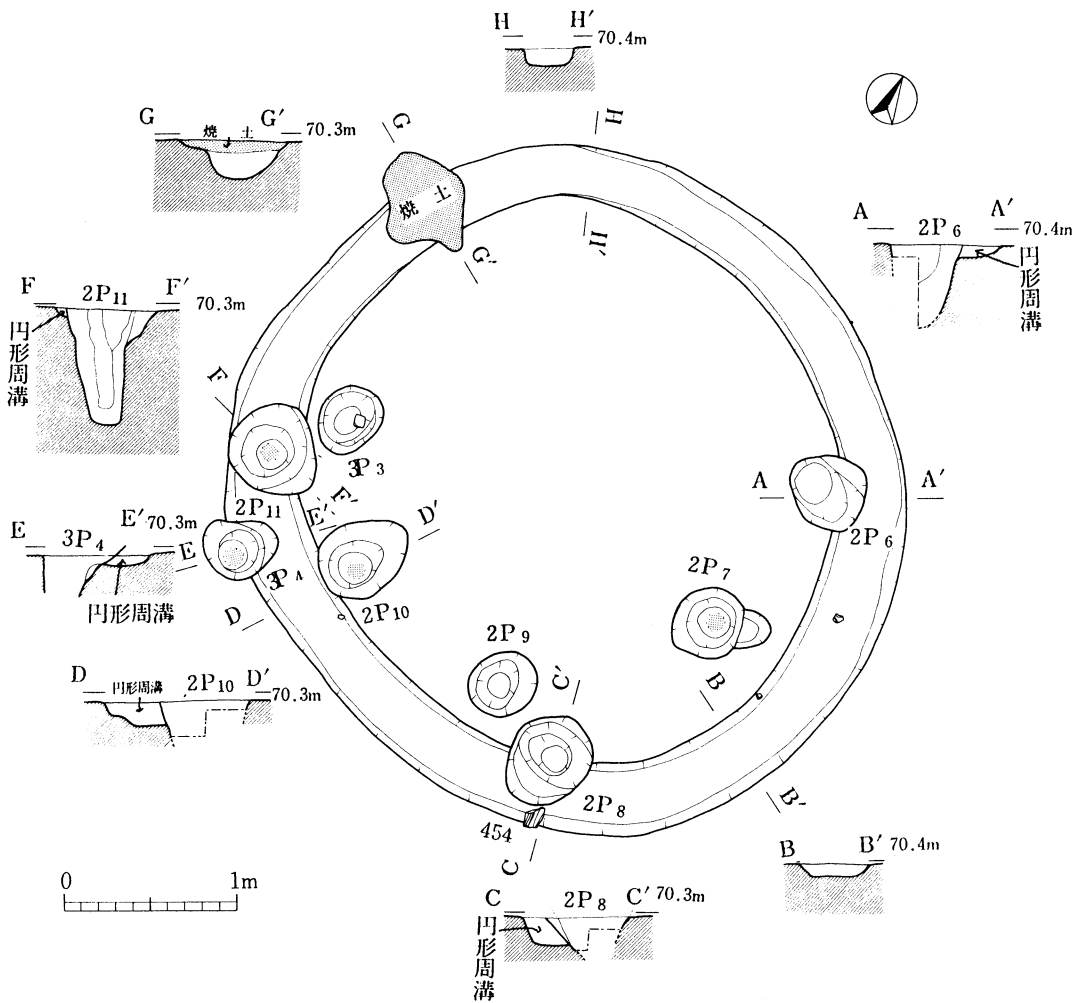
第96图 8号掘立柱建物跡実測図

(4) 円形周溝遺構 (第98図・第99図)

円形周溝は、C20区に位置している。円形周溝遺構は、2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡との複雑な切り合い関係が確認されている。検出状態の切り合い関係を観察すると、円形周溝遺構を3号掘立柱建物跡が切り、3号掘立柱建物跡と円形周溝遺構を2号掘立柱建物跡が切った関係になる。すなわち、円形周溝遺構→3号掘立柱建物跡→2号掘立柱建物跡の順に構築されたことになる。第87図でみると、3号掘立柱建物跡のP₄が円形周溝遺構を切り、2号掘立柱建物跡のP₁₂とP₁₃が3号掘立柱建物跡のP₁とP₂を切り、2号掘立柱建物跡のP₆、P₈、P₁₁と炉跡状の変色部分が円形周溝遺構を切っていることになる。

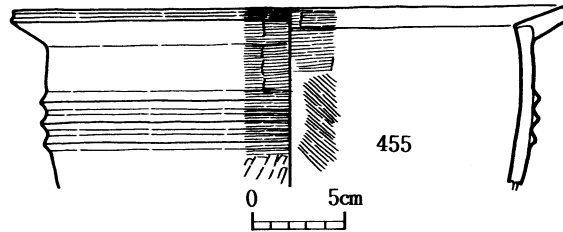


第97図 8号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第98図 円形周溝遺構実測図

円形周溝遺構は、周溝の外周で東西方向4.00m(内径3.14)×南北方向3.75m(内径3.00)を測り、若干東西に長い。周溝の幅は、35cm～45cm程度が検出されている。なお、円形周溝遺構は、本体の周溝以外は、これに付属すると



第99図 円形周溝遺構出土遺物実測図

考えられる遺構は検出されていない。ただ、C-C'断面の近くの周溝内から、甕形土器の口縁部破片(455)が出土している。

周溝の切り合い状態と周溝の規模をみると、次のようになる。A-A'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP₆で切られている。この部分で周溝の深さは7cm程度を測る。B-B'断面では、周溝の幅は40cmで深さは7cmを測る。C-C'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP₈に切られているが、周溝の深さは15cmを測る。D-D'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴のP₁₀に切られているが、周溝の深さは13cmを測る。E-E'断面では、3号掘立柱建物跡の柱穴のP₄に切られているが、周溝の深さは5cmと浅い。F-F'断面では、2号掘立柱建物跡の柱穴P₁₁で切られている。G-G'断面では、周溝の上に焼土による変色部分がのっている。変色部分の厚さは7cm程度がみられ、それ以下15cmが周溝の深さである。H-H'断面では、周溝の幅は30cmで深さは10cmを測る。以上が切り合い関係や周溝の規模であるが、このように円形周溝遺構は、2号掘立柱建物跡や3号掘立柱建物跡によって切られており、これらの遺構に先だって円形周溝が存在したことが判明した。

円形周溝遺構の溝内からの出土遺物は、455の甕形土器の破片が1点ある。455は、口径29.6cmを測る。口縁部は、「く」字状に外反し、胴部は若干丸味をもつ。胴部には頸部屈曲部から若干隙間を置いて三条の貼付突帯文が巡らされるタイプである。口縁部から貼付突帯文間は横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、それ以下はヘラナデ整形の仕上げがみられる。

2 出土遺物

前畑遺跡の一般の遺物の出土傾向は、住居址や掘立柱建物跡などの遺構からは完形品に近い遺物がまとまって出土しているが、Ⅲ層の包含層においては遺物はさほど多くない。一つには、耕作土（表層）直下が包含層であり、後世において削平されていることにも起因している。住居址の周辺は、旧道が存在し、戦時中は掩体壕など大規模な工事が行なわれ大々的な破壊を受けている。

出土遺物には、土器と石器がある。土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、丹塗土器などがある。石器には、磨製・打製石鏃、磨製・打製石斧、磨石、砥石などがある。

1) 土器 (第101～106図)

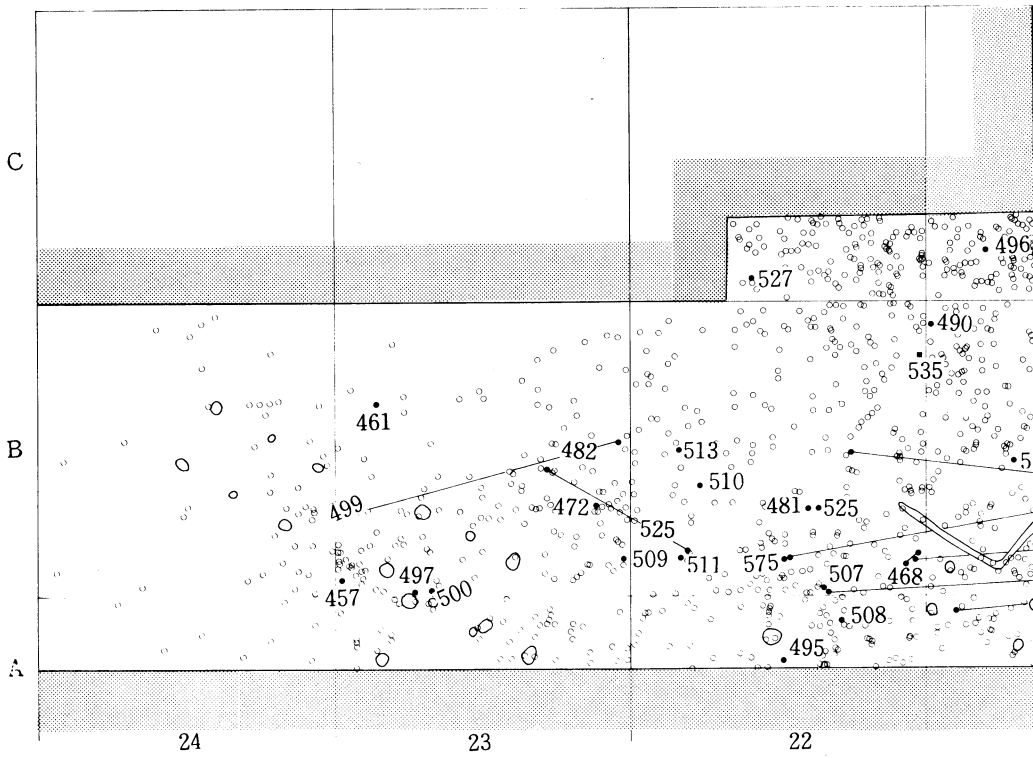
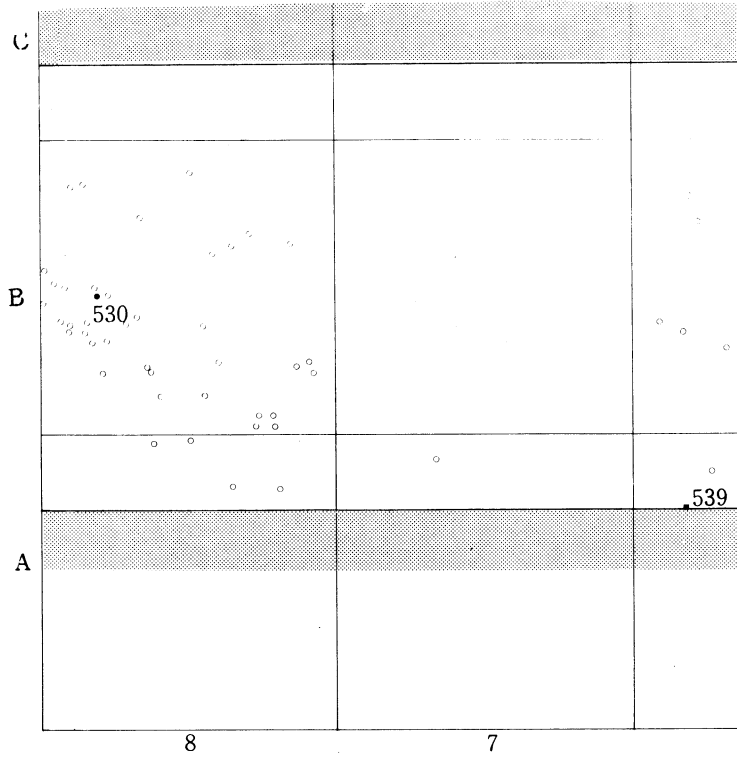
出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、丹塗土器などに分けられる。特に、丹塗土器は細片が多く器形が定かではないが、袋状口縁土器を含んでいる。在地系土器とは区別が明確であり、住居址出土の甕形土器や掘立柱建物跡付設の溝内出土の高杯形土器などと共に注目されるものである。

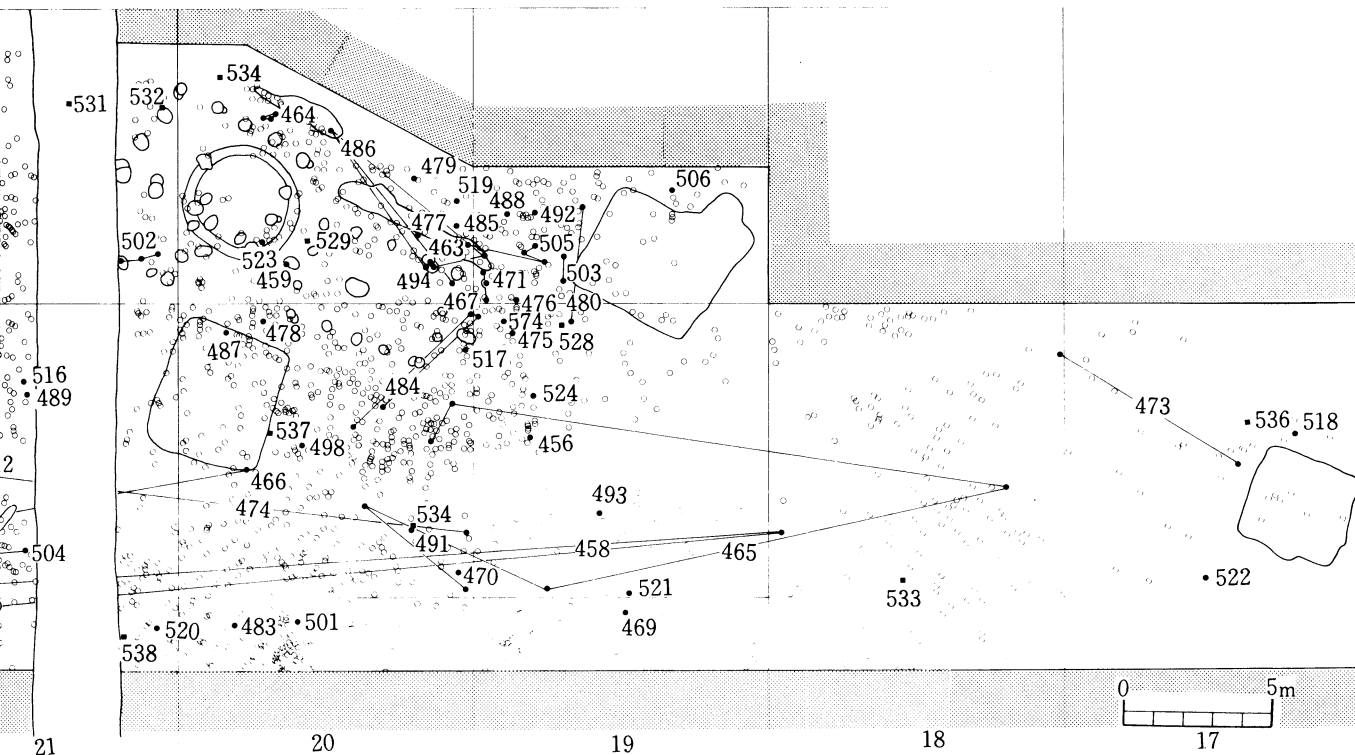
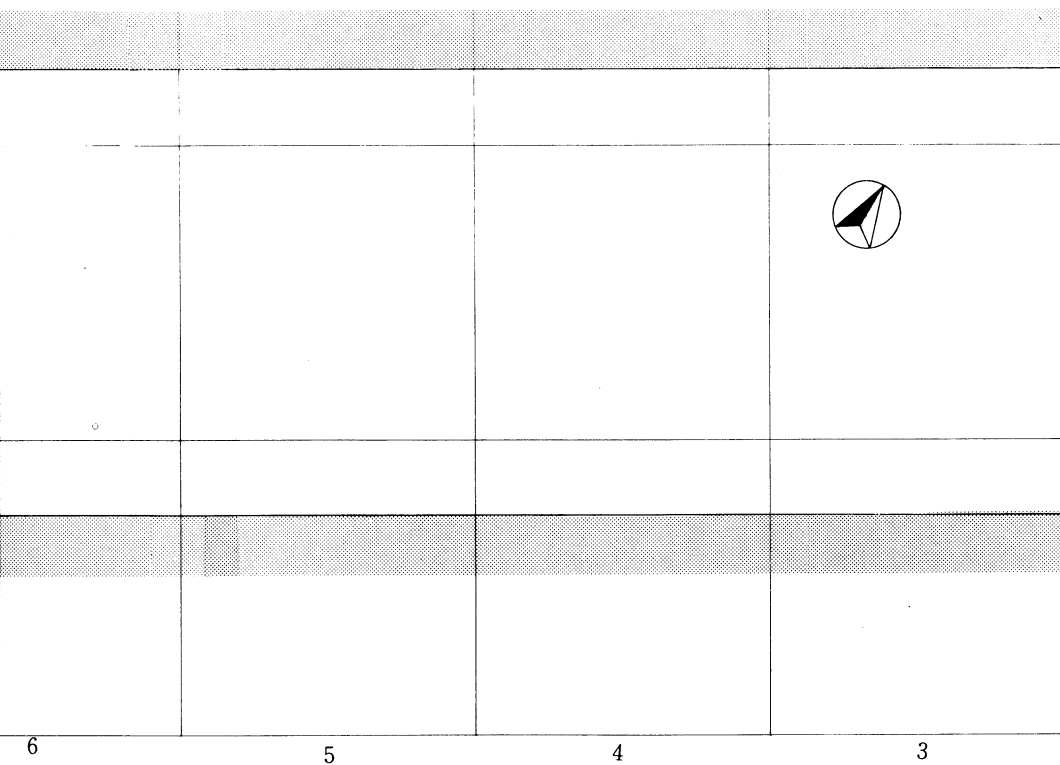
①甕形土器 (第101図～第103図-456～500)

甕形土器の器形には、二つの形態がみられる。一つは、比較的大型の甕形土器で口縁部が逆「L」字状に近く外反するタイプで、口縁部の直下には台形状の太くて力強い突帯文を一条巡らすタイプである。本遺跡では定かでないが、このタイプの底部は平底を呈することが判明している。二つめのタイプは、一般的な甕形土器で「く」字状に口縁部が外反して、肩部から頸部には突帯文を数条貼付するものである。このタイプの底部は、充実した脚台を呈する。両者はいずれも甕形土器で呼称されるが、形態上は大きな違いがみられる。

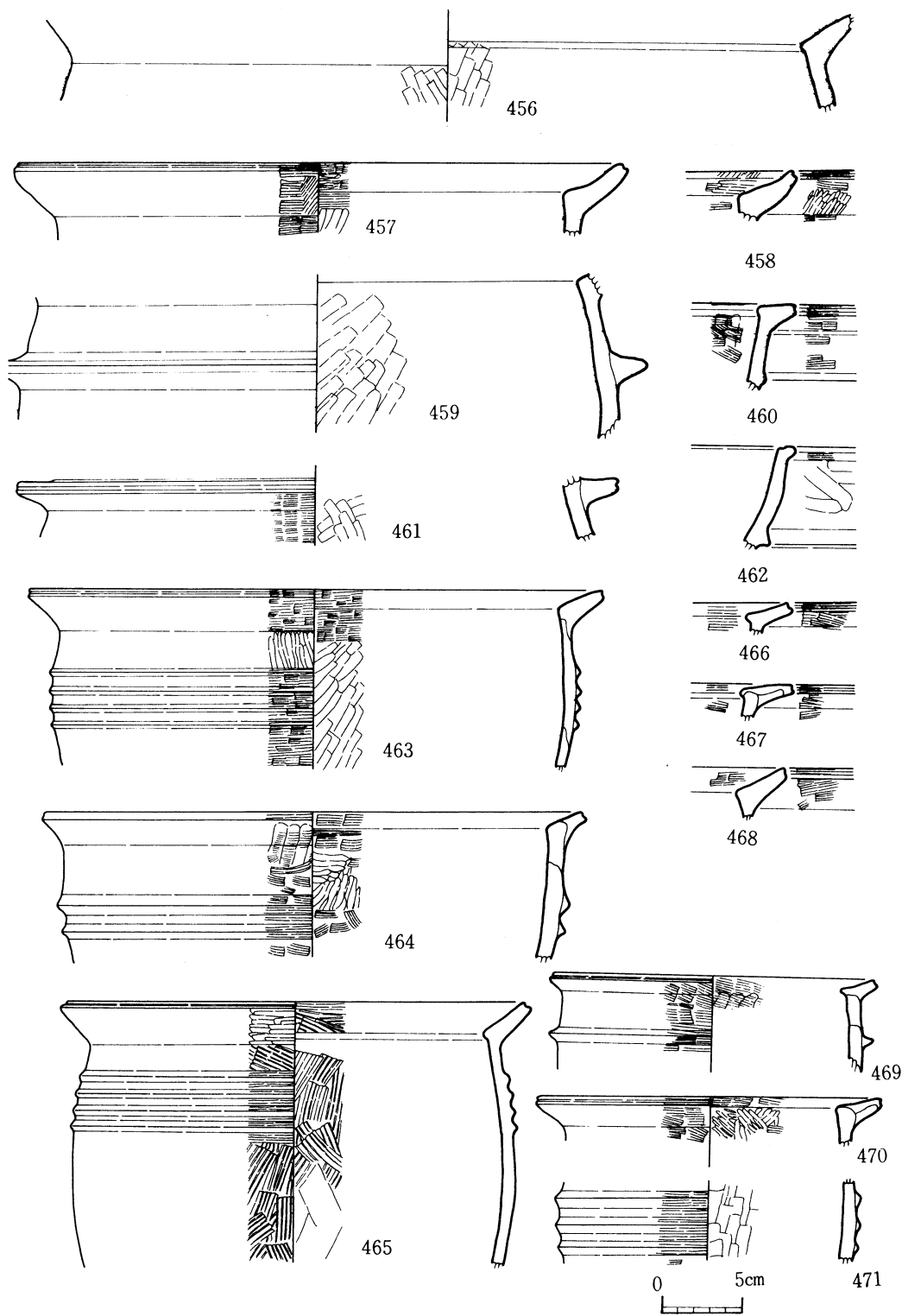
456～461・469は、前者の甕形土器に属すタイプである。456は、細片のため定かでないがもう少し逆「L」字状に起きる可能性がある。459・461のように口縁直下に太い貼付突帯文を巡らす。このタイプは大型の器形が一般的であるが、本遺跡では469のように口径20cm程度の小型のものがみられる。口縁部は若干上方に上がるが、逆「L」字状に近い外反である。口縁部下には、三角形の貼付突帯文が一条巡っている。小型のためか、貼付突帯文も三角形で小さい。口縁部付近と突帯文上は丁寧な横位のナデ整形が施されるが、そのほかはヘラ磨き整形が一般的である。

463～468・470・472～483は、一般的な甕形土器である。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部平坦面には凹線文状の凹みが施される。465のように、「く」字状口縁が大きく立ち上がるものもある。472～483は、細片の復元図のため口縁部の外反の角度は定かでない。口縁部内面は、463のようにシャープな稜をつくるものと465のように内側に突帯文状に張り出して稜をつくるものがある。





第100図 Ⅲ層遺物出土分布図



第101图 Ⅲ層出土遺物実測图(1)

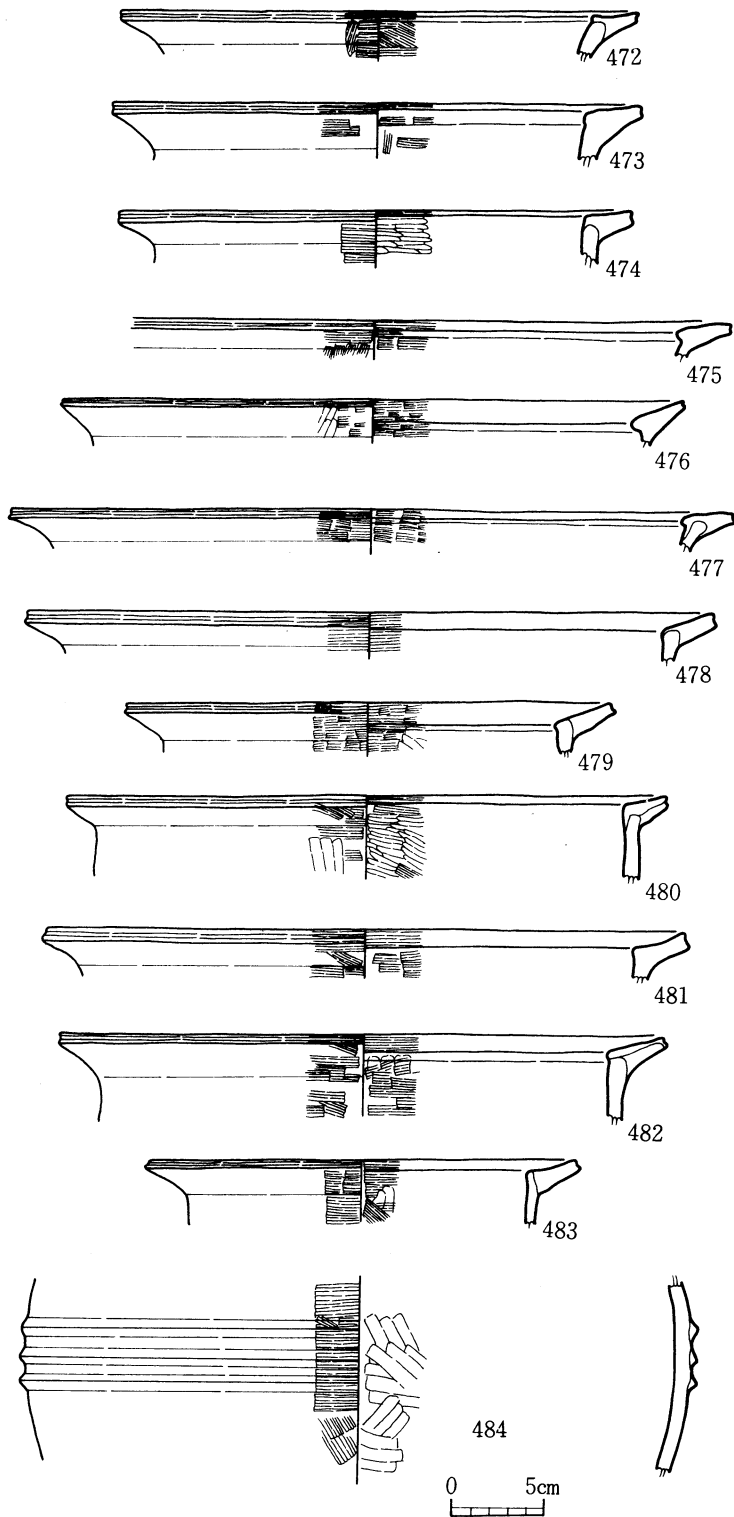
胴部上半の肩部には、貼付突帯文が数条巡らされる。本遺跡出土の甕形土器は、口縁部が外反する頸部下に若干隙間を置いて突帯文の貼付が始まっている。口縁部付近と突帯文上は、横位の丁寧な刷毛ナデ整形が施され、その他の部分は刷毛目やへら磨きの整形がみられる。

496～500は、甕形土器の底部である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底部裾部の端部は、面取りが行なわれその上に凹線文状の凹みが施される。しかし、490～500のように、面取りを行なわず丸味をもって仕上げるものもある。底面は、一般的には平坦な平底を呈する。しかし、490・491・495のように、底面が上げ底状にわずかに凹面をつくるものもある。

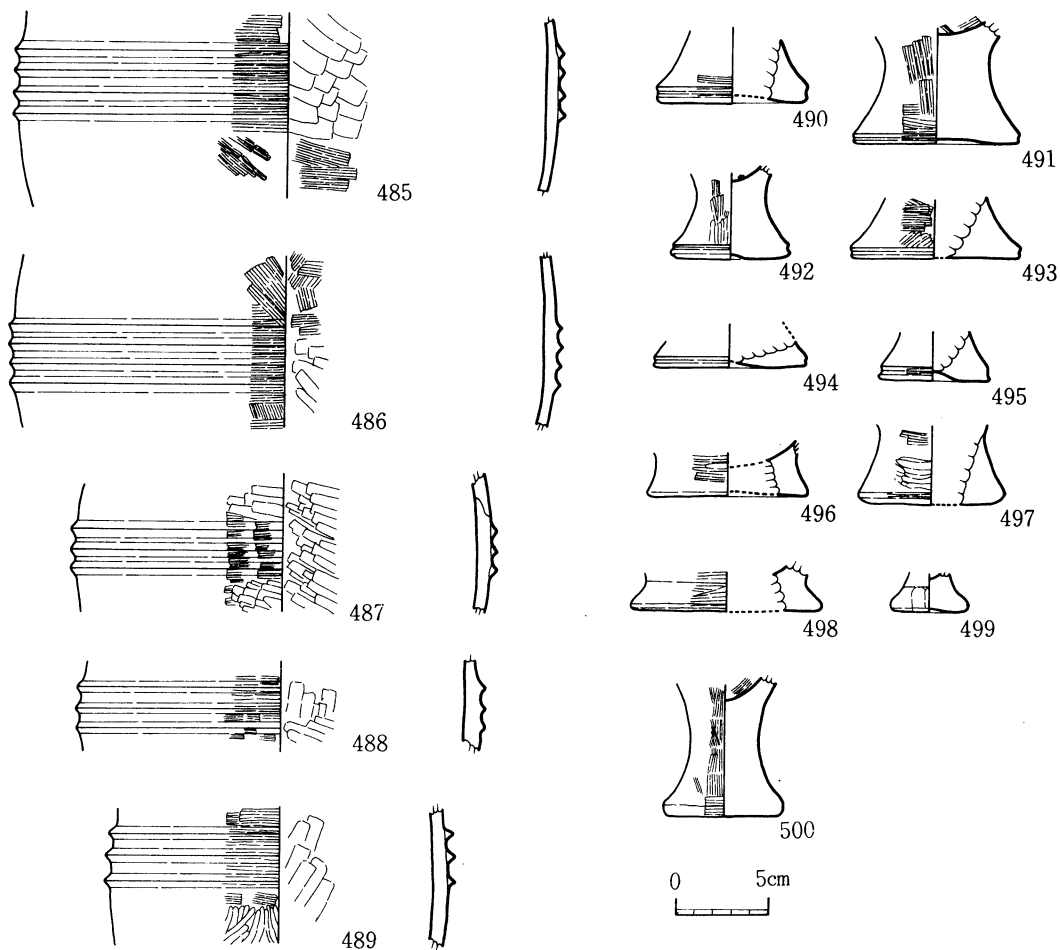
②壺形土器

(第104図-501～519)

本遺跡の包含層出土の壺形土器は、出土量が少ない。口縁部が明らかな



第102図 Ⅲ層出土遺物実測図(2)



第103図 III層出土遺物実測図(3)

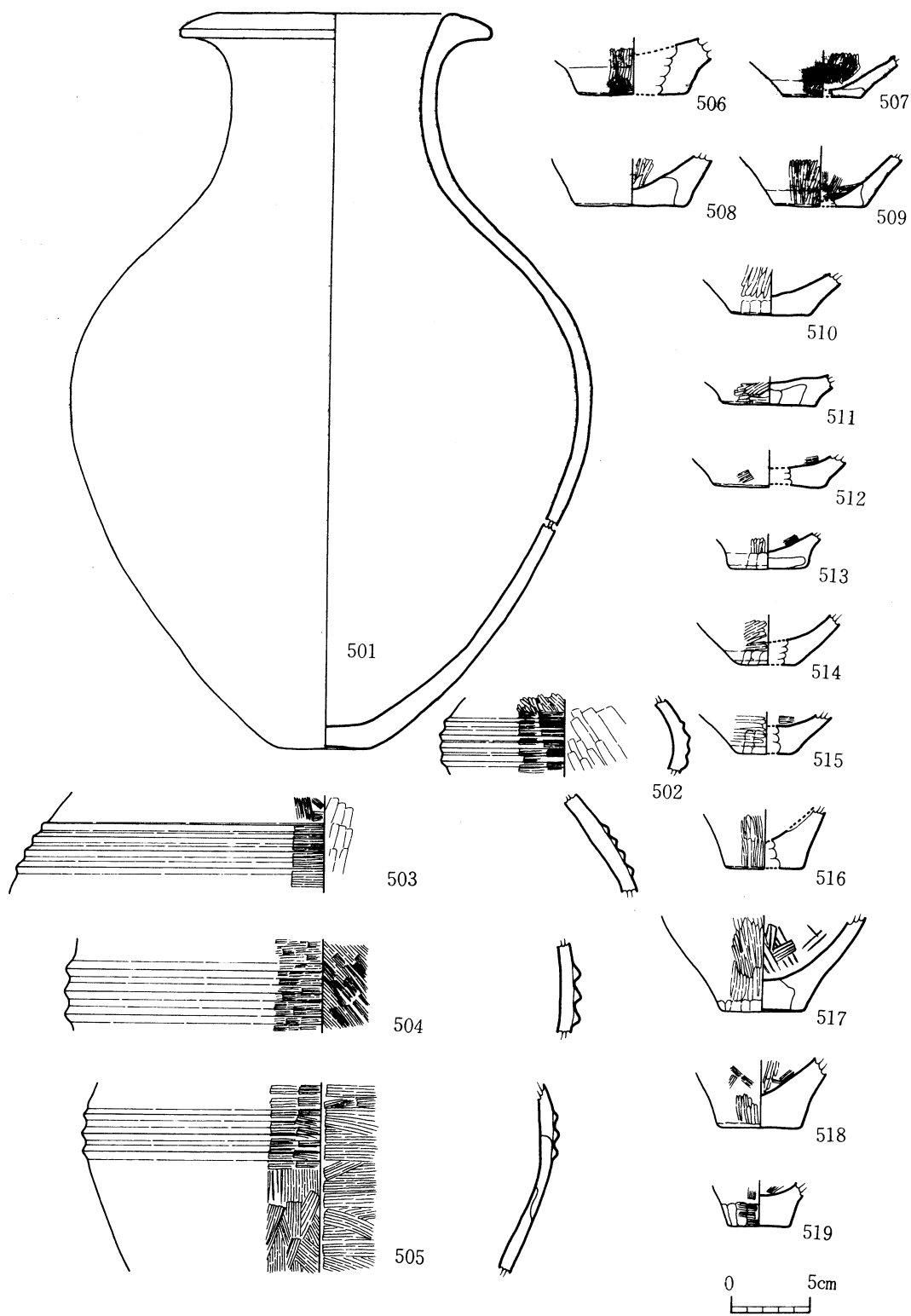
ものが1個あるのみで、胴部片はその形状から壺形土器に含め、底部は平底の形態から含めたものである。

501は、包含層出土で唯一完形に復元できたものである。器高47cm、口径14cm、最大胴部38.5cmを測る大型の壺形土器である。外反した三角形の口縁部は外方に若干垂れ下がり気味に拡張する。頸部は縮まり、肩部はナデ肩で、ほぼ中央で最大胴部をつくる。底部は、わずかに上げ底気味の平底を呈する。器内外とも、廃棄後の剝離・剝落が激しく、整形手法は不明である。502~505は、その形状から壺形土器に含めたものである。502は、胴部が円盤状に大きく張るもので、最大張部に貼付突帯文が四条巡っている。504・505も同様に、胴部最大張部に貼付突帯文を巡らすタイプである。503は、肩部に突帯文を巡らすものである。

506~519は、壺形土器の底部として取り上げた平底である。

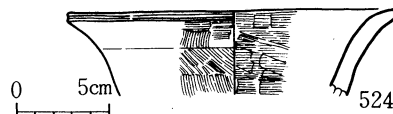
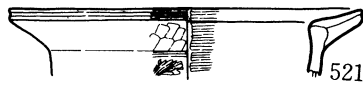
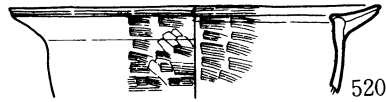
③鉢形土器 (第105図-520~524)

鉢形土器と考えられる細片が、5片出土している。壺形土器と同様に口縁部は「く」字状に



第104图 Ⅲ層出土遺物実測图(4)

外反するが、口径は20cm弱の小型である。細片のため、形態状は取り留めも無いが一応鉢形土器に類別しておく。

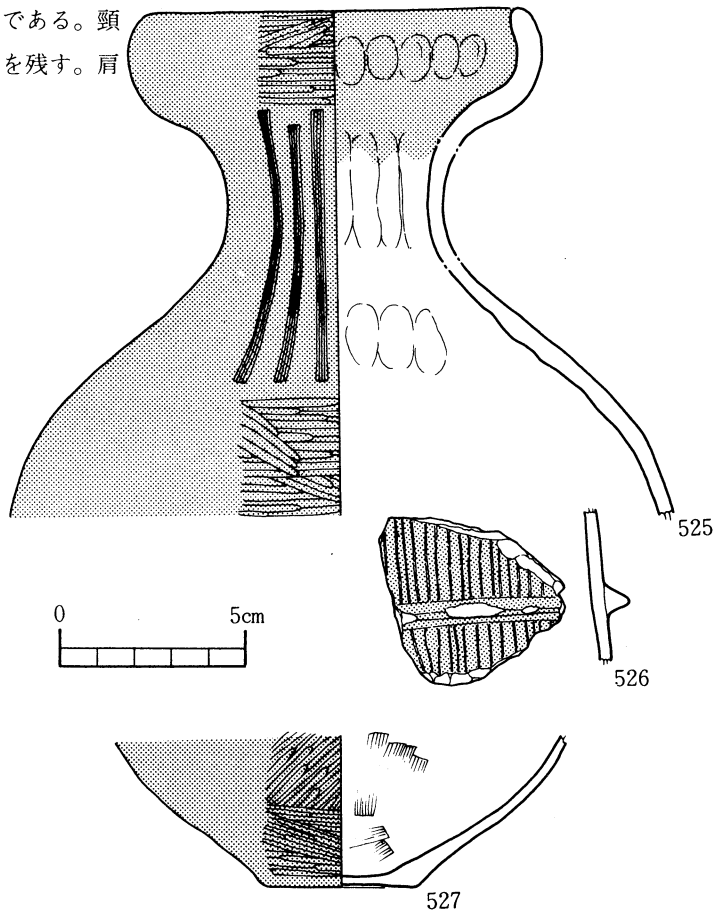


第105図 Ⅲ層出土遺物実測図(5)

③丹塗土器 (第106図-525~527)

丹塗土器は、A B 20区~A B 24区の包含層中とA B 3区・A B 8区の比較的離れた二ヶ所の区域から総数45点出土している。器形が判明するものを図化したものであるが、他の大多数は特色の少ない胴部片である。

525は、同一固体と考えられる破片から口縁付近と頸部付近と肩部付近から、復元図化したものである。口縁部は、頸部から大きく外反して立ち上がり、途中から袋状に内湾したいわゆる袋状口縁を呈するものである。頸部は強く締まり、内面には絞り痕を残す。肩部は緩やかなナデ肩が推定される。外器面は、丁寧なヘラ磨きで堅固に仕上げる。その上には、頸部から肩部にかけて縦位に暗文が施文される。さらに器面全体には、丹塗が施されている。器内面は、口縁部の袋状に内湾する部分や肩部付近はナデ整形と共に指圧痕を残す。強く締まった頸部の内面は、絞り痕が明瞭に残存する。内面は、頸部上部まで丹塗が施される。胎土は、非常に細粒で良質な白粘土を使用している。526は直線的な器面を呈する胴部片であるが、中央には三角突帯文を貼付する。器面には縦位の暗文を施し、さらに器面全体には丹塗がみられる。胎土は525とほとんど同じ



第106図 Ⅲ層出土遺物実測図(6)

である。527はC-22区から出土したもので、平底の底部である。底部下端まで丹塗が施される。器外面は、胴部付近は斜位に底部付近は横位に丁寧なヘラ磨き手法が施される。

2) 石器 (第107～109図)

石器は、包含層からは、総数13点の出土がみられた。磨製・打製石鏃、磨製・打製石斧、磨石、砥石などがある。

①磨製石鏃 (第107図-528～532)

528～530は、完成品であり、入念な研磨加工が施され、器面は非常に滑らかになっている。形状は、えぐりの浅い三角形を成す。531・532は、器面が鈍く、形状の類似から未成品と思われる。532は、周縁に整形痕を残す。

②打製石鏃 (第107図-533～535)

全面は、入念な二次加工が及ぶ。533は、両端に突起をもち、えぐりも浅い。534・535は、深いえぐりが入る。形態的に見て、534・535は本遺跡縄文時代早期例に類似し、533も早期に見られる。縄文期の所産が混入した可能性が大きい。

③剝片 (第107図-536)

④扁平打製石斧 (第108図-537)

片面に原面を残す横長剝片を素材とし、縁辺に二次加工が及ぶ。細長い撥形の全形を呈す。刃部付近に縦位の線状痕がみられ、扁平な本例を土掘具と考えれば、使用の方向と一致する。また、刃部付近の器面は、滑らかになっている。スクリーン・トーン部分は、器面が非常に滑らかとなっており、柄との装着を考えた場合、装着部分と一致する。

⑤石斧 (第109図-538)

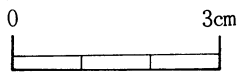
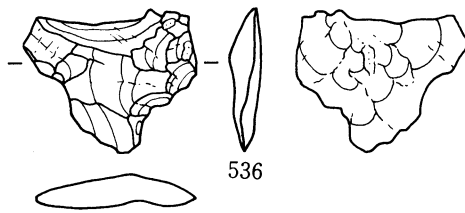
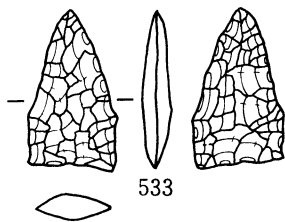
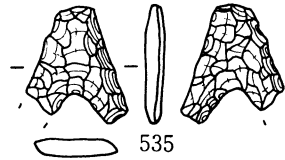
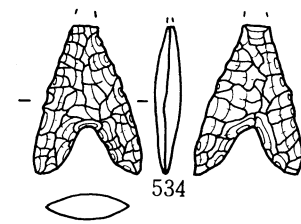
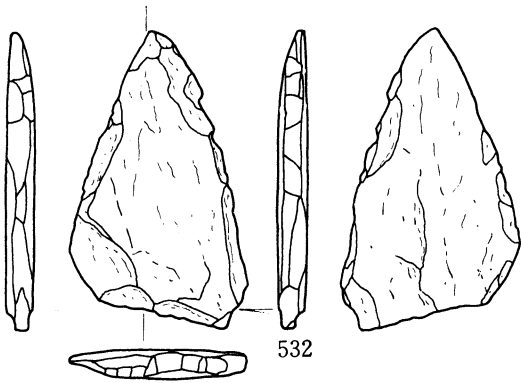
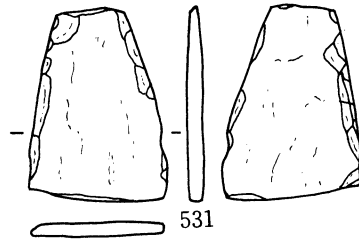
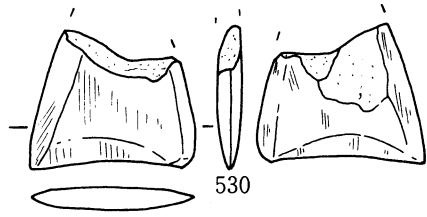
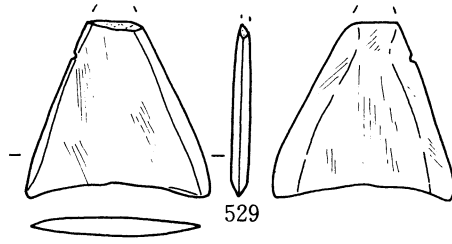
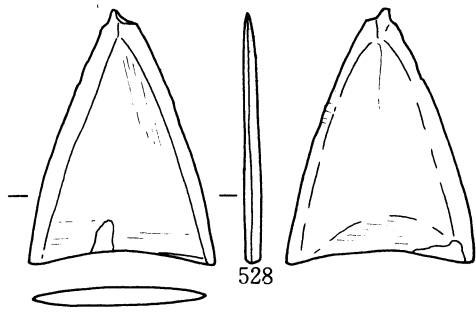
形状からみて石斧であろうが、敲打器に転用されたのであろうか、刃部にあたる部分は平たくつぶれている。

⑤磨石 (第109図-539)

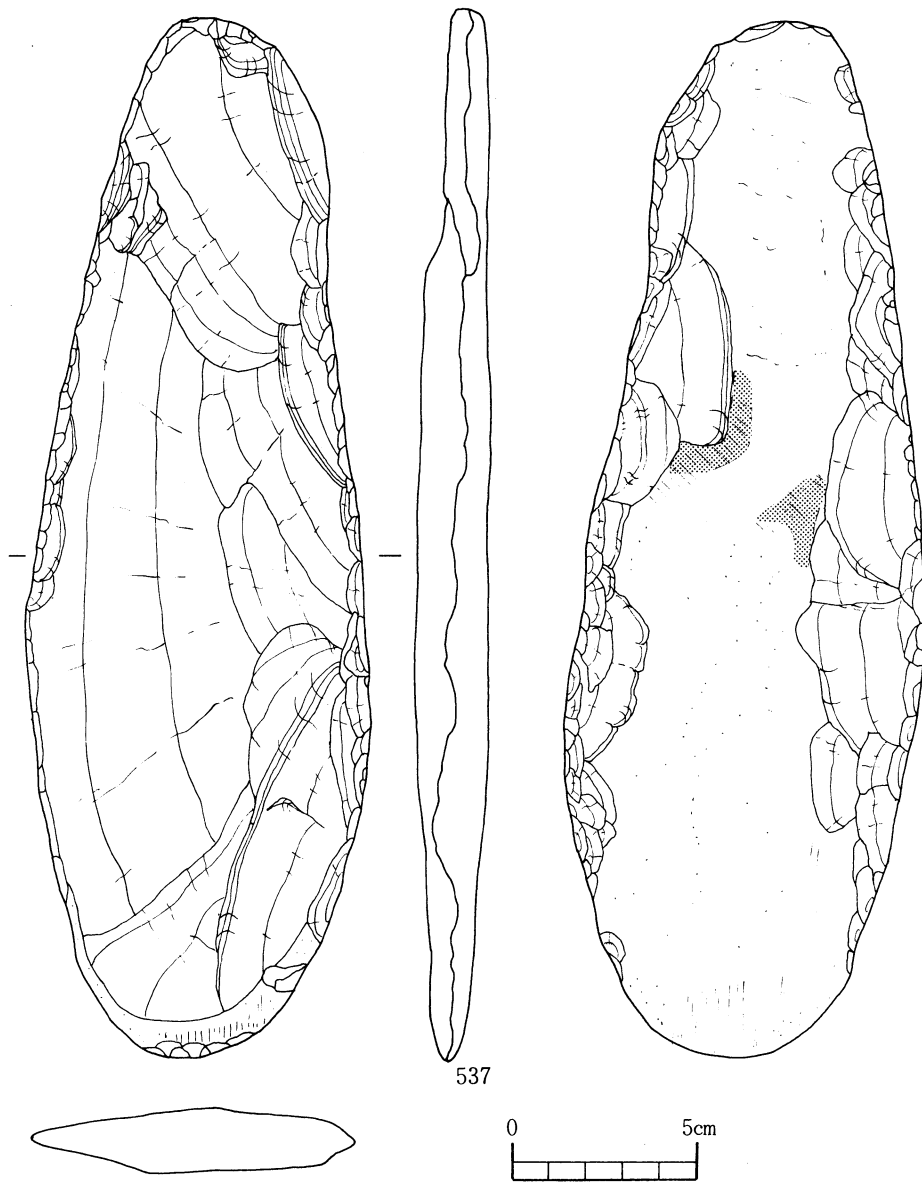
磨石の破片である。

⑥砥石 (第109図-540)

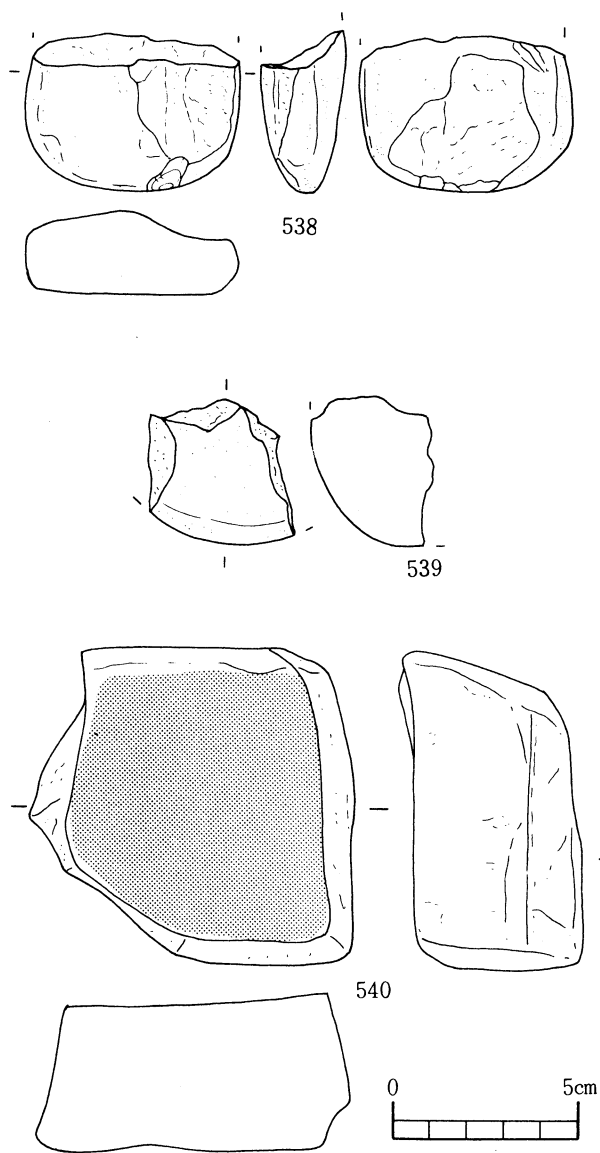
粒子の細かな石材を利用し、平坦面をもつ。スクリーン・トーン部分は、平坦でかつ器面が非常に滑らかになっている。



第107图 Ⅲ層出土遺物実測图(7)



第108図 Ⅲ層出土遺物実測図(8)



第109図 Ⅲ層出土遺物実測図(9)

第19表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(往・高・厚)cm	胎土	調土	焼成	色調	備考
402	弥生	70.42 他	住 1	壺	底部	底径 6.4	石英・長石 黒雲母・砂粒	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊦黒褐色	
404	〃	69.995他	住 2	甃	口縁部	口径 26.8	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
405	〃	70.03 他	〃	〃	〃	27.4	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦黒褐色	スス付着
406	〃	70.09 他	〃	〃	底部	底径 6.5	〃	㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色	外面剝落
407	〃	69.85	〃	〃	〃	7.8	〃	㊦ケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦明茶褐色 ㊦暗茶褐色	
408	〃	70.075	〃	〃	〃	8.2	〃	㊦ハケ→ナデ	〃	㊦茶褐色	
409	〃	70.125他	〃	〃	〃	7.8	〃	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
410	〃	70.045	〃	〃	〃	8.0	〃	㊦ミガキ	〃	㊦明茶褐色	
411	〃	69.965他	〃	壺	頸部	頸径 13.9	〃	㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色～茶褐色 ㊦暗茶褐色	
412	〃	70.01 他	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 角閃石	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦黒褐色～茶褐色 ㊦暗茶褐色	
413	〃	69.955	〃	〃	〃	3.4	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦茶褐色	
414	〃	69.95 他	〃	甃	口縁部 底部付近	〃	石英・長石 角閃石	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦黒褐色～明灰褐色 ㊦暗茶褐色	スス付着
415	〃	70.035	〃	〃	底部	底径 7.6	石英・長石 雲母・砂粒	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦明茶褐色 ㊦暗茶褐色	
416	〃	70.015	〃	高杯	脚部	器厚 1.0~1.1	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦茶褐色	
417	〃	70.075他	〃	甃	口器	径高 24.6 57.4	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目	〃	㊦黒褐色 ㊦暗茶褐色	
419	〃	70.235他	住 3	〃	口器	径高 23.2 28.2	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦茶褐色	スス付着
420	〃	70.095他	〃	〃	口縁部 胴部	口径 25.2	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦茶褐色	スス付着
421	〃	70.145	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ	〃	㊦黒褐色	
422	〃	70.18	〃	〃	口縁部	口径 34.6	〃	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗灰褐色	
423	〃	70.235	〃	〃	胴部	胴径 34.4	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	スス付着
424	〃	70.085	〃	壺	口縁部	口径 30.2	〃	㊦ハケ目 ㊦ミガキ	〃	㊦茶褐色 ㊦暗茶褐色	
425	〃	70.23	〃	〃	底部	底径 10.2	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦明灰褐色 ㊦明褐色	
429	〃	70.37	C-20ミソI	甃	口縁部	口径 53.0	〃	〃	普通	㊦暗茶褐色 ㊦	内外面共に剝落
430	〃	70.24 他	〃	〃	口縁部 胴部	〃	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	良好	㊦暗茶褐色～暗黄褐色 ㊦暗茶褐色	
431	〃	70.345他	建IミソI内	〃	〃	36.0	石英・長石 黒雲母	〃	普通	〃	内外面共に剝落
432	〃	70.235他	〃	〃	口縁部	〃	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	良好	㊦黒褐色	
433	〃	70.24	〃	〃	底部	底径 8.6	〃	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色～暗黄褐色 ㊦黒褐色	
434	〃	70.395他	〃	〃	〃	〃	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目	〃	㊦明茶褐色	
435	〃	70.14 他	〃	〃	〃	8.2	〃	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦	
436	〃	70.09	〃	壺	〃	7.6	石英・長石 黒雲母・砂粒	㊦ハケ目	普通	〃	内外面共に剝落
437	〃	70.335他	C-20ミソI	〃	復元	口径 11.0 復元高 17.3	〃	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	良好	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
438	〃	70.27 他	建IミソI	〃	口縁部	口径 26.4	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ ㊦	普通	㊦茶褐色 ㊦暗茶褐色	
439	〃	70.375	C-20ミソ2上	甃	〃	33.6	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	良好	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
440	〃	70.38 他	〃	〃	復元	口径 29.4 復元高 30.8	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色～茶褐色 ㊦茶褐色～暗茶褐色	
441	〃	70.355他	〃	〃	胴部	胴径 23.1	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦黒褐色～茶褐色 ㊦暗茶褐色	
442	〃	70.38	〃	壺	〃	37.4	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦黒褐色～茶褐色 ㊦茶褐色	
443	〃	70.35	C-21ミソ2上	〃	口縁部	口径 8.5	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦茶褐色 ㊦明灰褐色	
444	〃	70.38 他	C-20ミソ2上	〃	〃	19.0	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦暗茶褐色～暗茶褐色 ㊦明茶褐色～暗茶褐色	
445	〃	70.345他	〃	〃	完形	口径 12.0 復元高 29.7	〃	㊦ミガキ ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊦黒褐色	
446	〃	70.36他	〃	鉢	口縁部 胴部	口径 20.8	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色～暗茶褐色 ㊦黒褐色～明茶褐色	
447	〃	70.285	B-21 III	〃	口縁部	〃	〃	㊦ハケ目 ㊦ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
448	〃	70.465	C-20ミソ2上	浅鉢	〃	36.4	〃	㊦ハケ→ナデ ㊦	〃	㊦明燈褐色 ㊦暗茶褐色	

第20表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調整	焼成	色調	備考
449	弥生	70.36	C-20溝2上	壺	胴- 底部付近	胴径 41.6	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ→ナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊧	内面剥落
450	〃	70.36	B-20Ⅲ下	高杯	脚部	底径 11.2	石英・長石	㊦ミガキ ㊧	〃	㊦明灰褐色 ㊧暗灰褐色	矢羽根 スカシ
451	〃	70.35	C-20溝2上	〃	〃	〃 10.6	〃	㊦ミガキ	〃	㊦黒褐色	
452	〃	70.36	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	
453	〃	70.36	〃	〃	〃		〃	〃	〃	㊦暗灰褐色	
454	〃		建Ⅶピット5	甕	口縁部	口径 17.7	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧ハケ→ナデ	〃	㊦暗褐色 ㊧	
455	〃	70.3	円形周溝内	〃	〃	〃 29.6	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦暗褐色～暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	茶褐色 スス付着
456	〃	70.395	B-19 Ⅲ	〃	口縁部 付近	〃 50.0	〃	〃	普通	〃	内外面共に 剥落
457	〃	70.65	B-23 〃	〃	口縁部	〃 37.4	〃	㊦ハケ→ナデ	良好	㊦茶褐色 ㊧暗黄褐色	
458	〃	70.23 他	B-22 〃	〃	〃	器壁厚 0.8~1.6	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧	
459	〃	70.45	C-20 Ⅲ下	〃	〃	〃 0.8~1.1	〃	〃	普通	〃	内外面共に 剥落
460	〃		〃	〃	〃	〃 0.9~	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	良好	㊦暗褐色 ㊧暗茶褐色	
461	〃	70.62	B-23 Ⅲ	〃	突帯部	〃 1.0	石英・長石 角閃石	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦明褐色 ㊧暗茶褐色	
462	〃	69.535	Z-1 Ⅲ2-1	〃	口縁部	〃 0.95~	〃	〃	〃	㊦暗黄褐色 ㊧暗灰褐色	
463	〃	70.47	C-20 Ⅲ下	〃	口縁 ~胴部	口径 35.6	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦黒褐色～暗褐色 ㊧暗褐色	
464	〃	70.52 他	〃	〃	〃	〃 33.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧明茶褐色～暗茶褐色	
465	〃	70.335他	B-20 Ⅲ	〃	〃	〃 28.6	〃	〃	〃	㊦黄褐色～暗黄褐色 ㊧黄褐色	
466	〃	70.37 他	B-22 〃	〃	口縁部	器壁厚 0.9	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊧	〃	㊦暗茶褐色 ㊧黒褐色	
467	〃	70.41	C-19 Ⅲ下	〃	〃	〃 0.7~1.3	〃	㊦ハケ→ナデ ㊧	〃	㊦暗褐色 ㊧	スス付着
468	〃	70.35 他	B-22 Ⅲ	〃	〃	〃 0.8~1.4	〃	〃	〃	㊦暗褐色～暗茶褐色 ㊧～明灰褐色	
469	〃	70.34	A-19 Ⅲ	〃	〃	口径 20.0	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
470	〃	70.255	B-20 Ⅲ	〃	〃	〃 20.8	〃	〃	〃	㊦暗灰褐色 ㊧暗黄褐色	
471	〃	70.415	C-19 Ⅲ下	〃	胴部	胴径 18.4	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
472	〃	70.58	B-23 Ⅲ	〃	口縁部	口径 27.8	〃	〃	〃	〃	
473	〃	70.63 他	B-17 〃	〃	〃	〃 28.4	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
474	〃	70.325他	B-22 〃	〃	〃	〃 26.8	〃	〃	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧暗黄褐色～茶褐色	
475	〃	70.44 他	B-19 〃	〃	〃	〃 38.4	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧明茶褐色	
476	〃	70.45	C-19 Ⅲ下	〃	〃	〃 33.2	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗茶褐色	
477	〃	70.49	C-20 Ⅲ下	〃	〃	〃 34.0	〃	〃	〃	㊦茶褐色 ㊧暗褐色～明茶褐色	
478	〃	70.31	B-20 〃	〃	〃	〃 37.0	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	スス付着
479	〃	70.555	C-20 〃	〃	〃	〃 26.0	石英・長石 角閃石	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧暗黄褐色	
480	〃	70.505他	C-19 〃	〃	〃	〃 32.2	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦黒褐色～明茶褐色 ㊧暗茶褐色	
481	〃	70.37 他	B-22 Ⅲ	〃	〃	〃 34.0	〃	〃	〃	㊦暗褐色～暗黄褐色 ㊧～茶褐色	
482	〃	70.545他	B-23 〃	〃	〃	〃 32.3	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊧明茶褐色	
483	〃	70.25	A-20 Ⅲ下	〃	〃	〃 22.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色～暗黄褐色 ㊧暗茶褐色	スス付着
484	〃	70.59 他	B-20 Ⅲ	〃	胴部	胴径 36.6	〃	〃	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧暗茶褐色	
485	〃	70.44	C-20 Ⅲ下	〃	〃	〃 29.8	〃	〃	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊧暗茶褐色	スス付着
486	〃	70.48 他	C-20 Ⅲ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊦茶褐色～暗茶褐色 ㊧黒褐色～明灰褐色	
487	〃	70.41	B-20 Ⅲ下	〃	〃	〃 23.0	〃	〃	〃	㊦暗灰褐色 ㊧	
488	〃	70.49	C-19 〃	〃	〃	〃 22.2	石英・長石 角閃石	〃	〃	㊦明灰褐色 ㊧	
489	〃	70.445	B-21 Ⅲ	〃	〃	〃 18.8	〃	㊦ミガキ ㊧ハケ→ナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊧	
490	〃	70.42	〃	〃	底部	底径 8.2	石英・長石 黒雲母	〃	普通	㊦暗灰褐色	外面若干剥 落

第21表 遺跡出土遺物一覧表

番号	類別	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎土	調土	焼成	色調	備考
491	弥生	70.26	B-20 III	甕	底部	底径 9.0	石英・長石 黒雲母	㊦ケズリーナデ ㊦ハケーナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	スス付着
492	〃	70.455	C-19 III下	〃	〃	〃 6.6	〃	〃	〃	〃	
493	〃	70.45	B-14 III	〃	〃	〃 9.3	〃	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗褐色	内面欠落
494	〃	70.45	C-20 III下	〃	〃	〃 8.4	石英・長石 角閃石・砂粒		普通		内外面共に 剥落
495	〃	70.355	A-22 III	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 小礫	㊦ハケーナデ	良好	㊦明黄褐色	内面欠落
496	〃	70.41	C-21 III	〃	〃	〃 8.0	石英・長石 黒雲母	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
497	〃	70.62	B-23 III	〃	〃	〃 8.0	〃	〃	〃	㊦暗黄褐色	内面欠落
498	〃	70.38	B-20 III	〃	〃	〃 10.2	〃	〃	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
499	〃	70.55	B-23 〃	〃	〃	〃 4.2	〃	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
500	〃	70.665	〃	〃	〃	〃 6.2	〃	㊦ケズリーナデ ㊦ハケーナデ	〃	㊦茶褐色 ㊦暗茶褐色	
501	〃	70.17	A-20 〃	壺	復元 復元高	復元口径 47.0 復元高 14.0	〃	㊦ハケーナデ	〃		
502	〃	70.375他	C-21 III下	〃	胸部	胎径 16.0	石英・長石 黒雲母	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色	
503	〃	70.43 他	C-19 〃	〃	〃	〃 39.8	〃	㊦ミガキ	普通	㊦暗茶褐色	内面剥落
504	〃	70.305他	B-22 III	〃	〃	〃 32.8	〃	㊦ハケーナデ ㊦ハケ目	良好	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦暗茶褐色	
505	〃	70.39 他	C-19 III下	〃	〃	〃 30.0	〃	㊦ハケ目 ㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
506	〃	70.48	〃	〃	底部	底径 7.0	石英・長石 黒雲母・砂粒	㊦ケズリーナデ ㊦ナデ	〃	㊦暗褐色 ㊦明灰褐色	
507	〃	70.37	B-22 III	〃	〃	〃 5.0	〃	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦暗黄褐色	
508	〃	70.305	A-22 〃	〃	〃	〃 7.2	〃	㊦ハケーナデ	普通	㊦暗褐色	外面剥落
509	〃	70.54	B-23 〃	〃	〃	〃 6.8	石英・長石 黒雲母	㊦ハケ目 ㊦ハケーナデ	良好	㊦暗茶褐色 ㊦暗黄褐色	
510	〃	70.6	B-22 〃	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 角閃石	㊦ハケーナデ	〃	㊦茶褐色	
511	〃	70.33	〃	〃	〃	〃 6.2	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊦ハケーナデ	〃	㊦茶褐色 ㊦暗褐色	
512	〃	70.37	B-21 〃	〃	〃	〃 7.0	〃	㊦ハケーナデ	普通	㊦暗灰褐色 ㊦茶褐色	内外面若干 剥落
513	〃	70.565	B-22 〃	〃	〃	〃 5.2	〃	〃	良好	㊦暗褐色	
514	〃	70.42	B-19 〃	〃	〃	〃 3.8	〃	㊦ミガキ ㊦ハケーナデ	〃	㊦黒褐色～暗茶褐色 ㊦暗褐色～明茶褐色	
515	〃	70.495	B-22 〃	〃	〃	〃 3.4	〃	〃	〃	㊦暗褐色 ㊦明茶褐色	
516	〃	70.39	B-21 〃	〃	〃	〃 5.0	石英・長石 角閃石	㊦ミガキ	〃	㊦茶褐色	内面欠落
517	〃	70.375	B-20 〃	〃	〃	〃 5.5	石英・長石 黒雲母	㊦ミガキ ㊦ハケ目	〃	㊦明茶褐色 ㊦茶褐色	
518	〃	70.475	B-17 〃	〃	〃	〃 5.2	〃	㊦ミガキ ㊦ハケーナデ	〃	㊦暗灰褐色 ㊦暗褐色	
519	〃	〃	C-20 III下	〃	〃	〃 4.0	〃	㊦ナデ ㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
520	〃	70.2	A-21 〃	鉢	口縁部	口径 19.8	〃	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦明茶褐色	
521	〃	70.385	B-19 III	〃	〃	〃 18.8	〃	〃	〃	㊦暗褐色～茶褐色 ㊦暗褐色～明茶褐色	
522	〃	70.6	B-17 〃	〃	〃	〃 17.0	〃	〃	〃	㊦暗褐色～明茶褐色 ㊦明茶褐色	
523	〃	70.425	C-20 III下	〃	〃	〃 23.3	〃	㊦ミガキ ㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色 ㊦茶褐色	
524	〃	70.495	B-19 III	〃	〃	〃 17.5	石英・長石 角閃石	㊦ハケーナデ	〃	㊦暗茶褐色	
525	〃	70.37 他	B-22 III	壺	〃	〃 9.9	微粒	㊦ミガキ	〃	㊦赤褐色	円塗り
526	〃	70.04	B-8 III	〃	胸部	器壁厚 0.4~0.6	〃	円塗り ヘラミガキ	〃		〃
527	〃	70.31	C-22 III下	〃	底部	底径 4.0	〃	〃	〃	㊦赤褐色 ㊦暗茶褐色	〃

第22表 出土石器一覧表

番号	器種	出土区	層	標高	石材	最大長	最大幅	重さ	備考
403	砥石	住1		70.34	砂岩	5.7	3.7	42.57	
418	台石	住2			半花崗岩	32.9	22.2	11,550.0	
426	石鏃	住3		70.105	頁岩	2.6	2.5	2.07	
427	石皿	〃		70.09	半花崗岩	21.6	14.2	3,800.0	
428		〃		70.23	軽石	11.9	8.4	150.0	
528	磨製石鏃	B-19	Ⅲ	70.41	粘板岩	3.6	2.7	2.75	
529	〃	C-20	Ⅲ下	70.435	〃	2.5	2.6	1.96	
530	〃	〃	〃	70.54	〃	2.0	2.4	1.94	
531	〃	C-21	〃	70.3	千枚岩	2.8	2.0	1.06	
532	〃	〃	〃	70.315	〃	4.2	2.6	5.23	
533	〃	B-18	Ⅲ	70.38	黒耀石	2.4	1.5	1.66	
534	〃	B-20	Ⅲ下	70.11	〃	2.2	1.3	0.87	
535	〃	B-22	Ⅲ	70.33	〃	1.7	1.4	0.50	
536	〃	B-17	〃	70.48	〃	2.4	2.2	1.87	
537	磨製石斧	B-20	Ⅳ上	70.16	粘板岩	28.4	9.5	663.0	
538	〃	A-21	Ⅲ下	70.145	砂岩	4.2	5.9	56.0	
539	磨石	A-6	Ⅲ下	70.04	巨晶花崗岩	4.0	4.0	67.0	
540		B-12	Ⅳ上	70.49	砂岩	8.65	8.6	577.0	

第Ⅳ章 近世墓の調査

第1節 近世墓の概要

近世墓は、A B12区～13区とA B20区の二ヶ所で計7基発見された。そのうちのA B12～13区は、墓壙が密集して検出されており、さらに用地外の南側に延びることが想定されている。墓壙の検出状態から、墓所の可能性が考えられる。A B20区では、単独に2基が検出された。特に、A B19区からA B20区ではその後の戦時中の遺構が検出されており、近世墓との関係が興味深い。これらの近世墓からは、古銭、ガラス玉、鉛玉、楠など多数の副葬品がみられる。

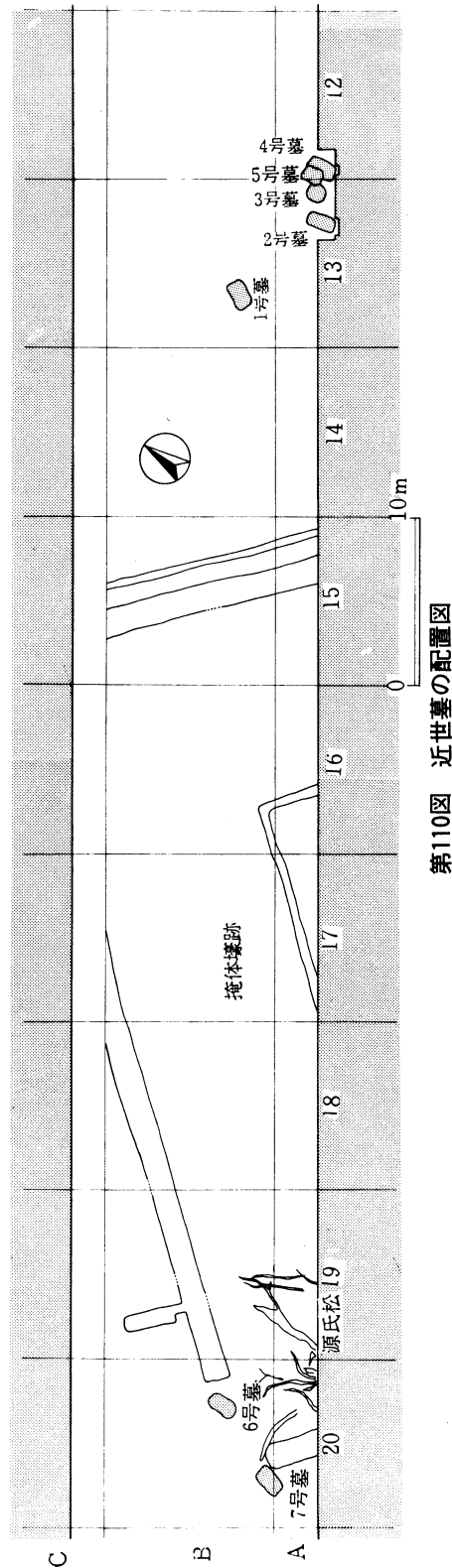
1 1号墓 (第112図)

1号墓は、B13区の南側に検出され、2号墓から5号墓までのグループとは単独に若干離れて位置している。1号墓の形状は、長さ1.71m×幅1.00mの長方形プランを呈し、検出面からの深さ1.12mを測る。墓壙の主軸は、N-36°-Eで、ほぼ北東方向を向く。墓壙内には、人骨は遺存していない。

墓壙の床面付近には、古銭6枚と豆板銀1個の計7個が埋納されていた。古銭は、すべて「寛永通寶」である。豆板銀は、一部を三日月状に欠いた不変形な楕円状を呈し、「是」と読める押印が施されている。最大長1.80cm、最大幅1.45cm、重さ6.79gの小粒である。

2 2号墓 (第114図)

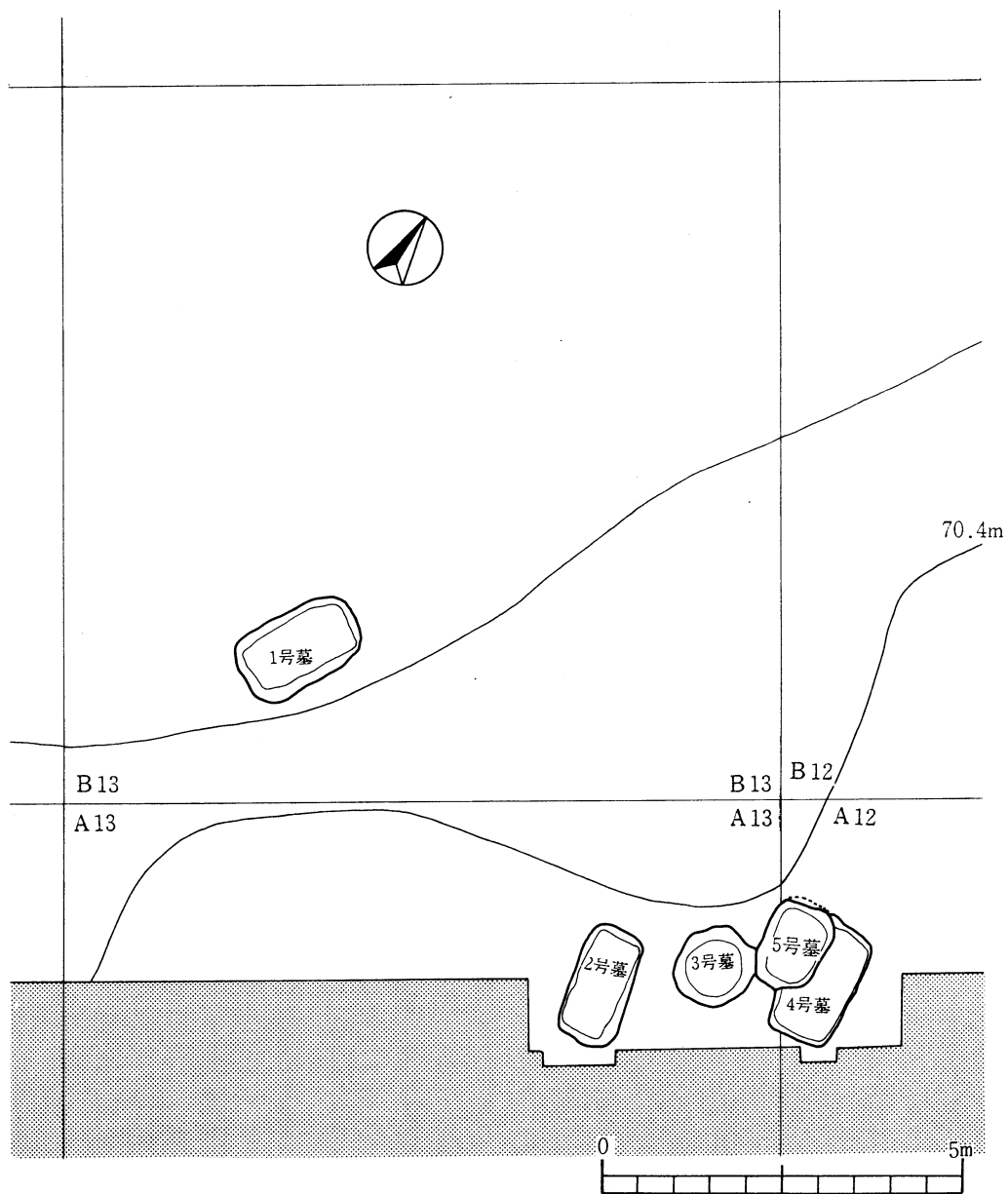
2号墓は、A13区の北側に位置し、東側の3号墓に隣接して検出された。2号墓の形状は、長さ1.62m×幅0.80mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは



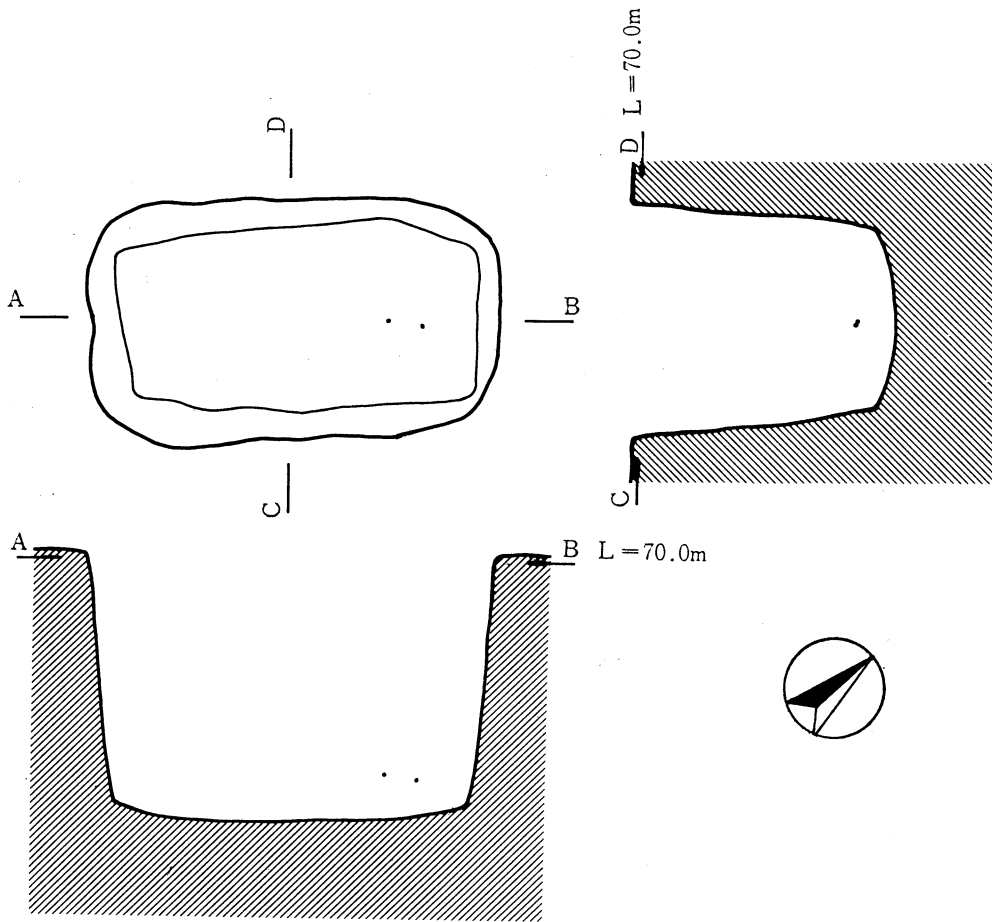
第110図 近世墓の配置図

1.24mを測る。墓壙の主軸は、 $N-8^{\circ}-W$ のほぼ北方向を向く。墓壙内には、人骨が遺存しているが保存状態は良くない。

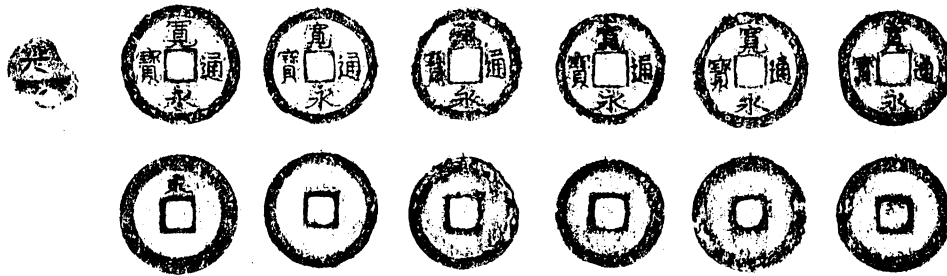
壙の床面付近には、古銭7枚とガラス玉1個が埋納され、他に釘状の鉄片がみられた。古銭は、すべて「寛永通寶」である。ガラス玉は、直径0.7cmの小粒のもので、中央に数珠状の穿孔が施されている。



第111図 墓壙配置図



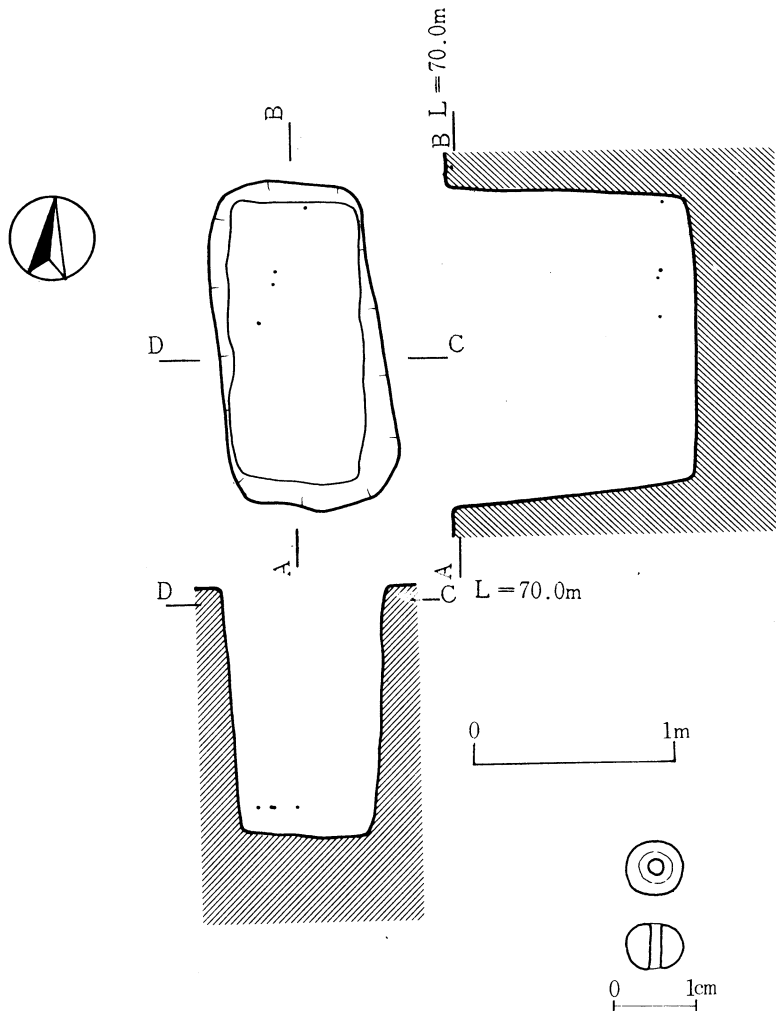
第112図 1号墓実測図



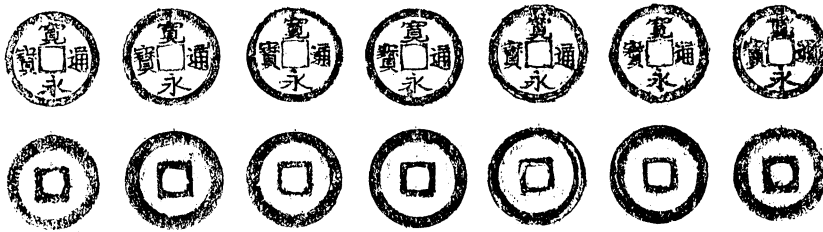
第113図 1号墓出土古銭

1号墓 出土銭一覧

		22	23	24	25	26	27
銭名	豆板銀	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	1.80	2.52	2.44	2.37	2.31	2.42	2.43
横長cm	1.45	2.52	2.45	2.34	2.29	2.46	2.44
重さg	6.79	2.27	2.22	2.57	2.30	2.37	3.11



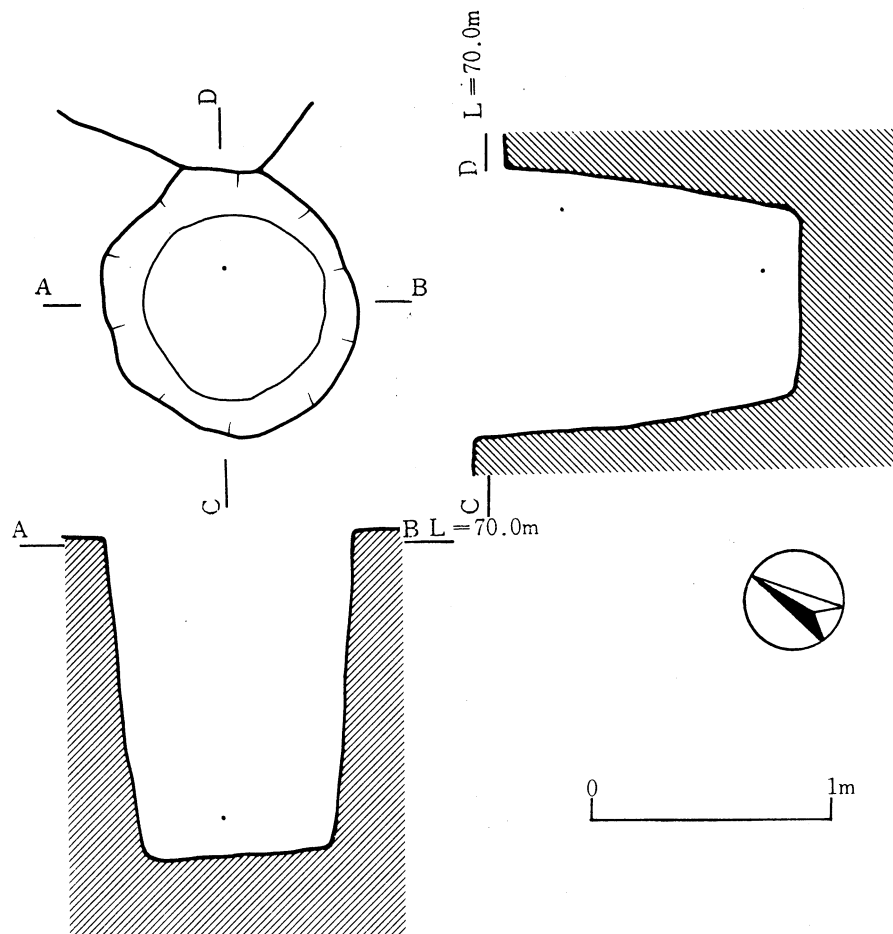
第114図 2号墓実測図 ガラス玉実測図



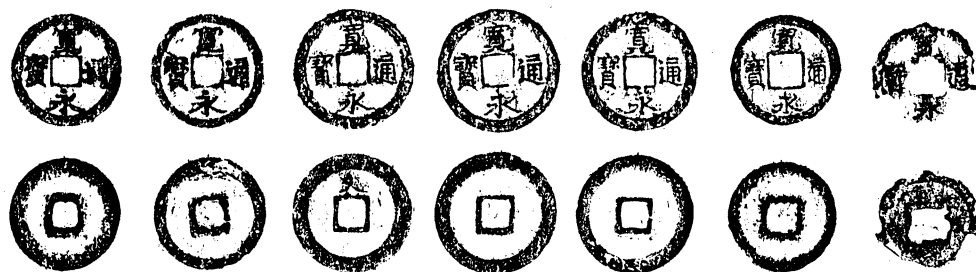
第115図 2号墓出土古銭

2号墓 出土銭一覧

	8	9	10	11	12	13	14
銭名	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.39	2.47	2.40	2.45	2.45	2.47	2.37
横長cm	2.39	2.48	2.40	2.45	2.46	2.48	2.34
重さg	3.11	3.25	2.77	3.71	3.71	3.30	3.09



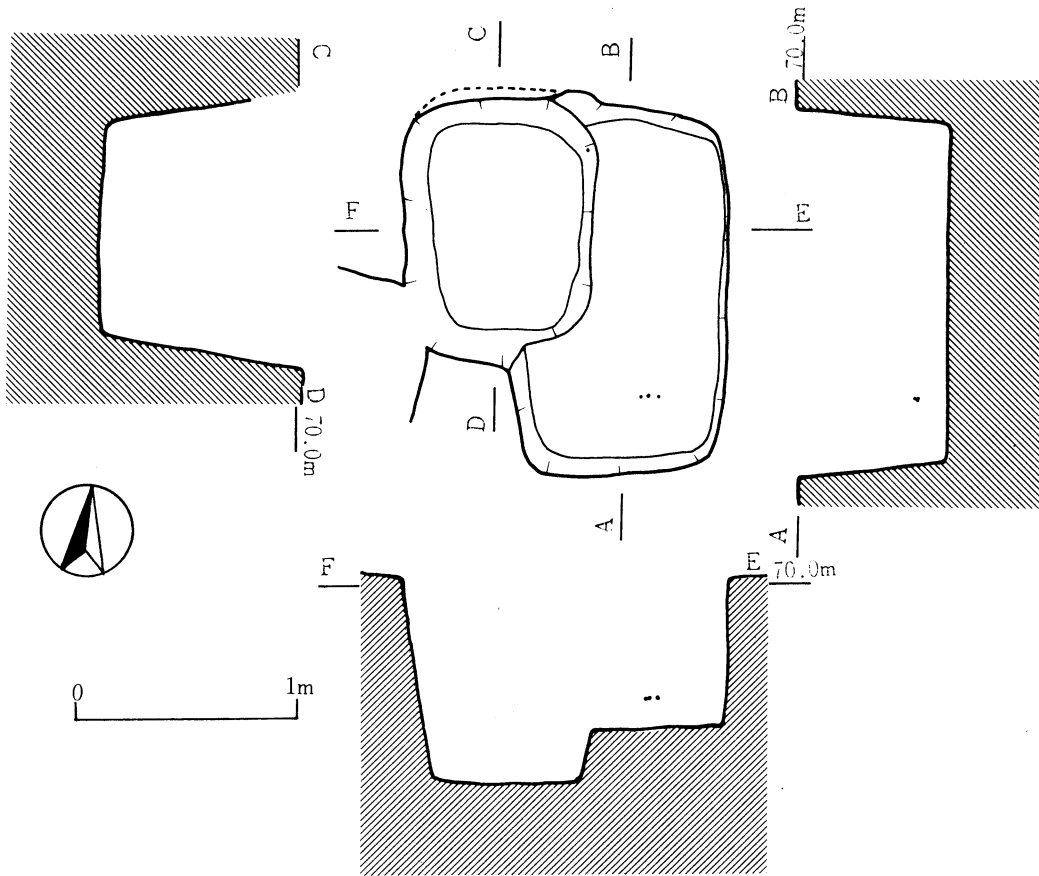
第116図 3号墓実測図



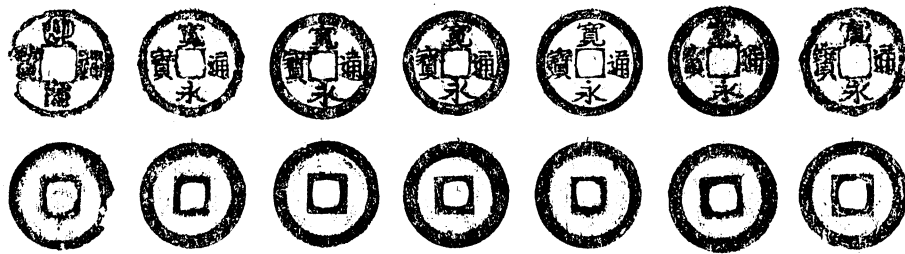
第117図 3号墓出土古銭

3号墓 出土銭一覧

	15	16	17	18	19	20	21
銭名	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.36	2.37	2.53	2.58	2.47	2.30	2.10
横長cm	2.35	2.36	2.52	2.57	2.47	2.30	2.27
重さg	2.27	1.91	3.03	2.32	2.23	1.75	1.43



第118図 4号墓・5号墓実測図



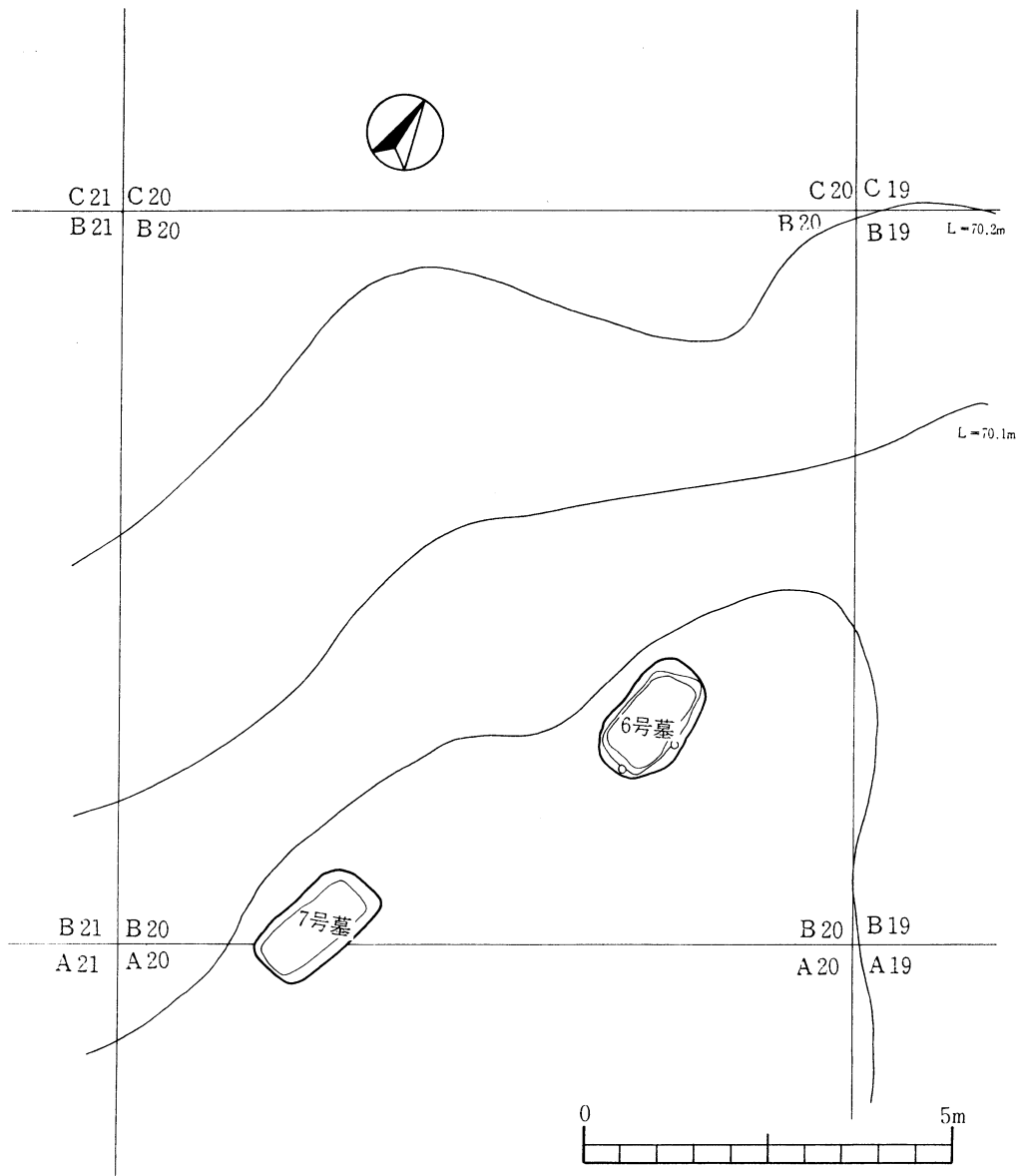
第119図 4号墓・5号墓出土古銭

4号墓 出土銭一覧

	1	2	3	4	5	6	7
銭名	明道元寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶	寛永通寶
縦長cm	2.46	2.45	2.43	2.44	2.46	2.52	2.50
横長cm	2.46	2.45	2.43	2.48	2.45	2.52	2.50
重さg	2.40	2.91	3.14	3.53	3.24	3.24	2.50

3 3号墓 (第116図)

3号墓は、A13区の東側寄りに位置し、2号墓と4号・5号墓に挟まれて検出された。2号墓の形状は、直径1.11m×1.04mの円形プランを呈し、検出面からの深さは1.24mを測る。今回発見された墓壙のなかでは、唯一の円形タイプである。墓壙内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。



第120図 墓壙配置図(2)

墓壇の床面付近には、古銭7枚が埋納されている。古銭は、すべて「寛永通寶」である。

4 4号墓 (第118図)

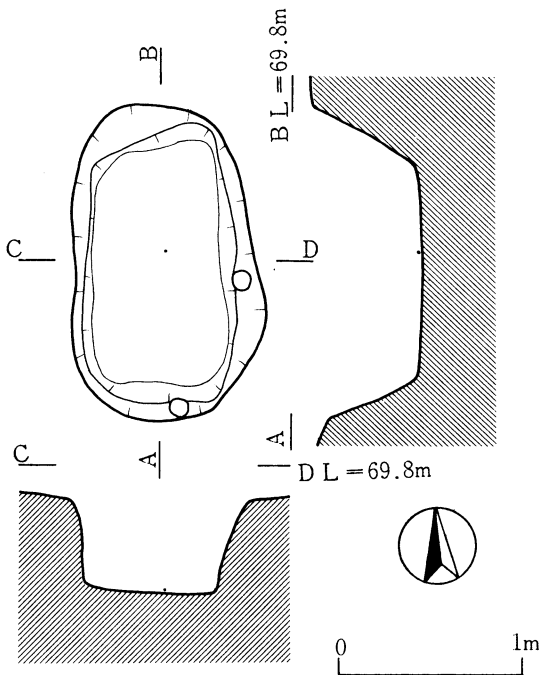
4号墓は、A12区の西側に位置し、5号墓に西側の側辺が切られた状態で検出された。今回発見された墓壇では、最も東側に位置する。4号墓の形状は、長さ1.65m×幅1.00mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.67mを測り浅い。墓壇の主軸は、N-7°-Wのほぼ北方向を向く。墓壇内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。

墓壇の床面付近には、古銭7枚のほか楕状の木片が埋納されている。古銭は、1枚は「明道元寶」で、他の6枚は「寛永通寶」である。楕は、約2cm程度の長さの歯の部分が残存している。塗漆などはみられない。

5 5号墓 (第118図)

5号墓は、A12区とA13区の境に検出され、東側の側辺は4号墓を切っている。3号墓と4号墓に挟まれた位置で、4号墓を切った状態で検出された。5号墓の形状は、長さ1.25m×幅0.84mの長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.92mを測る。今回発見された方形プランの墓壇では、最も規模が小さい。墓壇の主軸は、N-5°-Wのほぼ北方向を向く。墓壇内には、保存状態は良くないが人骨は遺存している。

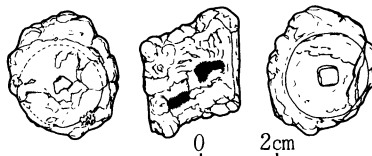
床面からは古銭などの出土はまったく無く、人骨のみの出土であった。



6 6号墓 (第121図)

6号墓は、B20区に検出された。1号墓から5号墓のグループとは約70m程度離れており、別な墓所が考えられる。6号墓の南5mに、7号墓が位置する。6号墓の形状は、長さ1.70m×幅0.97mの少し楕円状の長方形プランを呈し、検出面からの深さは0.60mを測

第121図 6号墓実測図



第122図 6号墓出土古銭

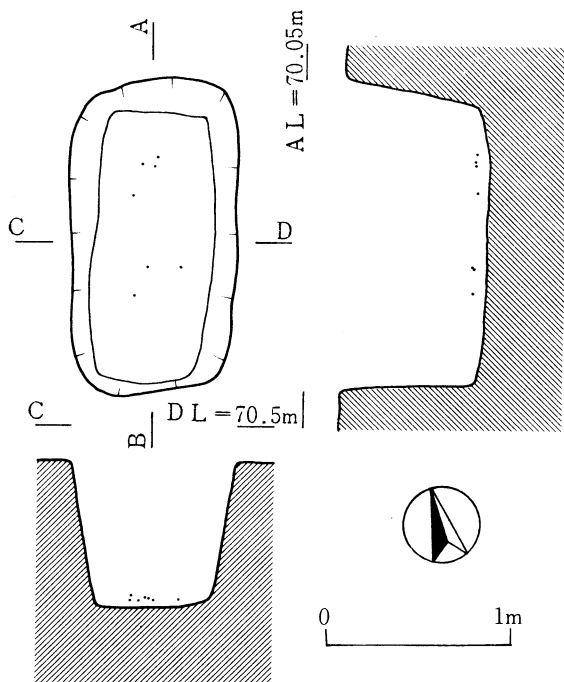
り最も浅い。墓壇の主軸は、N-7°-Eのほぼ北方向を向く。墓壇内には、人骨は遺存していない。

墓壇の床面付近には、古銭17枚程度が付着したまま出土した。さらに、古銭の袋と考えられる布痕が、鍔上面に確認される。現在のところ銅貨の遊離は出来ていないが、最上部は「洪武通寶」と読み取れるものである。これまで一墓壇内の出土古銭は7枚が一般的であったが、6号墓は17枚と最も多く、また、明銭の「洪武通寶」が含まれている点などから、近世墓との相違が指摘される。

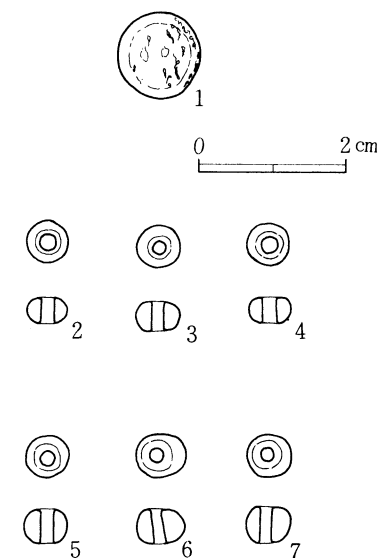
7 7号墓 (第123図)

7号墓は、A20区とB20区の境で、6号墓のほぼ南側の位置に検出された。7号墓の形状は、長さ1.70m×0.90mの長方形プランを呈し、深さは0.79mを測る。墓壇の主軸は、N-15°-Eで北方向からわずかに東を向く。墓壇内には、人骨は遺存していない。

墓壇の床面付近からは、鉛玉(註1)1個とガラス小玉6個の計7個が出土した。鉛玉は、直径約1.20cmの大きさを測り、ガラス小玉は直径0.5cm~0.65cmと小さい。小玉は、直径約1.5mm程度の大きさの穿孔がある。ガラス小玉には、透明度の強いものと不透明なものに分かれる。



第123図 7号墓実測図



第124図 7号墓出土ガラス玉実測図

第2節 鹿屋市前畑遺跡出土の近世人骨

小片丘彦・峰 和治（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座）

鹿屋市前畑遺跡の発掘調査で、1987年8月に検出された近世の土壙墓5基のうち4基に人骨が遺存していた。今回、その人骨を調査する機会を与えられたので、ここに概要を報告する。

<2号墓人骨>

脳頭蓋、歯および下肢骨が断片的に遺存する。脳頭蓋では、矢状縫合と右ラムダ縫合の周辺部および左右側頭骨だけが消失をまぬがれ、原形をとどめている。骨壁は全体に厚くはないが、正中矢状頭頂弦長122mm、ラムダ-右アステリオン間距離98mmと径は大きい。観察可能な頭蓋三主縫合には内外板ともに閉鎖は見られない。歯は、顎骨と歯根が腐食していたため、下記の歯式に示す22個（歯種不明1を含む）の歯冠だけが遊離した状態で遺存していた。

7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7
7 6 5 4 1		3 6

咬耗は大部分が Martin の2度であるが、第2大臼歯の象牙質露出は軽微である。齶蝕は見られない。

体肢骨は腐食が著しく、わずかに右側の大腿骨と脛骨が同定できただけである。ただ、この二骨が平行して検出されたことから、膝関節は屈曲状態であったことがうかがわれ、頭蓋と下肢骨の出土位置が離れていることや、この土壙の底が長径約1.5mの長方形であることを考え合わせると、上体は仰臥または側臥で伸展し、下肢だけを屈曲した埋葬姿勢が推測される。

頭蓋の諸径、縫合、歯の咬耗状態などから、本人骨は壮年男性と考えられる。

<3号墓人骨>

脳頭蓋、下顎体および体肢骨の断片が遺存する。脳頭蓋は底を欠くものの概形はよく保存されている。計測値と非計測的小変異の有島を表に示す。頭長が大きく(187mm)、頭蓋長幅示数(74.3)は長頭型の下限に入る。肩間や眉弓の隆起は破損のため観察できないが、乳様突起は頑丈で、後頭隆起も認められる。三主縫合は、矢状縫合の内板前方部で閉鎖が始まっている以外はすべて離開している。下顎骨は、右小臼歯部から左大臼歯部までの下顎骨が遺存する。歯は上下顎とも全く検出されなかったが、下顎の歯槽の状態は次のとおりである。

// // ● ○ ○ ●	● ● ● ● ● ● ● ●
(// : 歯槽破壊、● : 歯槽閉鎖、○ : 死後脱落・歯槽開放)	

3 2 | の歯槽窩は拡大しており、3 の歯槽閉鎖は不完全である。

体肢骨では左上腕骨、左右大腿骨および左脛骨の各骨体部破片が同定できる。左大腿骨体の上部は、破損のため矢状径が計測できないものの横径は34mmと幅広く、扁平性がうかがわれる。脛骨体中央部の断面形は Hrdlicka のV型を呈し、扁平とはいえない。

頭蓋の径、縫合や歯槽の状態、体肢骨の大きさなどから、本個体は熟年男性と推定される。

なお、本例も保存不良のため埋葬姿勢の確定は難しいが、左の下肢骨が膝関節を屈曲させた立て膝の状態で検出され、頭蓋がそのすぐ脇に位置していたことから、坐棺か早桶に屈身状態で納められたものと考えられる。これは、円形掘り込みという土壌の形態ともよく合った姿勢といえる。

< 4号墓人骨 >

左側の頭頂骨、側頭骨および後頭骨の一部が遺存するだけである。本墓からは櫛が出土しており、女性の可能性が高いが、性判定に有用な人骨の部位は欠失している。脳頭蓋の骨壁の厚さは中程度で、側頭骨錐体の大きさや形状から推して、成人とみてよいであろう。なお、頭頂切痕骨（左）が認められる。埋葬姿勢は不明である。

< 5号墓人骨 >

4号墓の北西隅を切り取るように掘り込まれた長方形土壌墓で、脳頭蓋、歯および下肢骨が断片的に遺存する。脳頭蓋では、頭頂部と頭蓋底を大きく欠損し、計測可能な部位はほとんどない。眉間や眉弓の隆起はほとんどなく、鼻根も平坦で、前額部の立ち上がりは急である。両側とも外耳道骨瘤の形成は見られない。顎骨が腐食しているため、次に示す遺存歯はすべて遊離歯である。

8	6 5	3		1	3	8
	4 3			4 5		

咬耗は6]が Martin の3度、8]8が1度、他歯は概ね2度である。5]には遠心隣接面齧蝕が、8]には咬合面小窩齧蝕がある。大臼歯には顕著な歯石沈着が見られる。

部位を同定できる体肢骨としては、左寛骨片と左右大腿骨体上部片が遺存する。計測はできないが、大腿骨体は細いようである。

前頭骨の形状、遺存歯の咬耗度および大腿骨の大きさを総合して、本個体は壮年後半期の女性とみられる。

埋葬姿勢としては、出土時の各骨の配置から、上体を仰臥または側臥で伸展し、下肢を屈曲させた状態が考えられる。

おわりに

近年、南九州地域（鹿児島県本土および宮崎県）においても近世の人骨資料は徐々に増えている。主な出土例としては、発掘年度順に枕崎市松之尾遺跡（中世末～近世）、川内市成岡・

西ノ平遺跡、宮崎学園都市堂地東遺跡、川内市麦之浦貝塚、大口市広徳寺跡古墓・王城古墓、大根占町出口遺跡、都城市貴船寺跡などの諸遺跡があげられよう。しかし、そのほとんどが深い墓壙への埋葬であるため人骨の遺存状況は概して悪く、南九州近世人に共通する特徴をつかむところまでには至っていない。わずかに頭蓋長幅示数に関しては、長頭に傾く個体の多いことが指摘されている。江戸や大阪などの大都市部で大量に出土した近世庶民の頭蓋は、長頭の中世人から現代人へと短頭化していく過程の途上にあつて、長幅示数の平均値は概ね中頭型の範囲に属す。一方、非都市部あるいは農山漁村の近世人については、中世人的特徴のひとつである長頭性を色濃く残していたのではないかということが、近年の人骨資料の積み重ねで明らかになりつつある。従来南九州人については、弥生時代人骨と現代人の資料をもとに短頭性が強調されてきただけに、非都市部の近世人骨を追加する意味とも合わせて、当地域での近世墓調査に際してさらに保存の良い人骨の出土が期待される。

表1 前畑遺跡近世墓出土人骨資料

	墓壙の形	性	年齢	埋葬姿勢
2号墓	方	男性	壮年	仰臥または側臥、下肢屈曲
3号墓	円	男性	熟年	屈身
4号墓	方	女性	成人	不明
5号墓	方	女性	壮年	仰臥または側臥、下肢屈曲

表2 前畑遺跡3号墓人骨の頭蓋計測値・示数

1	頭蓋最大長	187	8/1	頭蓋長幅示数	74.3
8	頭蓋最大幅	139	20/1	頭長耳高示数	62.6
9	最小前頭幅	92	20/8	頭幅耳高示数	84.2
10	最大前頭幅	110	9/10	横前頭示数	83.6
11	両耳幅	124	9/8	横前頭頭頂示数	66.2
12	最大後頭幅	106	26/25	前頭矢状弧示数	34.2
24	横弧長	322	27/25	頭頂矢状弧示数	33.9
25	正中矢状弧長	380	28/25	後頭矢状弧示数	31.8
26	正中矢状前頭弧長	130	27/26	矢状前頭頭頂示数	99.2
27	正中矢状頭頂弧長	129	28/26	矢状前頭後頭示数	93.1
28	正中矢状後頭弧長	121	28/27	矢状頭頂後頭示数	93.8
29	正中矢状前頭弧長	117	29/26	矢状前頭示数	90.0
30	正中矢状頭頂弧長	117	30/27	矢状前頭示数	90.7
31	正中矢状後頭弧長	104	31/28	矢状後頭示数	86.0

表3 前畑遺跡3号墓人骨の頭蓋非計測的小変異

	右	左
ラムダ小骨	—	—
ラムダ縫合骨	—	—
横後頭縫合痕跡	—	—
アステリオン小骨	—	—
頭頂切痕骨	—	—
翼上骨	△	—
前頭縫合残存	—	—
眼窩上神経溝	—	—
外耳道骨瘤	—	—

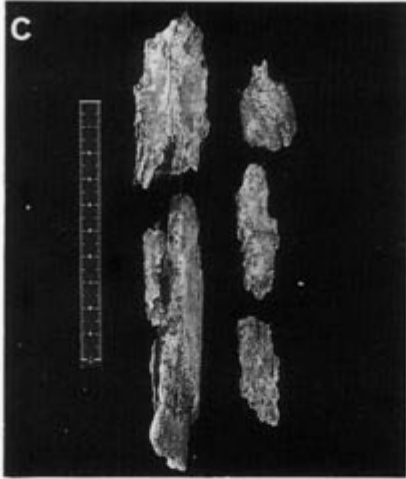
—：なし △：観察不能



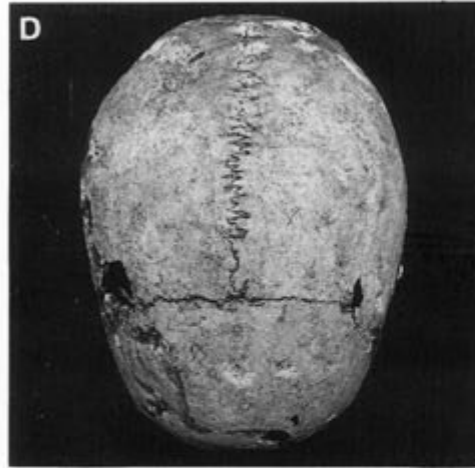
A



B



C



D



E



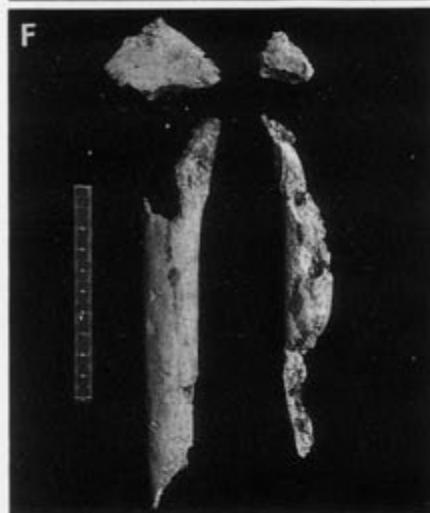
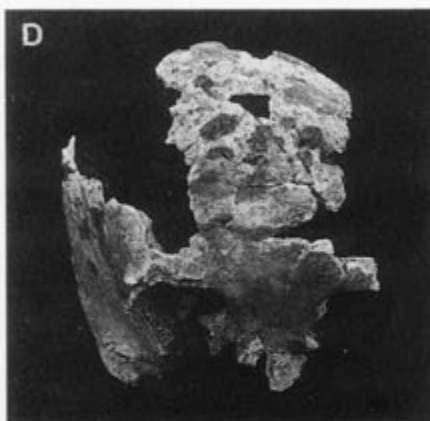
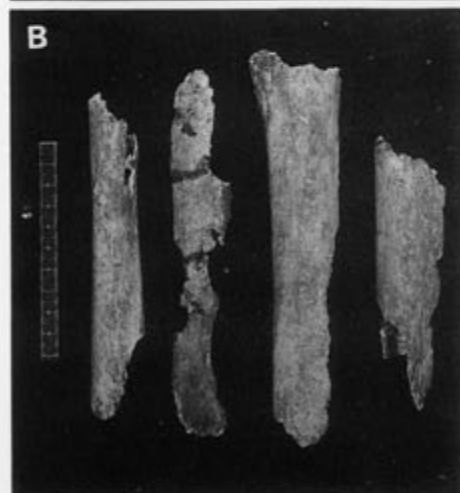
F

2号墓出土人骨

- A. 頭蓋冠ほぼ上面
- B. 復元した上顎歯列弓
- C. 下肢骨片

3号墓出土人骨頭蓋

- D. 上面
- E. 前面
- F. 側面 (左)



3号墓出土人骨

A. 下颏体上面

B. 下肢骨片

4号墓出土人骨

C. 头盖侧面 (左)

5号墓出土人骨

D. 头盖前面

E. 头盖侧面 (右)

F. 下肢骨片

第3節 前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の出土六道銭

桜木 晋一（九州帝京短期大学経営情報科講師）

1. 前畑遺跡の出土銭貨

本遺跡では、発掘された7基の墓のうち1号・2号・3号・4号・6号墓から六道銭が出土している。これらの六道銭は、俗に「三途の川の渡し賃」と言われており、六道の六という数字から通常6枚だと考えられているが、必ずしも6枚ではないことを本遺跡の銭貨は示している。全国的な傾向としては、6枚一組の六道銭が一番高い割合を示しているのは事実であるが、鹿児島県においては7枚一組のものの割合が最も高いという点に特色がある。この七という数の意味については、六地藏にそれぞれ1枚渡し6枚、プラス故人の持念仏または阿弥陀如来への賽銭として1枚、計7枚という考え方があるが、定かではない。但し、本遺跡の1号墓の銭貨や5号墓の数珠玉からは、6プラス1という思想の存在を窺うことができる。

発掘される中・近世墓は墓標を伴わないケースが多い。しかし、最近の研究によりこのような墓でも、出土銭貨の組合せから墓の造営時期の推定ができるようになってきた。渡来銭が国内に流通していた中世に終止符を打つべく、徳川幕府は公鑄貨である寛永通寶を寛永13年（1636）に鑄造を始めて以来（＝古寛永）、背面に「文」字を有するいわゆる文銭を寛永8年（1668）、さらに新しいタイプの銅銭である新寛永を元禄10年（1697）、素材の銅が不足したことによって鉄を素材とする寛永鉄銭を元文4年（1739）に鑄造開始している。これらの銭貨は都合の良いことに三十年程の間隔をもって鑄造されており、いずれの銭貨の占める割合が高いかで、おおよその埋葬年代を知ることができるのである。以下、銭貨の組合せから本遺跡の各墓の造営時期を推定してみることにする。

1号墓からは、豆板銀1枚と寛永通寶6枚が出土している。六道銭として豆板銀が使用されているのは、筆者の知見の限りでは本例のみである。豆板銀には「是」が読める。6枚の寛永通寶の組合せから時期を推定すると、文銭1枚と新寛永5枚なので、流通通貨がほとんど新寛永になってしまっていた時期で、且つ寛永鉄銭が1枚も混入していないことから、1740年頃の墓であると考えられる。マ頭通（通の字の旁上部がコではなくマになっているもの）と呼ばれている寛永通寶が含まれていることから、俗説では京都七条銭・鳥羽銭・伏見銭がマ頭通であり、これに従えば1726年以降ということになり、1740年頃であることを支持することになる。

2号墓は7枚全てが古寛永なので、1668年の文銭出現以前、つまり17世紀中期の墓であると推定できる。

3号墓からは、古寛永2枚、文銭1枚、新寛永4枚が出土している。新寛永が4枚で多いが、古いタイプの寛永通寶である古寛永と文銭も3枚混じっていることから、新寛永が流通し始めてから間もない時期の18世紀初期であると考えられる。

4号墓は北宋銭の明道元寶（1032年初鑄）1枚と古寛永6枚の組合せである。この墓は2号墓とほぼ同じ時期か、渡来銭が混入していることから、2号墓よりも若干古い可能性はある。

いずれにしても17世紀中期の墓であると推定できる。

6号墓の17枚については寛永通寶を含まず、明銭の洪武通寶（1368年初鑄）なので、1636年の寛永通寶公鑄以前の墓であると考えられる。枚数が二桁と多いのも、中世の六道銭の特徴である。

1～5号墓と6～7号墓は区域も離れており、1～5号墓は近世墓、6～7号墓は中世墓であると考えられる。従って、5～6号墓が中世末に造営され、近世に入って4号墓→2号墓→3号墓→1号墓の順で墓の造営が行われたと、銭貨からは推定できる。

2. 鹿児島県下の出土六道銭

前節で前畑遺跡の5基の墓について造営時期を推定したが、鹿児島県下で報告がなされている他の出土六道銭についても、ここで考察を加えてみる。

鹿児島県では表1のように、現在までのところ12の六道銭出土遺跡が知られている。発掘された全墓数に対して、六道銭を副葬した墓の割合が約8割と高い。筆者が現在まで集積している六道銭副葬率は、九州全体では1割強なので、九州の他県と比較すると群を抜いて高い。発掘精度の高さもあるが、六道銭を副葬する習慣が、鹿児島県下に定着していたことを知ることができる。

表Ⅱはこれらの遺跡なかで、銭貨の内容がわかるものについて分類したものである。六道銭の枚数は6枚と7枚のものが多い。特に7枚の割合が高いのは鹿児島県の特徴である。これほどまとまって7枚セットで出土する地域は、現在までのところ知られていない。また、渡来銭のなかで洪武通寶の占める割合が圧倒的に高いのも鹿児島県の特徴である。17世紀初期に鑄造されていたと言われている加治木銭との関係も考慮しなければならないが、背面に文字の読めるものはほとんどない。

成岡遺跡は墓数も多く、良好な六道銭の資料である。この墓地は墓壇Aにより中世末ないし近世初期から営まれていることが判るが、鉄銭をわずかに含むことによって18世紀中期までの墓群であると推定できる。但し、最も新しい墓標は文化9年（1812）のものがあり、19世紀初期までは墓が造営されていたことが判る。17号墓壇の2枚と18号墓壇の5枚の銭貨は、切り合いの関係から7枚セットだった可能性もある。また、10号墓壇からはガン首銭が出土している。これはキセルの火皿の部分を叩き潰して平にして、丁度銭の格好にしたものであるが、九州では、六道銭として使用されたものとしては唯一の発掘例であろう。

王城古墓は、紀年を有する墓石と墓壇が対応しているという点で貴重な遺跡である。現在までのところ、実年代が判る墓で六道銭を副葬したものはほとんど知られておらず、考古学的手法を使用して墓の造営期を推定している。王城古墓の4基はそのうちの3基について銭貨の判別ができ、すべての墓に古寛永・文銭・新寛永が2枚ずつ副葬されていた。新寛永を2枚含む古いタイプの寛永通寶も4枚存在することから、18世紀初期の墓であろうと推定できるが、墓石にも1708～1721年を記しているのである。考古学的手法でも、概ね実年代をおさえることが

表Ⅰ 鹿児島県六道銭出土遺蹟一覧表

	遺跡名	墓数		文	献
1	松ノ尾	7	2	枕崎市教委 1集松ノ尾遺跡	1981
2	成岡	29	21	鹿児島県教委 28集成岡・西ノ平・上ノ平遺跡	1983
3	西ノ平	9			
4	麦ノ浦貝塚	2	2	川内市土地開発公社 麦ノ浦貝塚	1987
5	王城古墓	4	4	大口市教委 4集広徳寺跡・王城古墓	1985
6	広徳寺跡	1	1		
7	石峰	6	2	鹿児島県教委 12集石峰遺跡	1980
8	中尾田	1	1	鹿児島県教委 15集中尾田遺跡	1981
9	薩摩国分寺跡	1	1	川内市教委 国指定史跡、薩摩国分寺跡環境整備事業報告書	1985
10	出口	2	1	大根占町教委 (2) 出口遺跡	1988
11	前畑	7	5	鹿児島県教委 1990刊行予定	
12	鎌石	2	2	鹿児島県教委 1990刊行予定	

表Ⅱ 鹿児島県出土六道銭の内訳

遺跡名	遺構番号	枚数	内訳							備考
			渡	古	文	新	鉄	不明	その他	
松之尾 (枕崎市)	13号人骨	7	7							洪武通寶 7
	17号人骨	7	7							洪武通寶 7
成岡 (川内市)	墓壇 A	4	4							洪武通寶 4
	4号墓壇	7		1		6				
	6号墓壇	7		4	1	2				
	7号墓壇	7		2		5				
	8号墓壇	6				3	2	1		
	10号墓壇	7		2		4			1	その他はガン首銭
	11号墓壇	2		2						
	12号墓壇	7		1	1	5				
	13号墓壇	7		2	2	3				
	14号墓壇	7		1		6				
	15号墓壇	7		3		4				
	17号墓壇	2				2				
	18号墓壇	5				3		2		
	19号墓壇	6		1	1	4				
	20号墓壇	6		1	1	4				
	21号墓壇	7		1		4	2			
22号墓壇	7				7					
23号墓壇	7		1		2	3	1			
24号墓壇	7		3		4					
25号墓壇	7		3		4					
26号墓壇	4		1		3					
西ノ平 (川内市)	中世墓壇 A	10	10							元豊通寶他
	中世墓壇 B	5	5							洪武通寶 5
	火葬遺構	7	7							洪武通寶 7
	1号墓	7		1	4	2				
	2号墓	7		2	2	2	1			
	3号墓	7		2	1	3	1			
	4号墓	6				6				
5号墓	6			1	2	2	1			
6号墓	7	1	1	2	3				景德元寶 1	
王城古墓 (大口市)	1号墓	6		2	2	2				
	2号墓	6		2	2	2				
	3号墓	6		2	2	2				
	4号墓	6						6		
前畑 (鹿屋市)	1号墓	7			1	5			1	その他は豆板銀
	2号墓	7		7						
	3号墓	7		2	1	4				
	4号墓	7	1	6						明道元寶 1
鎌石 (志布志町)	1号墓	7		2		5				洪武通寶
	2号墓	7		4		3				

できるということを示している。但し、3号墓の1枚はマ頭通であり、これは大きな問題を提示している。このマ頭通は享保11年（1726）の京都七条銭と古泉界で言われている銭貨にみうけられるが、墓石の紀年は寛永5年（1708）である。他の墓石と入れ違っていたとしても下限が享保6年（1721）である。まったく別の場所から墓石をもってきていない限り、このような現象は起こり得ない。つまり、マ頭通の鑄造期について疑問を投げ掛けているのである。古泉界において一般的に云われている考え方の中には、文献や実物その他の明確な証拠によって裏付けられていないものも多くあり、考案に使用する際には注意を要する。

3. セリエーション分析

最後にセリエーションを使用して、17世紀から18世紀中期にかけての銭貨流通の実態を考察してみよう。

器物の出現→盛行→消滅に至る量的変化のパターンは、ふつう「軍艦型のカーブ」になることは、よく知られている。これを銭貨の分析に利用して描いたのが図Ⅰと図Ⅱである。銭貨は伝世の問題があり下限年代は決定できないが、その初鑄年が知られているので、時間軸上において上限の年代を固定できる利点をもつ。セリエーション作成の手順を簡単に述べると、

① 横軸には、年代の古い順に左から渡来銭、古寛永、文銭、新寛永、寛永鉄銭を並べ、縦軸は、上を古い年代とする時間軸とする。

② 九州地域で出土した、65例の6枚組六道銭（図Ⅰ）と30例の7枚組六道銭（図Ⅱ）を、一例ずつ軸の中心から対称になるように絶対値で配列し、軍艦型カーブを描くようにする。

③ ②の際、二種以上の銭が含まれているセットを軸上に配列する場合、最も新しい銭の示す上限年代よりも遡った軸上には配列しない。

従来は6枚セットの六道銭についてのみセリエーションを組んでいたが、鹿児島県では7枚セットの六道銭が多いので、他の九州地域から出土している7枚セットのものを組み込んで図Ⅱを作成した。

資料数に違いこそあれ、図Ⅰと図Ⅱを比較して判ることは、描かれた軍艦型カーブの形態に差がないことである。幕府公鑄貨である古寛永・文銭・新寛永・寛永鉄銭の交替は、漸移していることがわかる。つまり、新銭が徐々に流通市場に登場してきたことが読み取れる。但し、渡来銭と古寛永通寶の間には不連続性があり、これは自然な状態で徐々に古寛永通寶が流通市場に浸透しだしたのではないと考えられる。つまり、幕府が渡来銭を速やかに回収し、それに代わって幕府公鑄貨である古寛永通寶が大量に流布したと想像できる。このセリエーションのパターンを読み取ることによって、徳川幕府の銭貨政策の一端を垣間見ることができる。

研究のあまり進んでいない中・近世の考古学ではあるが、出土六道銭の研究からだけでも、貨幣経済史の復元的研究や宗教儀礼の復元など、さまざまな問題を解くカギが与えられる。特に鹿児島県は他の地域と比較して、7枚セットの六道銭の割合が高いという特徴が認められる。

図-1 九州地方出土六道銭 完全セットセリエーション

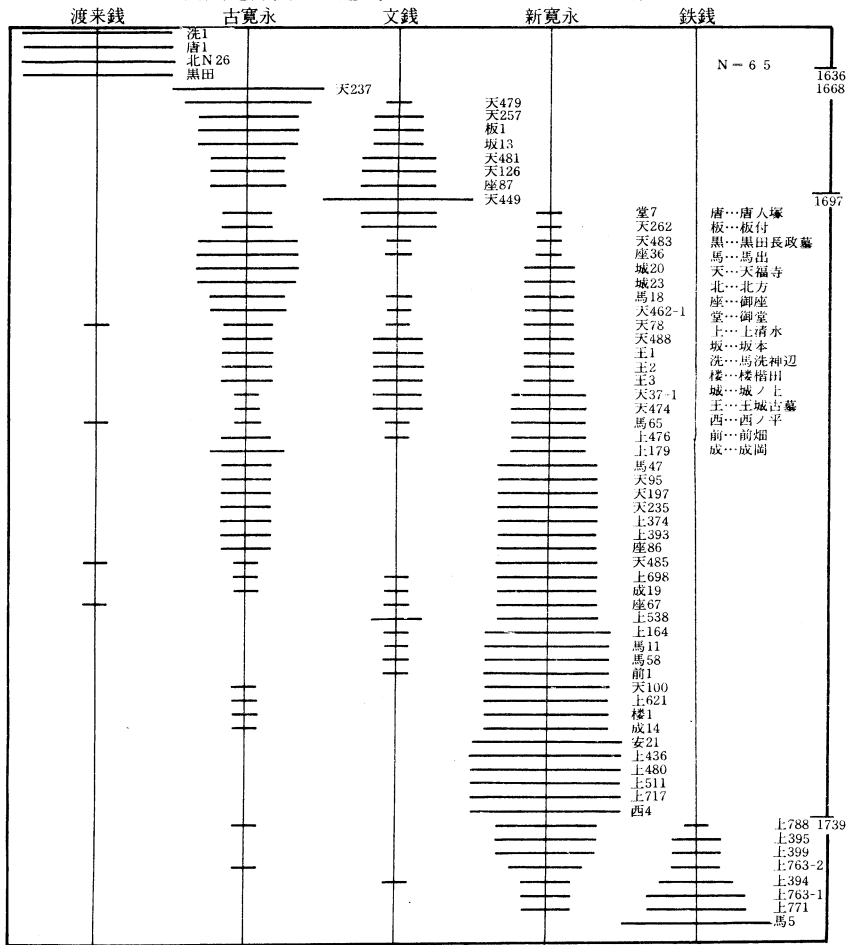
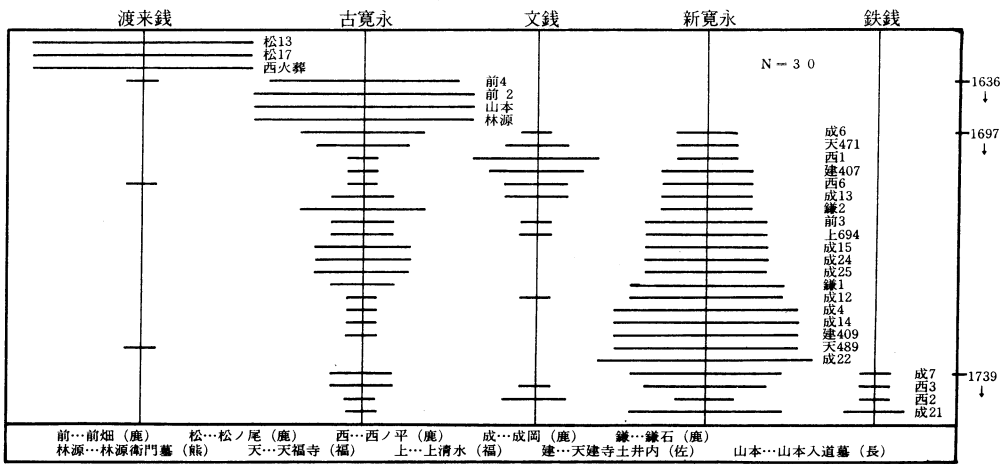


図-Ⅱ 九州地方六道銭7枚セットセリエーション



これは銭の枚数を7とすることと、何らかの宗教上の数の信仰とが結びついていたことを示している。また、これは六道銭の研究が、各地域における埋葬習俗と深い関係を持っていたことを意味するものであり、六道銭の研究が、民俗学や宗教儀礼との関係において考察されねばならないことを示している。さらに、六道銭の中で洪武通寶の占める割合が高いという点も、加地木銭その他の中世における本邦鑄造銭の問題を考える際の手がかりとして重要な資料といえる。今後ますますの資料集積とその分析に期待したい、

参 考 文 献

- 鈴木公雄：「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』第53巻6号、1988。
鈴木公雄：「出土六道銭の枚数と墓の保存状態」『考古学の世界』新人物往来社、1989。
櫻木晋一：「博多22次（天福寺）と箱崎・馬出遺跡群の出土六道銭」『福岡県地域史研究』第9号、1990。
櫻木晋一：「九州の六道銭研究の現状と課題」『九州帝京短期大学紀要』第2号、1990。
魚津市教育委員会：『印田近世墓』1981。
本田道輝：「鹿児島県下出土の銭貨集成」『鹿大史学』第35号。
佐々木四十臣：「葬送儀礼と六道思想」『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町教育委員会、1989。

第 V 章 発掘調査のまとめ

前畑遺跡は、縄文時代、弥生時代、近世墓群、戦跡遺構など各時代の遺構・遺物が比較的良好に検出され多大な成果が得られた。なかでも、縄文時代と弥生時代については、現在南九州で最も問題が提起されている時期に該当し、今回の調査の成果は、問題解決の一助となる部分も少なくない。なお、近世墓群についても本県の近世墓研究への指針を提供するような成果が得られ、また戦跡遺構の発掘調査及び報告は本県では初例となった（戦跡遺構は『西原掩体壕』として第5分冊で取り扱った）。

第1節 縄文時代について

前畑遺跡の縄文時代は、二文化層（V層とX層）に存在したが、その中心的成果はX層の縄文時代早期に該当するものであった。X層の文化層は、アカホヤ火山灰層（IX層）直下に存在する多量の遺物を含む包含層で、その下位には6基以上の集石遺構が遺存していた。包含層の形成される微高地は、北側の縁辺部が傾斜し、調査区内は遺跡の北端であることが確認された。そして、この微高地の縁辺部に、集石遺構は検出されている。なお、遺跡は南側の用地外に広範囲に広がることが想定される。

集石遺構は、掘り込みや石組み状態が看取されるものは3号と6号集石だけで、他は石を集めたままの状態のいわゆる集石となっている。包含層から出土し、集石に利用されたと思われる焼石の分布状態は第5図のようになるが、焼石の密集する部分がみられる。包含層の形成時に流失した可能性もある。集石遺構は時期を特定するものは無いが、層位的にⅣ類土器に伴うことが想定される。なお、集石以外の遺構は確認されていない。

X層に出土する遺物は、土器と石器がある。

土器は、形態上の特徴からⅠ類～Ⅵ類の大きく6つの類別を試みた。そのうちⅣ類土器が、本遺跡の主体を占める土器群である。

Ⅰ類土器は、最近、倉園B式土器⁽¹⁾と呼称した型式に属するもので石坂式系の土器である。Ⅱ類土器は、条痕文は前平式土器に酷似するが特定できる部位の出土はみられない。Ⅲ類土器は、山形の押型文土器である。田村式平行期に比定されよう。

Ⅳ類土器は、本遺跡では最も大量に出土し、そのほとんどがA B 9区からA B 13区間に安定した状態で出土している。Ⅳ類土器の器形は、深鉢形と壺形がある。深鉢形は、平椀式土器に該当するものである⁽²⁾。壺形は平椀式土器の紋様要素を取り入れたものが存在するが、この期の壺形土器の出土例は初見である。近年、横川町中尾田遺跡⁽³⁾や球磨郡山江村合戦ノ峰遺跡及び高城跡⁽⁴⁾や都城市荒ヶ田遺跡⁽⁵⁾などで完形に近い手向山式期の壺形が発見された。南九州の縄文早期の段階に壺形の器種の存在が確認され、新しい問題が提起された。その後、本遺跡において、後続する平椀式土器の段階にも壺形土器が存在することが判明したことは、南九州の縄文早期

後半の段階に深鉢形の他に壺形の器種がセットとして存在したことを裏付ける形となった。

Ⅳ類土器の深鉢は、口縁部の形態から二つのタイプに細分された。一つは幅広の肥厚口縁をもつタイプで従来の平椀式土器にみられるタイプである。紋様の特徴から a～g の 7 類に細別して説明したが、胴部施文に結節縄文を施文するタイプであり、同一型式に含まれることが考えられる。他方は、幅狭な肥厚口縁をもつタイプで a～f の 6 類に細別したが、これも従来散見される形態であるが、このような形で細別が試みられたのは良好な出土量の所以である。このタイプも胴部紋様は結節縄文を施文するものであり、紋様の細別は個体差に拠ることが考えられる。なお、幅広肥厚口縁は口縁部が明瞭な山形の波状口縁をつくり、幅狭肥厚口縁を有するものは緩やかな波状口縁を呈するという差異がある。平椀式土器には、この二つの器形が存在することが指摘される。さらに、平椀式土器の底部の形態も明らかになった。

なお、胴部破片に特異なものが二種みられる。一つは 227・228 で「く」字状に胴部中央が屈曲するものである。先行する手向山式土器の強く影響を残すものであろうか。他方は 229 の胴部片で、結節だけを縦位に転がすものである。志布志町白木原遺跡⁽⁶⁾では結節縄文の片方の縄文を切り取った施文具で結節から片側の縄文を施文するタイプが出土し、牧園町界子仏遺跡⁽⁷⁾では 229 と同様の結節だけを転がした胴部をもつ完形に近いものが出土している。これらは平椀式土器から後続する塞ノ神 A a 式土器を繋ぐ移行型式とすることが可能であろう。

Ⅴ類土器は、塞ノ神 A a 式土器⁽⁸⁾（または椀ノ原式土器）に比定される完形土器である。同一層の上部から比較的まとまって出土しており、近辺にこの期の遺跡が存在することが考えられる。Ⅵ類は細片から復元したものであるが、塞ノ神 B c 式土器⁽⁹⁾（または三代寺式土器）の範ちゅうに属するものである。

以上、出土土器を従来の土器型式に当てはめて説明したが、本遺跡の中心となるⅣ類土器の他に前後の土器型式が断片的にみられる。このことはこの遺跡周辺は、早期中葉から後葉にかけての格好のキャンプサイトであったことを窺い知ることができる。

Ⅹ層出土の石器は、打製石鏃、石匙、磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿、棒状敲石など多種にわたる。特に、磨製石斧と棒状敲石は注目すべき発見といえる。306 の石斧は全面敲打による仕上げがみられ、片刃は円刃で上部に二ヶ所の突出部を作り出した精巧なものである。いわゆるチョーナ型の石斧で、これまでほぼ同形態が西之表市立山遺跡⁽¹⁰⁾から採集されているだけで、発掘調査での出土は初見である。342～381 の棒状敲石は、包含層出土の自然礫から確認したもので、近年この時期の遺跡で散発的に出土しているものである。一般的な敲石、敲打器、石器製作のハンマーストーンなど色々利用が考えられるもので、今後注目すべき一群である。

第 2 節 弥生時代について

弥生時代はⅢ層に検出され、各種の遺構の検出や多量の遺物の出土がみられた。遺構は、竪穴住居址 3 基、掘立柱建物跡 8 棟、円形周溝 1 基、溝状遺構 3 基などがある。特に、8 棟の掘立柱建物跡の検出は、多くの新知見や多大の成果をもたらした。

狭い幅の調査区にもかかわらず検出された遺構は、集落内での建物配置の構成を如実に示している。まず各建物の配置は、竪穴住居址と平地式建物跡や円形周溝が東側のブロックにまとまり、高床倉庫跡群は西側にまとまって建てられている。つまり、居住区と倉庫群が分離された形態を採っており、このような集落構成が判明したことは大きな成果であった。

各遺構の特徴は、次のようなものがある。竪穴住居址は、1本柱の小型住居(1号)、一辺に張り出しを持つ住居(2号)、外側に主柱を備える住居(3号)とそれぞれ異なる。1号、2号住居址は多量の炭化木が遺存し、焼失家屋であった事も判明した。なお、さらに注目すべきことはこの2基の住居址から、北部九州系の須久式系の甕形土器が接合して出土していることである。次の3間×4間規模の3棟の建物は、炉跡が検出されたことや桁行間の片方が5間になるものもあり平地式建物であることが判明した。また、高床に比べて柱穴の深さが浅いことから平地式の可能性が窺える。さらに、1号と3号建物には棟持ち柱が所在し、しかもこの棟持ち柱は建物に向かって斜めに立てられている事実も判明した。最近、鹿屋市王子遺跡¹¹⁾、国分市上野原遺跡¹²⁾でも発見されており、南九州の平地式建物の上屋構造として流布していたことが考えられる。鹿屋市王子遺跡の建物跡の棟持ち柱の角度については再考の必要があろう。さらに、2号、3号建物跡と円形周溝は切り合い関係が確認され、円形周溝→3号→2号建物跡の順に構築されている。つまり棟持ち柱を備えない2号建物跡が最後に建てられたことになる。また、1号と2号建物跡には北側の桁行間側に溝状遺構が備えられ埋土には多量の遺物が混入している。そして、2号建物跡の溝からは瀬戸内系の矢羽根透かしの高坏の脚部が出土している。つまり、この瀬戸内系の遺物は最後の段階に出現したことになる。この建物跡の一辺に溝が備え付けられるタイプは、高知県田村遺跡¹³⁾や岡山県稼山遺跡¹⁴⁾にみられるが、発見例は極めて少ない。

円形周溝遺構については各説あるが、本遺跡では3号及び2号建物跡に切られて検出され、本遺跡では最も早い段階につくられた遺構にあたる。円形周溝は、中ノ丸遺跡に次いで検出であった。直径約4mで内径は3.15m程度の広さをもつ規模である。中ノ丸遺跡の二つの円形周溝とは、ほぼ同じ規模である。用途は不明である。

4号～8号掘立柱建物跡は、その形態から高床倉庫が想定される。4号は1間×1間の柱間で、他の4棟は1間×2間の柱間を持つ建物である。主柱はいずれも深く、中柱は浅い。

そのほか、4号建物から7号建物までの空間には、直角に曲がる浅い溝や柱穴などが検出されたが、遺構として組み合わせるものは存在しなかった。集落を囲む施設や居住区と倉庫群との区分の施設など発見されなければならない多くの課題が残っている。

出土遺物は、土器と石器があるが、住居址や建物跡に付属する溝などの遺構から出土するものが比較的多い。特に、在地系土器の山ノ口式土器に伴って出土する移入土器の関係が遺構によって明らかにされたのは大きな成果であった。2号住居址からは、1号住居址にも接合する完形に復元される須久式土器と高坏あるいは器台状の脚部の出土がある。これは須久Ⅱ式の範ちゅうに属することが考えられ¹⁵⁾、中期後半に位置付けられるタイプである。また、最後の段階の

2号建物跡に付属した溝からは瀬戸内系の矢羽根透かしの高杯が出土することになる¹⁶⁾。

本遺跡から出土する在地系土器は、山ノ口式土器の範ちゅうに属するものである¹⁷⁾。甕形土器は大甕と脚台付きの甕形土器に分かれる。大甕は外反する口縁部の下に突帯文を巡らすもので口縁部と突帯文間には隙間が置かれるタイプである。このタイプの小型の甕も存在し、逆「L」字状のシャープな形態で平底を呈することが考えられる。脚台付きの甕形土器は、「く」字状に外反した口縁部の屈曲部の下に若干の隙間を置いて突帯文が巡らされるタイプである。脚台は、ほとんどが充実した平底である。壺形土器は、口縁部は短く僅かに外反し、口縁外側に突帯文を巡らせこの部分までを口縁拡張部とするタイプで、頸部付近には数条の突帯文を巡らしている。このタイプはよくみられるもので、中ノ原遺跡、中ノ丸遺跡、中原山野遺跡にもあり、また鹿屋市王子遺跡や高付遺跡¹⁸⁾、山川町成川遺跡¹⁹⁾などでも出土し、長期間続く形態であることが分かる。また、525・527はB22区などの包含層からの出土であるが、暗文を施した袋状口縁を呈する丹塗土器である。北部九州系土器で中期後半に属すタイプで²⁰⁾、在地系土器との関連などで重要な共伴資料といえる。

以上、在地系土器と移入土器の在り方をみてきたが、前畑遺跡出土の山ノ口式土器は中期後半の終末期に位置付けられるものとする。

石器は、磨製石鏃や扁平打製石斧、磨石、砥石などのほか2号・3号住居址からは台石が出土している。住居址出土の台石は、中原山野遺跡や中ノ丸遺跡などの住居内からも出土しており、住居内の必需品であったことが窺われる。

第3節 近世墓について

前畑遺跡では、7基の近世墓が発見された。近世墓は、6基が方形の掘り方を呈し1基が円形の掘り方をもつタイプであった。1号から5号と6号・7号の二つの墓域に分かれる。1号から4号は、7枚の古銭を埋納するタイプで規格性が強い。特に、豆板銀や渡来銭を含めての7枚の埋納は注目される。また6号の17枚の古銭の埋納や7号の鉛玉とガラス玉の7個の関係も興味深い事例である。なお、近世墓のまとめについては、第IV章の第2節及び第3節に玉稿を頂いたのでこれにかえたい。

註

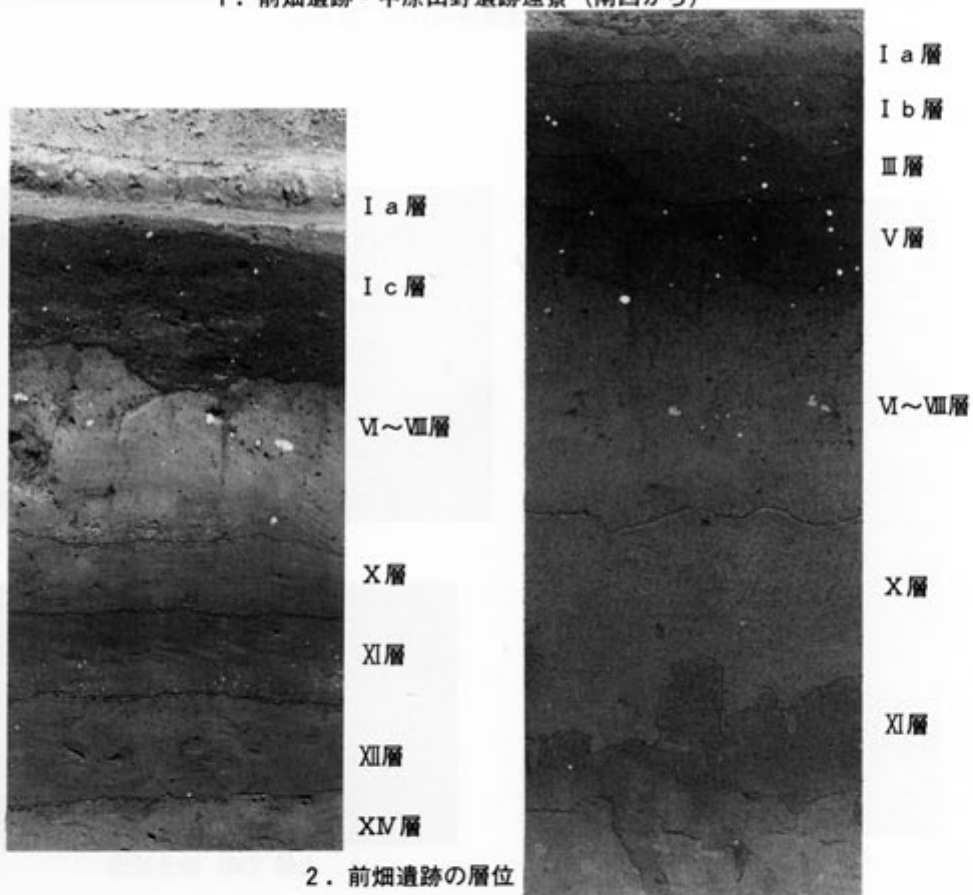
- (1) 新東晃一 1989 「南九州の円筒土器と角筒土器」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』
- (2) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』 第6号
- (3) 鹿児島県教育委員会 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (15)
- (4) 熊本県教育委員会 1988 「高城跡」『熊本県文化財調査報告』 第95集
- (5) 宮崎日々新聞 1989.2.3付けに掲載。
- (6) 志布志町教育委員会 1988 「白木原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』 (13)
- (7) 牧園町教育委員会 1989 「界子仏遺跡」『牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書』 (1)
- (8) 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』 第6号
新東晃一 1988 「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集
- (9) 註8に同じ
- (10) 鯨島安豊 1978 「立山出土のチョーナ型土器について」『潮流』第2号 種子島考古学研究会
- (11) 鹿児島県教育委員会 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (34)
- (12) 鹿児島県教育委員会 1988 「鹿児島県上野原遺跡」『日本考古学年報』 39
- (13) 高知県教育委員会 1986 「田村遺跡群」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (14) 金関恕・佐原真編 1986 「弥生集落」『弥生文化の研究』 7
- (15) 下籾信行・竹末純一氏の御教示による。
- (16) 高橋 護 1983 「山陽」『弥生土器』 I
- (17) 河口貞徳 1981 「新南九州弥生土器集成」『鹿児島考古』 第15号
- (18) 鹿屋市教育委員会 1984 「高付遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)』
- (19) 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 (24)
- (20) 註 (15) に同じ

図 版

PLATES



1. 前畑遺跡・中原山野遺跡遠景（南西から）



2. 前畑遺跡の層位



1. 集石遺構検出状況 (西から)



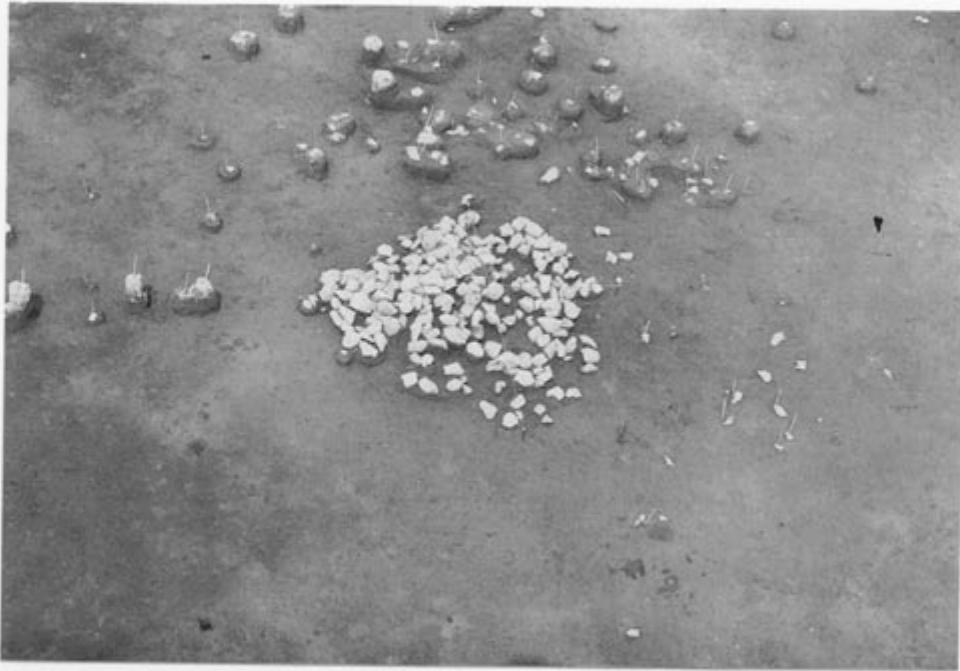
2. 石斧 (306) 出土状況



3. X層検出状況



4. 土器 (30) 出土状況



1. 4号集石と周辺の検出状況



2. 3号集石



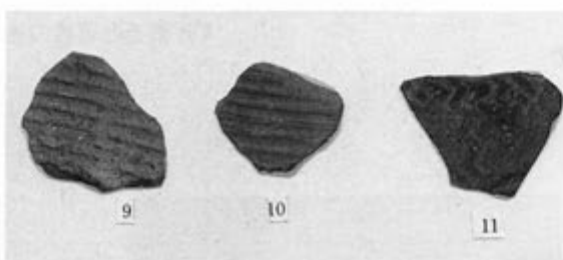
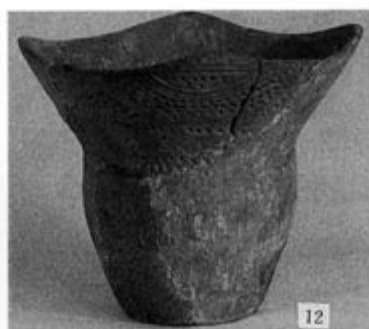
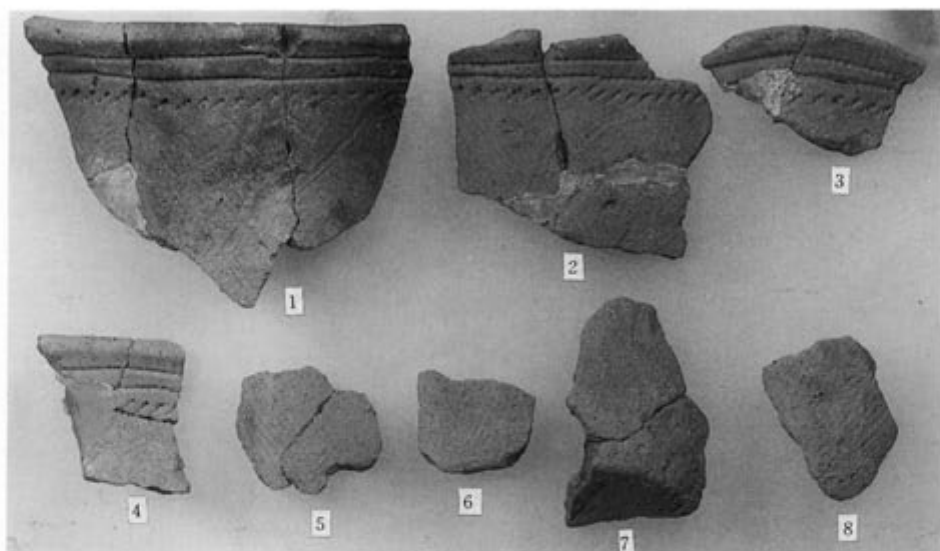
4. 6号集石



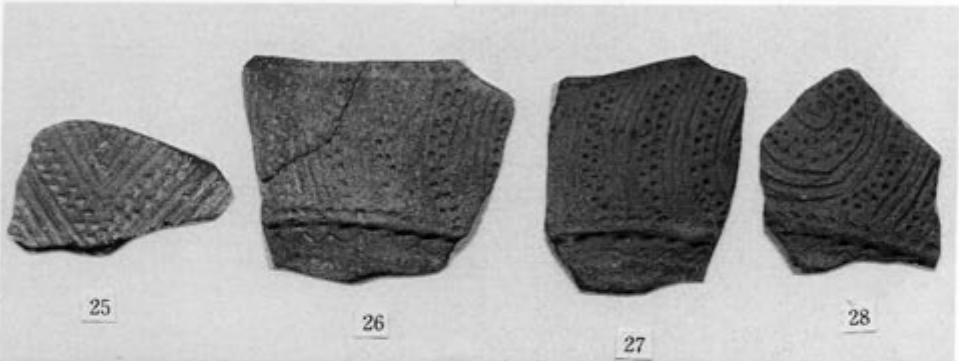
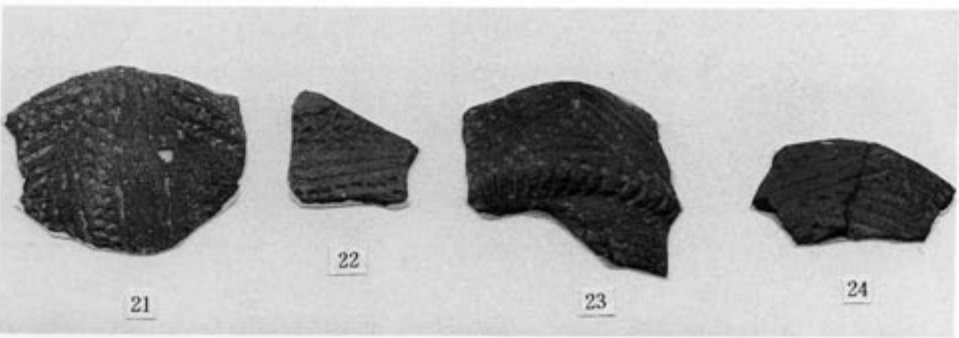
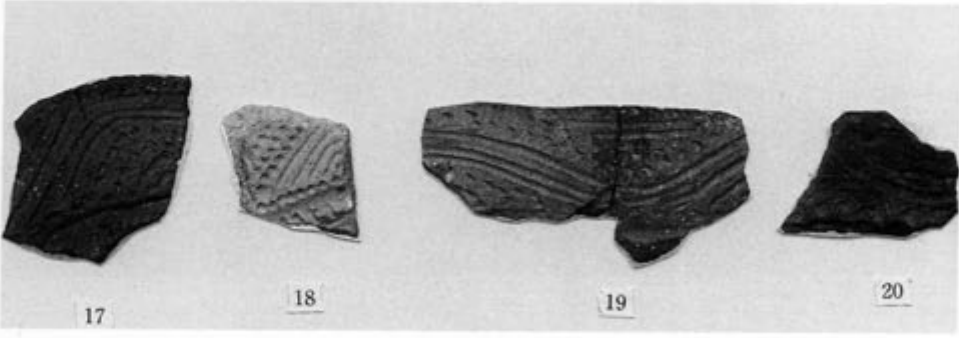
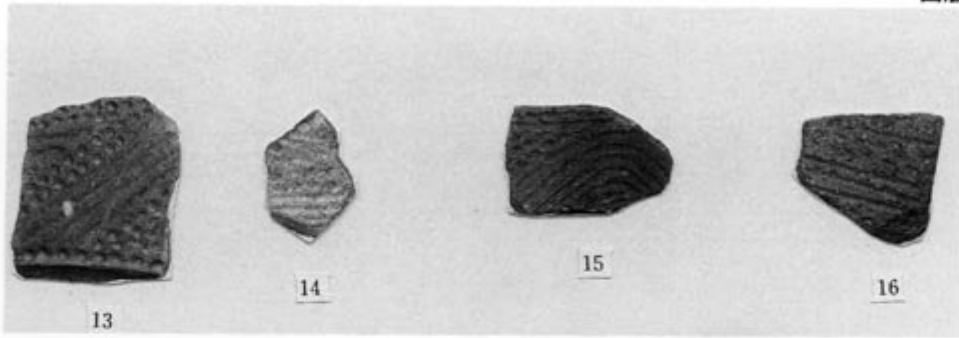
3. 3号集石断面



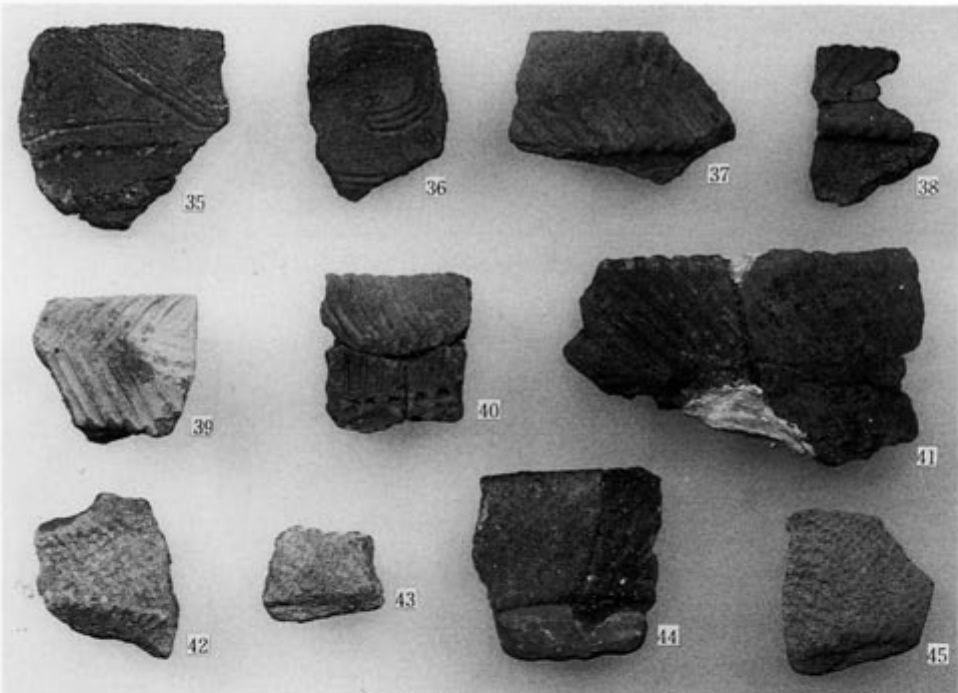
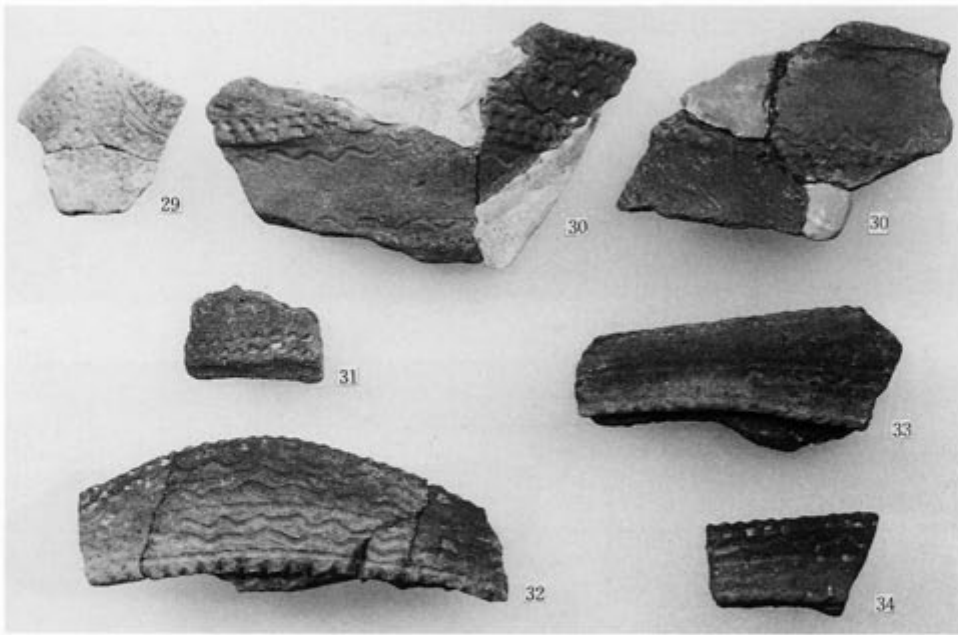
5. 6号集石断面



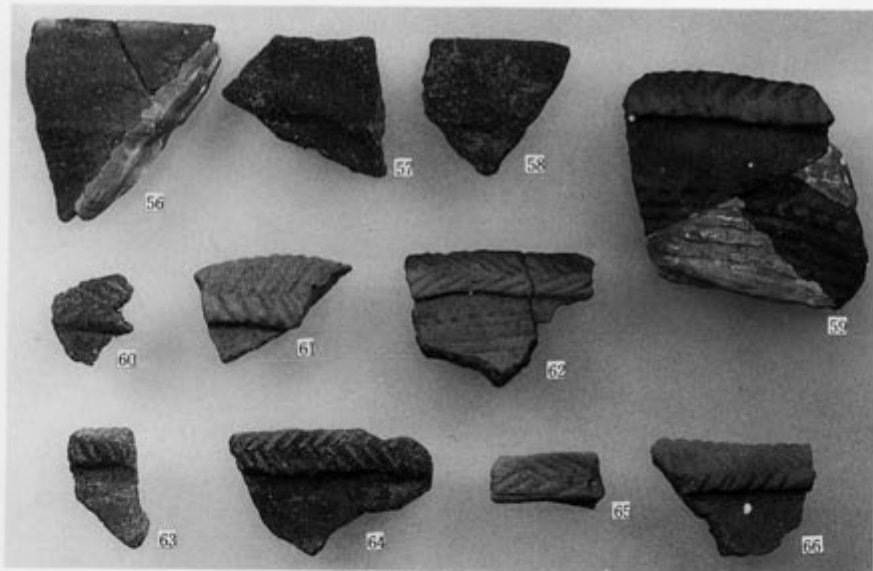
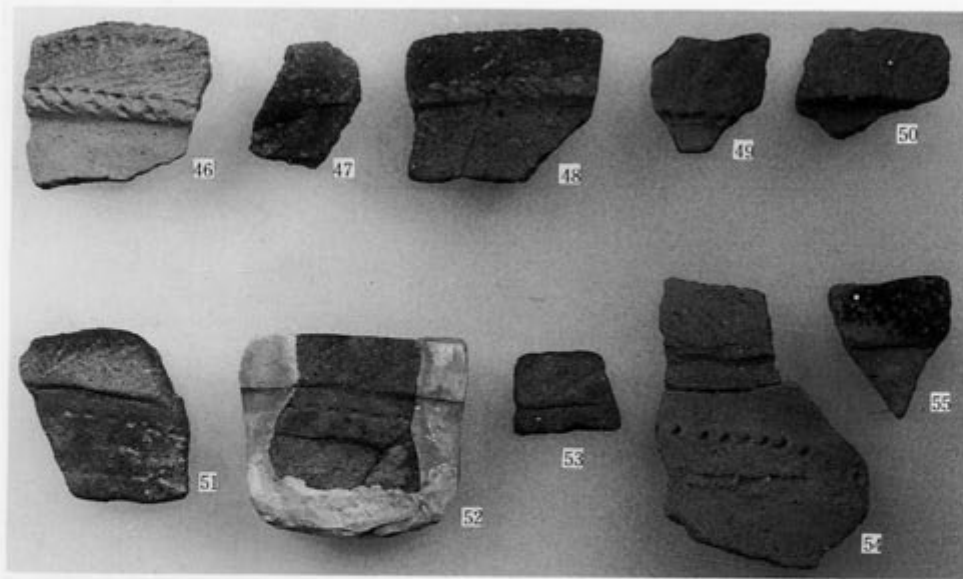
1. 縄文土器 (X層) (1)



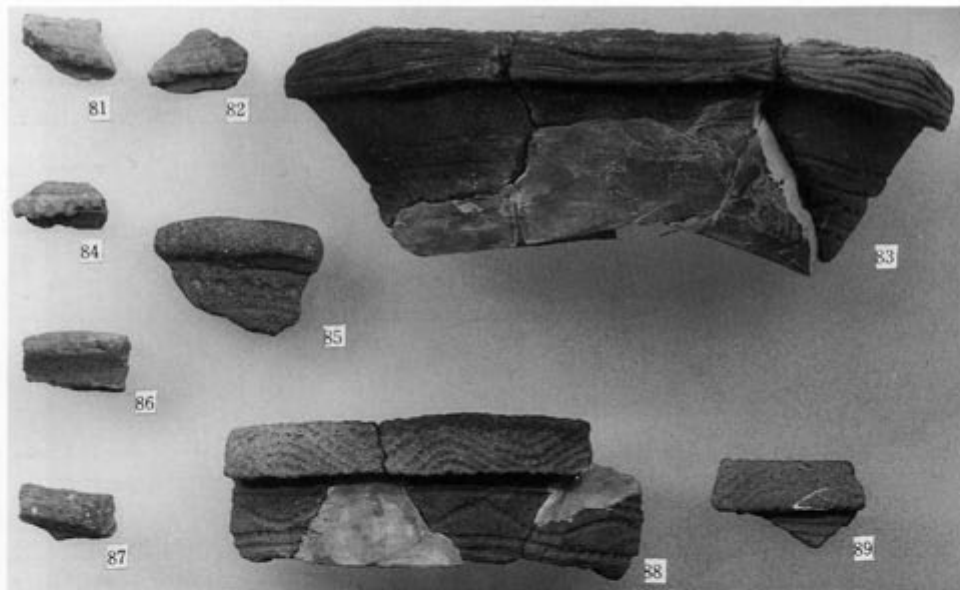
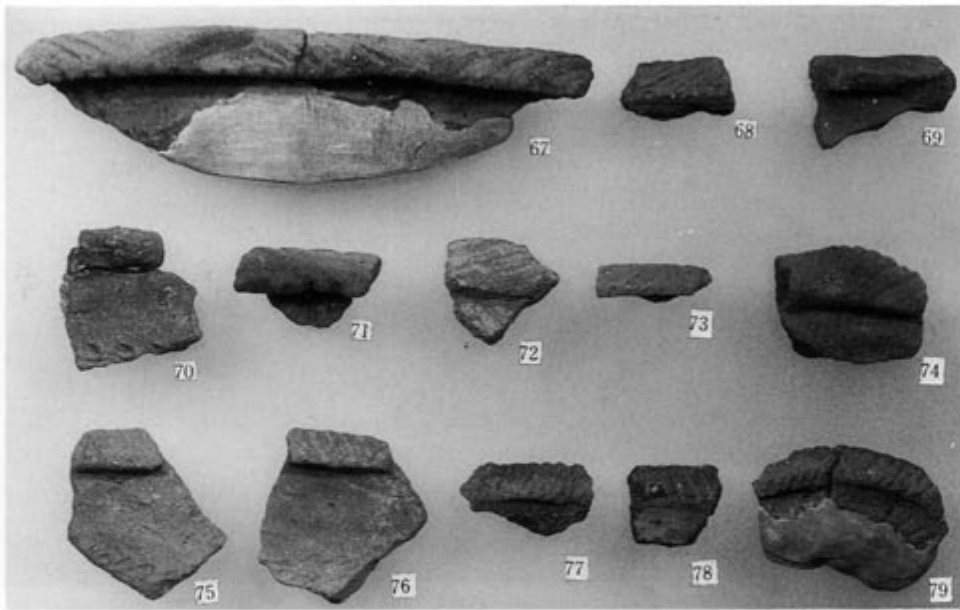
1. 縄文土器 (X層) (2)



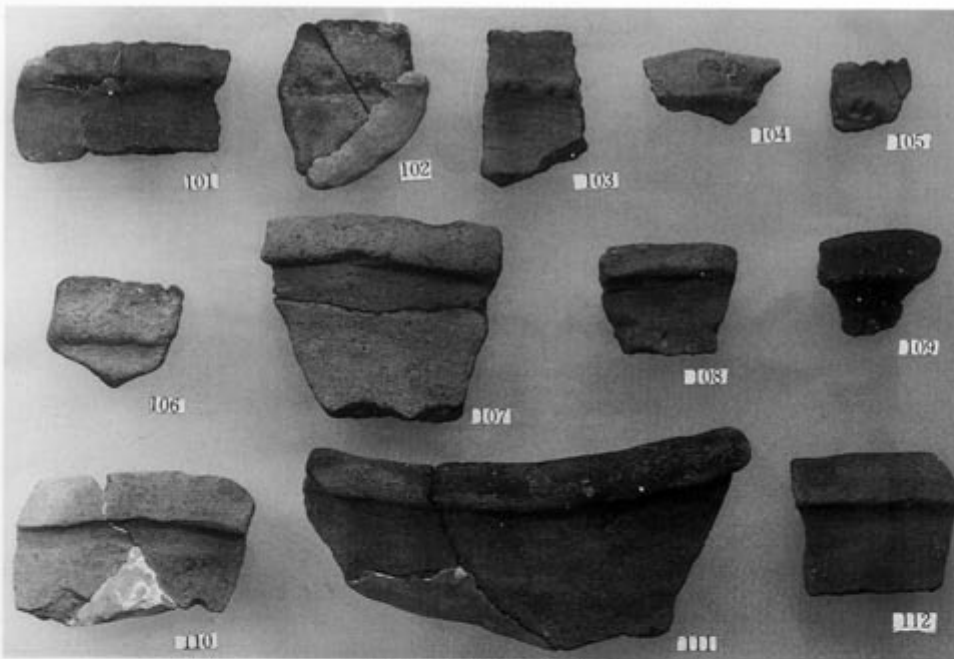
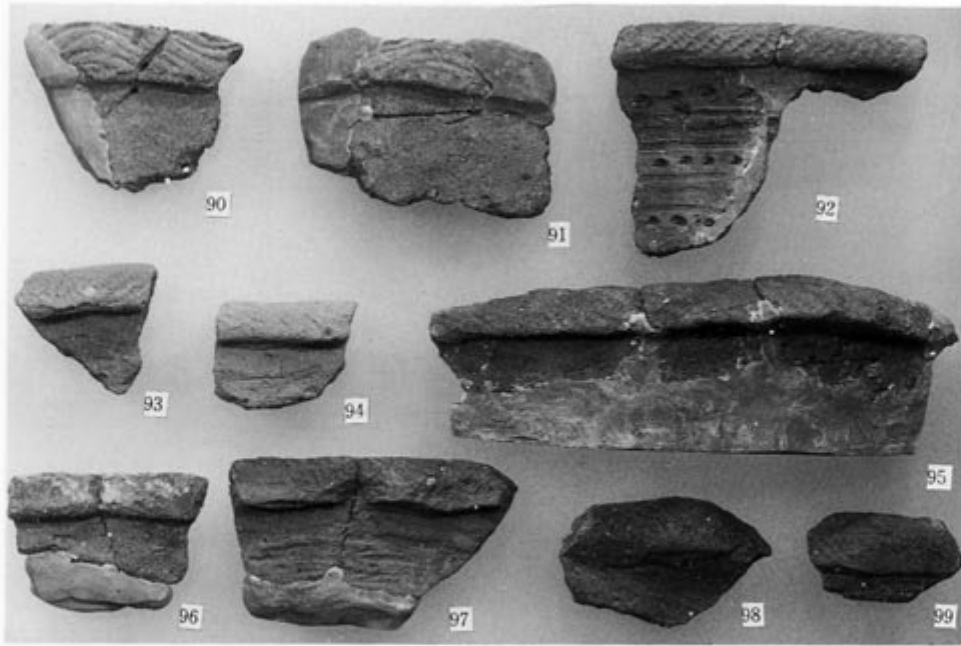
1. 縄文土器 (X層) (3)



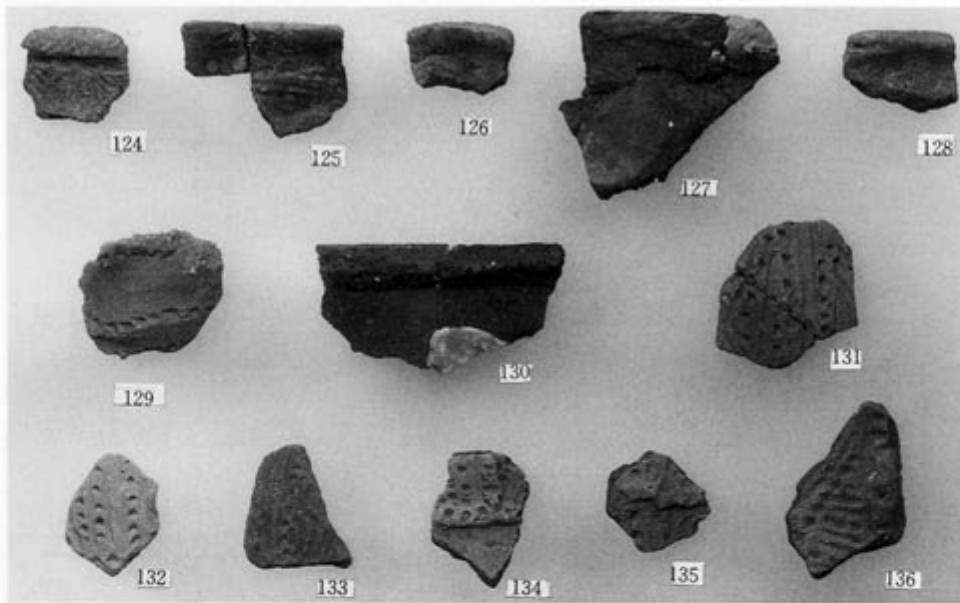
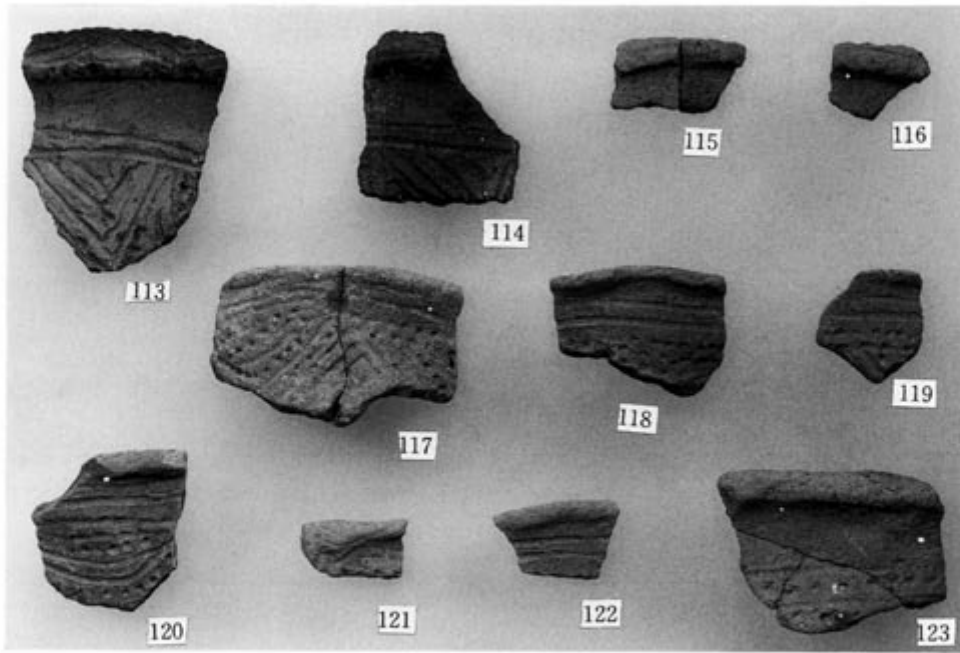
1. 縄文土器 (X層) (4)



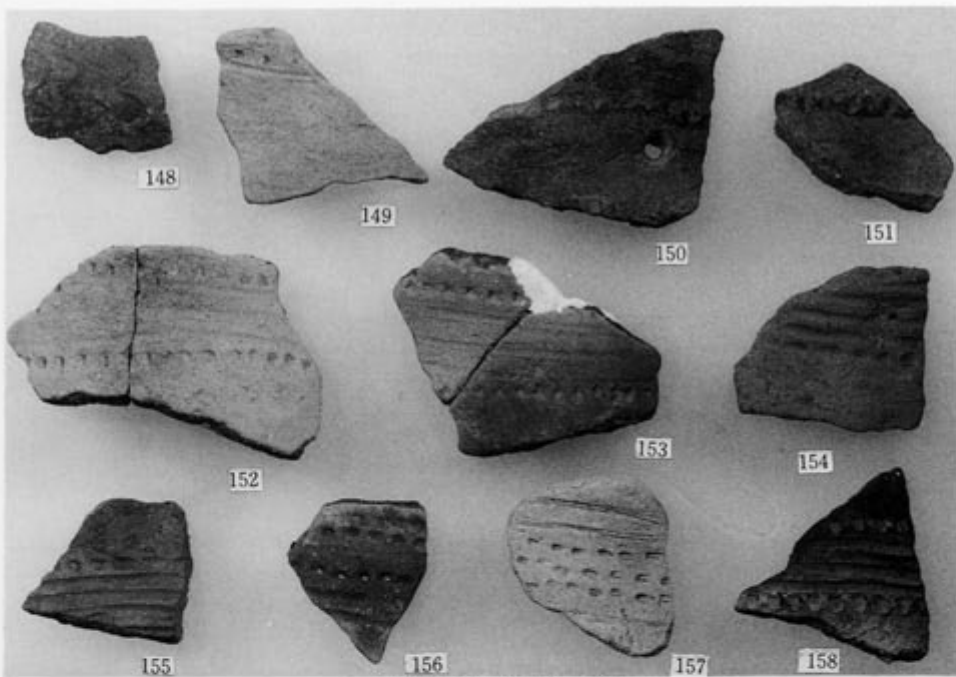
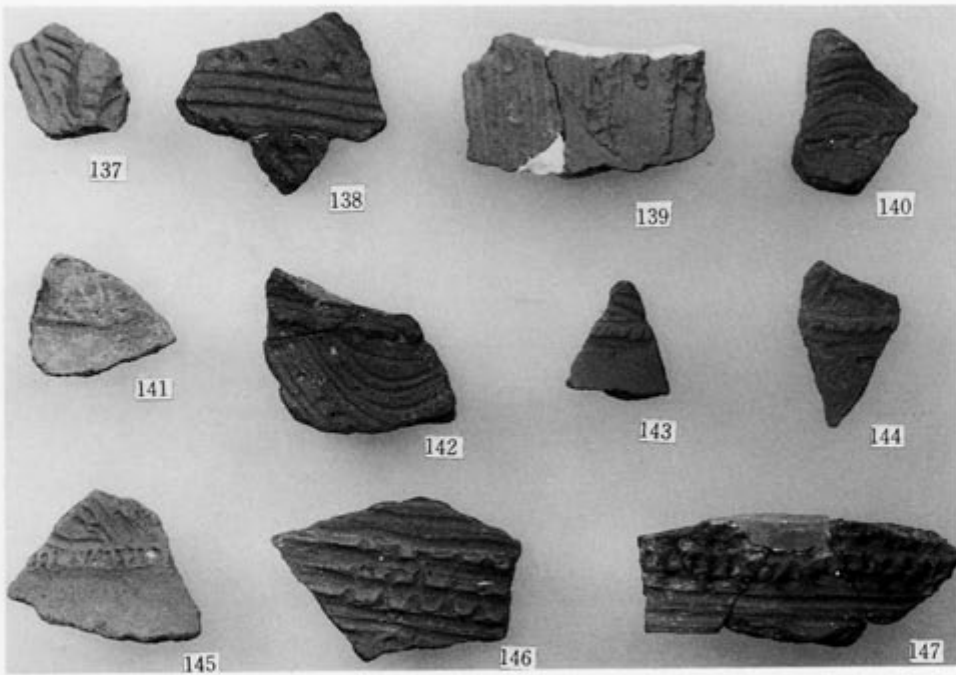
1. 縄文土器 (X層) (5)



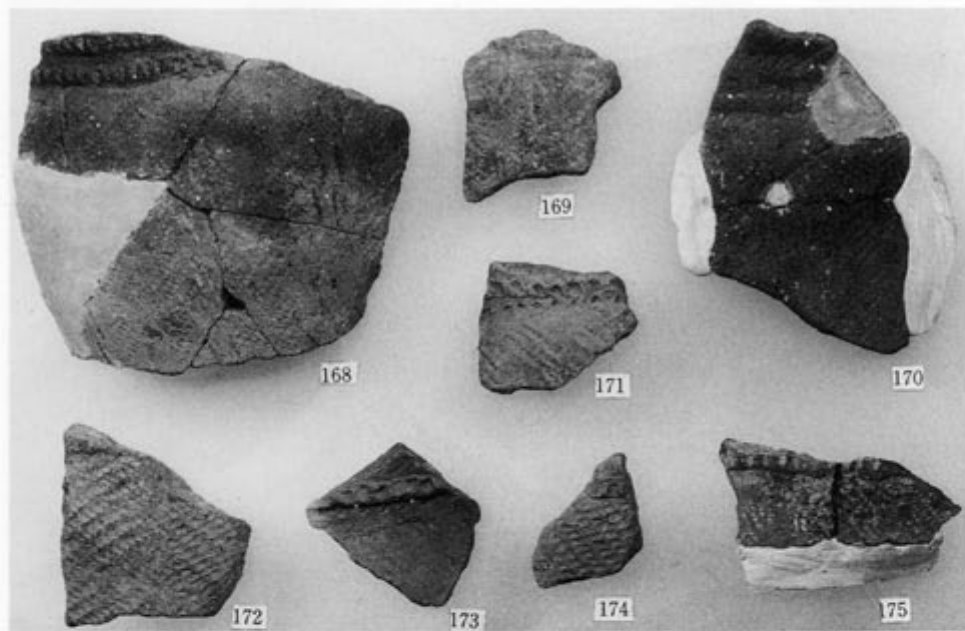
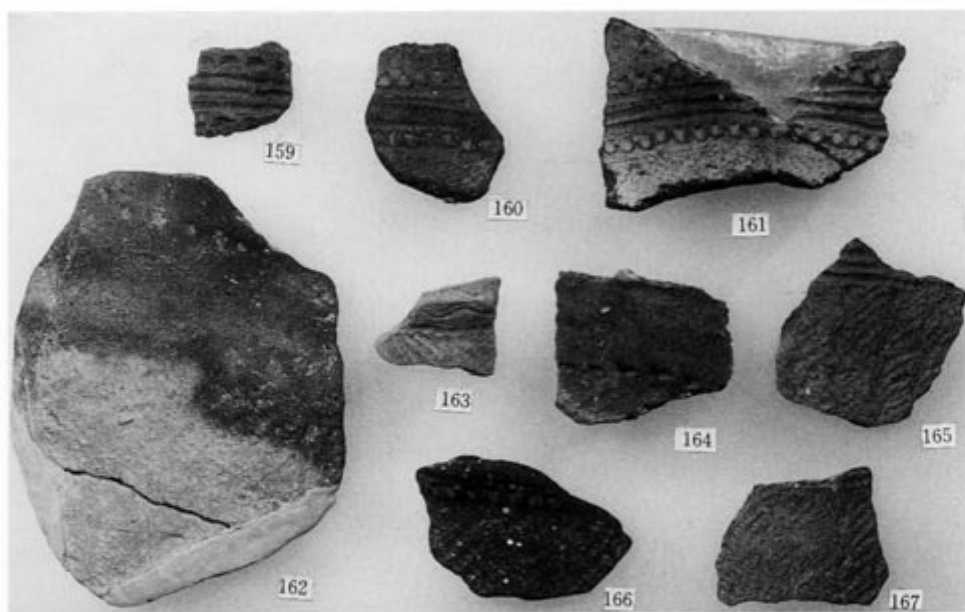
1. 縄文土器 (X層) (6)



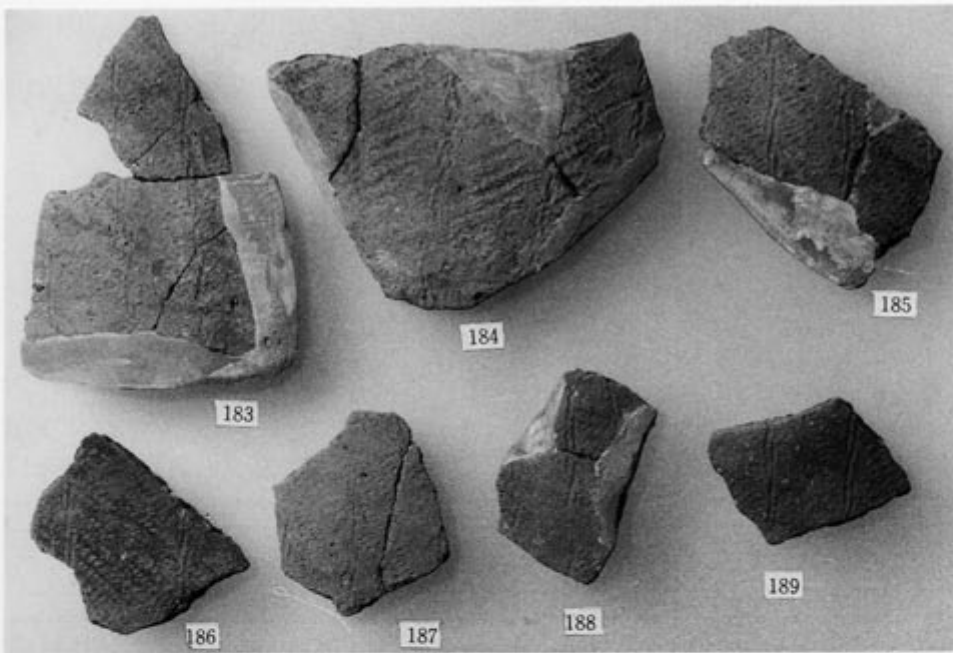
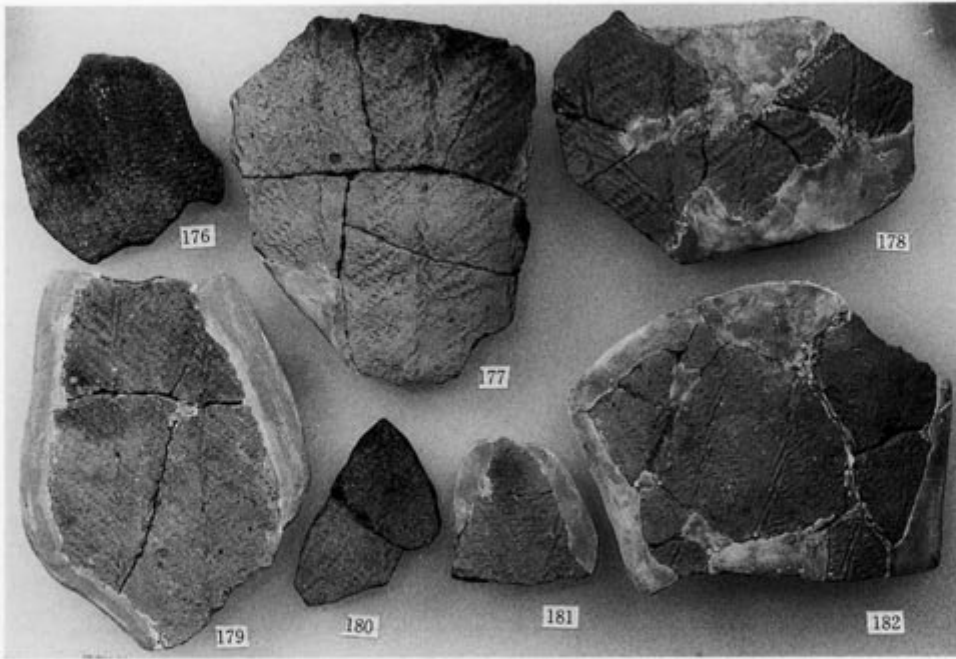
1. 縄文土器 (X層) (7)



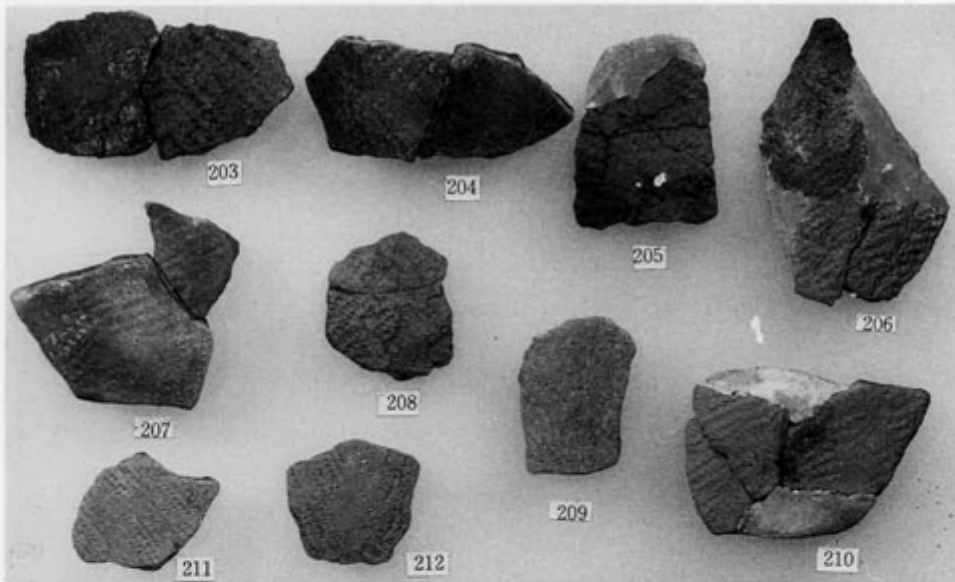
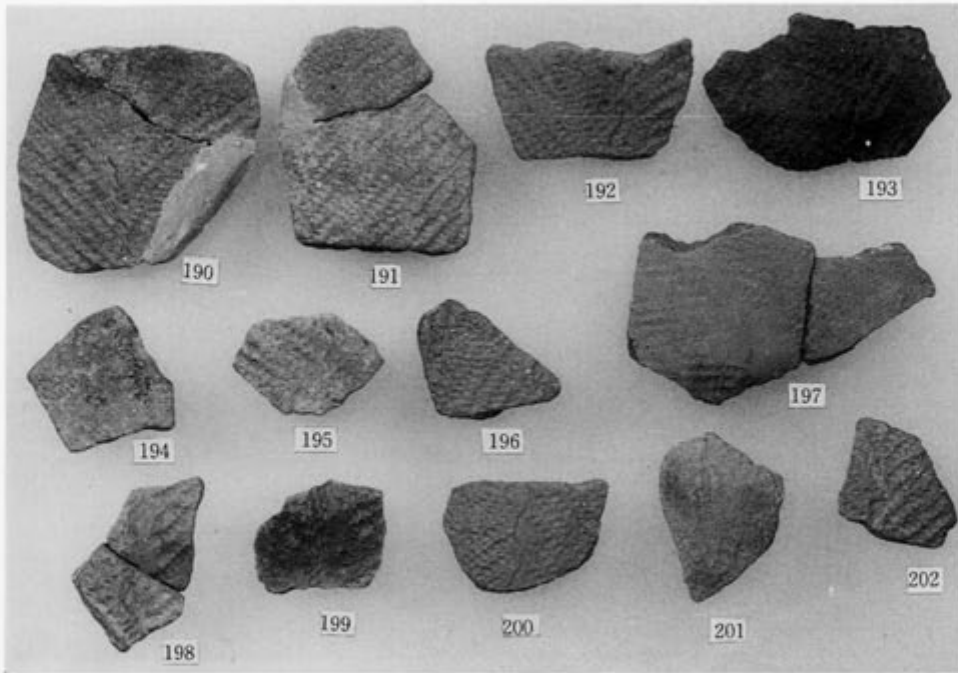
1. 縄文土器 (X層) (8)



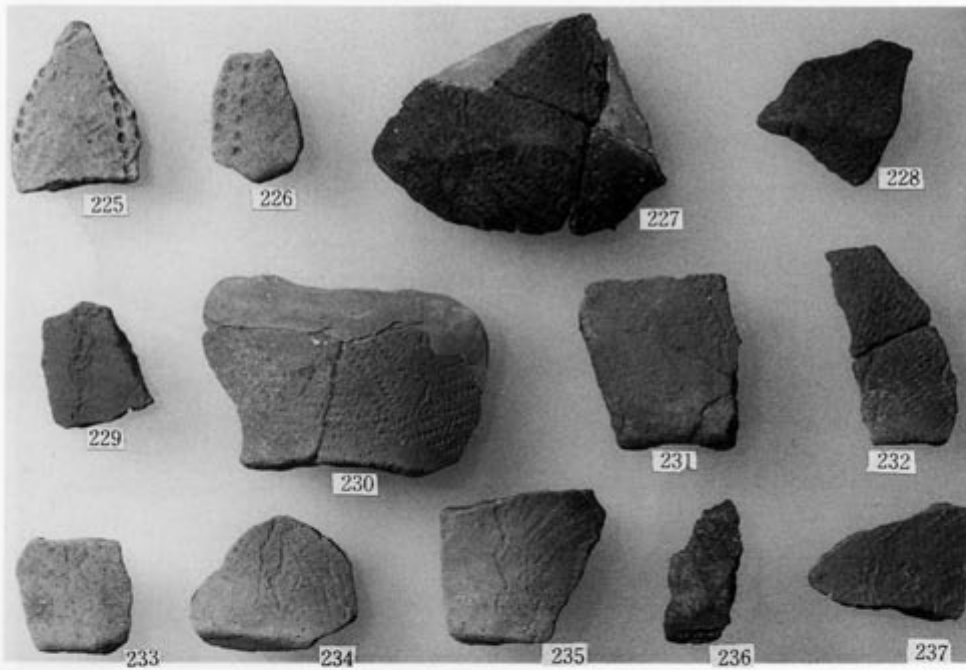
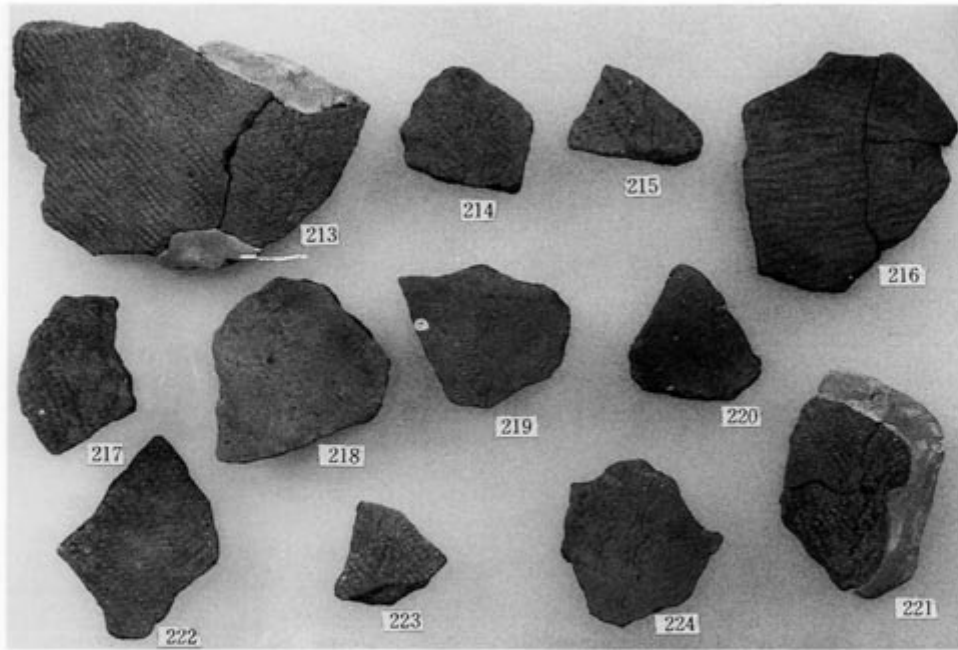
1. 縄文土器 (X層) (9)



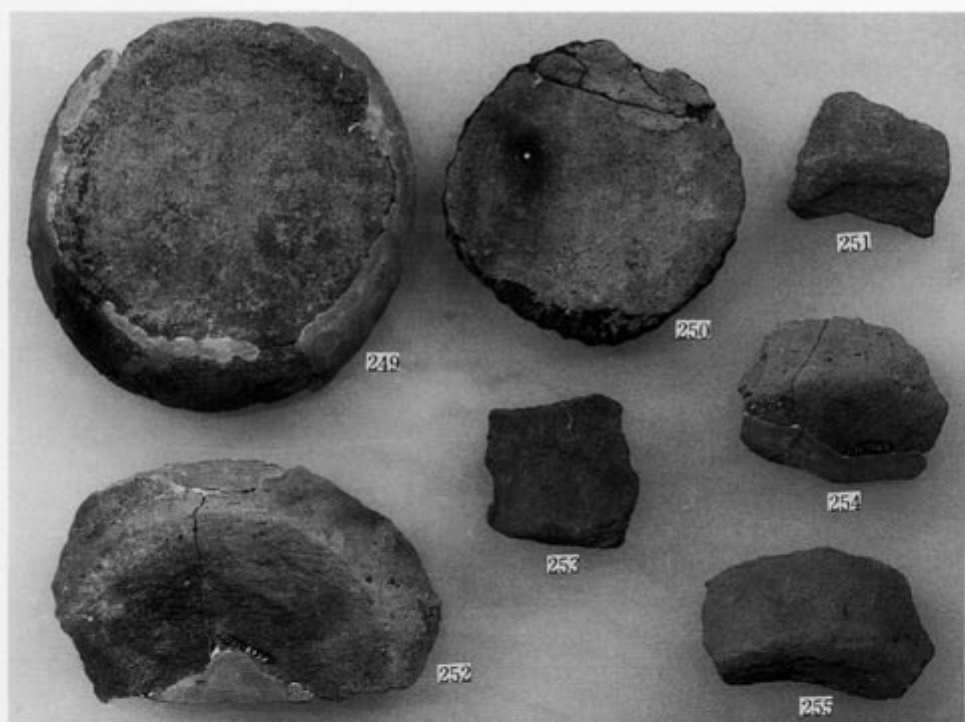
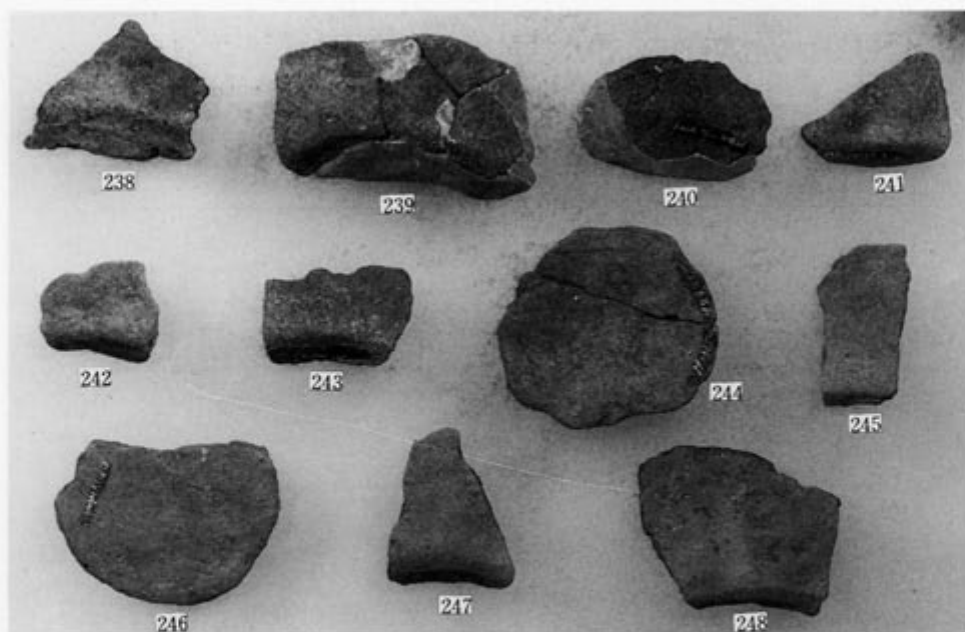
1. 縄文土器 (X層) (10)



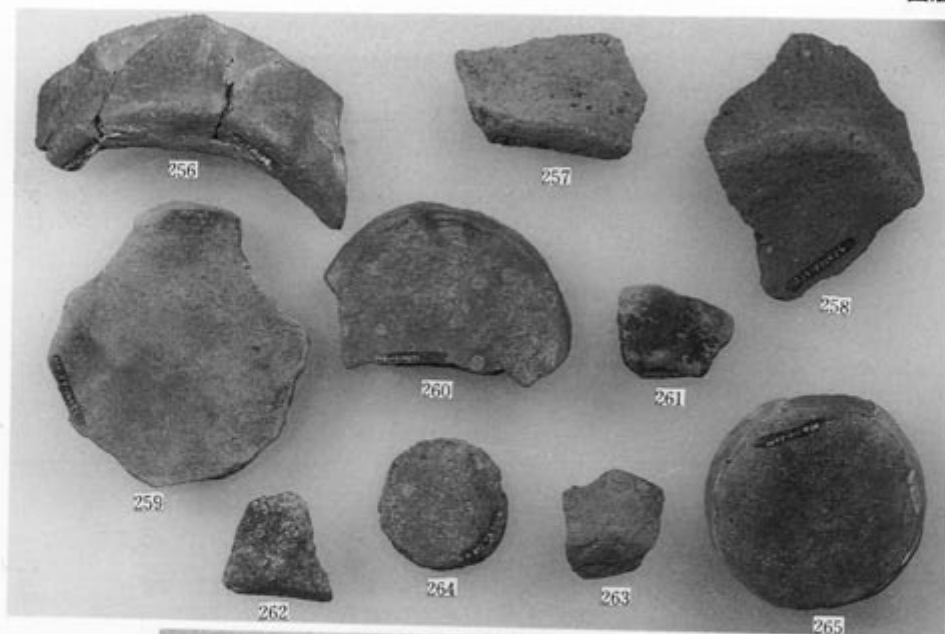
1. 縄文土器 (X層) (11)

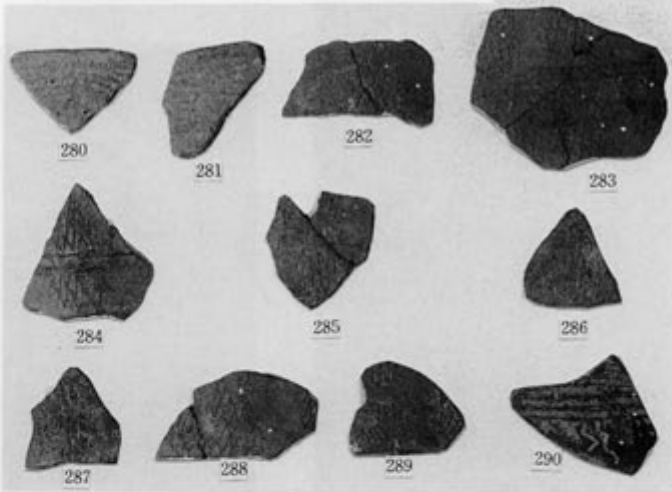
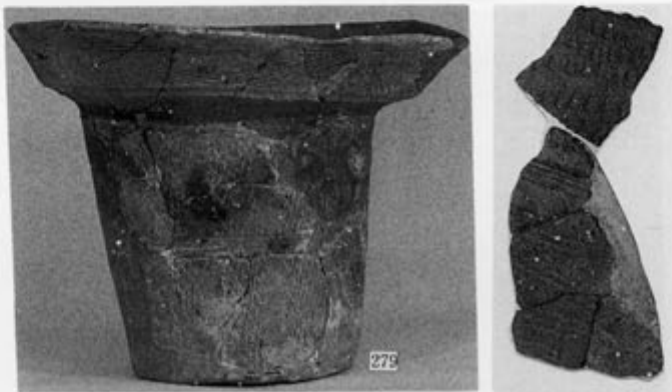
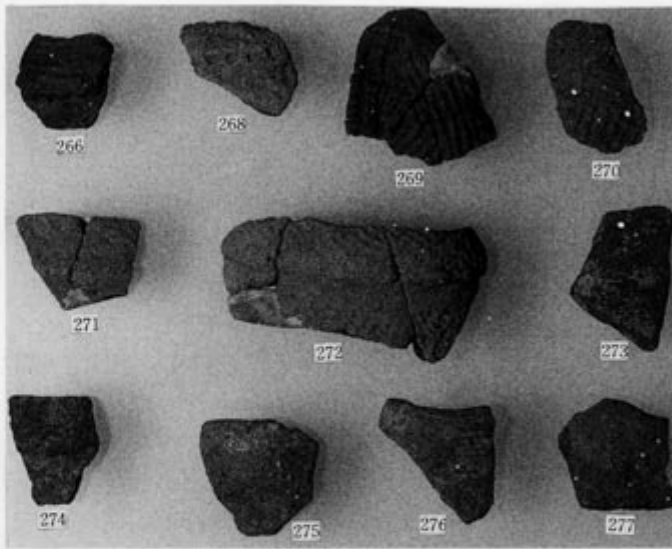


1. 縄文土器 (X層) (12)

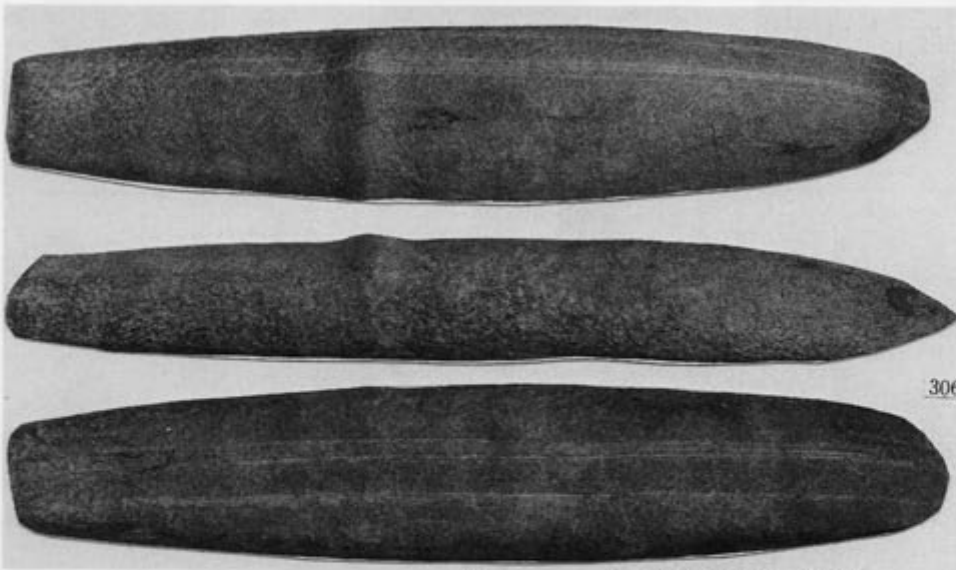
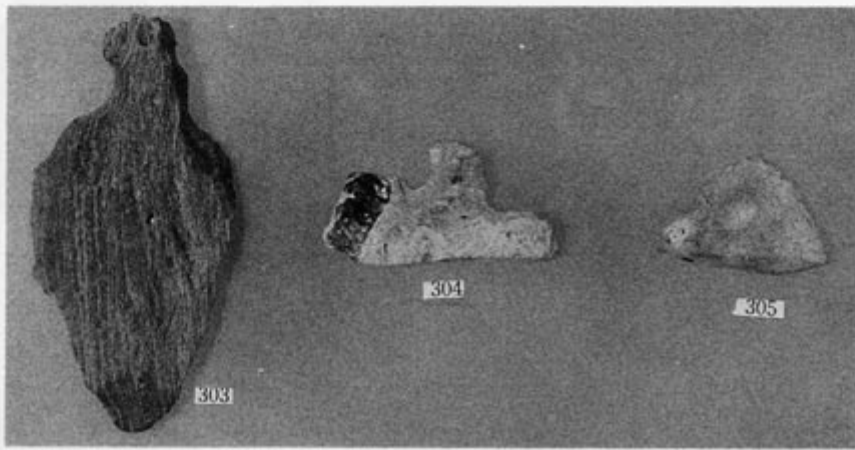
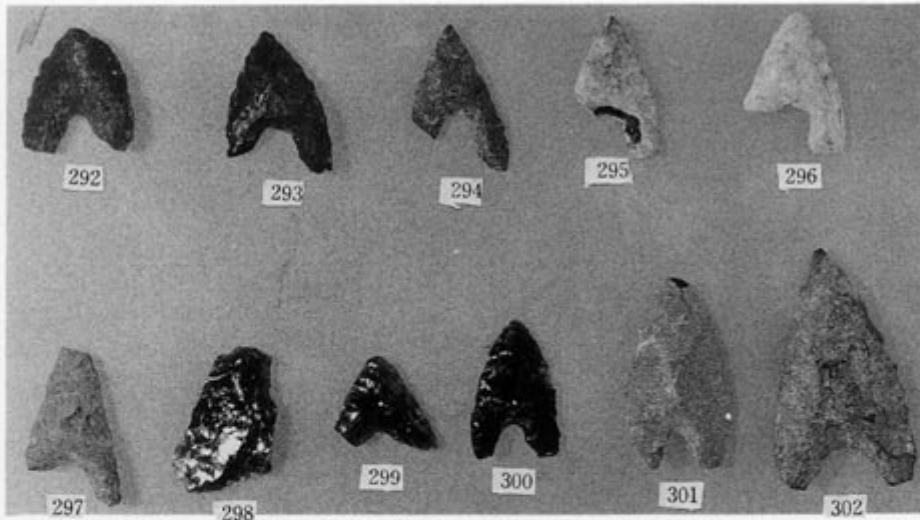


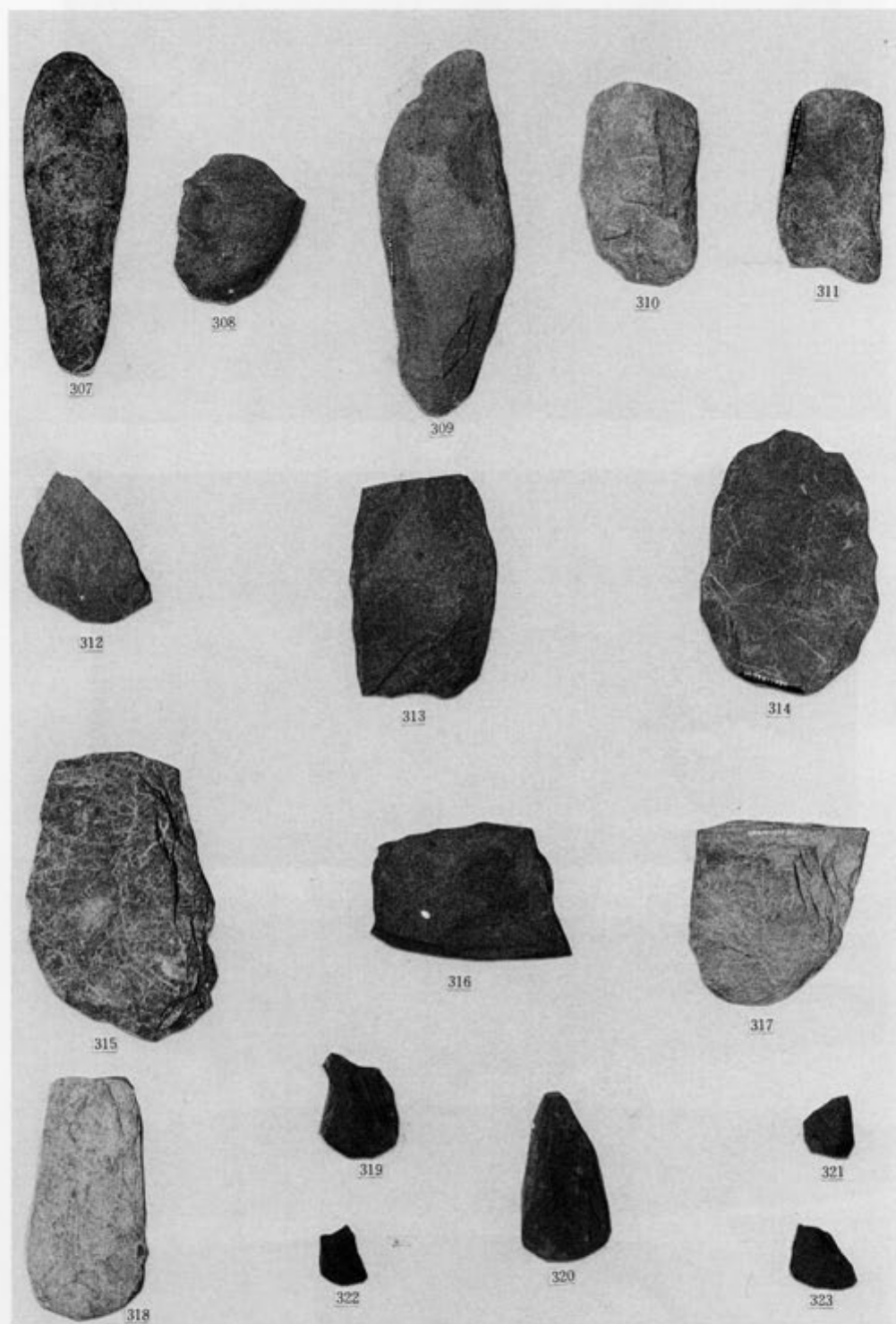
1. 縄文土器 (X層) (13)



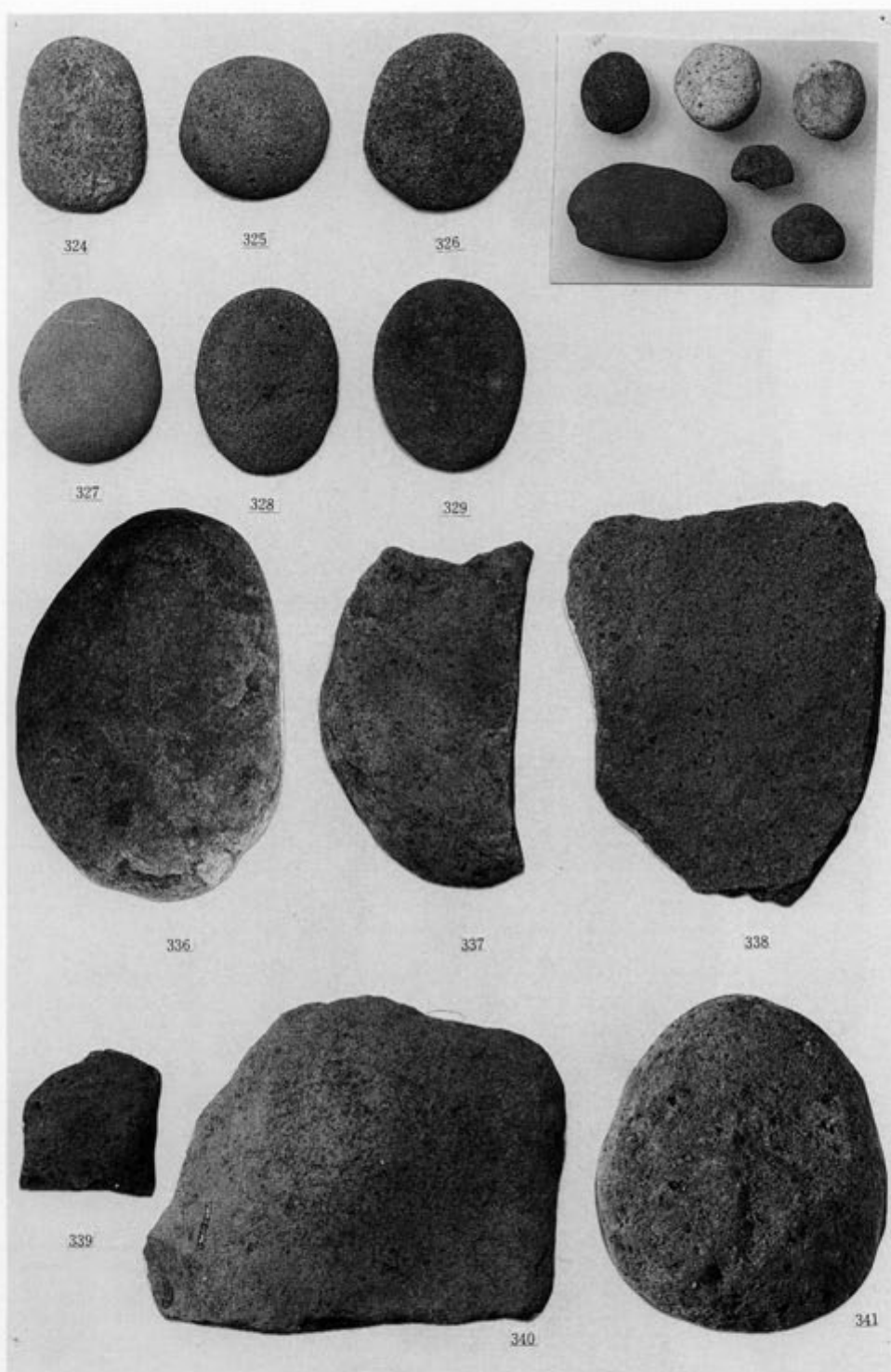


1. 縄文土器 (X層) (15)

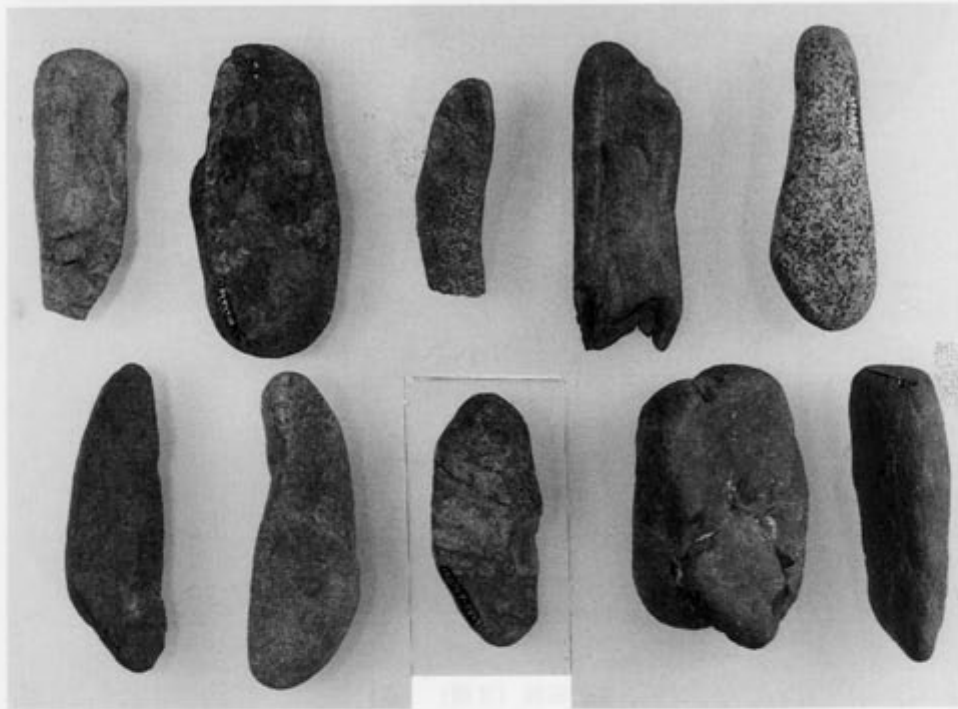
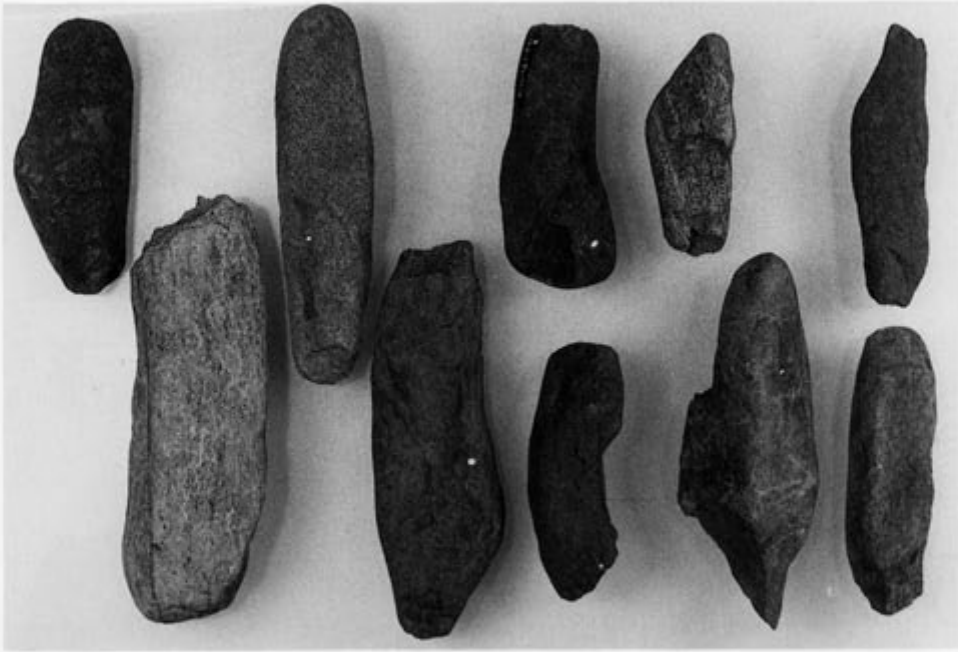




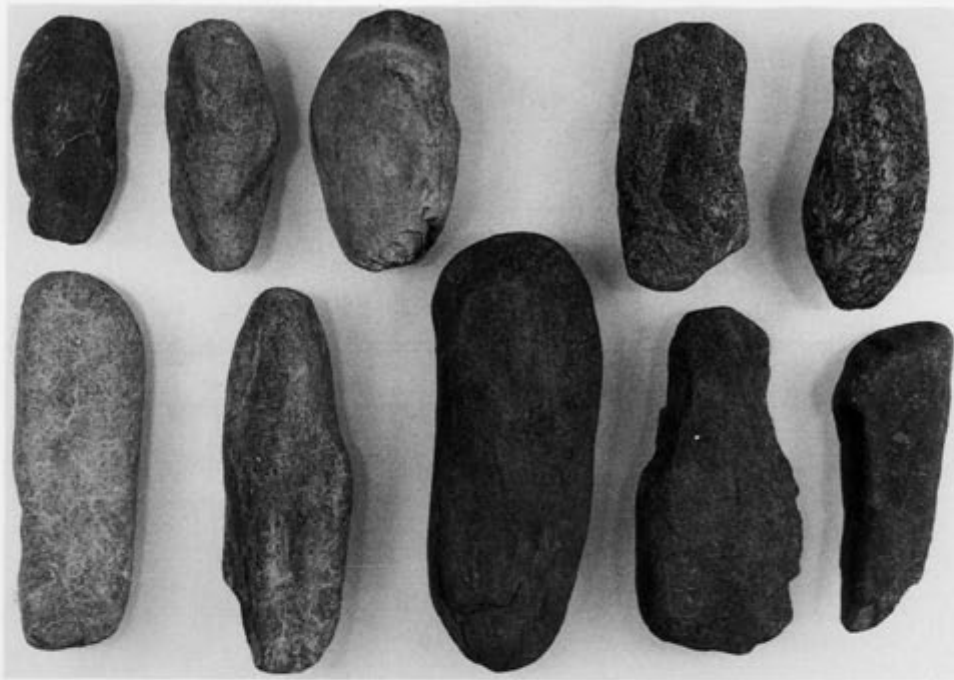
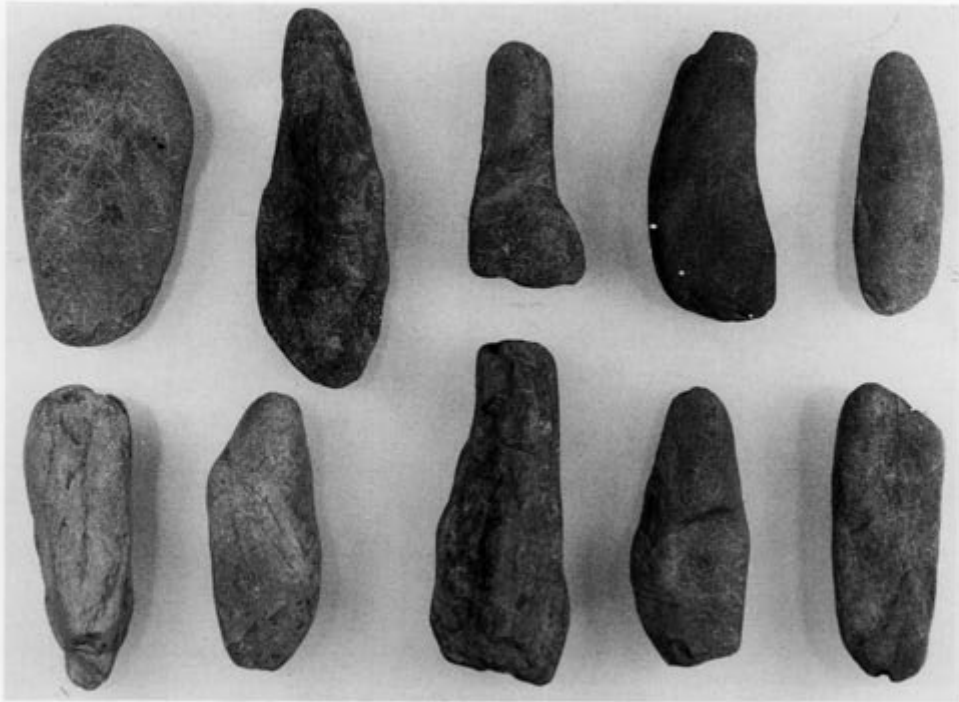
1. 石器 (X層) (2)



1. 石器 (X層) (3)



1. 石器 (X層) (4)



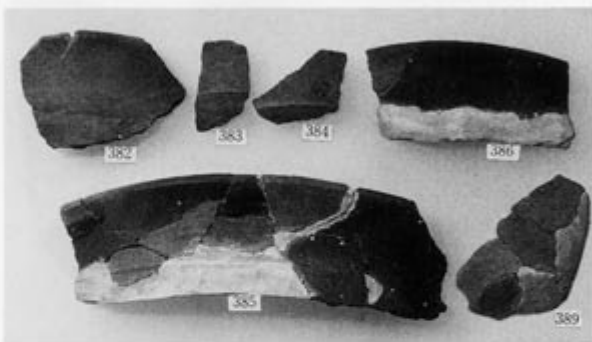
1. 石器 (X層) (5)



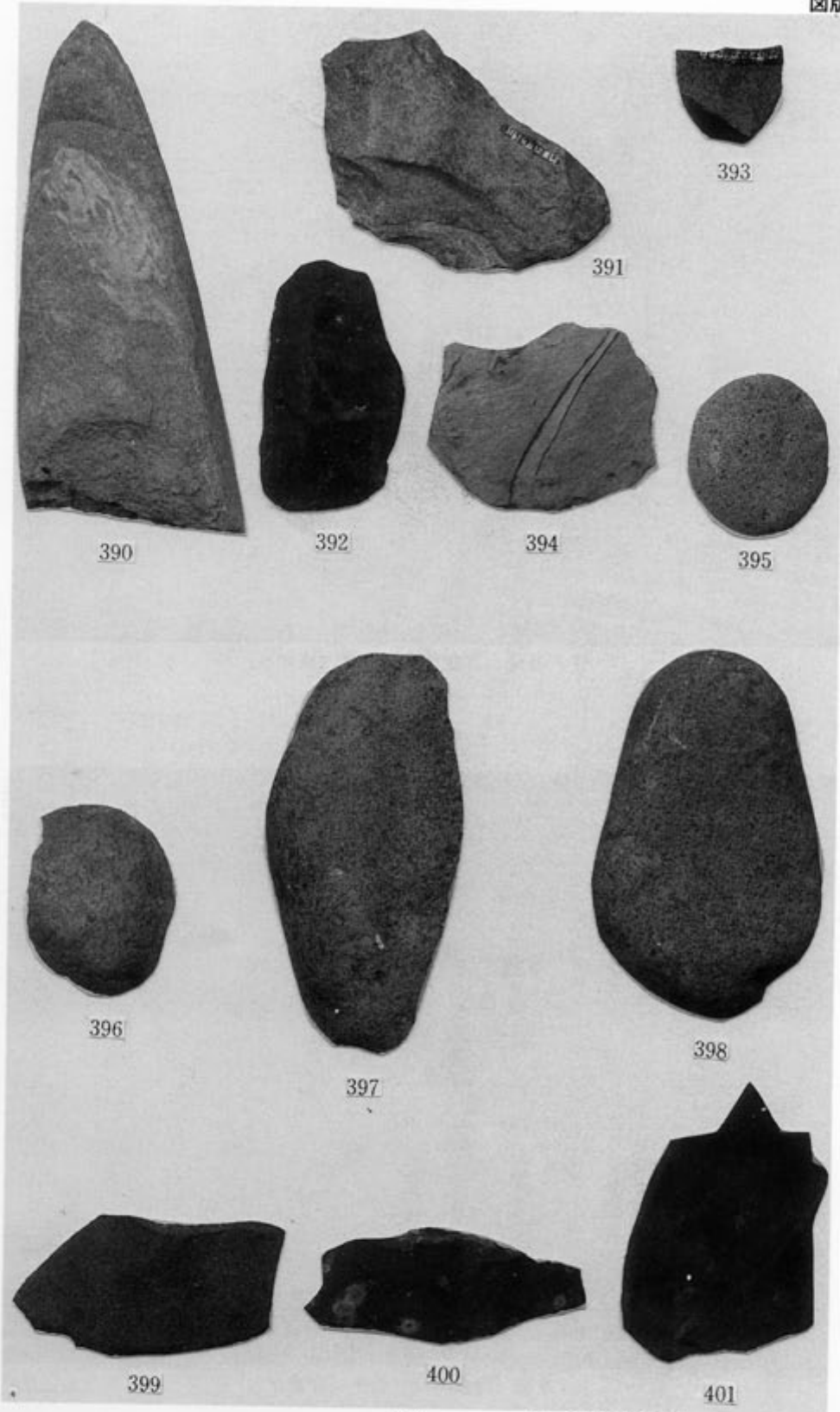
1. VI層遺物出土状態 (東から)



2. VI層土器出土状態 (387)



3. 縄文土器 (VI層)

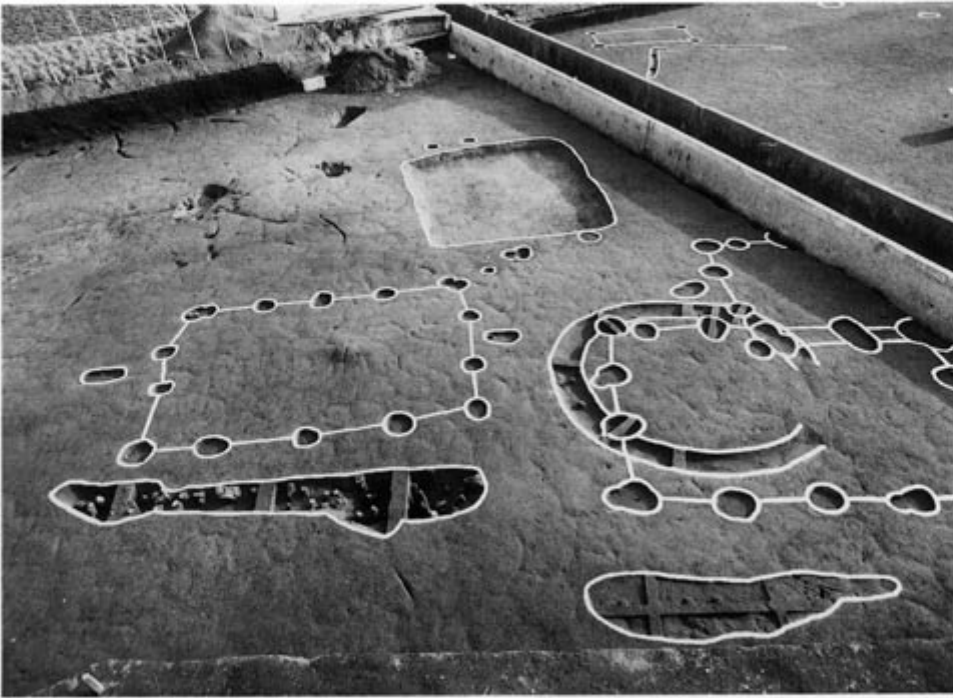




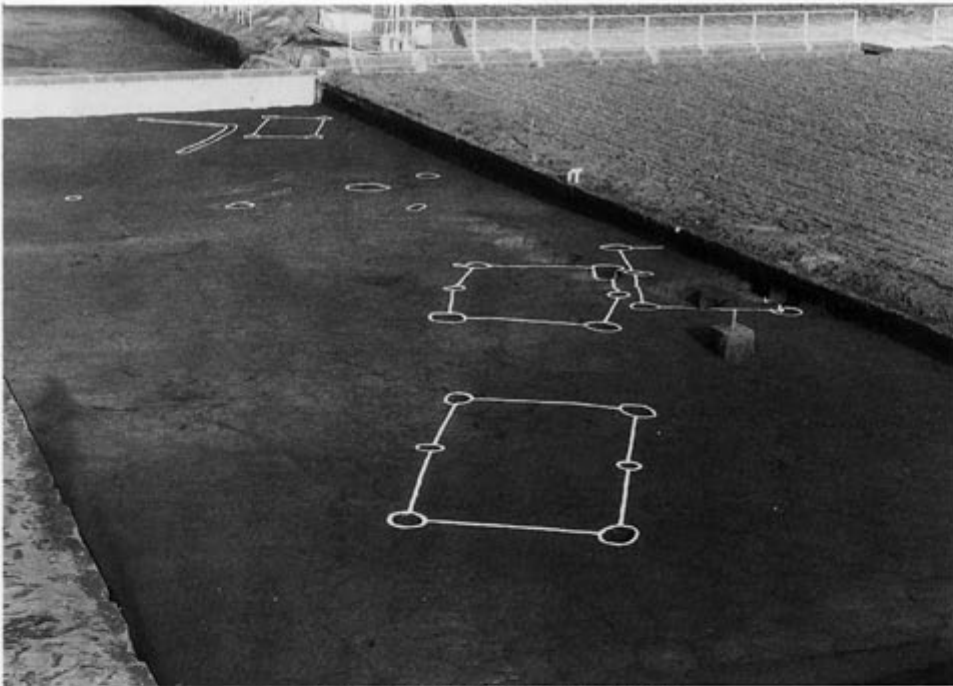
1. III層（弥生時代）全景（東から）



2. III層（弥生時代）全景（北東から）



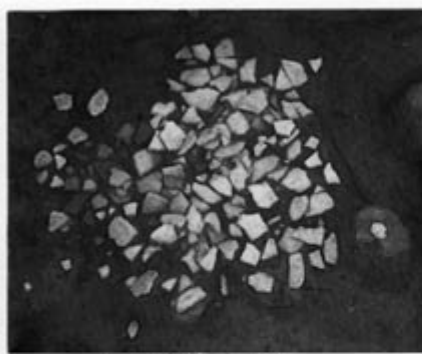
1. Ⅲ層（弥生時代）遺構近景（北から）



2. Ⅲ層（弥生時代）遺構近景（西から）



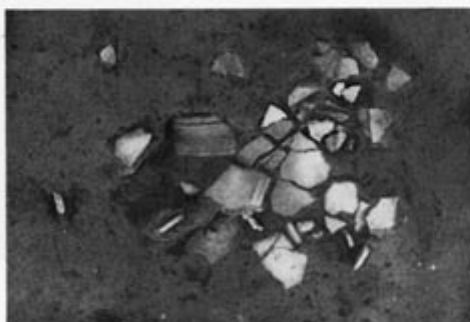
1. III層遺物出土状況遠景（東から）



2. 土器出土状況



3. 土器出土状況



4. 土器出土状況



5. 石器 (537) 出土状況



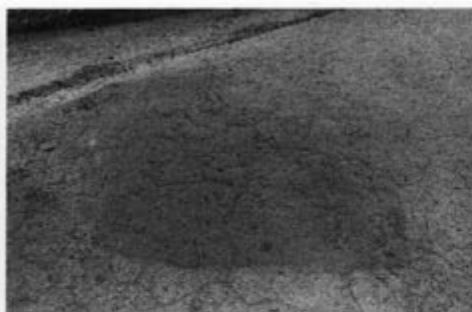
6. 鉄片出土状況



7. 石鏃 (528) 出土状況



1. 1号住居址遠景（東から）



2. 1号住居址検出状況



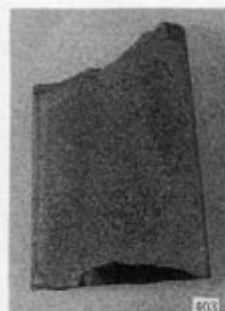
3. 1号住居址掘り下げ状況（北から）



4. 1号住居址掘り下げ状況（南から）



5. 柱炭化木検出状況



6. 1号住居址出土遺物



1. 1号住居址全景



2. 1号住居址全景



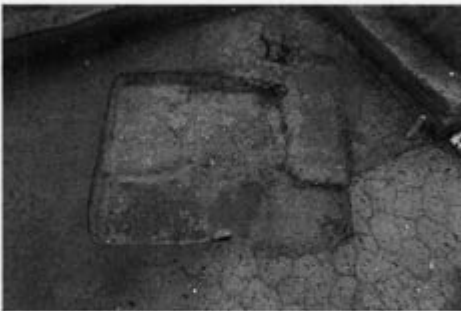
1. 2号住居址検出状況



2. 住居址掘り下げ状況



3. 炭化木出土状況



4. 住居址床面検出状況



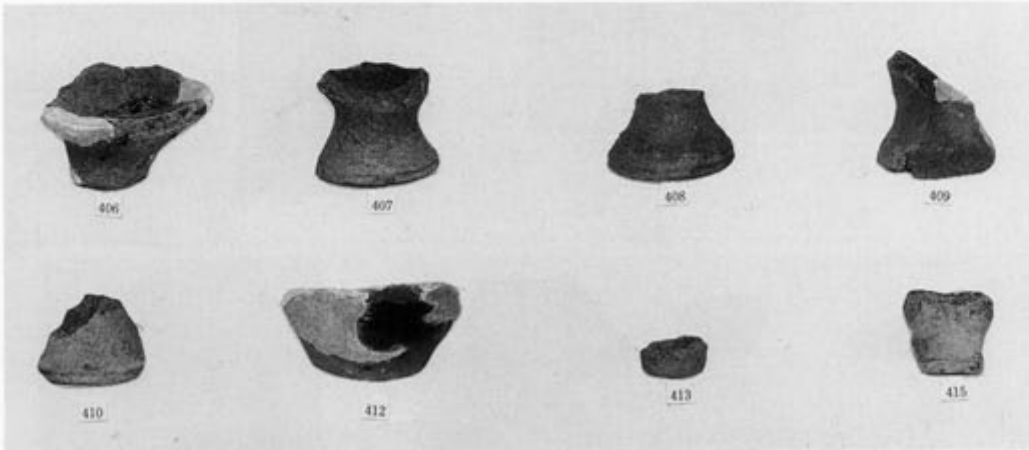
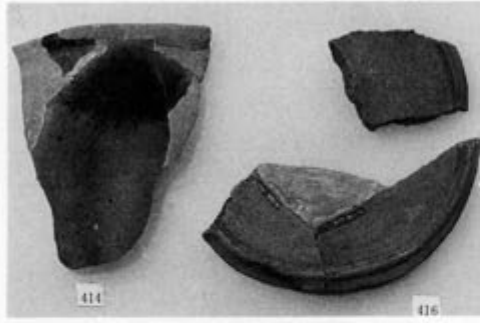
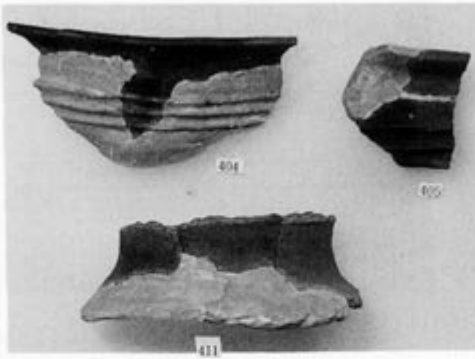
5. 2号住居址遠景 (南から)



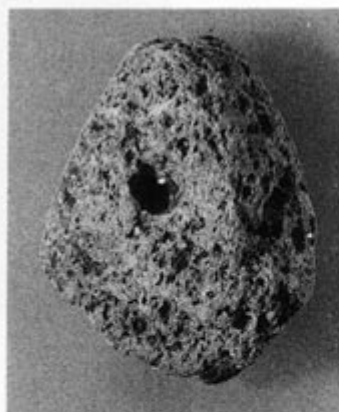
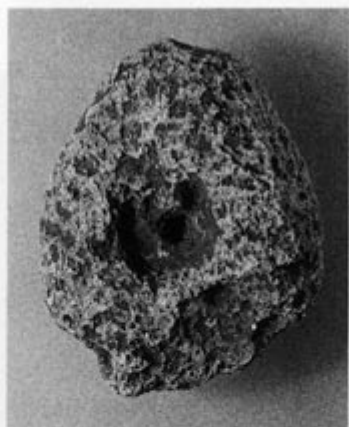
1. 2号住居址検出状況（南から）



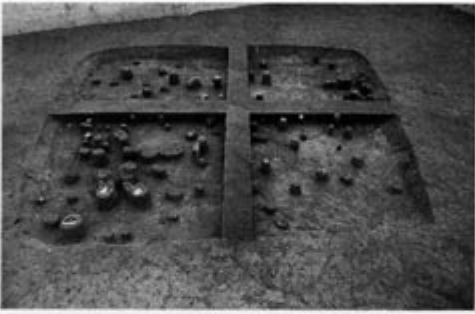
2. 2号住居址全景（南から）



1. 2号住居址出土遗物(1)



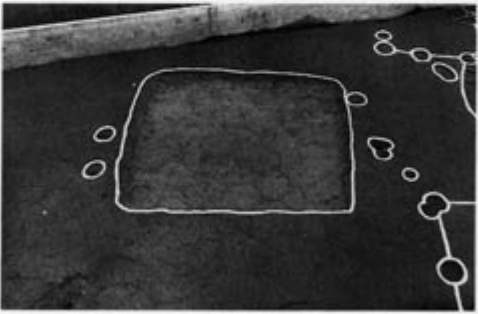
2. 2号住居址出土遺物(2)



1. 3号住居址掘り下げ状況 (1)



2. 3号住居址掘り下げ状況 (2)



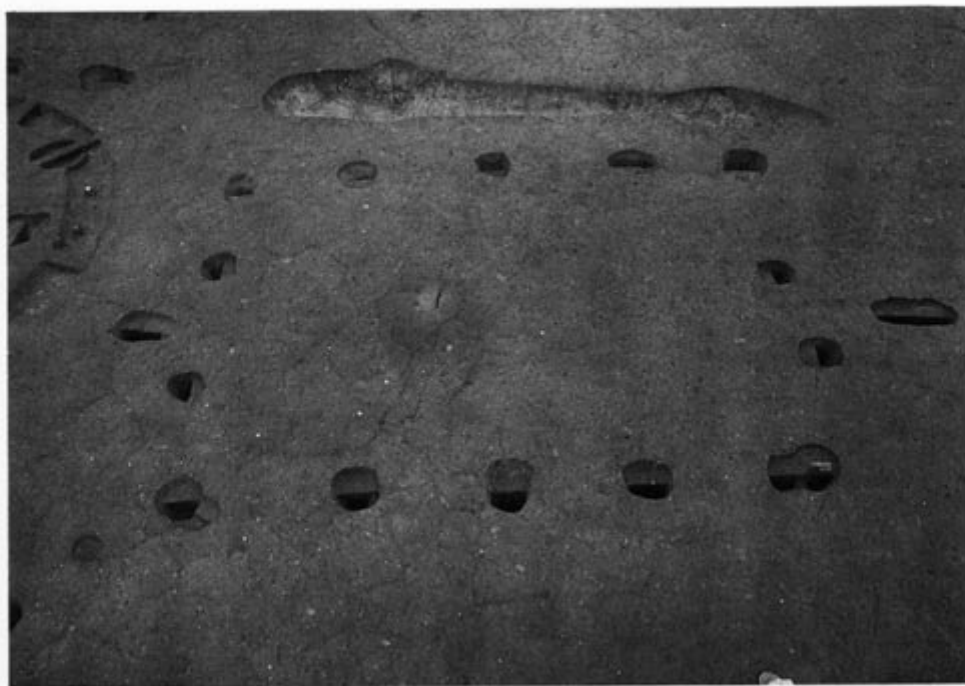
3. 3号住居址全景



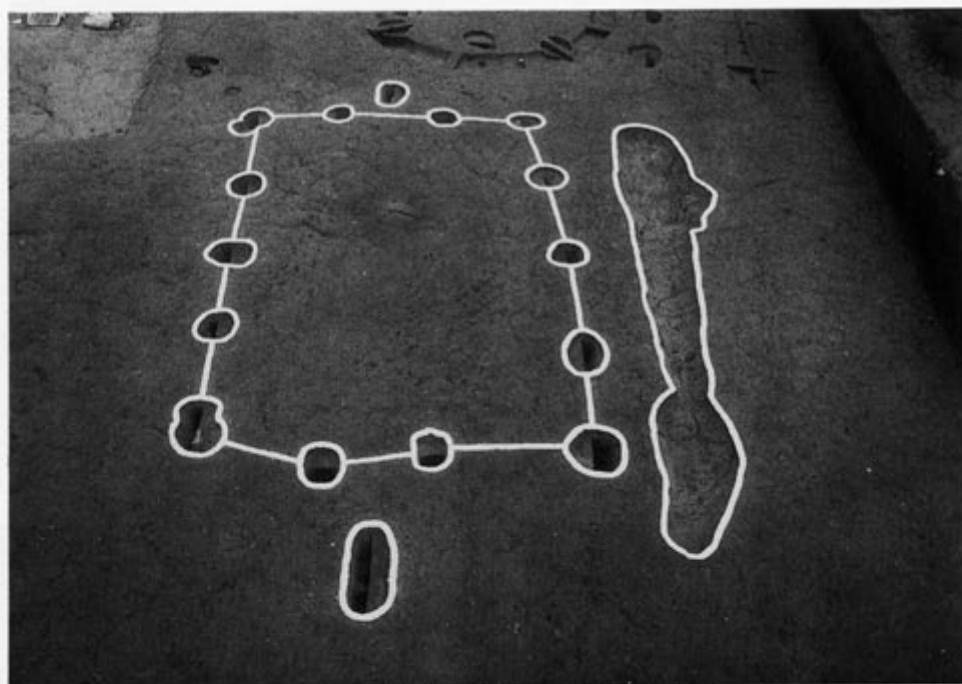
4. 3号住居址遠景



5. 3号住居址全景



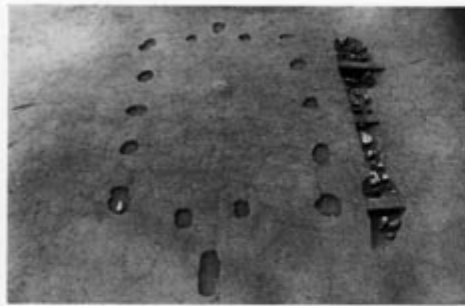
1. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (1)



2. 1号掘立柱建物掘り下げ状況 (2)



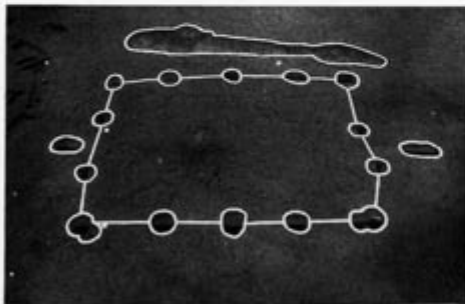
1. 1号掘立柱建物検出状況



2. 掘り下げ状況 (1)



3. 掘り下げ状況 (2)



4. 検出状況



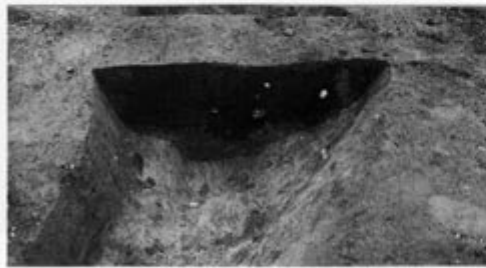
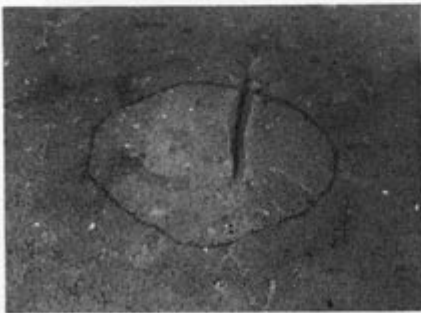
5. 1号掘立柱建物検出状況



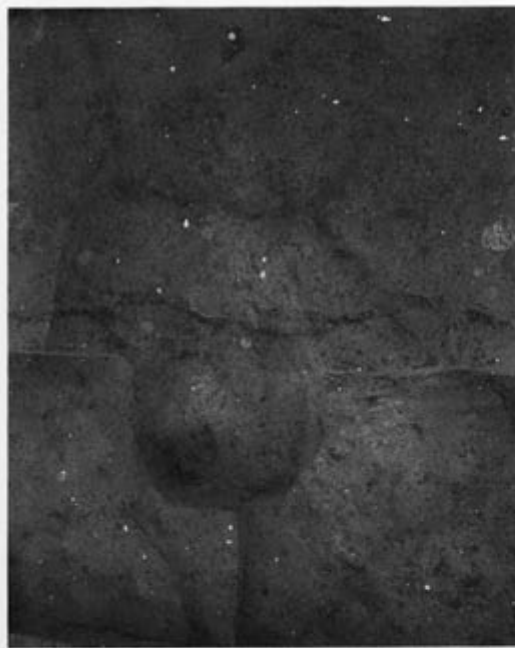
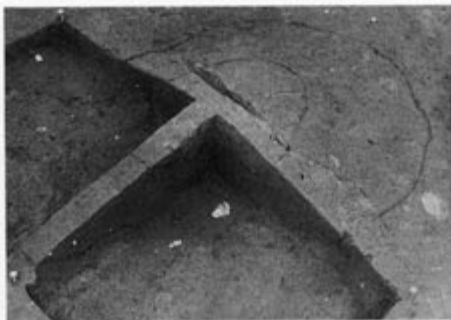
1. 柱穴掘り下げ状況



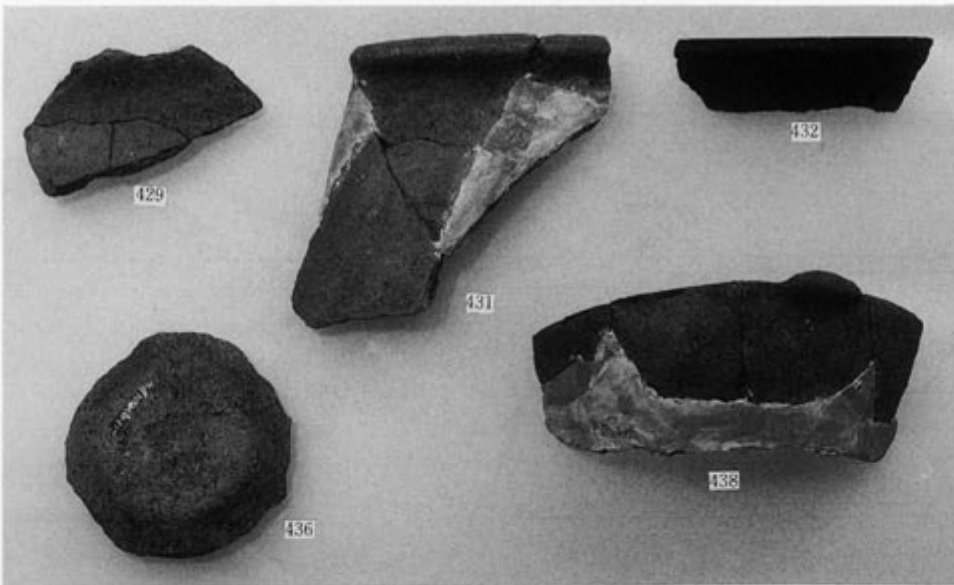
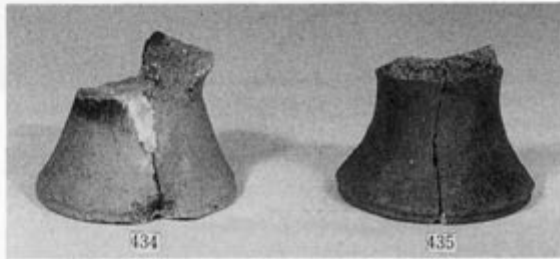
2. 溝1断面(1)



3. 溝1断面(2)



4. 建物内路址検出状況



1. 1号掘立柱建物・溝1出土遺物



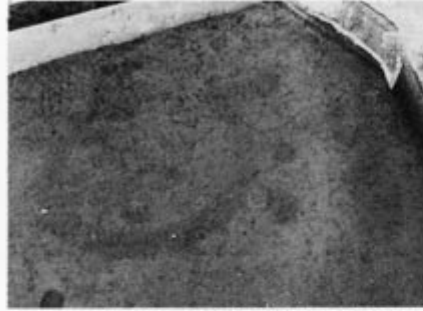
1. 2号据立柱建物検出状況（北から）



2. 2号据立柱建物掘り下げ状況（北から）



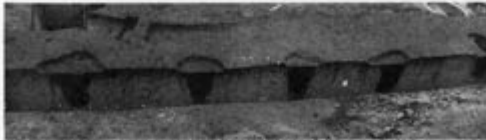
1. 溝2遺物出土状況(南から)



3. 2号掘立柱建物検出状況(北から)



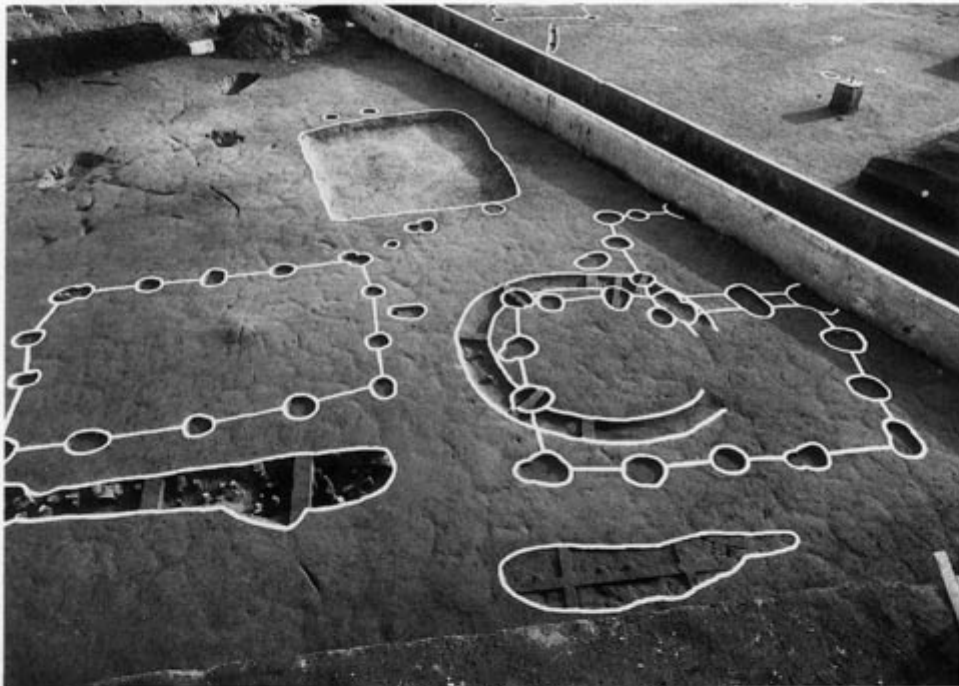
2. 溝2遺物出土状況(南から)



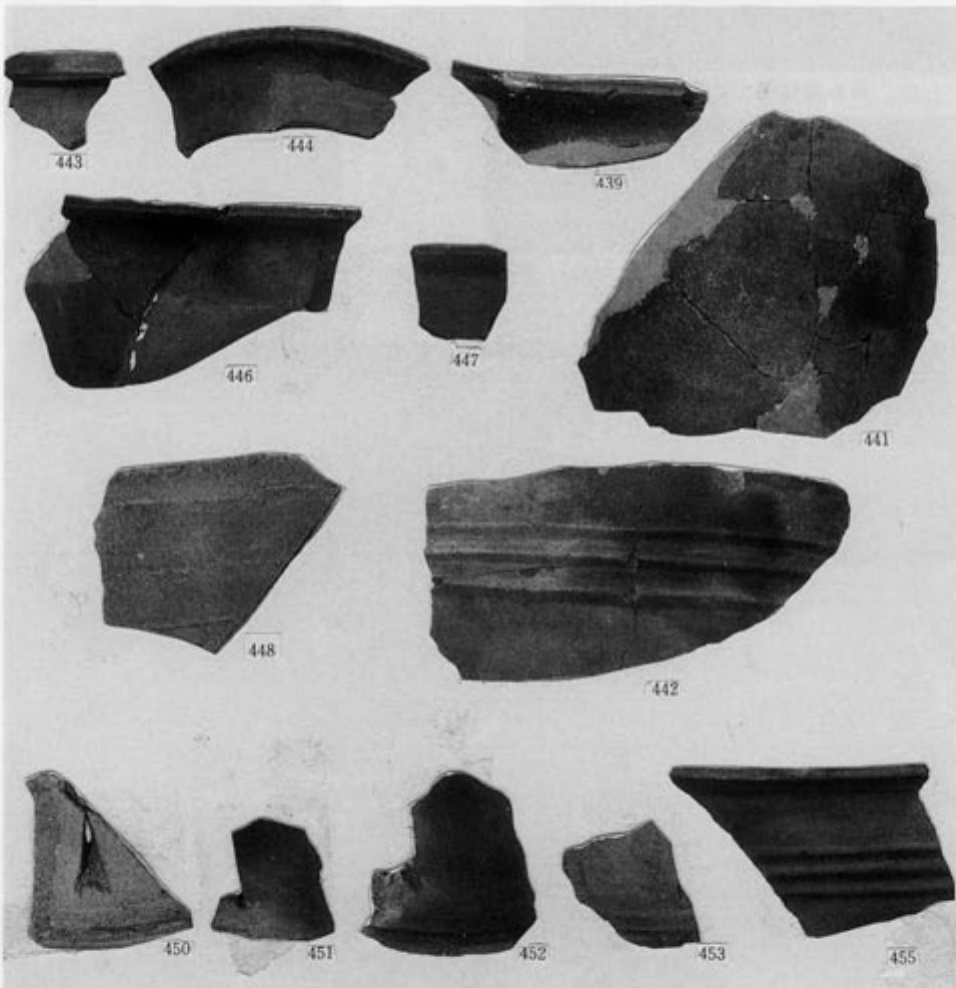
5. 柱穴掘り下げ状況(北から)



4. 溝2全景(東から)



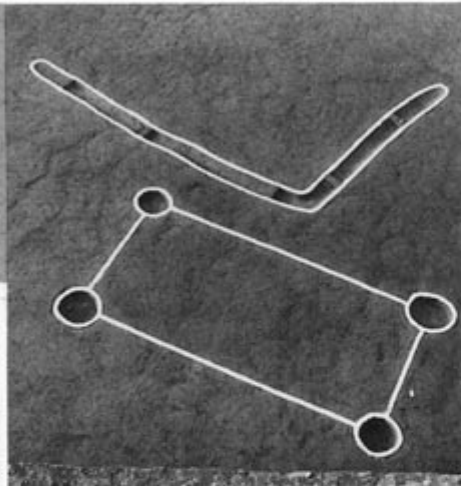
6. 2号掘立柱建物遠景(北から)



1. 2号掘立柱建物（沟内）出土遺物



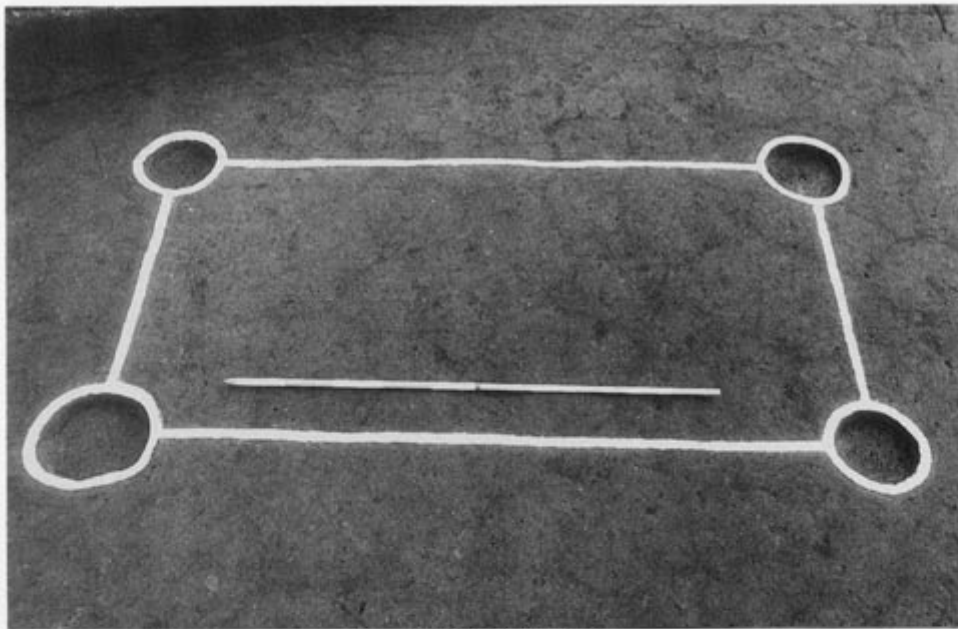
1. 4号掘立柱建物掘り下げ状況



3. 4号建物と溝3遠景



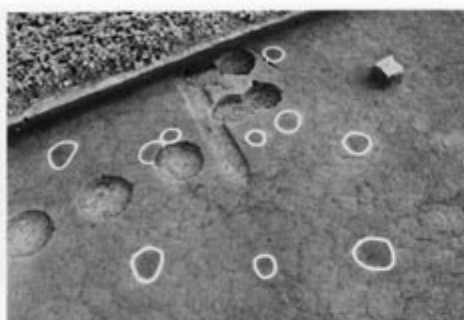
2. 作業風景



4. 4号掘立柱建物全景



1. 6号・7号建物検出状況(1)



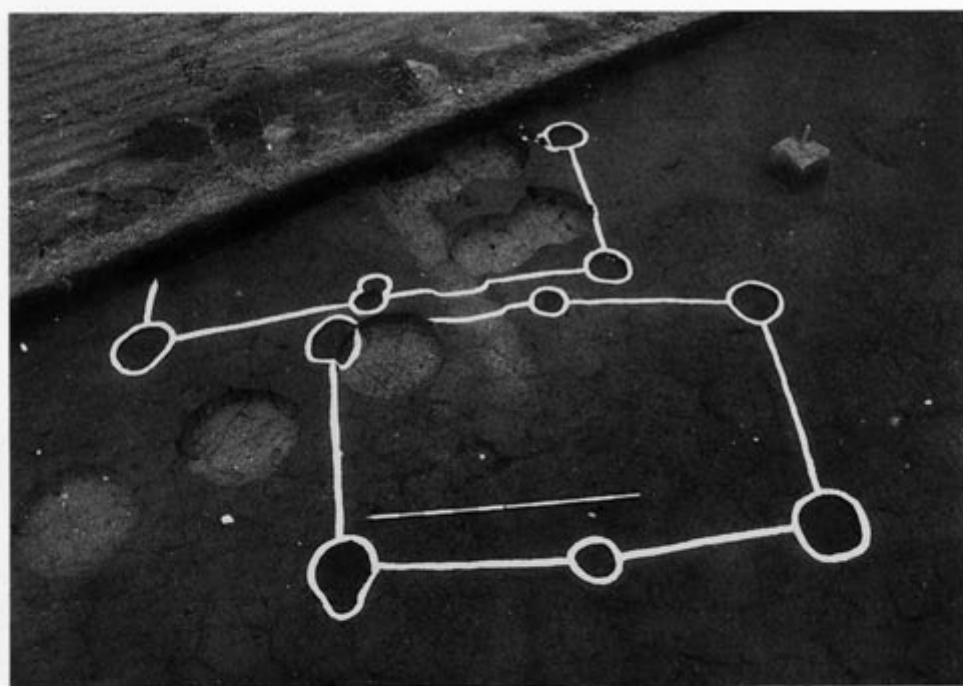
2. 6号・7号建物検出状況(2)



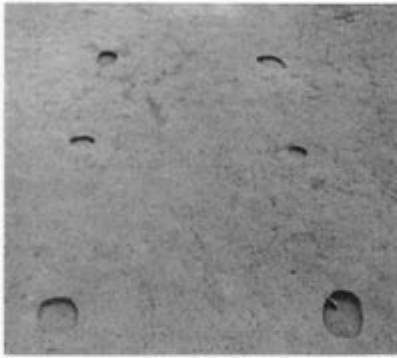
3. 6号・7号建物掘り下げ状況



4. 6号・7号・8号建物遠景



5. 6号・7号掘立柱建物全景



1. 8号建物掘り下げ状況（東から）



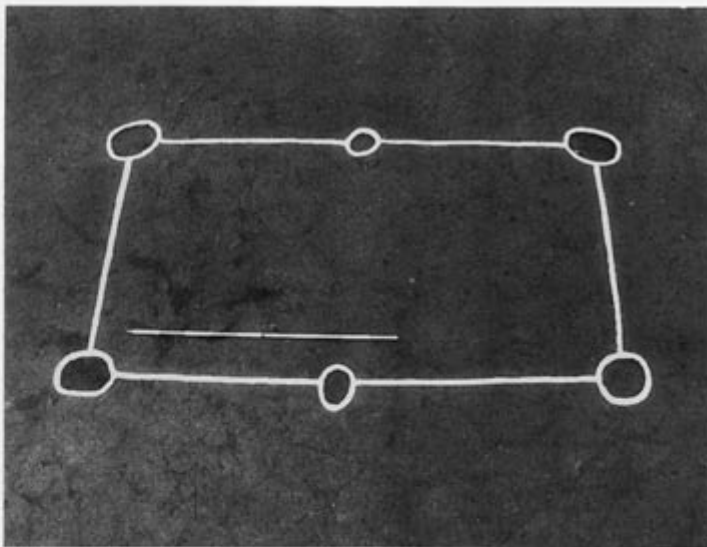
2. 建物群遠景（西から）



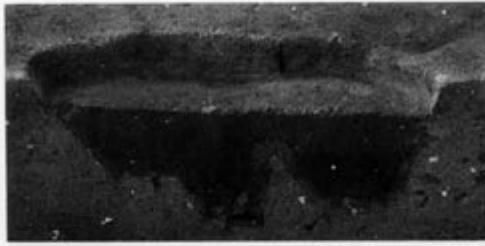
3. 8号建物柱穴出土遺物



4. 柱穴掘り下げ状態



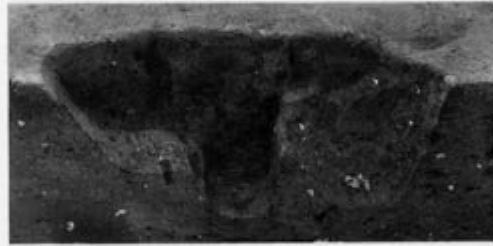
5. 8号建物全景（東から）



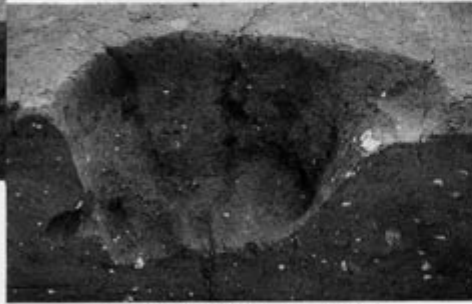
1. 1号建物跡柱穴 (No16)



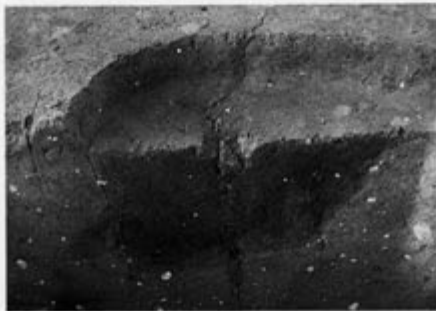
2. 3号建物跡柱穴 (No9)



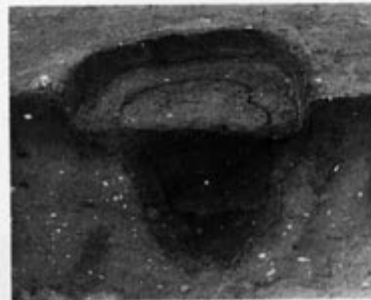
3. 1号建物跡柱穴 (No15)



4. 3号建物跡柱穴



5. 3号建物跡柱穴



6. 4号建物跡柱穴

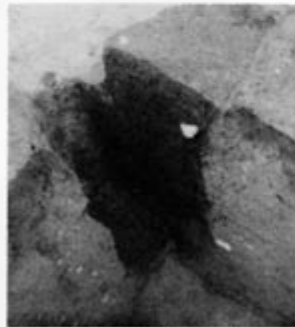
柱穴検出状態



1. 4号建物跡柱穴



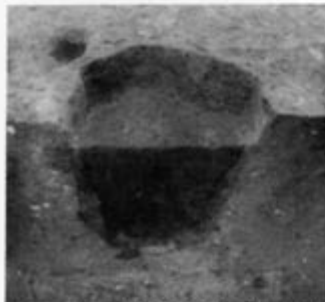
2. 5号建物跡柱穴



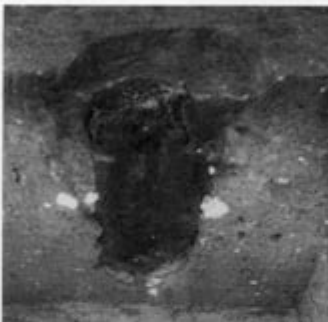
3. 7号建物跡柱穴 (No 2)



4. 7号建物跡柱穴 (No 1)



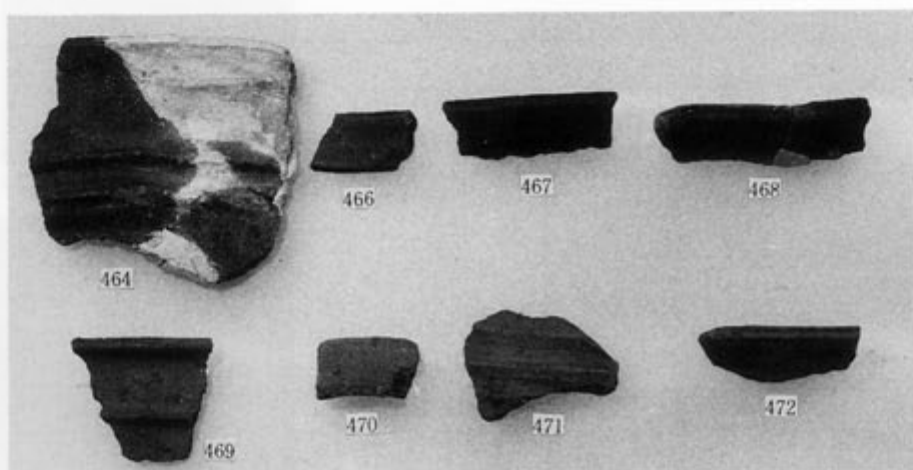
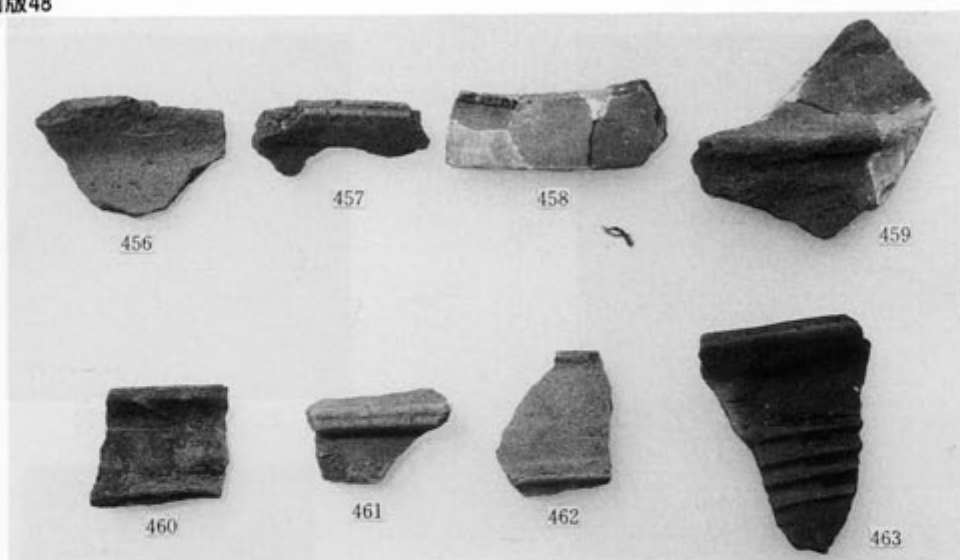
5. 7号建物跡柱穴 (No 3)



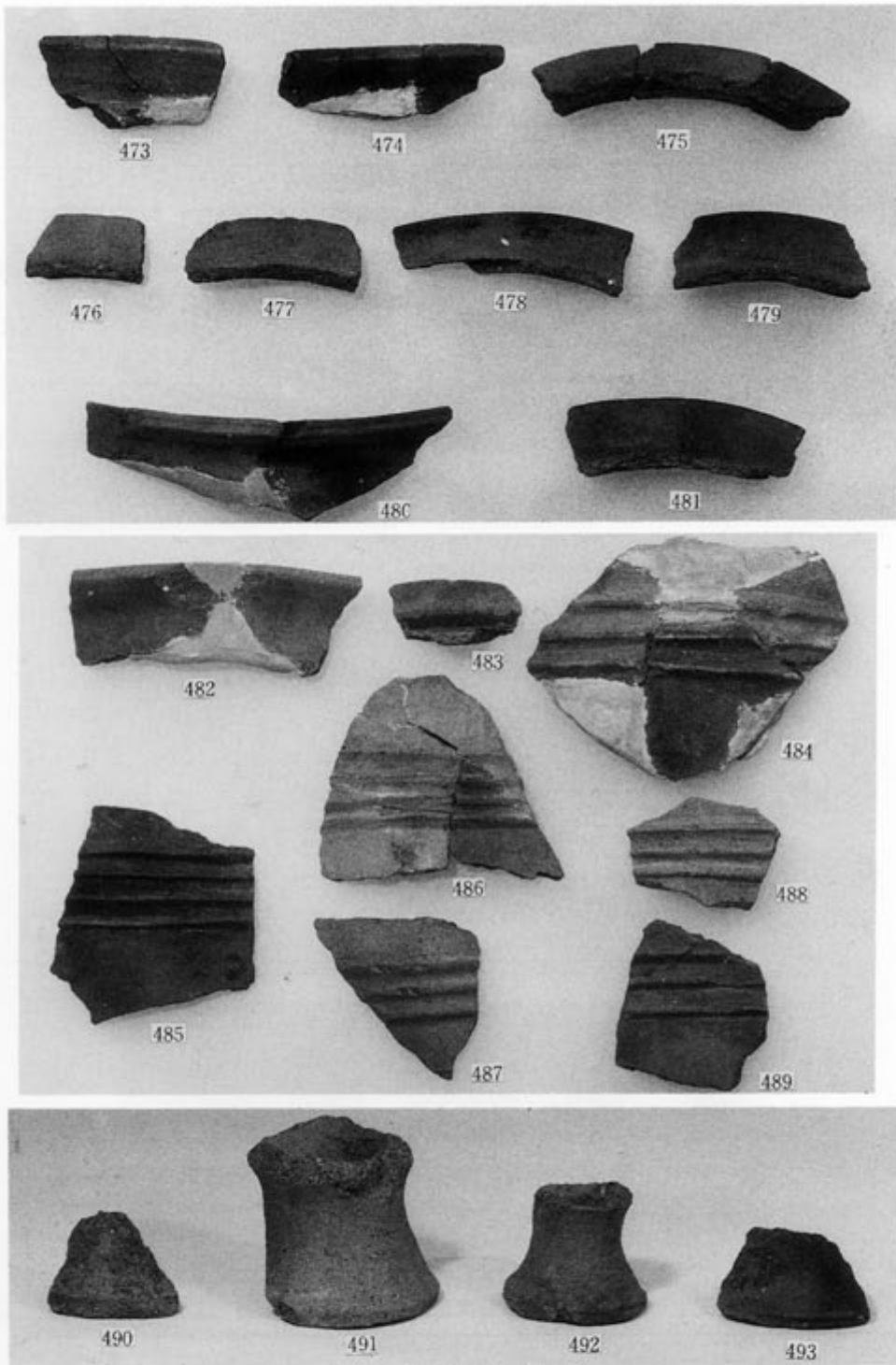
6. 7号建物跡柱穴 (No 6)



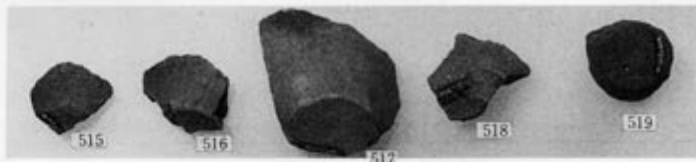
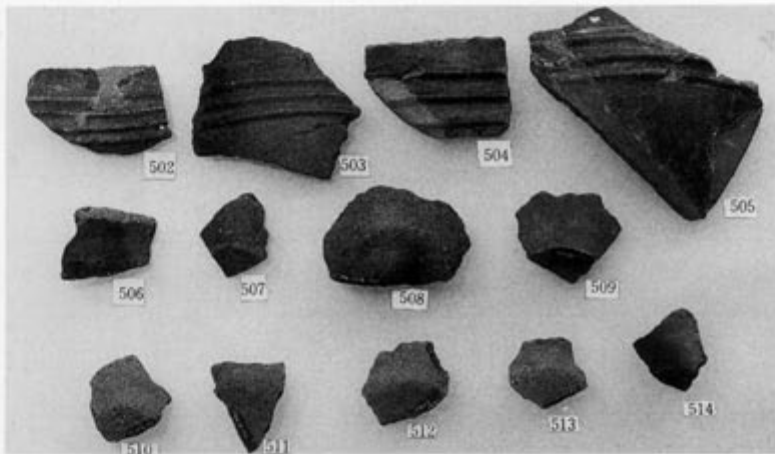
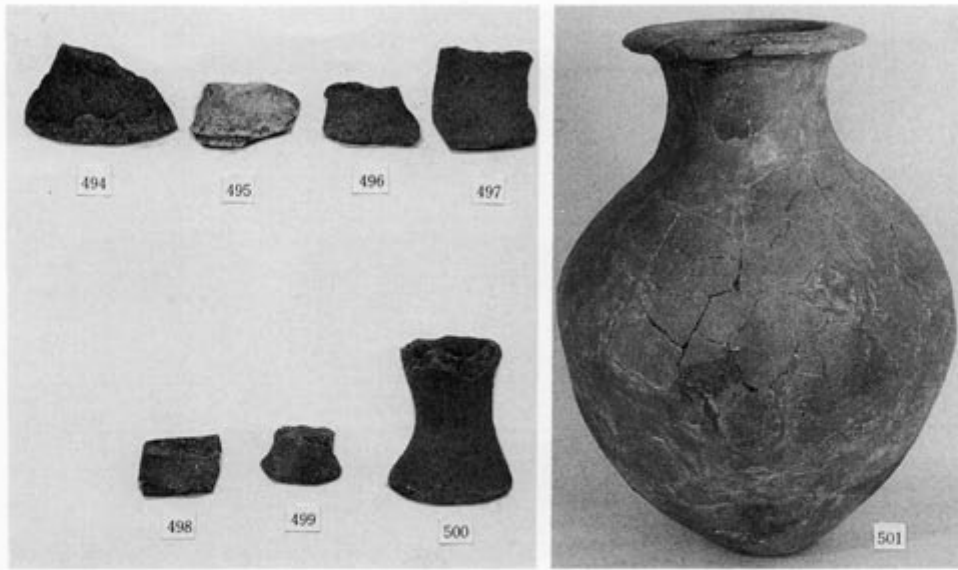
7. 円形周溝と建物跡柱穴の切り合い



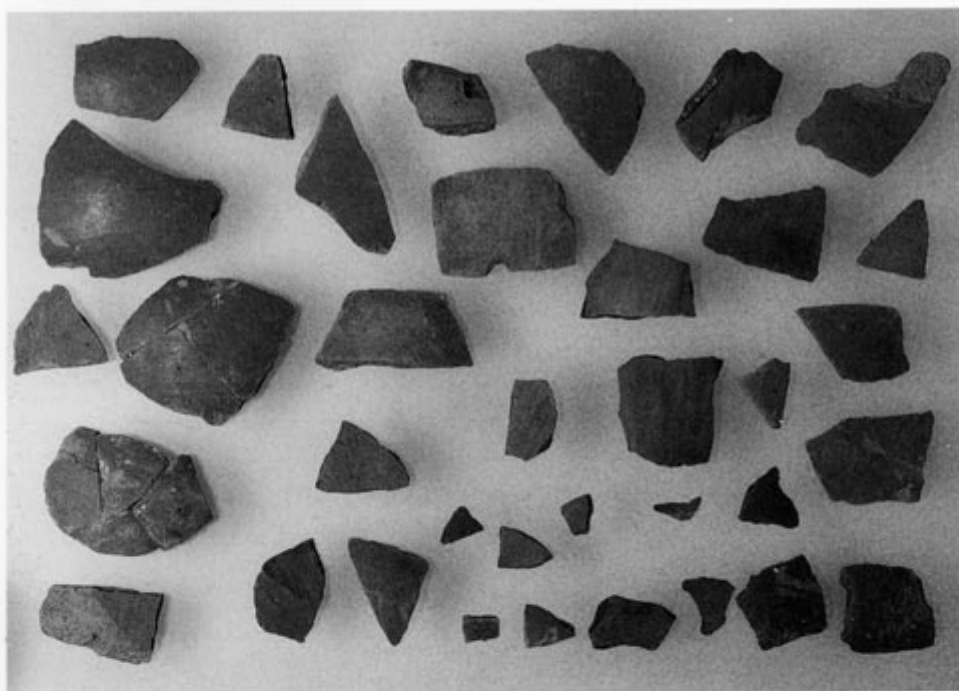
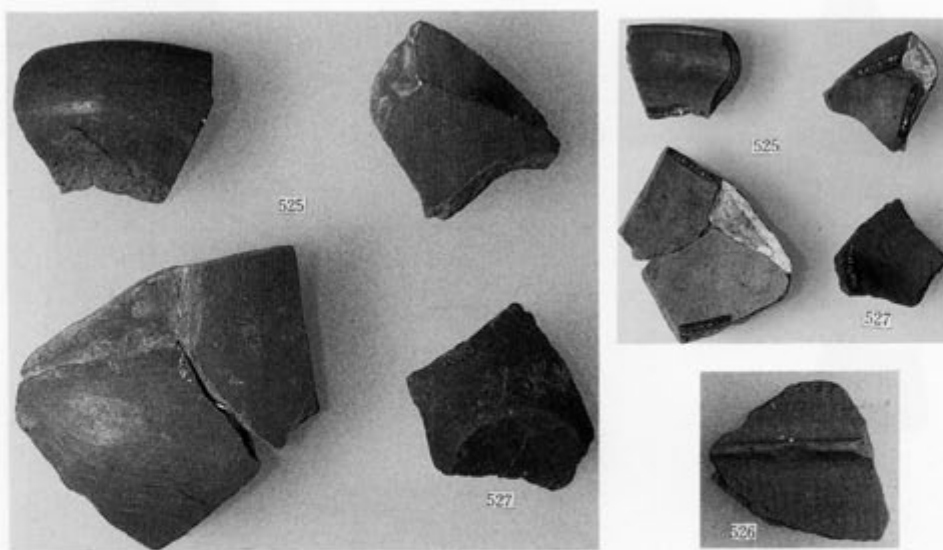
1. Ⅲ層出土土器(1)



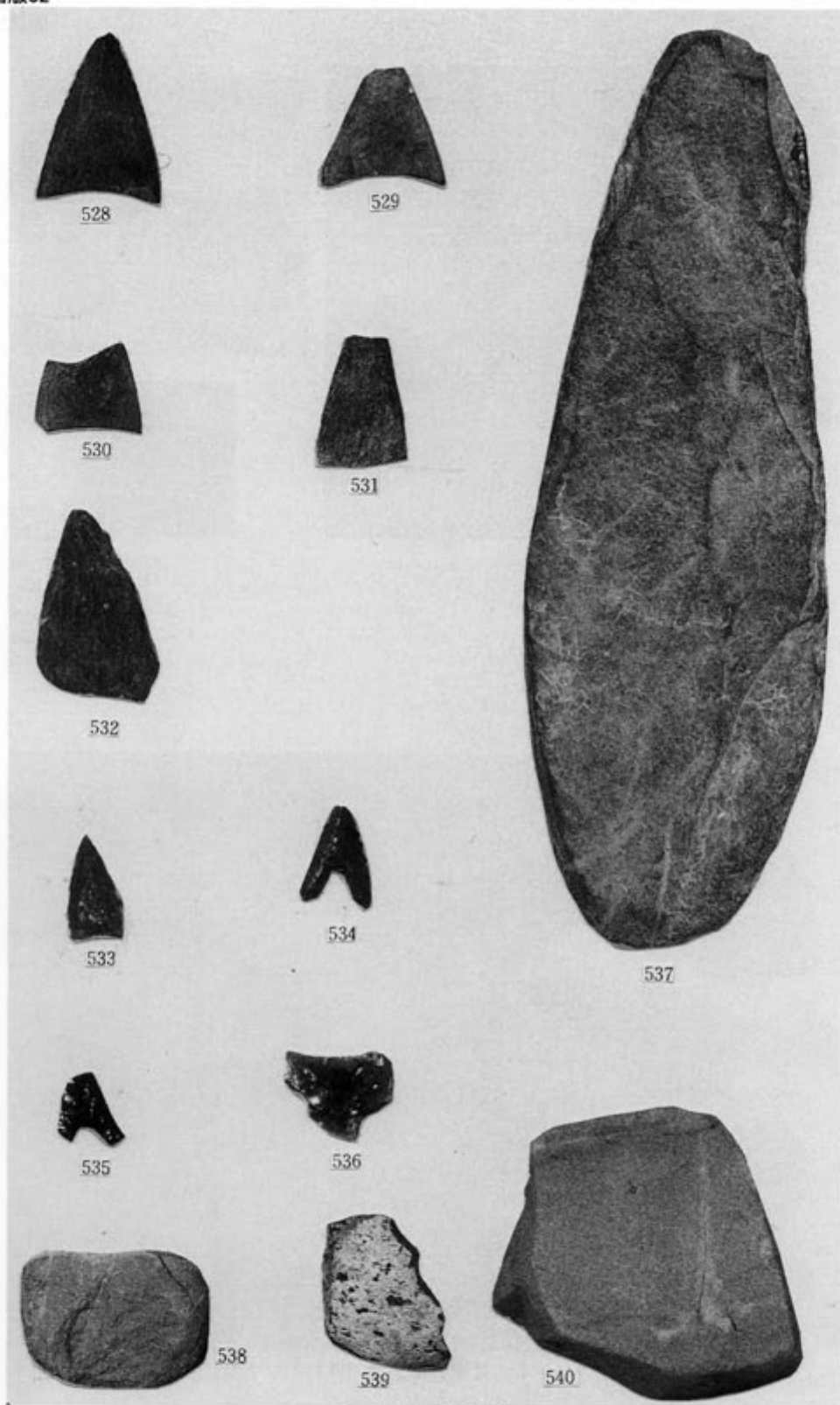
1. Ⅲ層出土土器 (2)



1. Ⅲ層出土土器(3)



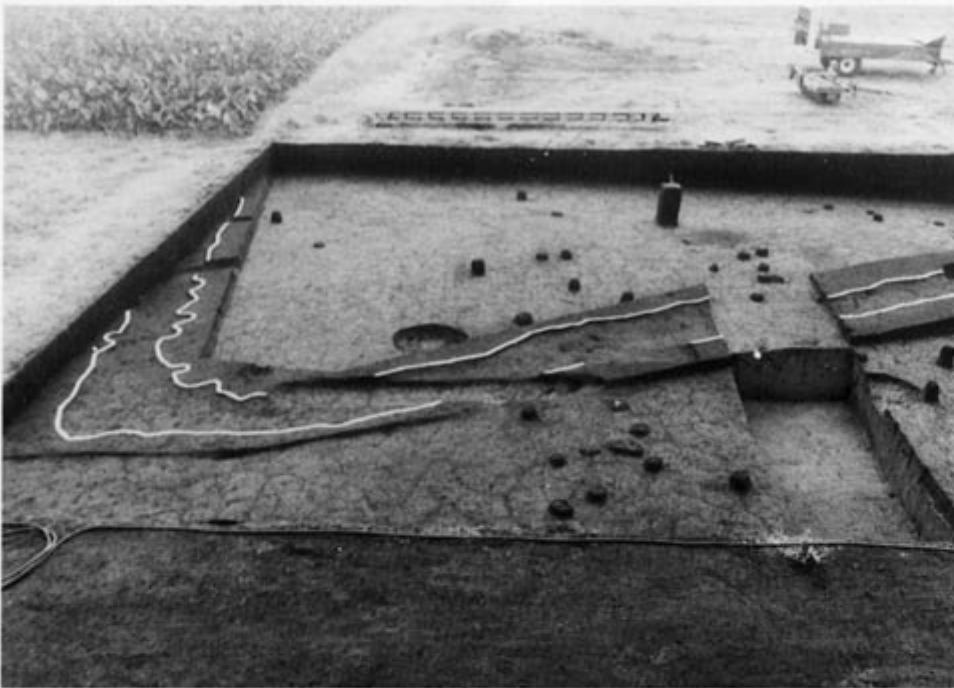
1. Ⅲ層出土土器(4)



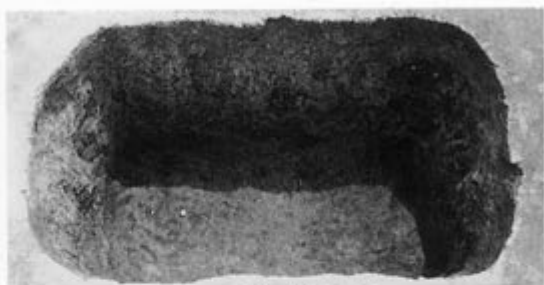
1. Ⅲ層出土石器
—230—



1. 中·近世溝状遺構



2. 中·近世溝状遺構



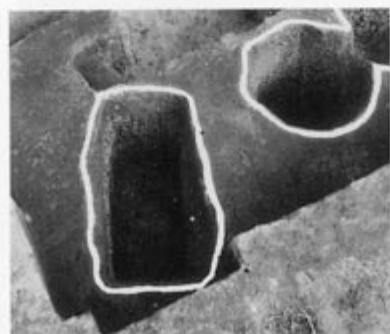
1. 1号墓 (北から)



3. 1号墓作業風景



2. 1号墓遺物出土状態



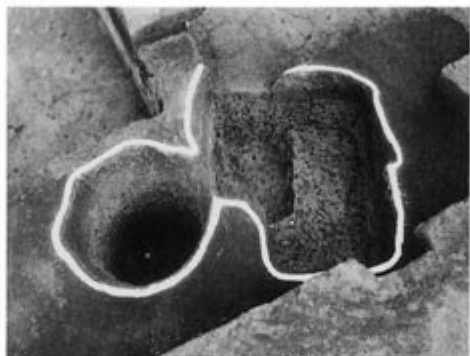
4. 2号・3号墓 (東から)



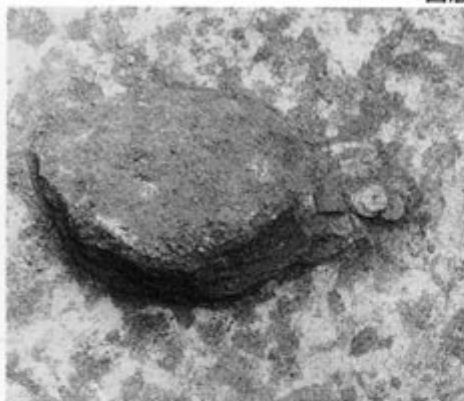
5. 2～5号墓 (北から)



6. 2～5号墓 (北西から)



1. 3～5号墓 (東から)



2. 4号墓出土状態



3. 4号・5号墓 (東から)



4. 6号墓 (北から)

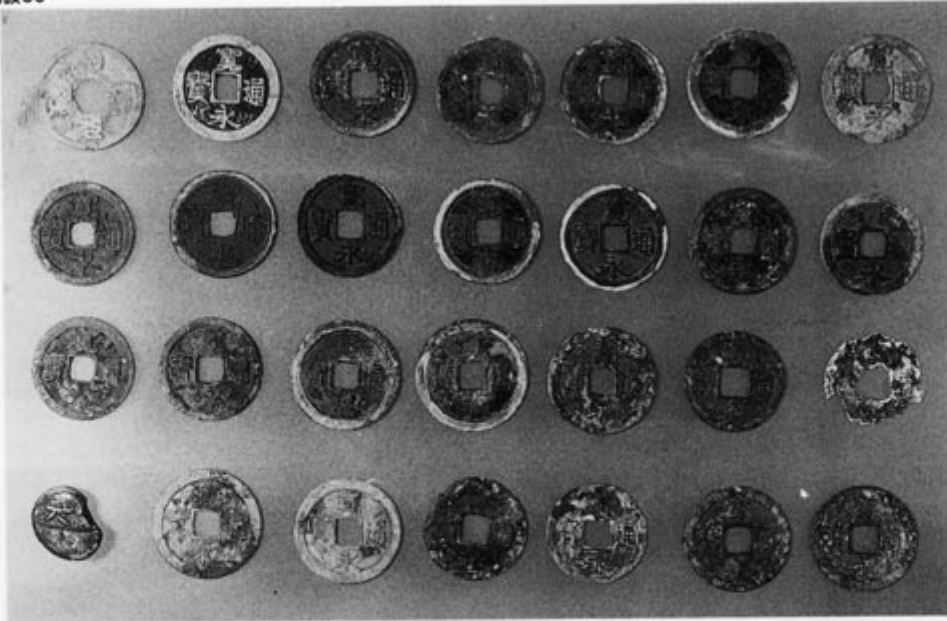


6. 7号墓 (東から)

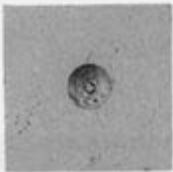


5. 7号墓出土遺物

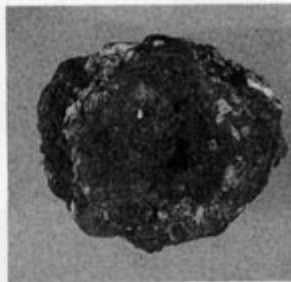




1 古銭 (1号~4号墓)



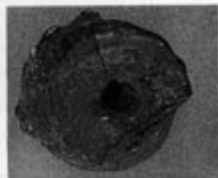
2. ガラス玉 (2号墓)



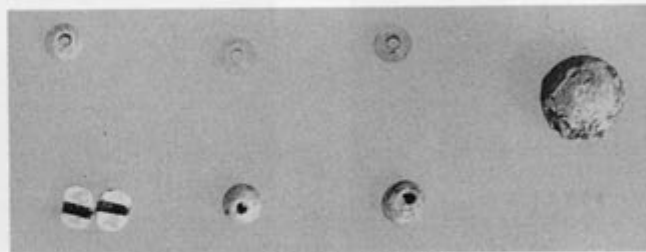
3. 古銭 (6号墓)



4. 櫛 (4号墓)



5. 古銭 (6号墓)



6. 数珠玉 (7号墓)

あ と が き

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査は足掛け四カ年にわたり、ようやく調査報告書を刊行する段階を迎えた。そして、前回に続き、前半の昭和60年度及び昭和61年度に調査を手掛けた「中ノ原遺跡（弥生時代）」と後半の昭和62年度及び昭和63年度に調査を手掛けた「中原山野遺跡」と「西原掩体壕跡」と「前畑遺跡」の整理作業と報告書作成を完成した。

大浦・郷之原地区の台地に展開するこれら4遺跡の発掘調査は、古代史研究上、多くの成果を提供してくれた。時代としては、縄文時代から戦跡遺構などの現代にわたる多時期に及ぶ豊富な資料である。

縄文時代早期では、前畑遺跡の集石遺構群の検出とそれに伴う多量の平椀式土器を中心とする遺物の出土である。特にこれまで本県では比較的希薄であった平椀式期の成果は、縄文土器研究に大きな成果を与えることが期待される。

弥生時代はまた多くの成果が得られた。中ノ原遺跡や中原山野遺跡では、各形態の竪穴住居址や多量の遺物が得られた。その極め付けは、前畑遺跡の弥生時代の集落跡の発見である。3基の竪穴住居址と3棟の平地式建物跡及び5棟以上の高床倉庫跡の検出は、弥生時代の集落構成を知る貴重な成果となろう。また、多量に出土する在地系の山ノ口式土器に今回共伴して出土した移入土器（北部九州系土器や瀬戸内系土器）の在り方は、南九州の弥生時代中期終末期から後期初頭の土器編年に大きな示準を与えてくれた。

さらに、七基の近世墓の発見も今回の成果の一つにあげられる。副葬銭の埋納形態は、南九州の近世墓研究の指標となろう。

また、掩体壕や誘導路などの戦跡遺構の発掘調査は、鹿屋の歴史上の記録として見逃してはならない資料である。

発掘調査中は、『古代史探訪』をはじめ各機関の研修会も実施された。また地域住民の多くの見学、さらには現地説明会や公民館での遺跡説明会なども実施して、埋蔵文化財への理解と啓発にも努めたつもりである。なお、遺跡だより「うらごのはい」の発行は、発掘調査を円滑に進めたと共に参加者の大きな記念となった。

最後に、発掘調査や整理作業において、地元の鹿屋市教育委員会や大浦町及び郷之原町の地域の方々の様々な便宜や協力を頂いた。深謝の意を表したい。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅲ）

前 畑 遺 跡 （第6分冊）

発行日 平成2年3月

発 行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号